

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北東インドの部族

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 靖之, 月原, 敏博, 人見, 五郎, 八木, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003709

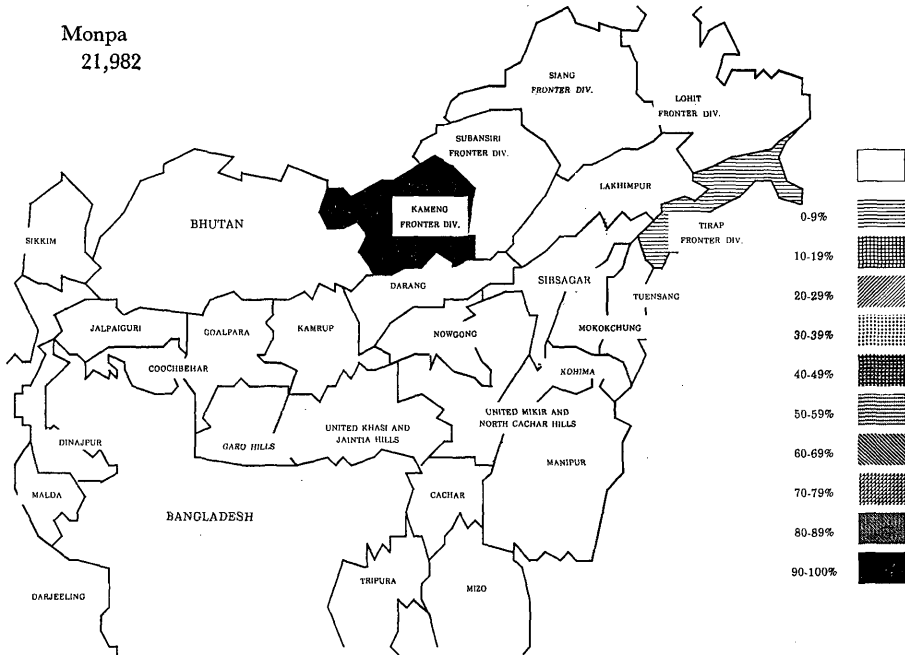
3. 北東インドの部族



"The Map of Arunachal Pradesh, Assam, Manipur, Meghalaya, Mizoram, Nagaland and Tripura" (Government of India 1981)
 および "Swidden Cultivation in Asia, vol.3" [SACHCHIDANANDA 1985:2] にもとづいて作成。

図6 アルナチャルにおける民族の分布

モンパ (Monpa, Mompa)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>モンパ (Monpa) 族はブータン (Bhutan) の東に隣接したアルナチャル・プラディシュ (Arunachal Pradesh) の、西カメン・ディストリクト (West Kameng District) に居住する。<144 人種的類縁性>人種的にはチベット・モンゴロイド系である。<618 クラン>モンパ族は3つの氏族に分類される。タワン (Tawang) には北モンパ (North Monpa), ディラン (Dirang) には中央モンパ (Central Monpa), 西カメン (West Kameng) のカラクタン (Kalaktang) には南モンパ (South Monpa) が住む。中央モンパは、ディラン・モンパ (Dirang Monpa), リシ・モンパ (Lish Monpa), パンチェン・モンパ (Panchen Monpa) に分けることができる。モンパは多分ブータンを経由して、北方から移住してきたと思われる [SEN 1986: 26]。北モンパと中央モンパは、服装は同じで、言語は方言関係にあると考えられる [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 148]。

<342 住宅>住居は石造りで、材木を用いている。隣接したダフラ (Dafla, Nishi), アパ・タニ (Apa Tani), アディ (Adi, Abor) が粗末なタケづくりの家に住むのとは対照的に、モンパの家は上等である。カメン・ディストリクトでは、モンパの家屋は

高度によって変化している。比較的低地のカラクタン地区においては、木造りの大きな家をつくる。ディラン地区では、石造りの家である。タワン地区の標高は、1,800メートルから3,600メートルほどである。ここでは石造りの家で、材木は内装に用いられるだけである。〈346 宗教用、教育用建造物〉ディラン・ゾン（城塞）はモンパの村のなかでも最も古いものである。そして多くのゴンパ（僧院）がある [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 149-150]。

〈19 言語〉言語はチベット・ビルマ語族といわれているが、長野はモンパの言語が直接チベット語と対応関係はなく、チベット語の方言とは認めにくいと述べている。数の数え方は、20進法で、ブータンのゾンカ語やロロ・ビルマ語との関連を考慮すべきであると指摘している [長野 1982: 784]。

〈77 宗教的信仰〉宗教はチベット仏教である。しかしボン教の信者も多い。モンパのチベット仏教は、ブータンからの影響が大きいといわれている。タワンは11世紀に、仏教の影響下に入った。これはブータンのブムタン (Bumthang) からの僧侶によってもたらされたもので、この時以来、カギュ派の一派のドゥルク派となった。第5世ダライ・ラマ (1617-1682) の時代にロドレ・ラマ、通称メラ・ラマがゲルック派をタワンにもたらした。その結果タワンにゲルック派の僧院が創立された [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 165-166]。〈764 葬式〉葬制は、遺体を108つに切りきざんで川に流す水葬、それに火葬、風葬、土葬がおこなわれている [SEN 1986: 27]。

〈24 農業〉農業は、モンパの経済の基幹をなしている。農作物は、近隣部族やチベットとの交易に用いられる。食物は大抵の村では自給されている。ディランでは、トウモロコシ、アワ、オオムギ、コムギが、灌漑された畑で栽培されている。高所では、オオムギ、コムギ、ジャガイモ、ダイズの栽培もおこなわれている。モンパ社会全域で鉄の付いた犁をミタン牛とインド牛の間に生れたウシに引かせて農耕をおこなっている。モンパの中には、焼畑も見られる [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 149-150]。

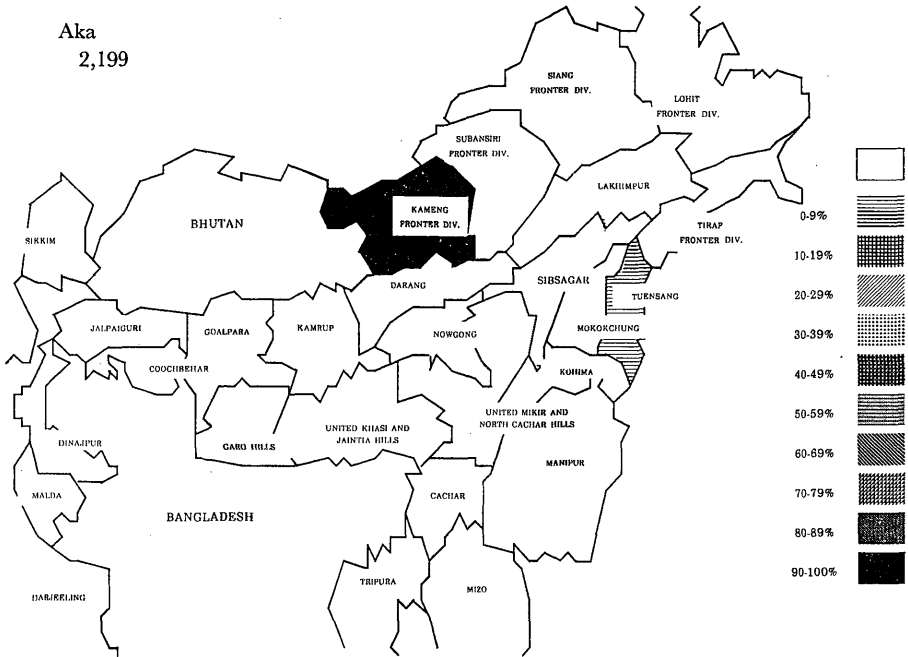
〈23 家畜飼養〉家畜は、チラン、カラクタンではミタン牛やウシを飼育している。ミタン牛はバングニから連れてくる。ミタン牛は、普通牛との混血に用いられ、ブータンとの交易がさかんである。ミタン牛と普通ウシの雄の混血をジャツア、雌をジャツアミと呼んでいる。3,000メートル以上では、ヤクが飼育されている。ディラン地方では、牧童をやとって、4、5か月ヤクを放牧する。牧童には200ルピーまたは300ルピーないしは60キログラムのもみ（粃）が支払われる [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 155-156]。モンパが他のアルナチャルの民族と大いに違っているのは、モンパはミルクをそのまま飲用することである [SEN 1986: 26-27]。

<66 政治的行動>社会制度としては、モンパの首長はツォンブラ (tsonbla) と呼ばれる。ツォンブラは仏教儀礼を行なう。ツォンブラは地方長官であるゾンペンの支配下にある。<56 社会成層>モンパの村には社会階層がある。上位の者は下位の者が用いた器では、水を飲まない。モンパはモンパ以外の者とは婚姻をしない。しかしブータン人とチベット人は外部の者とは見なされていない。<59 家族>家族関係は、核家族を基本とする。<58 婚姻>一人の女性と兄弟の男性の一妻多夫婚も見られる。婚資は男性から通常は一頭のウマまたはヤクである。男性が貧しくて婚資が支払えない場合は、その子が母の実家にたいして、婚資を支払わねばならない。チベット人の社会で見られるように、一人娘と結婚した男性は、女性の家に入り婿 (makuba マクバ) となることがある [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 157-162]。

<101 アイデンティフィケーション> 周辺部族との関係を見れば、ブータンの東部メラ・サクテン谷には、ダクパ、ダップまたはブロックパとよばれる部族がいる。栗田がブータンで現認したところでは、この部族は、四本のたれの付いた特徴的なベレー帽をかぶっており、皮の貫頭衣を着用している。エルウィン (Elwin) のモンパを紹介した写真には、この特徴的なベレー帽をかぶったモンパの写真が紹介されていることから、ブータンでブロックパとよばれる人びとは、モンパないしはモンパの一支族と考えられる [ELWIN 1959b: 192]。モンパは自らをブータン人よりも一段上にあると位置づけているという [Pradip Das による]。

(栗田靖之)

アカ (Aka), フルソー (Hrusso)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>アカ (Aka) 族は自称をフルソー (Hrusso) といい、その言葉は、人間を意味している。彼らは顔に樹脂 (ヤニ) で化粧するので、他の民族から、それを意味するアカという名前がつけられたという [CHOWDHURY 1983: 24]。加藤によれば、インドの主張する国境線の北方に住むおよそ2,000人 (1982年) のアカ、ダフ (ダフラのことと思われる)、ミリを中国政府は少数民族に指定して、ロパ (珞巴 Lupa) の名称を与えている [加藤 1987: 843-844]。

<131 位置>居住地は西カメン・ディストリクト (West Kameng District) の南部である。その居住地は、カリ・デカリ (Khari-Dikari) 川の中流で310平方キロメートルほどである。この地における重要な川は、東の境界をなしているボレリ (Bhorelli) 川や、ビチョム (Bichom) 川、テンガパニ (Tengapani) 川、ケヤング (Kheyang) 川である。<13 地理>西ではダフラ (Dafla, Nishi) の一部族であるシェルドックペン (Sherdukpen) に接している。このシェルドックペンはアカと隣接している北東部をも支配している。北はミジ (Miji) に、南はダラン地区に接している。アカの重要な村は、ディジュンガニア (Dijungania), ジャミリ (Jamiri), ブラガオン

(Buragaon) である。＜157 パーソナリティー特性＞彼らは、周辺の部族から恐怖と尊敬の目で見られている [CHOWDHURY 1983: 24]。

＜618 クラン＞アカに関するマッケンジー (Mackenzie) の記述は、かなり初期のものである [MACKENZIE 1884]。この記述の中で、アカには Hazari-Khawa と Kapachor という2つのクランがあると記述している [MACKENZIE 1884: 21]。

＜628 コミュニティ相互の関係＞ハイメンドルフ (Füerer-Haimendorf) は、ボンディラ (Bomdila) 村で得た情報として、一世代前までは、アカ族の村はバングニ (Bangni) からの襲撃に脅かされて、バングニに隷属していた。また一方アカは、少数のコア (Khoah) やシェルドックベンの村に圧力をかけていた [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 147]。

＜77 宗教的信仰＞彼らの宗教はアニミズムである。しかし最近ではヴァイシュナヴァ (Vaishunava) 派のヒンドゥー教徒となっており、とくにジャミリ (Jamiri) 村やブラガオン (Buragaon) 村では平原からグルを呼んで儀礼を行なっている [Pradip Das による]。＜142 身体諸形質の情報＞彼らの容貌は、荒あらしい。がっしりとした身体と、近辺の部族と比べて色白な顔色、平らな鼻、太い首をしている。男性はおよそ1.6メートル、女性は1.5メートルの身長である。男性は髪の毛を頭の上でむすび、女性は髪の毛を後で結んでいる。

＜19 言語＞言語は、チベット・ビルマ語族、北アッサム語群に属する。＜29 服装＞彼らの服装と装飾品はチベットからの影響が大である。身体のまわりに布を巻き、肩に彩色をほどこしている。女性は長いジャケットを着用し、頭には布を巻きけている。タケ製の帽子をかぶっている。帽子の前にはオンドリの羽やタケの葉を飾りにしている。男性はタケ製の耳飾りをしている。また男性はつねに、ダオ (dao) とよばれる山刀を腰または肩からつるしている。同時に弓矢を携行している。女性はいろいろな色のビーズの首飾りをし、銀製の装飾品を身に付けている。女性は耳に大きな銀製の耳飾りをして、首にも同様に銀製の首飾りをしている。入墨は珍しいことではない。彼らは経済的にも文化的にも進歩しているとは言い難いが、近隣の仏教徒から大きな影響を受けている。＜34 建造物＞彼らは、2メートルほどの高さの高床式住居に住み、その住居の中は小さなコンパートメントに仕切られている。彼らの村は散村である。

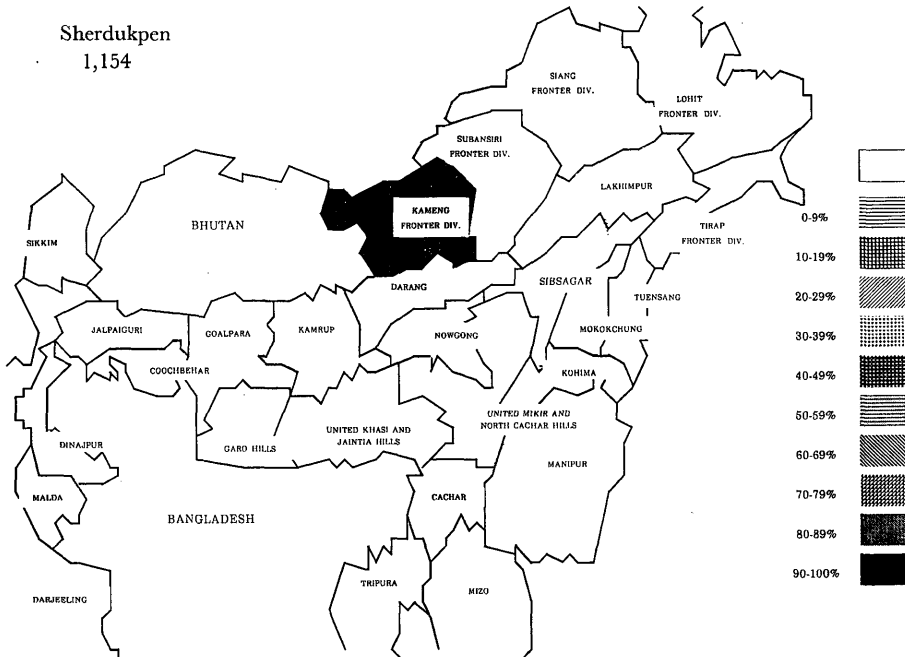
＜62 コミュニティ＞それぞれの村は、特定の個人が支配している。村は習慣法に従ってものごとを決するガオンブラ (gaonbura) と呼ばれる村長の下に村会がある。かつては奴隷制度があった。＜24 農業＞農耕は焼畑で、主要な農産物は、コメ、ト

ウモロコシ，ジャガイモである。＜23 家畜飼養＞ブタ，牛肉を食している。

＜58 婚姻＞婚姻においては，交叉イトコ婚が好まれる。＜59 家族＞家族は主人，妻，未婚の子供，家内奴隷で構成されている。＜76 死＞死者はその人が生前使用していた衣類や生活用具，武器などと共に埋葬される [SEN 1986: 29-30]。

（栗田靖之）

シェルドゥクペン (Sherdukpen), センジ・トンジ (Senji Tonji)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>シェルドゥクペン (Sherdukpen) は、西カメン・ディストリクト (West Kameng District) の南部テンガパニ (Tengapani) 川の溪谷の6つの村に住んでいる。シェルドゥクペンは、ブータンから流れ出したボンディラ (Bomdila) 川からそれほど遠くないテンガ・チュ (Tenga chu) に流れこむ川によってつくられた溪谷に集中して住んでいる。<19 言語>彼らの言語はチベット・ビルマ語族に属しており、チベットとブータンから、文化的にも伝統的にもそして風俗習慣においても大きく影響を受けている。<77 宗教的信仰>彼らは仏教徒である。<438 国内交易>彼らは有能な交易民で、平原の人々との交易と、丘陵地帯での寒さを避けるために、冬の間の数か月は平原に移住する。このように移住するために、農業には重きをおいていない。<46 労働>彼らは、機織りと銀細工、鍛冶屋として優秀である。<142 身体諸形質の情報>彼らは色白で、中肉中背である。入墨はしない。男性は髪の毛を短く刈って、ヤクの毛でつくった帽子をかぶっている。<58 婚姻>結婚は一夫一婦である。<62 コミュニティ>ガオンブラ (gaonbura) とよばれる村長によって村の会議がおこなわれている。<24 農業>彼らは焼畑と畑作をおこなっている。水田

に、オオムギ、コムギ、ハダカムギ、トウモロコシを耕作している。そして最近はリンゴとジャガイモの栽培を行なっている [Pradip Das による]。<34 建造物>住居は石造りで地面から10センチメートルから20センチメートルはなれて建っている。一階はヤギやその他の家畜のためであり、住民は木の厚い板でできた2階に住んでいる [SEN 1986: 27-28]。

<162 人口構成> シェルドゥクペンを調査したハイメンドルフ (Füerer-Haimendorf) によれば、シェルドゥクペンは、1971年現在、1,635人を越えない小さな集団である。<101 アイデンティフィケーション>彼らの自称はセンジトンジ (Senji Tonji) であるが、他の民族からは、シェルドゥクペンと呼ばれることを好んでいる。Senji は, Shergaon, Rupa (以前の名前は Rooprai Gaon) といった彼らの部族の集落の名前から由来している [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 172-173]。

<162 人口構成>彼らはカラクタン (Kalaktang) とボンディラ (Borndila) のモンパ (Monpa) と混住している。<173 口碑・伝説による歴史>彼らの歴史によると、先祖はチベットの王子ゲヤルング (Geyalung) が移住してきて、今日モンパの村であるブット (But, Bhut) に住みついた。そしてブット村では今日でもその廃墟が見られる。歴史によれば、ゲヤルングはアッサムを含む広い地方を支配し、穀物による税を課していた。<565 社会階級>モンパ (Monpa) と同様、シェルドゥクペンもいろいろな社会階層に分かれている。しかしモンパと同じようにそれらの社会階層間の区別は明確ではない。おおまかにいってシェルドゥクペンは2つの社会階層に分れている。上層階層は、Tong という名前で、Tungdok, Thungshi, Thungo, Thungon, Khrame, Mosubi, Wangdza, Klengtung, Lamaguru というクランを含んでいる。Lamaguru のクランは、Thungo クランの男子の子孫であり、その男がチベットで勉強して、Lamaguru と自らを呼んだ。上層階層におけるクランは内婚制であるが、Tungdok は、Klengtung と、Thungo は、Lamaguru と婚姻できない。それは Lamaguru は、Thungo から派生したからである。下層階層は Tsao と呼ばれており、Megedzi, Shindzazi, Dingla, Monodzi, Midzidzi の5つのクランがある。最近までは、上層と下層の階層は、全く婚姻しなかったが、今日では、Thong と Tsao の階層間の婚姻も見られるようになった。しかし、このような婚姻は、今日でも承認されている訳ではない。Thong と Tsao クランの個人間には、代々の結びつきが見られる。Thungdok クランは、Megadzi の家族とある種の特別な結びつきがある。同様に Khrame は Dangla と、Mosubi は Sindzadzi と結びついている。依存しているクランは、その相手方のクランに貢ぎ物をする必要はないが、後者のクランがある

種の仕事を要求された時には、それに従わなければならない。その逆に、相手方に困りごとが生じた場合、その相手の相談にのるという道義的な義務がある。このような、ある種のクラン間の結びつきは、結婚のときの贈り物としての家畜のやりとりで見られる。

<58 婚姻>Thungdok クランの女性の結婚に際しては、夫方から贈られるミタン牛やヒツジは、Megedzi クランの家族に回される。シェルドックペンは通常、婚資を支払わない。しかし上流階層であれ下層階層であれ、彼らが動物を屠殺したときには、その頭を母の兄弟の所に持ってくる。この贈り物は、ルー (ru) と呼ばれている。これは、母の実家にたいする不払いを清算するためのものであると考えられている。このルーは、母が死んだ後からはじめられる。もし男が狩りをしない場合には、家畜がそれにかわる価値のあるものをルーとして贈らねばならない。母の兄弟が死んだ後は、その息子または孫にそのルーが贈られる。このようにして、2つの家族の結びつきがつづけられる。

<77 宗教的信仰>シェルドックペンは仏教徒であると考えられている。ルパ村には、大きなニンマ派 (Nyingmapa) の僧院 (ゴンパ) があり、ここでは仏教の法事がおこなわれる。しかし、この法事をとりしきるラマは、ブータンから来ている。1980年には、カメン・ディストリクトのゴンパには、シェルドックペンのラマ僧はいない。ワムグ (Wamg) と呼ばれる法事がおこなわれるときには、ディラン (Dirang) かタワン (Tawang) のチベット仏教の僧が呼び寄せられる。今日では、テンジンガオン (Tenjingaon) のチベット難民のラマがそのような儀式をおこなっている。仏教がもたらされたのは、比較的新しい。キク (Khik) と呼ばれる儀式には、土着の信仰が色濃く見られ、これらの信仰は、シェルドックペンの伝統に深く根ざしている。<76 死>キク (Khik) の主な儀礼は、ルパの村はずれでおこなわれている。キクサバ (Khiksaba) と呼ばれる儀礼は、11月と12月の最後の7日間におこなわれる。キクの祭とキクへの供物をしなければ、シェルドックペンは新しい収穫と脱穀を開始しない。キクサバの儀式をおこなう僧は、シェルドックペンで、その僧はキクジジ (Khikzizi) と呼ばれている。これらの僧は、Megadzi, Dingla の下層階層から出ている。ルパ村の人びとは誰がキクジジとして修業すべきであるかには大いに興味があるが、シェルドックペンの若者が仏教僧になることには、興味がない。シェルドックペンにはシャーマンが居るが、これはモンパのユミン (yumin) と同じ役割である [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 172-177]。

<11 参考文献>アルナチャル・プラデシュのルパ村におけるシェルドックペンに

関する組織的調査は、アディカリィ (Adhikari) らによって、1971年に行なわれている [ADHIKARI et al. 1975]。以下は、その調査にもとづく、ルパ村の報告である。

<131 位置>ルパ (Rupa) 村は、アルナチャル・プラデシュのカメン・ディストリクト (Kameng District) の地方政府の所在地であるボンディラ (Bomdila) から、19キロメートル離れたところにある標高1,400メートルの丘陵の中腹にある。ルパ村には8つの部落が含まれている。<162 人口構成>ルパ村は、典型的なシェルドゥクペンの村である。ここでは1,144人のシェルドゥクペンが6つの大きな部落に分かれて住んでいる。シェルドゥクペンは、平原のボド (Bodo) グループに属するカチャリ (Kachari) 族と親密な関係を持ち、社会的、経済的な影響を受けている。かつてシェルドゥクペンは、近接したカチャリやコア (Khoah) から徴税を行っていた。しかし現在では、このようなことは行なわれていない。<132 気候>ルパ村周辺は、概して健康的な土地である。季節は三つに区分される。10月から2月までは冬で、たいへん寒い雪はない。3月から6月まではモンスーン期でたいへん暑い。摂氏35度までに達する。7月から9月まではモンスーン期で、村人たちは農作業を行なう。アディカリのこのような記述に対して、プラディプ・ダス (Pradip Das) は、モンスーンは5月から8月までで、シェルドゥクペンの人々は9月から10月までを「春のようにたいへんよい気候」と呼ぶと話してくれた [Pradip Das による]。<173 口碑・伝説による歴史>チベット王バ・ストロングツェン・ゴンパ (Ba Strongtsen Gompo) は、王妃ベ・ム・ツァ (Be Mu Za) とその子ゲプ・ロディン・ドルジ・チュング (Gepu Roding Dorjee Chung) とともに、ラサ (Lhasa) のデバラジャリ (Devalajari) に住んでいた。王は、アッサム (Assam) の王のところに、たいへん美しい娘がいることを知った。彼は、有能な大臣リグプー・チャン (Rigpu Chhan) をシブサガル (Sibsagar) に送って、結婚を申し出た。はじめアホム (Ahom) 王は断わったが、やがてそれを受け入れた。大臣は、その娘を連れてラサに向かって旅だったが、ブラマプトラ (Brahmaputra) 川を渡るとき、この大臣はこの娘を誘惑したのである。一行は、ラサに帰り着き新しい娘の到着を喜んだ。しかし王は、この娘がすでに妊娠をしていることを知り、大いに怒り、大臣を投獄した。やがて子どもが生まれたが、その身体は人間であったが、イヌの顔をしており、ヤギの角を持っていた。この子は、森の中に連れていかれて、放置されたのである。王はこの娘を愛していたので、前非を許した。やがて、ジャブドゥン・ングワン・ナムジー (Jabdung Ngwang Namje) とジャプタン・ブラ (Japtang Bura) という二人の息子を持った。ジャプタン・ブラがやがてシェルドゥクペンの王となったのである。シェルドゥクペンの祖先は、チベ

ットの王、バ・ストロングツェン・ゴンパの息子であるこのジャプタン・ブラが現在のシェルドックペンの居住地を統治するように命ぜられたことから始まる。彼は、ポーターと召使を連れて、旅を始めた。彼はバングニ (Banguni) と戦いこれを撃ち破った。そしてブット (But) 村にいたった。しかし、ブットの村も、周辺の部族からの攻撃があり、やがて現在のルパ村に移住した。ルパ村は最初からこのように呼ばれていたのではなくて、シェルドックペンは、トングチュック (Thongthuik) と読んでいた。トングチュック (Thonguthuik) と云う村の名前は、「Thong の人々の村」を意味しているといわれている。この村の人々が、平原の村人と交易をするようになって以来、ルパ (Rupa) という名前が、平原の人々から与えられたのであろう。それは、「銀貨」を意味する言葉である。

<56 社会成層>このジャプタン・ブラおよび彼の召使、ポーターの子孫がシェルドックペンと呼ばれる人々である。しかしシェルドックペンの中には、2つの社会階層がある。上層階層は、Thong と呼ばれる人々で、下層階級は Chhao と呼ばれている。Thong は王族の出身で、Chhao はその従者からの出自であると考えられている。その二つの階層は、婚姻関係を避けている。それぞれの階層は、数多くのクランに分割されている。下層の Chhao も、チベットを起源としていて、現代のルパ村に定住している。伝統によりと Chhao は荷物を運搬しながら、家の建築や雑事をしながら Thong の畑で労働する。Chhao は決して Thong に憧れたりしない。Chhao が社会的に下層であるということは、いろいろな場面で示される。例えば、宗教的な儀礼では、Chhao は下座に座らなければならない。また供物は、Thong の手で分配される。Chhao は Thong の女性とは結婚できないし、Thong は Chhao の女性とも結婚できない。しかし Chhao は Thong と一緒に食事するし、台所から家の中まで自由に動き回る。そういう意味では、インドの不可触賤民とは違ったものである。

<19 言語>シェルドックペンは、チベット・ビルマ語族に属する。文字はない。それゆえ、経文の旗には、チベット文字を使っている。ルパ村の人々は、アッサム語、ヒンディー語、モンパ方言を補助的に話している。

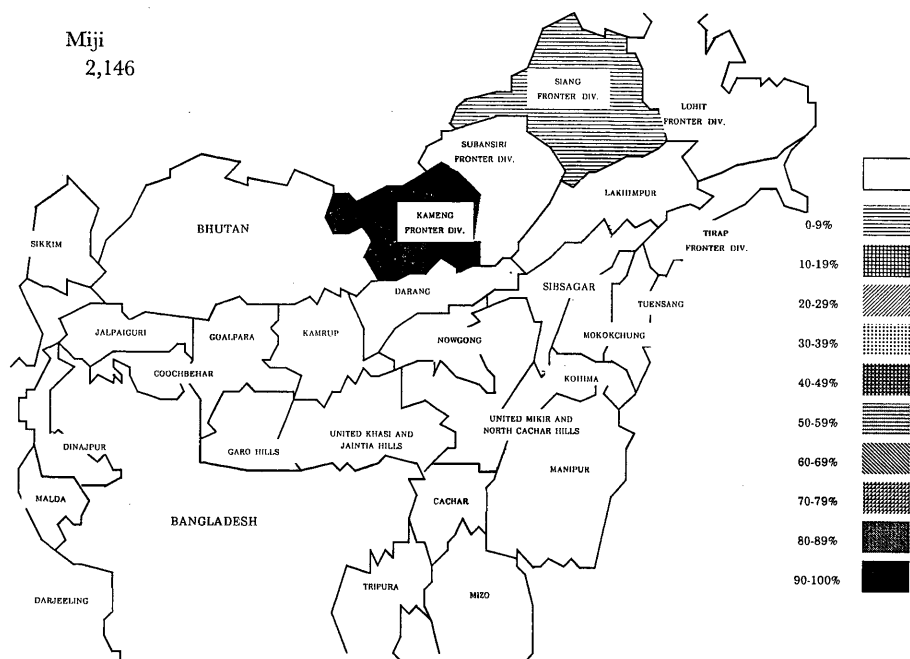
<34 建造物>家屋は、大別すると3つある。第1は、石造りの家 (dichiya-yam) で、全体の8.1パーセントである。これはたいへん高くつくので、数は少ない。第2には、木造の家 (wanwa-yam) がある。大半のシェルドックペンの家は、これである。第3は、タケの家で (tampla-yam) である。これは貧しい人々の家で、これも数は多くない。田や畑の出づくり小屋として利用していることもある。シェルドックペンの家は、タケの家を除いて、2階建てである。大工は、釘を用いずにこれらの家を建

てる。2つの社会階層である Thong と Chhao の間に、家の違いはない。

<29 服装> シェルドックペンの男性は、スパ (supa) と呼ばれる長い布を身にま
 とっている。それは絹でできており、2メートル30センチの長さで、1メートル30セ
 ンチの幅である。スパは膝ぐらいの長さである。スパの下には、前あきのシャツを着
 ている。これはルダック (luduk) と呼ばれ、これも絹製である。厚手の手紬のムカ
 ック (mukha) と呼ばれる布を腰の回りに巻き付けている。これは栗色でデザインも
 なかなか良い。彼らは、ゴルダム (gordam) というヤクの毛でできた帽子をかぶっ
 ている。そしてそれらの帽子には飾りがある。彼らは、2、3年に一度村を訪れるモンパ
 (Monpa) やブータン人の行商人から帽子を買う。帽子は、このように購入されたも
 のであるが、帽子の飾りは、自分らの村でつくられたものである。ダウン (daun) と
 呼ばれる大変込み入った手織の鞆を肩に掛け、背中にはドグレ (dogure) と呼ばれる
 鞆をかついでいる。靴は、めったにはかない。今日、シェルドックペンの社会では、服
 装に大きな変化が起こっている。彼らは、アッサム (Assam) の市場から買ってきた
 洋風のシャツやパンツをはいている。しかし、女性の服装は、それほど変わってはい
 ない。女性の上着は、絹製のシンコー (sinkoo) と呼ばれるもので、平原に住むカチ
 ャリ (Kachari) 族から購入したものである。それは、袖無しで、長くて広いガウン
 で肩から脚をおおっている。シンコーを着るときには、腰のあたりでムカックと呼ば
 れる帯をしている。このシンコーの上に、腰まであるルダックというシャツを着るこ
 ともある。この上着の縁には、刺繍が施されている。サナップ (sanap) という白また
 は赤い布を上着の上に付けることもある。このサナップは、前で両端を結び、残りは、
 後ろにたらしめている。女性は、帽子をかぶらない。男性の上の毛は短い。女性は、子
 供のうちは髪を短くしているが、大きくなると、長くする [ADHIKARI et al. 1975:
 15-32]。

(栗田靖之)

ミジ (Miji), ダンマイ (Dhammai, Dammai)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置> 西カメン・ディストリクト (West Kameng District) のビチョム (Bichom) 川の渓谷に住んでいる。<144 人種的類縁性> 言語において異なるが、アカ (Aka, Hrusso) と大へん類似性の高い小集団である [SEN 1986: 28]。<58 婚姻> 彼らは、アカと婚姻関係を持つ [CHOWDHURY 1983: 24]。他の部族との交易は、アカを通じて行なわれている [HUNTER 1879: 355]。

<101 アイデンティフィケーション> 自らをダンマイ (Dhammai) とよんでいる。<131 位置> ミジ (Miji) は25の村にわかれて住んでいる。北と東はダフラ (Dafla, Nishi) に、南はアカ (Aka, Hrusso) に、西はモンパ (Monpa) に囲まれている。<342 住宅> 住居は9メートルから12メートルの長さで、幅は3.5メートルから6メートルで台地の上に建っている [SEN 1986: 28]。

<62 コミュニティ> 村長は、ナク (Nakhu) ないしはクジャロン (Kujalong) である [CHOWDHURY 1983: 24]。<30 装飾品> 彼らは、装飾品を好む。ミジの女性は、いろいろな色のビーズや真鍮の装身具を身につけている。男性も女性も長い髪の毛をしており、男性はアカと同じく頭の上でパン (bun) とよばれる髪型をしてい

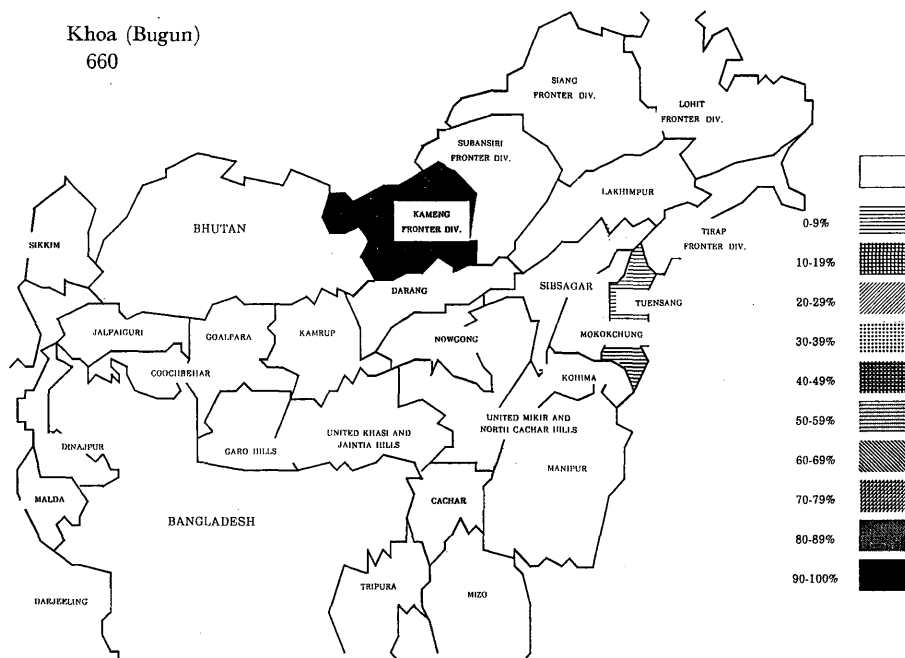
る。ミジの屈強な男性は、小型と中型のナイフを首からつるし、大型のナイフを首からつるし腰にさしている。＜56 社会成層＞ミジの最下層には奴隷も見られる。＜58 婚姻＞多婚は一般的である。＜76 死＞死者は、土葬される [SEN 1986: 28]。

＜26 食物消費＞ミジの女性はヒツジとヤギの肉は食べないという [Pradip Das による]。

(栗田靖之)

コア (Khoa), コワ (Khowa), ブグン (Bugun)

Khoa (Bugun)
660



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

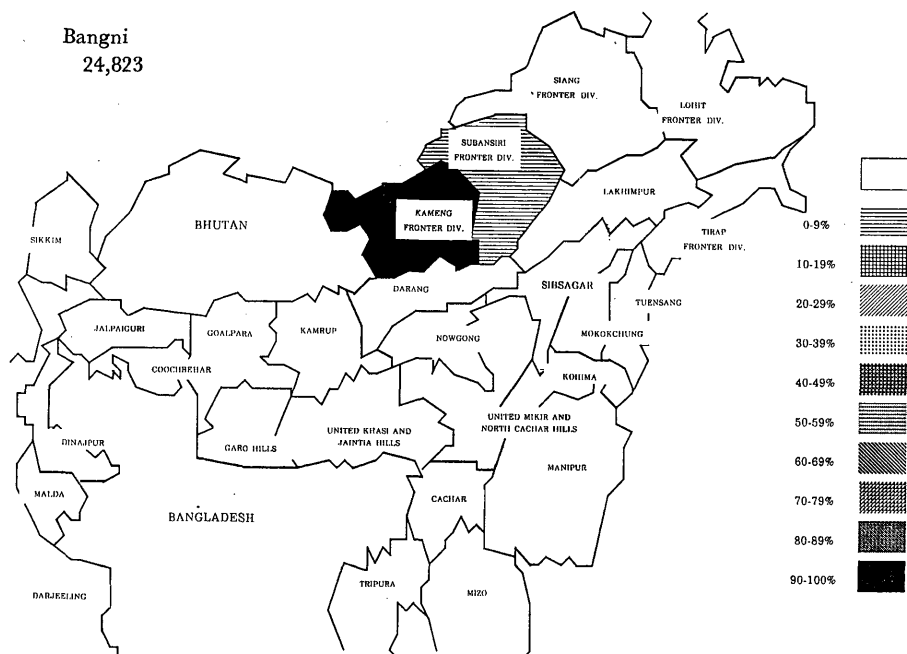
<131 位置>コア (Khoa) は、カメン・ディストリクト (Kameng District) のビ
 チョム (Bichom) 川のほとり、ボンディラ・サークル (Bomdila Circle) の中の10村
 に居住している。<101 アイデンティフィケーション>自称はブグン (Bugun) であ
 るが、他の部族からそのように呼ばれることはない。<58 婚姻>10村にまたがる外
 婚制で婚姻はなりたっている。コアは厳密には部族内婚で、アカ (Aka, Hrusso), ミ
 ジ (Miji) などの類似の生活様式をもった部族や、シェルドックペン (Sherdukpen)
 といった、コアと長い経済的、儀礼的關係をもった他の部族とも婚姻しない。<77
 宗教的信仰>コアの伝統的宗教は、家畜の犠牲をともなった多くの神がみや自然の霊
 に対するものであるが、チベット仏教からの影響も受けており、儀式をとりおこなう
 のにラマ僧を招いている。<43 交換>モンパがチベットと交易していたころには、
 コアもモンパ (Monpa) と交易を行っていた [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 29-
 30]。<62 コミュニティ>アカにまじって住むが、独立した村むらでは、首長のも
 とで、村をつくっている。<144 人種的類縁性>アカに大へん似ているが、顔色は
 やや黒い。彼らは熱心に働く。<24 農業>コアは焼畑を営んでおり、穀類、コムギ、

ムギ, ジャガイモ, サツマイモを耕作している。しかし焼畑の望ましくないことが教育されて, 今日では少なくなりつつある [Pradip Das による]。<58 婚姻>男性は婚資を支払うことが出来る場合には, 一人以上の妻を持つ。<43 交換>相続は, 息子たちが, 父の遺産を均等に相続するが, 未婚の娘は装飾品を相続するだけである。<76 死>死者は土葬する [SEN 1986: 28]。

<115 情報提供者>ハイメンドルフ (Füer-Haimendorf) は, バングニ (Bangni), ミジ (Miji), コアは未だ人類学者の本格的な調査がされていないと述べている [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 147]。

(栗田靖之)

バングニ (Bangni)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>彼らはダフラ (ニシ) のサブ・トライブである。ニシもバングニもともに「人間」を意味している。ダフラ (Dafla) という言葉は、彼ら自身の間では、大へん品位を傷つける言葉である [CHOWDHURY 1983: 26-27]。プラディプ・ダス (Pradip Das) によると、Bangni の g は無音化しておりバンニと発音する方が多いという。しかし本文では、古くから書きあらわされているバングニをとることにする。

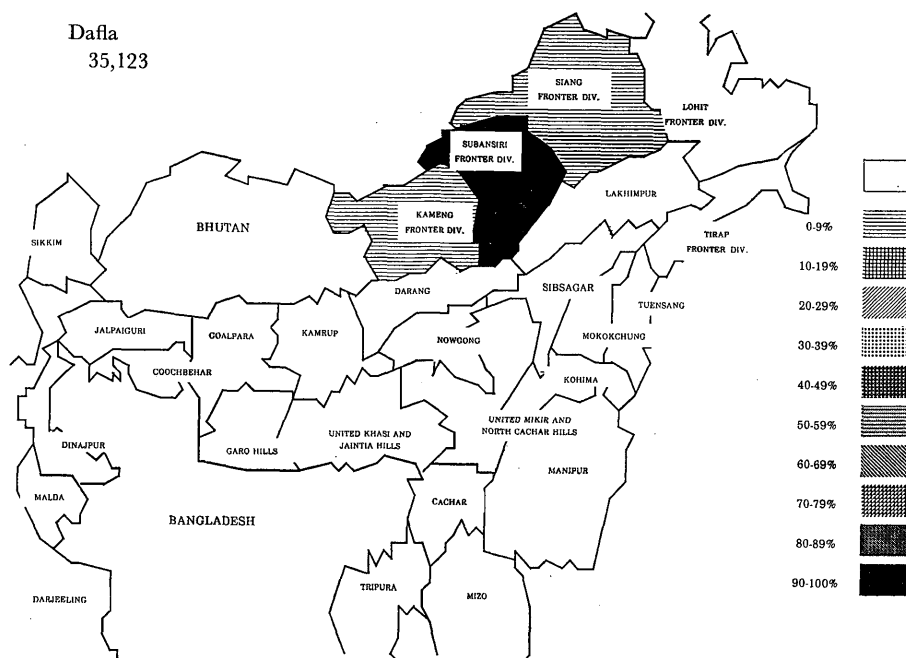
<11 参考文献>ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf) は、その著書の中で、バングニ (Banguni), ミジ (Miji), コア (Khoa) については、人類学者の調査は行われていないと述べている [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 147]。それゆえ、以下の情報は、綿密なフィールドワークの結果によってもたらされたものではないが、バングニに関する一般的な情報として、記載することにする。

<131 位置>彼らは、東カメン・ディストリクト (East Kameng District) に住み、アルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) のダフラ (Dafla, Nishi) に近い民族である。<24 農業>彼らの居住地が急斜面であるので、ほとんど農耕をしない

い。彼らは、タケ細工が上手である。＜142 身体諸形質の情報＞男性は、12, 3 才から髪の毛をながくのばす。そして男性はブン (bun) と呼ばれる髪型をしている。女性は、5, 6 才から髪の毛をのばしたままにしている。しかし今日では学校に通うようになった子供たちは、ある一定期間ごとに髪の毛を切っている。入墨は女性のあいだで一般的である。これは思春期に到達する以前に行なわれる。彼らは装身具が好きである [SEN 1986: 30]。

(栗田靖之)

ダフラ (Dafra), ニシ (Nishi), ニシャン (Nishang)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>ニシ (Nishi) は、アルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) の低地スパンシリ (Low Subansiri) と東カメン・ディストリクト (East Kameng District) に住む。<101 アイデンティフィケーション>ダフラ (Dafra) という言葉は、「服従しない人々」という意味で、平原に住むアッサム人が付けたものである。彼ら自身は、「人間」を意味するニシ (Nishi) という呼称を用いている。しかし、インド政府の公文書においても指定部族としてダフラの名称が用いられていることから、本文においても、ダフラと呼ぶことにする。加藤によれば、インドの主張する国境線の北方に住むおよそ2,000人 (1982年) のアカ、ダフ (ダフラのことと思われる)、ミリを中国政府は少数民族に指定して、ロパ (珞巴 Lupa) の名称を与えている [加藤 1987: 843-844]。<157 パーソナリティー特性>彼らは、たいへん好戦的であると言われている。

<142 身体諸形質の情報>彼らは強くて、がっしりした筋肉質の身体をしており、平たい鼻と平らな顔、突き出した頬骨、高い背をしている。<30 装飾品>髪の毛は王冠のように前頭部で黄色い紐と真鍮のピンでとめている。またサイチョウの嘴を赤

く色づけしたり、羽で飾ったタケ製の帽子をかぶっている [SEN 1986: 31]。<19 言語>彼らの言語は、チベット・ビルマ語族ボド・ナガ語群ボド語系に属している [長野 1987: 459]。

<11 参考文献>ダフラについては、近年3つの調査報告書が見られる [BISWAS 1966; SAIKIA 1964; SHUKLA 1965]。ビスワス (Biswas) の調査は、『インド国勢調査』の一環としてなされたものである。以下その記述に従う。

<58 婚姻>彼らは一夫多妻であるが、一妻多夫ではない。氏族はお互いに外婚制をとっている。<342 住宅>家屋は長さが30メートルにもおよび、幅が5から7メートルにおよぶロングハウスである。かれらは川の側に家を建てない。それはヘビや川虫を嫌ってである。それぞれの妻は、独立した区画を持っている。<24 農業>焼畑が行なわれている。

<77 宗教的信仰>彼らは、夢を信じている。そして死後の靈魂を信じており、死後天国で先祖の靈に出会うと信じている。<76 死>死者は住居の近くに葬られる。そして死者のために大きな声で泣き叫ぶ [BISWAS 1966]。

<171 文化要素の分布>ダフラ (Dafla, Nishi) とバングニ (Bangni) とは、お互いに近い関係にあり、ダフラとバングニとは同じであると記述した資料もある [Intelligence Branch Division of the Chief of the Staff Army Head-Quarters India 1907: 167]。<62 コミュニティ>サイキア (Saikia) の記述によれば、ダフラの社会には、連帯感で結ばれた共同体としての村はない。すぐ近くのロングハウス同士でも、住人たちには政治的にも経済的にもまた宗教的にも共同し合う義務は一切ないという。

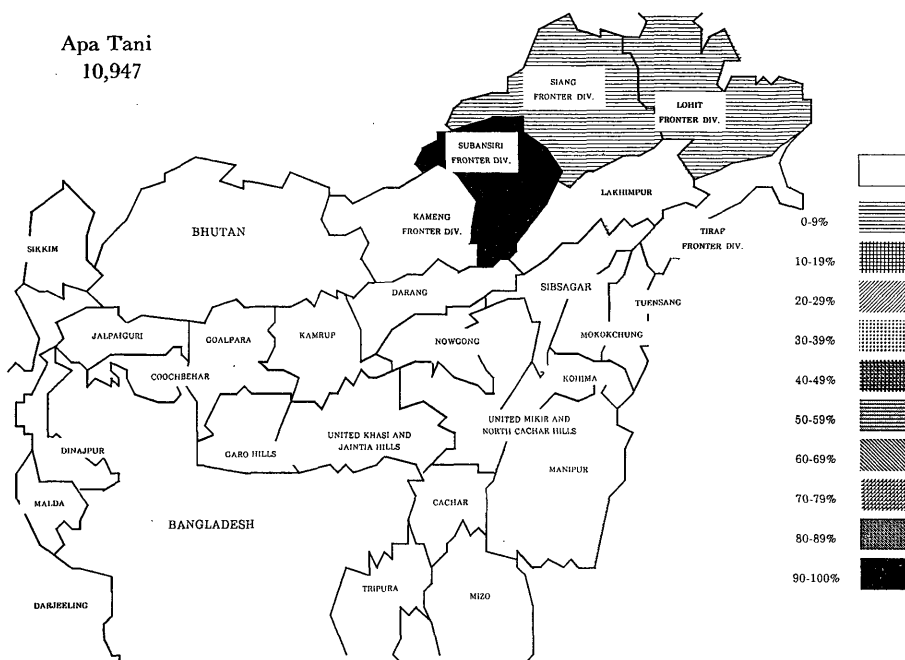
<56 社会成層>またニシ社会には、ネテ (Nete) とばれる自由民と、ネラ (Nera) と呼ばれる奴隷がいる [SAIKIA 1964: 15-20]。<567 奴隷制>サルン (Salung) という小集団が、西カメン・ディストリクト (West Kameng District) のボンディ (Bomdi) 川の近くにダフラとともに住んでいる。彼らは山地部族の中で、いちばん古い部族と言いつたえられている。彼らは、鍛冶屋としてたいへん優秀である。服装はダフラと同じであるが、タケの帽子はかぶらない。ダフラは彼らを奴隷として使用していた。アルナチャル州政府は、彼らをボンディのダフラから引き離し、奴隷の地位から解放した [Pradip Das による]。

<626 社会的統制>ダフラの社会の特徴は法や秩序を維持するための全部族的な組織がないということである。争いは当事者間で解決しなければならない。争いごととは、ふつう村対村ではなく、家対家で起こる。

<43 交換>このように別個に存在する家を、友好的にし、相互扶助的に結びつけるためにアロムダムトム (aromdumtom) やダポ (dapo), パケ (pakhe) とよばれる儀礼的な交換関係がある。この儀礼的な交換関係を維持するために幾度となく相手の家に訪問が行なわれる。その結果、双方の家に友好の絆が結ばれるのである [SAIKIA 1964: 20-26]。

(栗田靖之)

アパ・タニ (Apa Tani)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<13 地理>アパ・タニ (Apa Tani) は、低地スパンシリ・ディストリクト (Low Subansiri District) に住む [SEN 1986: 31-32]。チョーダリー (Chowdhury) によれば、アパ・タニはスパンシリ・ディストリクトのダフラ (Dafla, Nishi) とヒル・ミリ (Hill Miri) の間の26平方キロメートルに住んでいる [CHOWDHURY 1983: 28]。

<142 身体諸形質の情報>彼らは背が高く、大変良い容姿をしている。鼻は高く、面長である。肌の色は白い [SEN 1986: 31-32]。<29 服装>彼らの服装は、隣接しているダフラ (Dafla, Nishi) と大変似ている。男性は額の上で水平に20センチメートルほどの長い留金で髪の毛をたばねている。ダフラの髷は大きく、アパ・タニの髷は小さい。外見的にはこれが区別できる大きな特徴である [Pradip Das による]。男性は入墨を下唇の所で真横に、そして顎の下まで入れている。それはちょうどTの字の形をしている。女性は額の上から鼻の上までと、鼻から八の字に、また下口唇の下から横一文字に入墨をしており、髪の毛を頭の上に巻き上げている。このような入墨のために、アパ・タニの女性は、ディブルガル (Dibrugarh) のような町で仕事につくことを嫌っており、何人かの女性が整形手術を受けて、この入墨を消したという

[Pradip Das による]。またできるだけ大きな木製の鼻栓を小鼻につけたいと思っている。男性は両側のとがったサトウキビでできた帽子をかぶっている。女性は男性と同じく、広くて青いふちどりがあり、ひざまでとどくシャツとジャケットを着ている [SEN 1986: 31-32]。〈15 行動の過程とパーソナリティー〉彼らは平和な部族である。〈42 財産〉彼らの間では、自分の財産を散財したり、人にあげたりする者が豊かで、地位の高い者であると考えられている。

〈58 婚姻〉婚姻は簡単に行なわれる。結婚式はない。もし若い二人が夫婦として住もうと思えば、女性が男性の両親の家に移って住む。しかし一般的には若い二人は、結婚後、新しい家をつくる。〈34 建造物〉家は地面に建てられる。家は木の杭の上にタケ製の壁、イネワラで屋根がふかれる。彼らの家は小さな通路に面していて、壁と壁を接して建てられている [SEN 1986: 31-32]。

〈24 農業〉彼らは、こみ入った灌漑システムを発達させた優れた農民である。コメを常食にしている。彼らは、段々畑で耕作をしている。補助的に鋤でたがやすこともあるが、人力の鋤耕が行なわれている。コメ、穀類、ジャガイモ、キュウリ、トウガラシ、タバコ等を耕作している [SEN 1986: 31-32]。

〈161 人口〉通常アルナチャル・プラデシュの豊かな自然のもとでも、焼畑農耕を行なっている部族社会では、1平方キロメートルあたりに6人ほどの人口しか保持できない [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 37]。しかしアパ・タニの部落では、1平方キロメートルあたり、300人が住んでいるが、これは驚くべきことである。これはアパ・タニが集約的な農業を行なっているから可能なのである。ダフラもアパ・タニも農業を行なっているが、アパ・タニ以外の部族は、焼畑を中心に農耕を行なっていて、ひとつの畑を2、3年以上つづけて耕作するのはまれである。それに対してアパ・タニは、農地を大変よく手入れしている。そして灌漑された田畑は平原のアッサム人にとっては驚異的であった。水田での稲が主作物であるが、乾いた土地では、穀類、トウモロコシ、ジャガイモ、野菜等を栽培している [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 28-29]。またハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf) は、標高1,500メートルにおいて、二毛作を行なっていると報告している。また彼らは、水田では養魚も行なっている [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 288]。

〈43 交換〉アパ・タニは、人口の割には耕地は狭いが、生産力が高いので、余剰のコメを交易品としている。コメとブタやウシと交換する。彼らは、家内制手工業にも力を入れており、アッサム州でとれる鉄で、ナイフや刀をつくる。ワタは栽培していないが、コメとの交換で得たワタを紡いで糸にし、植物性の染料で染めて織物とし

ている。アパ・タニは優れた交易民としての才能がある。アパ・タニは低地アッサムからの交易品を高所に輸送するだけでなく、自らも非常に質の高い木綿製品をつくり出し、それとともに、鉄製品や植物の灰からとれる塩を交易品としている。アパ・タニの主な交易相手はミリ (Miri) 族である [FÜRER-HAIMENDORF 1982a: 58-59]。

<66 政治的行動>アパ・タニは7つの村に分れて住んでいる。彼らの社会は、非中央集権的である。各氏族を代表する首長が、村会をつくっているが、これも村人の要求があった時だけ開られる。祭は1年のうち数週間行なわれる。この場で首長同士が贈りものを儀礼的に交換する。これが部族全体の統合を象徴している。彼らの間で部族意識をはっきりと持っている。伝統的には、反社会的犯罪行為には、村長が村民の要求にしたがって死刑をも含んだ厳しい刑罰を決めた。私的な紛争は当事者間のなりゆきにまかされている。<68 侵犯行為と制裁>村同士の紛争が生じると、決闘の場が定められる。多量の槍が投げられて、それぞれの側に死傷者がでると、決闘は中止される。<56 社会成層>アパ・タニの社会には、貴族と平民の階級があり、2つの階級間では、婚姻はできないが、通常の生活では差別されていない。アパ・タニは、貴族、平民の身分は来世までもたらされるものと信じている。アパ・タニは、近隣のダフラやミリと抗争していたので、アパ・タニの奴隷には、ダフラやミリ族出身の者が多い [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 30C]。アパ・タニの宗教は、アニミズムである [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 28-29]。

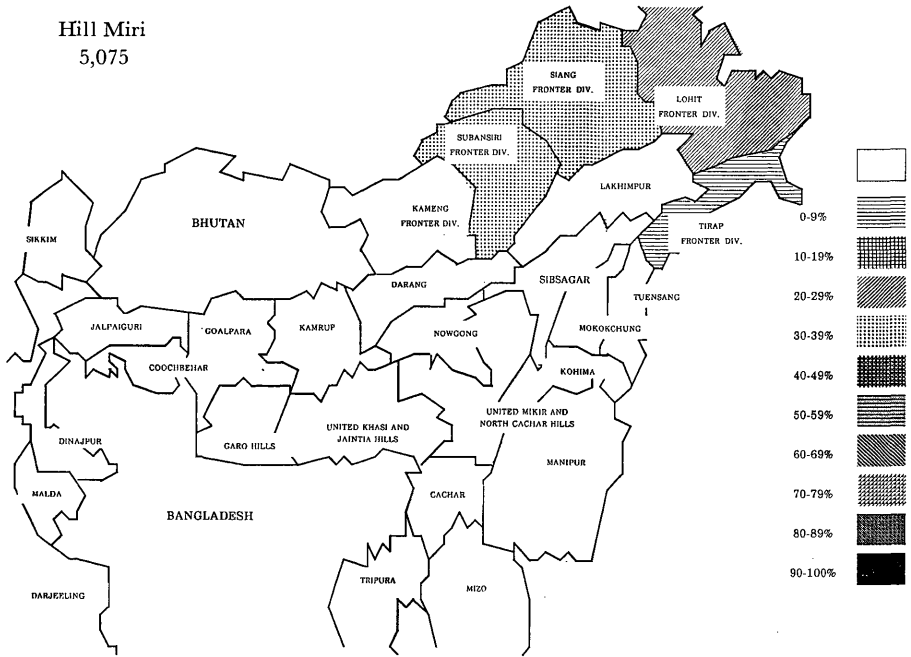
アパ・タニは、ダフラ、ヒル・ミリ (Hill Miri) やその他の関連した部族とは、その住んでいる場所、言語、風習、伝統といった側面において、他のアルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) の住民とは異っている。<36 集落>ダフラが定住していないのに対して、アパ・タニは集村に定住している。村では家が軒を接して建っている。このように密集した村落であるので、火事があると村全体が消失するという [Pradip Das による]。その村の中は区画に分れていて、それぞれの区画は外婚的クランとなっている [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 28-29]。<23 家畜飼養>ミタン (mithan) 牛は、アパ・タニにとって重要な資源であると同時に、ミタン牛を保有していることは、威信を高めることであり、同時に犠牲に用いたり、交易に用いたりする。しかし普通牛の飼育も行なわれている。ミタン牛を交換の財とすることは、だんだんと現金にとって変わられている。アパ・タニにおいては、相当量の食肉に対する要求がある。そしてそれらは、アパ・タニと劣らぬほど食肉に対する要求のあるニシやミリに供給されている。ブタやウシもまたアパ・タニが平原から連れてきて飼育している。肉はこの地方の重要な食物である。かつてアパ・タニは穀物との交換で家畜

をダフラから得ていた。しかし現在では、アパ・タニが平原の人々から、商業として家畜を得るようになったので、近隣の部族との交易は大幅に少なくなっている。アパ・タニが牛肉を食べるので、平原のアッサム人からは、不可触民としての烙印を押されている [FÜRER-HAIMENDORF 19:82b 299]。

<46 労働>近年アパ・タニは政府の道路工事に従事し、現金収入を得た。そしてその金で、アパ・タニはハポリ (Hapoli) と呼ばれる町に店を持つようになっている。このハポリを中心としたアパ・タニの経済力は相当なものである [FÜRER-HAIMENDORF 1982b: 300]。

(栗田靖之)

ヒル・ミリ (Hill Miri)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<11 参考文献>ヒル・ミリに関する最初の報告書は、ダルトン (Dalton) のものである [DALTON 1872]。また最近の研究としては、チョーダリー (Chowdhury) がある [CHOWDHURY 1983]。これら2冊を主に参考としながら記述する。<131 位置>彼らは、高地スバンシリ・ディストリクト (Upper Subansiri District) に住んでいる。<115 情報提供者>1911年ミリ討伐隊 (Miri Mission) が派遣されて、ミリのことが明らかとなったが、それ以前については、彼らのことは、ダルトンの報告書以外にほとんど知られていなかった。<19 言語>彼らの言語はチベット・ビルマ語族であると考えられている。<156 社会的パーソナリティー>穏和で協力的である点をのぞいて、バンゲニ (Bangni) やダフラ (Dafla, Nishi) と大変似ている。彼らの村落は小規模で散村である。<58 婚姻>彼らの間では一夫一婦も見られるが、まれには一妻多夫もある。姓にあたるものはないが、名前の前に村の名前を付ける。<29 服装>彼らは、自分の手で織った自らの色彩で魅力的なデザインの服装をしている。彼らは、籐細工をよくし、女性同様男性も籐の繊維で織ったバンド (帯) でからだを飾っている。<75 病気>彼らは呪術的な治療を信じている。<76 死>死者

は土葬する [SEN 1986: 32-33]。

<36 集落>ヒル・ミリは、ダフラの東に居住している。そこはカマラ (Kamala) 川の両岸であり、カマラ川がクル (Kur) 川との合流するあたりからスバンシリ (Subansiri) 川と合流する付近までである。彼らは、2,000人以下である。2, 3の例外をのぞいて、村落は900メートルから1,200メートルの間にある。彼らは外部から見るといくつかのグループに分かれている。<618 クラン> Ghasi Miri は、ドル (Dhol) 川とスバンシリ (Subansiri) 川の間に住んでいる。Sarak Miri はスバンシリ川とランガ (Ranga) 川の間の外側に住んでいる。Panibotia と Tarbotia は、スバンシリ川の西の丘陵に住んでいる。これ以外にも Bani, Biku, Gocham, Taya などのミリのクランが知られている。かつてスバンシリのヒル・ミリは、民族的にも文化的にもブラマプトラ (Brahmaputra) 川のプレイン・ミリ (Plain Miri) と関連があると考えられていた。事実、彼らは顔つきや服装、習慣においてダフラとたいへん似ている。<171 文化要素の分布>ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf) は、彼らがダフラ (Dafla, Nishi) に属していると見なしている。しかしダルトン (Dalton) やグリアーソン (Grierson), ゲイト (Gait), マッケンジー (Mackenzie) などは、彼らは別の民族であるとみなしている。今日では、行政的にも彼らは別個の地位があたえられている [CHOWDHURY 1983: 28]。ダルトンは、プレイン・ミリは、あきらかに顔つきの違うものもいるが、アディ (Adi, Abor) の分派で、奴隷の脱走したものが、何年にもわたって平原に住みついたものであり、そして高床式の家に住み、農耕をはじめたのであろうと述べている。チュティヤ・ミリ (Chutiya Miri) をのぞいて、彼らの風俗習慣は、ディハン (Dihang) 溪谷からのものをしのばせる。彼らは、現在アディが住んでいた地域に住んでいたが、平原に追い出されたと考えられる。ダルトンは、ヒル・ミリは、Saiengya と Aiengya と呼ばれる2つのクランに分れると言う。そして彼らの髪型は、アディのものと似ている。

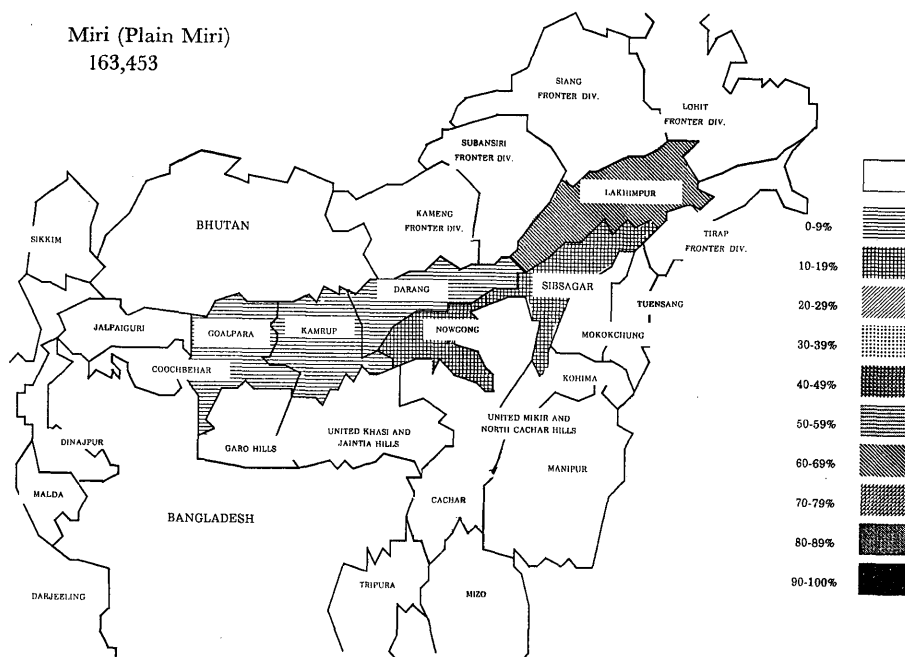
<101 アイデンティフィケーション>またダルトンは、Miri という名前は、彼らがアッサム平原とアディとの間の交易を独占しており、コミュニケーションの仲介をはたしていたので、その結果、仲介者または仲人を意味する Miri という名があたえられたのであろうと言う。これは、Miri という名がオリッサ (Orissa) 州で Miria ないしは Mila とよばれている言葉と同じであるという。<36 集落>ヒル・ミリの居住域はうっそうとしたジャングルの中である。視程は例外的な谷を横ぎる高所や坂の下の方の村や耕地をのぞいて、およそ10メートルから90メートルである。植生は標高1,200メートルから2,200メートルにいたってタケが見られる。2,100メートルから3,000メ

ートルでは、カシやシャクナゲが多い。しかしカシの樹型は、大きくない。＜173 口碑・伝説による歴史＞ミリは、彼らははじめ、もっと北方の地に住んでいたが、鳥の飛ぶのにしたがって、やがてここに住みついたと言う伝説をもっている。ミリに対する探検は、1897年に行なわれており、1911年から12年には、ミリ討伐隊が送られている。＜171 文化要素の分布＞ハイメンドルフは、ダフラとミリの区別に反対して、ドル (Dol) グループという名称を考え、ダフラの三つのグループ (Dopum, Dodum, Dol) のひとつだと考えている [CHOWDHURY 1970: 14]。ヒル・ミリとダフラ (ニシ) との区別をめぐる議論は、[CHOWDHURY 1970] に詳しく論じられている。

＜162 人口構成＞加藤によれば、インドの主張する国境線の北方に住むおよそ2,000人 (1982年) のアカ、ダフ (ダフラのことと思われる)、ミリを中国政府は少数民族に指定して、ロパ (珞巴 Lupa) の名称を与えている [加藤・1987: 843-844]。

(栗田靖之)

プレイン・ミリ (Plain Miri), ミシング (Mishing)



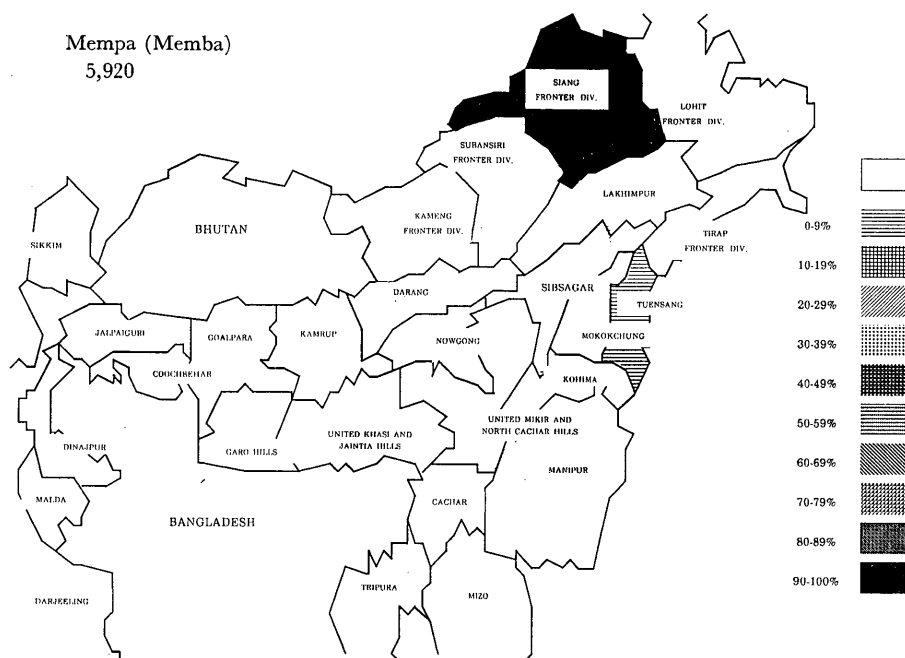
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>プレイン・ミリ (Plain Miri) は、アッサム政府とアディ族の間をとりもっていた。ミリ (Miri) という名前は、オリッサ (Orissa) 州の milia また Hmilia とおなじく、仲介者または仲人を意味している [CHOWDHURY 1970: 115]。ミプン (Mipun) は、ヒル・ミリをミシング (Mishing) の名称で紹介している [MIPUN 1978: 165-166]。<142 身体諸形質の情報>彼らは黄色のモンゴロイド系である。背が高く丈夫な骨格をしている。しかし前かがみの歩き方、ゆったりとした身のこなし方、低い調子話し方は、アディ族の特徴である。<177 文化変容と文化接触>プレイン・ミリは先祖の持っていた宗教的なものを失っている。<173 口碑・伝説による歴史>ダルトン (Dalton) は、プレイン・ミリがアディ (Adi, Abor) の逃亡した奴隷の子孫と考えられると述べている。彼らの間には多くのクランがあり、その内のあるものが、アッサムに定住したと思われる。<171 文化要素の分布>彼らは、牧畜生活の影響を持っている。草を束ねた小屋をブラマプトラ (Brahmaputra) 川の分流の堤の上にたて、洪水でもたらされた沖積土の地で耕作を行なっている。チュティヤ・ミリ (Chutiya Miri) をのぞいて、彼らの習慣は、ディ

ハング (Dihang) 溪谷まで遡ってたどることができる。彼らは北からやってきて、現在アディ族が住んでいる地に定住したのであろう。そしてアディ族によって彼らは、低地へと押し出されたのであろう。Saiengya と Aiengya のクランは、アディ族のように髪の毛を巻きあげている。〈30 装飾品〉そして若い女性は、装身具の端を子安貝や真鍮の房でかざっており、それはたいへん幻想的なものである。他のクランでは、アッサム人の服装や髪型をまねているが、民族的な血は守られており、身体的特徴は失っていない。〈26 食物消費〉彼らはブタやニワトリ、牛肉を食べ、酒やビールを飲み、食事の準備については、カーストによる差別はない。プレイン・ミリはアッサム的な祭を行なう。〈58 婚姻〉未婚の男女が大きな家で一緒にすごす。そして気が合えば結婚する。〈342 住宅〉家屋はアッサム風の高床であり、床下にはブタを飼い、汚物は床下に捨てる。家は川の岸に沿って立てられており、塀や囲いはない。耕地は、村からはなれたところにある。穀物倉庫は、畑の中に、何の防御もなく建っている [CHOWDHURY 1970: 1-15]。

(栗田靖之)

メンパ (Mempa, Memba)



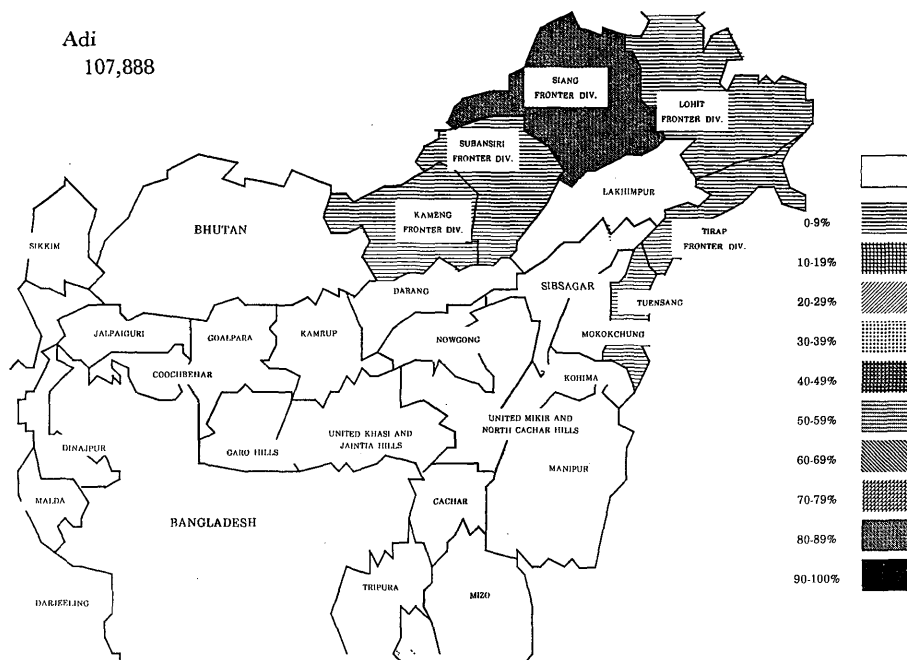
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>中国のチベット自治区にも、門巴(メンパ)という少数民族が存在している。加藤は、門巴は、メン地方の人々を意味すると述べている。また1960年代にメンパをチベット族から分けて一民族としたのは、中印国境紛争への政治的配慮があったからだ指摘している [加藤 1987: 773]。アルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) の西シャン・デストリクト (West Siang District) に住む。かれらはタワン・ディストリクト (Tawang District) のモンパ (Monpa) と類似性を持つ。<77 宗教的信仰>メンパ (Mempa) は仏教徒である。彼らはたいへん踊りを好む。しかし経済的にも、文化的にもモンパ (Monpa) と比較して大変低い水準である [SEN 1986: 36]。メンパ (Mempa) とカンバ (Khamba) は、カメン・ディストリクト (Kameng District) のモンパ (Monpa) と関連した部族である。<131 位置>カンバ (Kamba) は、ヤン・サン・チュ (Yang Sang Chu) 川流域に居住している。メンパ (Mempa) は、ディハング (Dihang) 川またはシャン (Siang) 川がシャン・ディストリクト (Siang District) の北方域を横切っているゲエ

リン (Gelling), ゲェレン (Gelleng), テュティング (Tuting), メチュカ (Mechukha) 付近に居住している [CHOWDHURY 1983: 30]。

(栗田靖之)

アディ (Adi), アボル (Abor)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<115 情報提供者>アディ (Adi) に関する調査は、ドゥンバル (Dunbar) の報告書が古典的なものである [DUNBAR 1915]。<101 アイデンティフィケーション>この部族の自称はアディである。アボル (Abor) とは、平原のアッサム人が、西シャーン・ディストリクト (West Siang District) や高地スパンシリ (Upper Subansiri) の丘陵地帯に住むチベット・ビルマ語族の言語をはなす人々に与えた名称で、支配に従わない人々を意味している。アボルという言葉は、今日では公式には使われてはいない。<618 クラン>アディはふたつに大きく分けることができる。Padam, Minyong, Pasi Shimong, Bori, Ashing, Tangam が一つのグループである。もう一つのグループは Gallong, Ramo, Boka, Pailibo である。彼らはすべてモンゴロイド系である。それぞれのグループは、地域的なものを基盤としている。ガロン (Gallong) は高地スパンシリ・ディストリクト (Upper Subansiri District) に居住している。アディは広い地域に分布しているが、共通の言語をもっている。<156 社会的パーソナリティー>アディはアルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) の他の民族に比べて、保守的ではない。彼らの村は民主的に組織されている [SEN

1986: 33-35]。<114 文献の解説>ロイ (Roy) は Padam, Minyong を題名に用いた研究書を著わしているが、この場合ロイは、Padam, Minyong でアディ全体を表わそうとしている [Roy 1966b]。Ramo については、ダスマナ (Dhasmana) の優れた研究書がある [DHASMANA 1979]。<142 身体諸形質の情報>アディ族は背が低い、健康的な身体をしている。ただ Padam だけが、他の民族に較べてやや背が高い。肌色は黒く、モンゴロイド系の切れながの目をしている。目の色は濃い茶色で真っ直ぐな黒い髪の毛をしている。顔は平らで楕円形をしており、額は広い。鼻は広い鼻孔で上を向いている。頭蓋はモンゴロイド系の長頭である。Minyong, Padam, Shimong は髪の毛を刈り込んでいる。ガロンは髪の毛を頭の回りで刈り込んでいる。ガロンの女性は、髪の毛を切らない。入墨は1910年頃のダウンバンの記録においても、すでに消えつつあると記載されている [SEN 1986: 33-35]。アディに関する形質人類学的な調査が行なわれており、その報告書が刊行されされている [Roy 1966a]。

<72 戦争>主な武器は、弓矢と山刀と長い剣である。<29 服装>ガロンの帽子は、楕円形で形はお碗のようである。アディは、機織りがうまく文様は芸術的である。男性は腰布とジャケットを身につけている。女性は2枚の布を身につけ、一枚は腰にもう一枚は胸に巻き付けている。女性は重いネックレスを付けている。彼らの間では入墨は一般的であった [DUNBAR 1915]。<24 農業>彼らは焼畑を営んでいる。主要農作物はコメ、トウモロコシ、タバコ、サトウキビ、阿片などである。<26 食物消費>彼らはゾウ、スイギュウ、ウシ、リス、シカ、アヒル、フクロウなどの肉を食べる。<77 宗教的信仰>主な祭は、スラング (Sulung) である。彼らはイヌを飼っているが、神への犠牲として、このイヌを殺す。<36 集落>アディの村は低地を避けて、高地に位置している。彼らは240メートルにもおよぶ吊り橋をツタとタケでもって作る。アディの家はおよそ1メートルから2メートル地面から離れて建っている。家はおよそ6メートルから12メートルで、内部には仕切りがない。それぞれの村には、ケバン (Kebang) と呼ばれる村会がある。その会合には正式のメンバーはなく、アディの男性がその会議のメンバーである。そこでは狩りや釣りのためにいつ森を切り開くか、いつどのようにして祭りを行なうかといったことが決められる。その会合が法的な力を持ち、違反者に有罪を言い渡す。この会合の長はメンバーの中から選ばれる。<882 青年の地位>モシュブ (Moshup) と呼ばれる若者宿があり、10才以上の若者が寄宿している。娘宿はルシェン (Rsheng) と呼ばれている。モシュブについては部族ごとにいろいろな名前がある。<58 婚姻>男性は結婚すると自分の家をつくる。<42財産>長男は3分の2の財産を相続する。そして残りは弟たちが相続する。

<46 労働>女性は機織りが上手でカーペットをつくる。<76 死>死者は埋葬される。ガロンは、埋葬のための穴を、他の部族よりも深く掘るようである [SEN 1986: 33-35]。

<619 部族と国家>イギリスとの接触についてはマッケンジー (Mackenzie) らを参照のこと [MACKENZIE 1884; Intelligence Branch Division of the Chief of the Staff Army Head-Quarters India 1907]。

(栗田靖之)

ガロン (Gallong)

<101 アイデンティフィケーション>ガロン (Gallong) は、アディ (Adi) のサブ・トライブである。<131 位置>かれらは、アルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) のシャン・ディストリクト (Siang District) とスバンシリ・ディストリクト (Subansiri District) との間に住んでいる。正確にはスバンシリ (Subansiri) 川の西からシド (Sido) 川までの間で、シメン (Simen) 川をすこし越えたシャン・ディビジョン (Siang Devison) の北東部に住んでいる。Liromoba, Yomsha, Gamlin, Kombong, Bagra, Basar, Daring, Gensi といった村がガロンの大きな村である。またわずかのガロンの村が下部シモ (Simo) 溪谷ある。北はシヨム (Siyom) 川、南はブラマプトラ (Brahmaputra) 川である。北方には Minyong, Boris, Ramos, Pailibos といった民族が、東には Minyong が、南にはプレイン・ミリ (Plain Miri) が居住している。ガロンは散村に住んでいる [SRIVASTAVA 1962: 1-5]。<24 農業>彼らの居住地域である川の兩岸の丘陵地帯は、300メートルから3,000メートルの標高で、焼畑がおこなわれている。<132 気候>またこのあたりは多雨地帯である。年間2,500ミリメートルから5,000ミリメートルの雨が降る。3月から9月までは雨期で、とくに5月には激しい雨が降る。10月から2月までは冬期である。10月からは、激しい風が吹き、寒い日がつづく [SRIVASTAVA 1962: 1]。

<142 身体諸形質の情報>彼らは、モンゴロイド系で、男性はがっしりした中肉中背の体格をしており、背は低い。髪の毛は黒い。広い鼻をしている [SRIVASTAVA 1962: 12]。<341 建築>彼らは通常高い尾根の上に住んでいる。その家は地面からおよそ1メートルから3.5メートルの高い木やタケの上に建てられている。家は正方形である。男性と女性は家に入るのに別の階段をもちいる。男性は正面の階段を、女性は横の階段を用いる。もし女性が正面の階段を用いると、森には動物が、川には魚がいなくなると彼らは信じている。家の真中には炉がある。家の中には煙突がないので、煙が充満する。炉の入口に面したところは、バゴ (bago) とよばれる客のための席である。それに対する席は、ニョシ (nyosi) とよばれ、家族の奴隷か年寄りの男女の席である。左側はニョデ (nyode) と呼ばれ、長男ないしはその妻の席である。右手はウドゥ (udu) とよばれ、未婚の男女の席である。<173 口碑・伝説による歴史>彼らの伝承によれば、ガロンは、チベットないしは、インドとチベットの境界線地帯に住んでいた。彼らは、谷筋を通して上部から低地へと移住したといわれる [SRIVASTAVA 1962: 5]。<19 言語>彼らの言語は、チベット・ビルマ語族である。二、三の音声

的特徴をのぞいて、アディ (Adi) 族の言語と類似している。ガロンの言語には声調がある。ガロンの言葉は、アルナチャル・プラデシュの中での大きな方言である [SRIVASTAVA 1962: 6-7]。<58 婚姻> 嫁として連れてこられた女性にたいしては、他の男兄弟は性的な関係をむすぶ権利を有している。いわゆる兄弟による多婚 (fraternal polyandry) がおこなわれている。交叉イトコ婚は彼らの間でおこなわれている。<142 身体諸形質の情報> ガロンは、髪の毛を長くしており、容貌が良いことで、ミニョン (Minyong) やパダム (Padam) と異なっている [SEN 1986: 35-36]。

(栗田靖之)

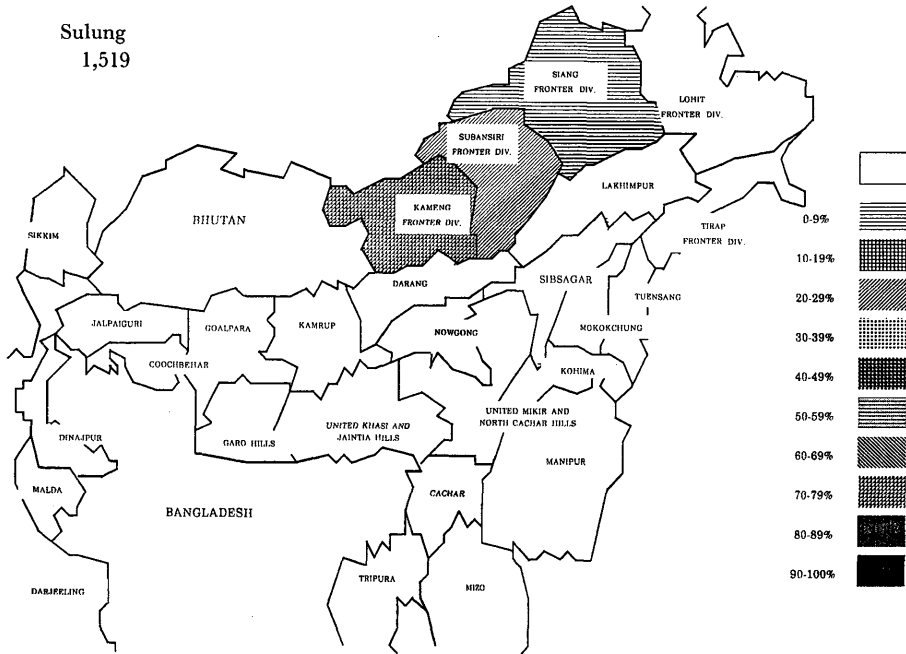
ミニョン (Minyong)

<101 アイデンティフィケーション>ミニョン (Minyong) はアディ (Adi) の一部族であり、西シャン・ディストリクト (West Siang District) に住んでいる。彼らはミシュミ (Mishmi) のサブ・トライブであるパダム (Padam) と深く結びついている。彼らは70の村に住んでいる。<882 青年の地位>村には少年と青年、未婚の女性のための宿がある。彼らは踊り上手で、機織りがうまい。パダム (Padam) やこれと同じくミシュミ (Mishmi) のサブ・トライブであるイドゥ (Idus) のように、男女とも髪を短くしている。<62 コミュニティ>彼らは年寄りによるケバング (Kebang) と呼ばれる寄り合いをもっている。<562 性別による地位>女性は社会の中で高い地位を占めている。<26 食物消費>彼らはコメを常食にし、ブタ肉もよく食べる。彼らはライス・ビールをよく飲む。

<58 婚姻>婚姻は、彼らの古くからの習慣によって若い男女に相談することなく、両親が決める。時には子供が生まれる前から、結婚が決められていることもある。離婚者、未亡人の再婚は認められている。<76 死>死者は土葬される [SEN 1986: 36]。

(栗田靖之)

シュラング (Sulung)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>シュラングは、カメン・ディストリクト (Kameng District) とスパンシリ・ディストリクト (Subansiri District) にまたがって広く居住している小さなグループである。彼らの人口は、この両地域を含めて2,000人を越えない。彼らはパル (Par) 川の北方の入域困難な地域に住んでいる。その地域はスパンシリ (Subansiri) 川からブータン (Bhutan) 国境におよんでいる。彼らの居住地域はおよそ 900 メートルから2,100メートルである。

<22 食物獲得>彼らは未開の状態にあり、食物を捜すために、たいへん広範囲に歩き回る。現在彼らは、農耕を営んでいる。彼らは、かなり早い時期にこの地に移住してきたと考えられる。<142 身体諸形質の情報>彼らは、隣接の部族より身体的にはやや小型である。

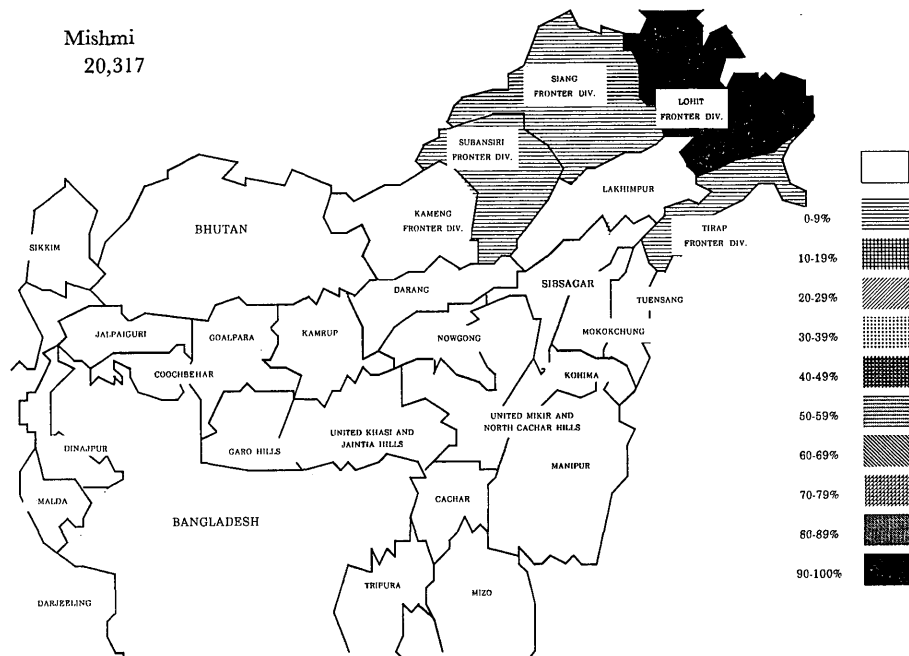
<29 服装>服装や容貌からしてもダフラ (Dafla, Nishi) とほぼ同じである。入墨に対する強要はない。彼らは、生態的にも社会的にもニシに依存している [CHOWDHURY 1983: 28]。

<342 住宅>家屋は急斜面に建てられており、ニシのそれと似ている。<56 社会

成層>彼らは、ニシの奴隷よりも、ほんの少しましである。<22 食物獲得>ずっと昔には、彼らは農耕を知らず、バングニ (Bangni) 同様に、狩や食物採集をして、半遊牧的生活を行ってきた。今日では彼らは焼畑を行なっている。<411 武器>弓矢を武器として使用する。彼らは鉄や真鍮の細工が巧みである。<76 死>死者は火葬される [SEN 1986: 30-31]。

(栗田靖之)

ミシュミ (Mishmi)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>アルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) のディハン (Dihang) とロヒット・ディストリクト (Lohit District) に住む。<618 クラン>彼らは, Idu (別の名を Chulikata), Taraon (別の名を Digaru), Kaman (別の名を Miju) の3つのグループに分かれている。Idu-Mishmi (Chulikata) は, 髪の毛を頭の回りでもるく刈っている [SEN 1986: 37]。Digaru(Taraon) と Miji (Kaman) は, 髪の毛を頭の上で結んでいる。Chulikata には, Bebejiya というサブ・トライブがある。Mishimi はその色彩豊かな服装が特徴である。彼らは, 遠い昔ビルマから移住してきたと言われている [CHOWDHURY 1983: 31-32]。

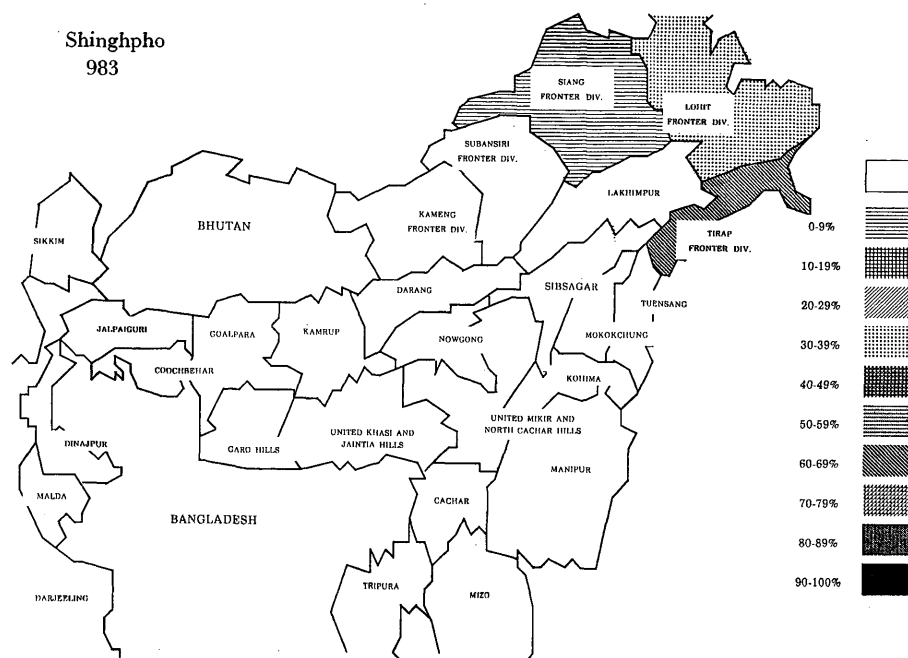
<101 アイデンティフィケーション>イド・ミシュミ (Idu-Mishmi) の村は, それらのある川の名前から付けられている。<34 建造物>家は離ればなれに建っており, その家は時には50メートルにもおよぶものがある。その細長い家には, いくつかの部屋がある。彼らは伝統的な歌と踊りを持ち, 文化的には豊かである。<142 身体諸形質の情報>ミシュミは, がっしりした身体である。背は低い, 広い肩をしており, 頭は大きく, 大きな鼻の穴で鼻は低い。目は小さく, つりあがっている。女性は機織

りが上手である。＜22 食物獲得＞小さな小鳥と、野生のネズミを除いて、女性には肉食を禁じられている。＜411 武器＞彼らの武器は石と弓で、男性はタケ製の帽子をかぶっている。＜76 死＞死者は、一夜家に留めおかれるが、それから埋葬され、5日の後に取り出されて火葬される [SEN 1986: 37]。＜42 財産＞ミシュミの間では、多くのミタン牛と多くの妻を持つことが富の象徴となっている [Intelligence Branch Division of the Chief of the Staff Army Head-Quarters India 1907: 181]。

＜101 アイデンティフィケーション＞さきに述べたようにミシュミは、3つのグループに分かれているが、アディ (Adi, Abor) と同じように、言語や大きな文化的側面においては、おたがいが結び合っている。＜131 位置＞Digaru (Taraon) と Miji (Kaman) は、ロヒット (Lohit) 川とその支流に住んでいる。Chulikata (Idu) はディバン (Dibang) 川とその支流に住んでいる [CHOWDHURY 1983: 31-32]。＜11 参考文献＞ミシュミに関する古典的な報告書としては、19世紀半ばチベットとアッサムの通商路を開拓する任務に就いたクーパー (Cooper) の報告書がある [COOPER 1873]。

(栗田靖之)

シンポー (Shingpho, Shimpho), カチン (Kachin)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション> シンポー (Shingpho) は、ビルマではカチン (Kachin) と呼ばれている民族であり、そのいずれの言葉も人間を意味している [MACKENZIE 1884: 61]。カチンは、上ビルマー帯に数多く居住しており、ビルマのカチンについては報告も多い [三森 1945]。しかし、ビルマのカチンとこのアルナチャル (Arunachal) のシンポーの生活様式がまったく同じものであると結論づけることはできないので、ここではアルナチャル・プラデシュやアッサムに居住しているシンポーについての記述のみを紹介することにする。

<131 位置> アルナチャル・プラデシュにおいては、シンポーはティラップ・ディストリクト (Tirap District) のボルドゥサ・サークル (Bordusa Circle) およびロヒット・ディストリクト (Lohit District) に隣接した地域に住んでいる。<166 国内移動> シンポーは、1793年にビルマのパトカイ (Patkai) 山脈とチンドウィン (Chindwin) 川の間の丘陵地帯から移住してきた。<101 アイデンティフィケーション> かれらは、ビルマ語でカキェン (Kakhyen), クキェン (Krkyen), カコ (Kako) と呼ばれていて、最初はイラワジ川の東からユンナン (雲南) に広がる地域に居住し

ていた [CHOWDHURY 1983: 33]。<77 宗教的信仰>彼らの宗教は、仏教であるとセン (Sen) は記述している [SEN 1986: 38]。しかしハンター (Hunter) は、彼らの間における超越神についての観念を紹介している。それによるとナット (Nhat) と呼ばれる有害な精霊があり、これを宥めるためにニワトリ、ブタやイヌを用いて犠牲儀礼を行なっている [HUNTER 1879]。<15 行動の過程とパーソナリティー>シンポーは、かつては強力な民族であり、好戦的な民族でもあった。<52 レクリエーション>彼らの祭りは色彩豊かで、フラ・ポイ (Fra-Poi) と呼ばれている [SEN 1986: 38]。<618 クラン>彼らはいくつかのクランに分れていて、そこにはそれぞれ首長が居る。それらのクランは、ひとつのリネージまたはサブ・リネージで組織されている。<34 建造物>住居はカムティ (Khamti) のものと似ており、25メートルから30メートルの長さで、6メートルの幅があり、いくつかの区切りがある [SEN 1986: 38]。<142 身体諸形質の情報>人種的には、彼らはモンゴロイド的特徴を持っている。目は切れ上っており、ほほ骨は高い。肌の色は黄褐色か茶褐色である。シンポーの男性は、長い髪の毛を頭の上で結んでいる。結婚した女性も、長い髪の毛を頭の上で結んでおり、銀のクサリで留めている。彼らは瑠璃製の数珠などの装身具を身につけている。結婚している女性は、両足の足首から膝まで入墨をしている。男性は四肢に入墨をしている [SEN 1986: 38]。彼らの身長は1.6メートルを越えることはない [Intelligence Branch Division of the Chief of the Staff Army Head-Quarters India 1907: 188]。

<29 服装>彼らの服装は、木綿の色つきのジャケットで下着は木綿か絹である。男性はルンジー (lungi) と呼ばれるいろいろの色で織られた腰巻とジャケット、頭には白いターバンをつけている。女性はスカートと腰と首の周りに色のついた木綿の布で細工されたみじかいジャケットを着ている。<24 農業>彼らは種々のコメを栽培しており、コメの収穫は上々である。<32 原材料の加工>男性は鍛冶屋としても優秀で、鉄を持ちいて山刀 (dao) や槍をつくっている。女性は機織りに優れている [SEN 1986: 38]。

<72 戦争>シンポーは、ビルマ戦争の折、多くのアッサム人を奴隷としてビルマ領に連れさったことがある [ゲイト 1944: 356]。そして、かつてはアッサムにおける彼らの農業は、奴隷によって行なわれていた。しかし奴隷とは名ばかりで彼らは、結婚することも、財産を持つことも認められており、外見は自由人と同じであるという [Intelligence Branch Division of the Chief of the Staff Army Head-Quarters India 1907: 188]。

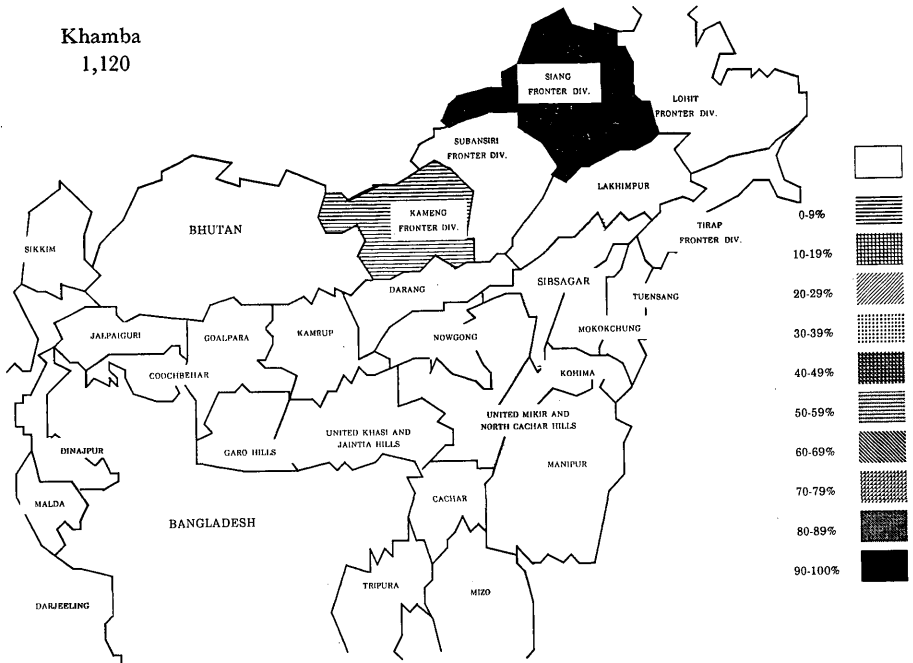
(栗田靖之)

タギン (Tagin)

<131 位置> スバンシリ (Subansiri) 川の左岸の上流, スバンシリ・ディストリクト (Subansiri District) の小高い丘の斜面に住む。<19 言語> 言語はチベット・ビルマ語族の北アッサム語群である。<342 住宅> 彼らは、タケと木の土台の上に建てられたロングハウス風のバラックに住む。この住居には一世帯以上の家族が住んでいる。窓は無く正面に入口がある。炉で火をたくと、家中は煙がいっぱいになる。<26 食物消費> コメ, トウモロコシ, 穀類は彼らの常食である。ミタン牛, ウシ, ブタ, ヤギ, イヌ, シカ, サル, 小鳥, ヘビ, ネズミを食べる。一般的には、彼らは食料を入会地から採る。<29 服装> 彼らは衣服を好まない。男性は、袖なしの黒いコートと木綿の一枚布を、女性はウールの一枚布を身に付けている。未婚の女性は、チベット風のウールの丸い帽子をかぶっている。<22 食物獲得> そして食料獲得のための優れたハンターである。<75 病気> 彼らは栄養不足で、そして彼らの容姿から見るかぎり、皮膚病もあり、あまり衛生的ではない。<58 婚姻> 彼らの間では単婚であるが、豊かな階層では多婚も見られる。<76 死> 死者は埋葬される [SEN 1986: 38]。

(栗田靖之)

カンバ (Khamba)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

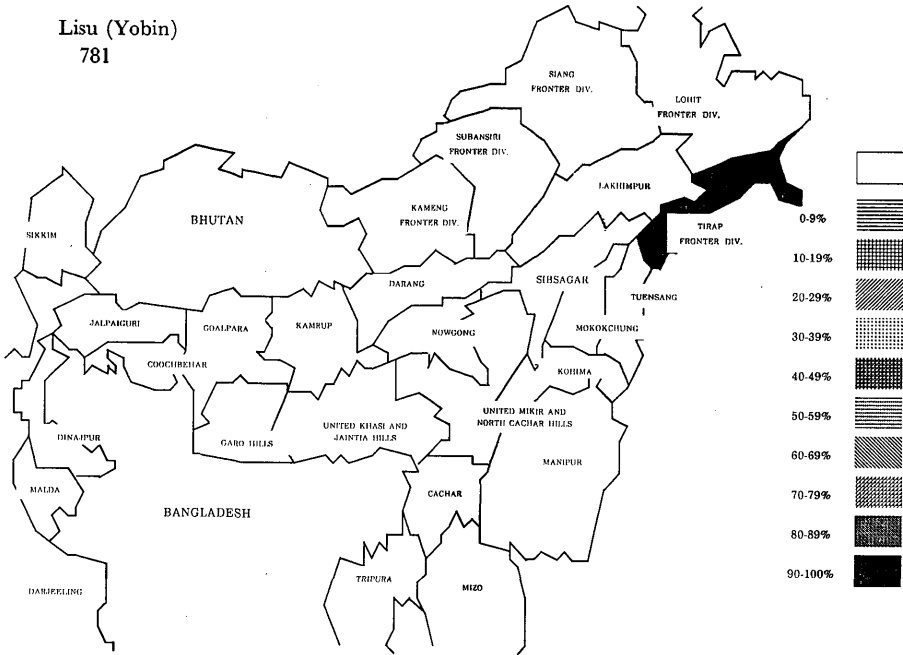
<101 アイデンティフィケーション> シャン・ディビジョン (Siang Division) に住むこの部族について、インド側の文献には独立した記述を見いだし得なかった。唯一チョーダリー (Chowdhury) の記述の中に、「メンバ (Memba) とカンバ (Khamba) は、カメン・ディストリクト (Kameng District) のモンパ (Monpa) と関連した部族である。カンバ (Khamba) は、ヤン・サン・チュ (Yang Sang Chu) 川流域に居住している。メンバ (Memba) は、ディバン (Dibang) 川やシャン (Siang) 川がシャン・ディストリクト (Siang District) の北方域を横切っているゲェリン (Gelling) 付近に居住している。」とある [CHOWDHURY 1983: 30]。

その名前から判断すると、チベット地方の昌都を中心にして居住するカンバと呼ばれる人びとが、ヒマラヤを越えてこの地に定住したのかもしれない。中国においては、カンバは少数民族として認定されておらず、この場合、カンバは、部族名ではなく、チベットのカム地方に住む人 (バ) を意味する言葉に過ぎない [栗田 1987: 30-31]。

(栗田靖之)

リス (Lisu), ヨビン (Yobin)

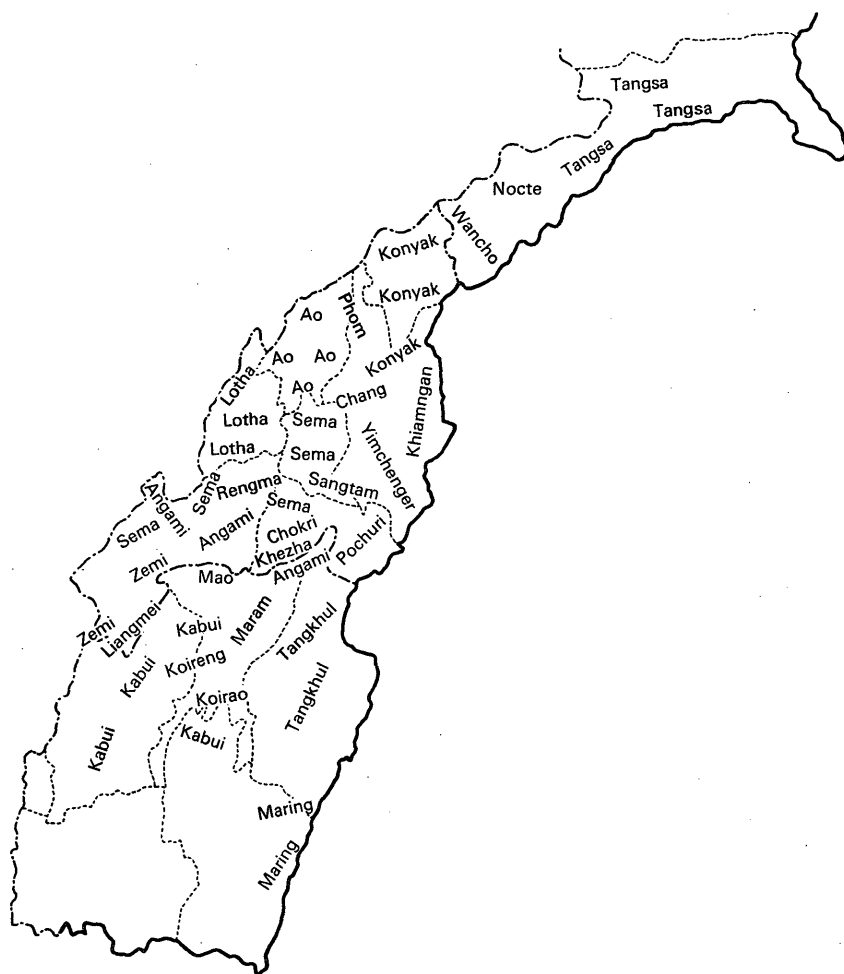
Lisu (Yobin)
781



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<115 情報提供者> リス族については、セン (Sen) の情報のみであった。<131 位置>彼らは、ティラップ・ディストリクト (Tirap District) のノア・デヒン (Noa Dihing) 川の川岸ビジョイナガル (Vijoynagar) という場所に多く住んでいる。<171 文化要素の分布>彼らは隣接する部族とは違った文化を継承している。<161 人口>人口はたいへん少ない。<101 アイデンティフィケーション>彼らは、ビルマの人々とはたいへん近い共通性を持っている。<24 農業>焼畑以外にこれと行った経済的活動はない。<20 コミュニケーション>地理的要因のために、彼らは外の世界とほとんど接触を持たなかった。<77 宗教的信仰>この部族は、彼ら自身の宗教的信念と儀礼を行なっている [SEN 1986: 41]。

(栗田靖之)



[SREEDHAR 1974; GORI 1984; SACHCHIDANANDA 1985]を参考に作図。
ナガランド州、マニプール州、ティラップ・ディストリクトにおける
ナガ諸族の分布を示している。

図7 ナガ諸族の分布

ナガ (Naga) 諸族概説

ナガという民族名称はよく知られている。しかし、ナガと呼称される人々は、決して単一の民族、あるいは部族ではない。言語についていえば、「村ごとにその話し方がある」といってよいほどに多様であり、相互の理解が不可能な言語が乱立している。個々のコミュニティあるいは部族そのものの中でも、たいへん異なった方言が並存している例が多いのである。また、部族ごとに特徴的な衣服、身体装飾があり、逆にこれが部族の識別に役立っている。また、農作物に例を取ってみても、アンガミ族に代表される水稻の籾段耕作から、焼畑での陸稻、雑穀、タロイモなどを中心にすえるものまで、地域、部族によるヴァリエーションに富む。この地域においては、「村落は国家である」と言いかえてよいような独立性の強い部族社会が多数ちらばっていたのである。(ナガ諸族に関する地図は、この項の終わりに一括して掲載する。)

<101 アイデンティフィケーション>「ナガ」という名称は、アッサム人による、山地民にたいする呼称である。これの語源に関しては確定できていないわけではなかった、サンスクリットで「山」を意味する「ナガ (Naga)」に由来するという説、アオ・ナガ (Ao Naga) 族などの言葉で「人」を意味する「ノク (Nok)」に由来するという説などがある。現在はアディ (Adi) 族をさすアボール (Abor) という名称が、かつて、アルナチャル・プラデシュの多くの山地民にたいして用いられたのと同じように、ナガという呼称は、カチン族の南西、クキ・チン諸族の北の部族全体、つまり、チンドウィン川とブラマプトラ川の間山地帯に住む部族全体を包括する意味で用いられてきたといえる。そして、現在においても、ナガという名称は、民族学的に明確な定義を持ち得てはいない。

<105 文化の概要>それでは、ナガと呼ばれている諸部族と他の諸族はいかに区別されるのか、またナガ諸族の間での共通性は無いのか、という疑問がわくが、これについては、以下のような意見がある。

「全ナガ諸族に例外を除いて共通していることは、その社会機構と経済機構である。まず社会機構においては、父系制をとり、氏族を単位とする外婚制である。村落はふつつ同一氏族の家々に占拠され、他のちがった氏族の村落と伝統的に結婚関係を結ぶ。……同一氏族以外の者と結婚をするという嚴重な族外婚制のわくがある。経済は他のアッサム諸族と同様焼畑耕作で、……毎年山頂にある村落の南辺の広大な地域内で焼畑を移動させるのである。……最近まで、奥地では首狩りの習慣をもっていた。」
[中根 1972: 53]。

「アッサムやビルマに住む隣接した諸族とナガ諸族を区別する基準を設けるのは難しい。しかし、ハットン(Hutton)は、「ナガ」なる用語は特定の地域に住む諸族をさす語として有用であるとし、またエルウィン(Elwin)は、『ナガとして知られる諸族にはある種の共通した雰囲気と精神があることが明白である。』と述べている [ELWIN 1961: 5]。形質、言語、文化の上では部族によって変異がみられるが、特定の信仰や経済行為においては明らかに一般的な類似性を示している。」 [NAG 1964: 44]。

<198 特殊言語>現在、多数の部族は、共通語として、アッサム語と現地の言葉をとりまぜたもの (Nagamese, Naga Pidgin) を用いるようになってきている。このような事情をふまえて、ここでは、ナガ諸族という呼び方を採用することにする。

<197 言語の同定>グリアーソンは、ナガ・グループ (Naga Group) を6つのサブ・グループに分けており、それぞれに属する言語集団をあげている。いまそれを表にすると以下ようになる [GRIERSON 1927]。

グループ サブ・グループ 言語

Naga	—Western Naga	—Angami, Sema, Rengma (Unza), Kezhama
	—Central Naga	—Ao, Lhota, Tengsa Naga, Thukumi, Yachumi
	—Eastern Naga	—Angwanku, Chingmegnu, Banpara, Mutonia
		—Mohongia (Borduaria),
		—Namsangia, Chang, Assiringia, Moshang, Shangge
	—Naga-Bodo	—Kachcha (Empeo) Naga, Kabui (Kapwi), Khoirao
	—Naga-Kuki	—Mikir, Sopvoma (Mao), Maram, Miyangkhang,
		—Kwoireng, Tangkhul, Maring
	—(unclassified)	

このなかで、一つの言語に纏められているもののうちでも、たがいに理解不能な方言を幾つも持っている例は多く、しかも、言語の違いとコミュニティーの違いが必ずしも一致しないため、大変混乱している。また同一の村落でも、そのサブ・グループであるケル(khel)ごとにかんがりの言語の差異がみられる場合がある。そのことを端的に示しているのは、諸部族の自称、相互の呼称の錯綜である(例えば [HUTTON 1921 a: 388-389] の表参照)。このような言語の差異が発達したことは、集落の孤立性が高かったことによって説明されている。現在、ナガ諸族は互いのリング・フランカとして、アッサム語化したナガ語 (Nagamese, Naga Pidgin) を使っているが、それまでは、自分の住む集落のみが国家であり、たがいに交渉を持つ隣接した集落くらいの範囲に彼らの生活世界は限られていたと思われる。言い替えれば、ナガ諸族が一つの集合として自分たちを認識し始めたのは比較的最近のことと思われるのである。

スリーダー (Sreedhar) とエンブリー (Embree) に従えば、ナガ諸語の分類に関する研究史を以下のようにたどることができる [SREEDHAR 1974: 25-33; Embree 1950: 41]。

「ナガ・グループ (Naga Group) の言語は、全般にビルマ語よりもチベット語に近い。」 [GRIERSON 1903]。

「ナガ諸族の言語の多くはチン (Chin) 語である。ナガ語か、また非ナガ語かの分類は、言語学的に大きな意味をもたない。」 [Embree 1950: 41]。

「北部のナガ諸語を分析してみると、これらの諸語であるチャン (Chan), ポム (Phom), ノクテ (Nocte), タンサ (Tangsa) などは、ボド・カチャリ (Bodo Kachari) グループにいれ、他のナガ諸語はクキ (Kuki) グループに入れるのが適当である。」 [SHAFER 1953]。

「ナガ諸語を、音声論、形態論、統語論などから分析、分類してみれば、一般にナガの呼称は、アルナチャル・プラデシュやビルマの諸部族と関係なく使われる傾向があるが、コニャック・ナガ語はそれらと大変近い関係がある。また、ボロ語、カチャリ語ともある程度似ている。」 [MARRISON 1967]。

このように、いまだナガ諸族の持つ言語について言語学的な整理が行われているわけではなく、これはナガなる用語の定義を一体なにに求めるかという事とも関わって今後解決されるべき問題点である。

<62 コミュニティ>本稿においては、多くのナガ諸族を、現在の主要な政治地区に分けて整理しておきたい。かつて、ナガ諸族自身にとっては現在引かれているような国境、州境線は意味をなさず、以下の領域全体が彼らの集会的なテリトリーであった。しかし、現在ではどの政治地区に属するかが社会的、文化的に重要となっている。

1 ナガランド州のナガ族

ナガランド州には、アンガミ (Angami), チャン (Chang), チョクリ (Chokri), ケザ (Kheza, Kezhama), キアムンガン (Khiamungan), コニャック (Konyak), リヤンメイ (Liangmei), ロタ (Lotha), ポム (Phom), ポチュリ (Pochuri), レングマ (Rengma), サンタム (Sangtam), セマ (Sema), イムチェンゲル (Yimchenger), ゼミ (Zemi) などの部族が居住する。

ナガランド州に住むナガ諸族は、古くから多くの研究者の注目をひいてきた。“Journal of the Asiatic Society of Bengal”, “Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland”, “Man”, “Anthropos”, “Man in

India' などの人類学に関わる雑誌には多くのレポートがあり、また、まとまった民族誌は、ハットン (Hutton)、ミルズ (Mills)、ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf)、カウフマン (Kauffmann)、スミス (Smith) らによって残されている。[HUTTON 1921a, 1921b; MILLS 1922, 1926, 1937; FÜRER-HAIMENDORF 1976; KAUFFMANN 1939; SMITH 1925]。ハイメンドルフなどを除けば、西欧人による現地調査のほとんどは、第二次大戦以前に行なわれたものである。<11 参考文献>本稿では、シモンズ (Simoons)、セン (Sen)、ゴーシュ (Ghosh)、スリーダー (Sreedhar) などにしたがって、ナガランド州に住むナガ諸族について概説しておくにとどめる [SIMOONS 1968; SEN 1987; GHOSH 1982; SREEDHAR 1974]。

<63 領土機構>1960年8月10日、ネルー首相による宣言によって、実質上の州となった N.H.T.A. (Naga Hills Tuensang Area) 地方は、1961年2月にナガランド (Nagaland) と改名され、1963年12月正式にインド第16番目の州として誕生した。現在この州には、コヒマ (Kohima)、ペク (Phek)、ウォカ (Wokha)、ズネボト (Zunheboto)、モコクチュン (Mokokchung)、テンサン (Tuensang)、モン (Mon) の7つのディストリクトがある。

<13 地理>州面積 (約16.5万平方キロメートル) のほとんどは山がちな土地で、ディマプール (Dimapur) のような例外を除いて低平地はほとんどない。ナガランドの年間降水量は、1,800から2,500ミリメートルほどであり、森林面積は約8万平方キロメートルに達している。この森林は常緑樹の密林となっており、樹種はたいへん豊富であるほか、野生牛、ゾウ、トラなど様々な野生動物のすみかにもなっている。低平地は夏季には気温・湿度ともに高く、居住に適した気候ではないため、集落のほとんどは夏冬ともに比較的冷涼な丘陵地にある。それらの標高は900から1,800メートル程度である [SEN 1987: 3-15]。

<105 文化の概要>ナガ諸族は、すべてチベット・ビルマ語族のモンゴロイドであり、父系にしたがって親族を構成する。狩猟や農耕においてはさまざまなジェンナ (genna 儀礼、タブー) が行なわれる。祭りは農事暦と深く関わるものが多い。<171 文化要素の分布>しかしナガ諸族はさまざまな点において多様であることが指摘されている。シモンズに従えば、ナガ諸族の文化の多様性について以下のようにまとめることができる [SIMOONS 1968: 106-109]。

<24 農業>農業と作物に関しては、ナガ諸族全体をみた場合は、陸稲を中心とした焼畑農耕が主流である。しかし、東アンガミ族は急傾斜地に造成した棚田での水稲耕作を行なっている。また、この耕作法は彼らに接する諸部族にも伝播しており、

それらはこの水稻耕作とともに焼畑耕作も行なっている場合が多い。こういった部族に含まれるのは、レンガマ族、セマ族の一部、タンクール族などのマニプールに住むナガ諸族の一部などである。他に作物として重要なものには、ミレット、トウモロコシ、ハトムギ、タロイモなどがある。コニャック族の中には、タロを主作物とし、ミレットや陸稲を副作物としているグループも存在していた。ロタ族、セマ族、レンガマ族、アンガミ族などは、穀物の種を穴に蒔くのに対して、コニャック族、ポム族、サンタム族、イムチェンゲル族、アオ族などは散播する。

<34 建造物>家屋については、南部のグループの中には、地面の上にじかに家屋を建てるものもあるが、多くはタケで作った高床の上に家屋を建てている。ロタ族は両者の折衷型を好む。また、家屋の大きさ、耐久性、装飾については、ヴァリエーションに富んでいる。<344 公共建造物>つぎに若者宿についてであるが、アッサム語であるモルング (morung) という言葉は、ほぼすべてのナガ諸族においてみられる若者の組織、またさらにその活動の拠点になる建築物双方をさす言葉として慣習的に用いられている。若者宿 (モルング) は一般に村落の中でも最もきわだった建物で、大きくかつ念入りの装飾がなされていることが多い。しかし、アンガミ族やセマ族の場合は一般に若者宿を持たず、普通の家屋や首長の家屋が若者の組織 (モルング) の活動の場となっている。モルング組織は、クランの構成員のうちの未婚の男性からなる。この組織はクランに由来し、クランの結束を守る役目を果たすものであるが、組織への加わり方、組織に対する忠誠度、組織のメンバーである期間などに関しては、部族によって違いがみられる。

<621 コミュニティの構造>政治体制については、コニャック族などでは強力な権力を持つ王 (首長) を中心とした明白な専制体制、階層的なリネージの構成がみられるが、セマ族などではさほどでもなく、アオ族、ロタ族、アンガミ族などではある程度民主的な政治体制がみられる。

<304 身体変工 [身体損傷]>入墨に関しては、南部や西部のグループではみられないのに対して、コニャック族やチャン族は男女とも入墨をし、またアオ族やサンタム族においては女性だけに入墨がみられる。女性の入墨は婚姻や出産と関わる人が多いのに対して、男性の入墨は首狩りに関わる人が多い。

<72 戦争>首狩りについては、イギリスの統治下に入るまでは、どの部族でも残っていたといわれている。首狩りも婚姻や出産と関わっており、首狩りを遂行していない男が結婚するのは容易ではなかった。とくにコニャック族などでは、戦果をあげた襲撃に参加した経験のない男性は「男」と認められなかった。

<764 葬式>葬式の方法については、埋葬するか、台の上で風葬するか2通りがある。多くのグループは埋葬するが、墓の位置、石の利用法、木の彫像などに関しては、様々なヴァリエーションがある。台の上で風葬するやり方は、アオ族のほか、ディク川以東の部族でよくなされている。しかしこれらの中でも、頭蓋や遺体の取扱い方についてはさまざまである。一般に、葬送の儀式の一部は、播種や収穫の時期に行なわれることが多い。

<77 宗教的信仰>しかしこれらの多様性のうちにも、ナガ諸族一般に共通する宗教的信仰がみられ、これが彼らの文化上の個性である首狩り、勲功祭宴、巨石建造などと結びついている。ここでもシモンズにしたがえば、以下のようにまとめることができる [SIMOONS 1968: 109-114]。

<776 精霊と神々>ナガ諸族は無数の精霊の存在を信じており、またそれらには、人間のように種々様々の個性がある。人に害をなす精霊に対しては、供儀を行なうことで、それをなだめることができると考えている。<771 宗教の一般的特性><78 宗教的慣行>人の頭にはある種の生命力が宿っている。これは生存中でも死後でも種種の方法によって他のものに移らせることができるものであり、この生命力が、村全体や個人の幸福や豊饒を保証する力となる。首狩りを行なうのは、それに宿る生命力を得るためである。生命力がもたらす豊饒とは、村人や家畜の多産、作物の豊作などである。長期間の一連の儀式からなる勲功祭宴 (Feast of Merit) は、主催者の社会的地位の向上という目的も含まれているが、豊饒を求めるためのものであり、主催者の持つ豊饒な生命力が、村やクランに豊饒と幸福を与えるほか、主催者自身も更なる豊饒を得られることが、期待、保証されるのである。

<346 宗教用、教育用建造物>巨石による記念建造物は、この生命力をのりうつらせようとしたものであり、勲功祭宴や葬送と関わって建築される。儀式によって生命力が乗り移った建造物は、そこから周囲に影響を与え、村落の豊饒を末永く保証する力となる。人が死んだ際に作られる木の彫像や墓石も、やはりその人の生命力が宿ったものであり、同様に周囲に影響する。<788 儀礼>これらの生命力に関わる豊饒を保証する諸儀礼においては、ブタやニワトリなどの家畜が犠牲にされるが、最も値打のある犠牲獣は、ミタン牛あるいは水牛と考えられている。

<17 歴史と文化変化>しかし以上のような伝統的文化を持つナガ諸族においても、近年の文化変容は急速に起こっている。第二次大戦後の都市の発達、教育の拡大、キリスト教の浸透などによって、伝統的な文化は遠隔地の村落や古い世代にのみ見ることができるといわれている [SEN 1987: 24-26]。

さて現在のナガランドに居住する諸族を概観しておきたい。コミュニティの併合や分離はたびたび起っているようで、どれを部族の単位とするかは問題であるが、以下に取り上げるのは、センが示した、現在州政府が認定したコミュニティである [SEN 1987: 24-26]。<161 人口>なお、それぞれの人口については、1971年センサスによれば以下のとおりである（数字は人口を表わす）。

Ao	74,016	Konyak	72,319
Sema	64,918	Chakhesang	43,438
Angami	43,994	Lotha	36,638
Sangtam	19,315	Phom	18,019
Chang	16,075	Khiemungan	14,338
Yimchunger	14,146	Zeliangrong	13,883
Rengma	8,174	Tikhir	2,800
Makware	2,501	Chirr	692

(1) ジェリアンロン (Zeliangrong)

このグループは、ゼミ (Zemi, Zemei), リヤンメイ (Liangmei), ロンメイ (Rongmei) の3部族がなすコミュニティである。彼らは、かつてカチャ・ナガ (Kacha Naga, Kachcha Naga, Kachcho Naga) と呼ばれていた。居住域はマニプール州にも広がっており、現在そこでは、ゼミとリヤンメイはカチャ・ナガ族、ロンメイはカブイ (Kabui) 族として知られている [SEN 1987: 43]。またグリアーソンの示した言語名のうちで、ゼミ、リヤンメイ、ロンメイにあたるのは、それぞれ Empeo, Kowireng, Kabui である [GRIERSON 1927: 65-70; SREEDHAR 1974: 14-15]。

ゼミ・ナガ族の居住域は、ナガランド州の南西部から、北カチャル山地などにまで広がっているが、ダス (Das) は、ナガランドのゼミ族と北カチャル山地のゼミ族とは文化的な違いはほとんどないとしている [DAS 1975: 163]。またハットン は、ゼミ族はコノマ (Khonoma) のアンガミ族に従属していたことを記しており、彼らの文化はアンガミ族の影響を強く受けている [HUTTON 1921a: 352]。なおジェリアンロン族の踊りはナガ諸族の中でも最も優れているとされている [GHOSH 1982: 260]。

(2) チャケサン (Chakhesang)

このグループは、チョクリ (Chokri, Chakhuma), ケザ (Kheza, Khezham) とサンタム (Sangtam) の一部がなすコミュニティである。かつては、チョクリは東アンガミ (Eastern Angami), ケザは南アンガミとして、アンガミ族のサブ・グループとして知られていた。チャケサン族の共通語はアンガミ語であり、村は村長会議によって統治される [SEN 1987: 47]。

(3) ポチュリ (Pochury, Pochuri)

かつては東サントム族として知られたのち、チャケサン・グループに加わり、サントム・ポチュリ (Sangtam-Pochuri) と呼ばれたが、現在は独立したコミュニティをなしている。この部族に関する情報は少ない。代表的な村はメルリ (Meluri) である [SEN 1987: 49; SREEDHAR 1974: 17]。

(4) アンガミ (Angami)

アンガミ族はナガ諸族のうちでも最も大きなグループの一つであり、かつ経済的に発展しているといわれている。自称はテンギマ (Tengima) である。ナガ諸族中で最も民主的とされる政治体系を持つ。アンガミ族の行なう棚田での水稲耕作は、彼らと隣接した諸族へと広まったことが知られている。この犁を持たない雑穀耕作について、周辺の多くの地域との多様な文化要素の比較を通して、その文化史的な位置づけを考察した大林によれば、雑穀耕作は低地の河川流域住民であるタイ系諸族やアッサム人のそれとは異なる系統のものであり、巨石文化複合（巨石建立、死者崇拜、石と水との深い結びつき、豊饒儀礼、非功利的な牛の飼育など）や平地家屋といった文化と深い関わりを持っている [大林 1954]。代表的な村落には、コヒマ (Kohima) やコノマ (Khonoma) がある。彼らのグループの一部はマニプール州にも住んでいる。

(5) セマ (Sema)

シミ (Simi) と自称するセマ族は、ズネボト (Zunheboto) を中心とした地域に居住する、ナガ諸族のうちでは比較的大きなグループである。ハットンによる民族誌の記述は、アンガミ族などとの比較に富むが、それによれば、彼らの住む地域はアンガミ族より比較的標高が高い冷涼な土地であり、陸稲、ミレット、ハトムギなどの焼畑耕作をおこなっている [HUTTON 1921b]。北ビルマの山地に住む焼畑民であるカチン族と、溪谷の低地での水田稲作民であるジャン族との政治・社会体系を比較したうえで、さらにカチン族社会を「貴族的」なグムサ型社会と「民主的」なグムラオ型社会に二分して、これらの社会変化を動態的に考察したリーチによれば、セマ族はグムサ型、アンガミ族はグムラオ型のタイプに近いという [リーチ 1987: 331-332]。

(6) レングマ (Rengma)

ミルズ (Mills) によれば、レングマ族は、アンガミ、セマ、ロタなどと同じく、ナガラランド南部のケザ・ケノマ (Kheza-Kenoma) に出自を持ち、比較的最近まで、ロタ族と同じ部族に属していたという [MILLS 1937: 4]。彼らの移動は、ミキール山地までにも達しており、アッサム州内にも分布しているが、イギリス勢力との接触の時期も早く、現在多くはキリスト教化しているといわれている [SEN 1987: 51-52]。

(7) アオ (Ao)

アオ族はモコクチュン・ディストリクト (Mokokchung District) を中心にアッサム州に接した地方に居住している。ナガ諸族の中ではアンガミ族と並んで最も大きな勢力を持っている。主たる方言には, Chongli, Mongsen, Changki があるが, これらはそれぞれ一群のクランからなり, さらに細かな方言の発達が著しい。ケザ・ケノマ (Kheza-kenoma, Kezakenoma) の石から生まれたという同じ伝統を持つ隣接部族であるセマ族やロタ族とは, 風葬や女性の入墨などの点で明確に異なっている [MILLS 1926: 1-3]。しかし現在は西洋化, キリスト教化がすすみ, 多くの者は古い慣習に従わなくなってきている [SEN 1987: 52-54]。

(8) ポム (Phom)

ポム族はかつてはコニャック族のグループに入れられていた。古い記述において, Tamlu, Chingmegnu, Assiringia などとよばれていたグループである [SREEDHAR 1974: 21, 27]。

(9) ロタ (Lotha, Lhota)

アオ族やレングマ族と隣接するロタ族は, それらとの文化的な共通点をいくつも持っている。彼らは個々の外婚クラン (ケル *khel*) の代表者からなるングティ (*ngti*) という政治組織を持ち, 首長の権力はさほど強くない。土地は村の共有地がほとんどである [SEN 1987: 55]。

(10) コニャック (Konyak)

ナガ諸族の中でも最も未開であるといわれるコニャック族は裸のナガ (Naked Naga) ともいわれるように, 衣類をあまり身につけず, 織物の技術も優れてはいない。彼らの居住域はビルマ側にも広がっており, 地域によってたいへん多数の方言がある [SREEDHAR 1974: 20-21]。ハイメンドルフが報告したように, 彼らの社会組織の特徴は, アン (Ang) と呼ばれる血統を持った王を中心としたものである [FURER-HAIMENDORF 1976, 森田 1984: 63-94]。そのほかの文化上の特徴としては, 入墨をすること, 木の彫刻に優れること, トライアル・マリッジ (Trial Marriage) を行なうことなどがあげられる。グリアーソンなどの古い記述において, Angwanku, Tablung などと呼ばれているのがコニャック族にあたる [SREEDHAR 1974: 27]。

(11) サントム (Sangtam)

テンサン, コヒマなどのディストリクトに住むサントム族は, 主として北のグループと南のグループに分かれている。現在南のグループはチャケサン・コミュニティーに属している。古い文献でツクミ (Thukumi) と記されているものは, サントム族に

あたる [SREEDHAR 1974: 21-22]。

(12) イムチェンゲル (Yimchenger, Yimchunger)

グリアーソンが Yachumi と記しているグループである。彼らの主作物は雑穀であり、最大の祭である metemneo も、ハトムギの収穫を祝うものである [GHOSH 1982: 262]。

(13) キアムンガン (Khamungan, Khiemungan)

かつて、Kalyo-Kengyu と呼ばれていたグループで、これは「石の屋根の家に住む者」の意を表わしている。スリーダーは、彼らの村落はインド側に27村、ビルマ側に130村あるとしている [SREEDHAR 1974: 22]。森田によれば、彼らの先祖は、キアムンガンの大地が亀裂を生じて生まれたという伝承を持つ。また、娘を略奪して結婚する慣習があるという [森田 1984: 109-122]。

(14) チャン (Chang)

テンサンを中心に分布しているチャン族は、Manjung とよばれる [SREEDHAR 1974: 27]。この部族はボム族やキアムンガン族との関係を持っていたため、儀礼の上でもそれらに似ている [GHOSH 1982: 260-261]。森田によれば、彼らは最近まで稲作を知らず、ハトムギとアワを主作物としている。葬送は、土葬にした後、一年後に頭蓋骨を掘り出し、谷底に安置するという [森田 1984: 95-108]。

(15) その他

以上の他に Makware (Mokware), Tikhir, Chin (Chirr) というごく少数の集団がある。Makware はサンタム族、イムチェンゲル族などの住む地域に散らばっており、Tikhir と Chin は、それぞれイムチェンゲル族とコニャック族の居住域のうちに住んでいる [SREEDHAR 1974: 23]。

2 マニプール州のナガ族

マニプール州には、カチャ・ナガ (Kacha Naga), コイレン (Koireng), カブイ (Kabui), ジェリアンロン (Zeliangrong), アンガミ (Angami), コイラオ (Koirao), マオ (Mao), マリン (Marring, Maring), タンクール (Tangkhul), マラム (Maram) などの部族が、マニプール盆地を囲む山地に住んでいる。ナガランド州のナガ族と親縁関係を持つ少数の共同体などがある。

<13 地理>マニプールのナガ諸族は、主として州の北部の山地に分布している。
<177 文化変容と文化接触> この諸部族は、歴史的にマニプール盆地のメイティ族の影響を受けてきており、また、言語や出自など文化の上では、ナガランド州南部に

住む諸部族やクキ諸族との関わりが深い。たとえば、マオ(Mao)族やマラム(Maram)族はアンガミ(Angami)族から出自したという伝承を持っており、伝承上の移動経路が北や北東方向からのものであることなどである[大林 1954]。また、州境を越えて分布する部族も多い。彼らの伝統的な生活や文化、伝承に関してはハドソン(Hodson)が民族誌を残している[HODSON 1911]。しかし現在は、たとえば1961年センサスの村落調査モノグラフにみられるように、山地からマニプール盆地の縁辺部に集落を移動させ、もはや丘陵での焼畑耕作ではなく、平原部での水稻耕作を主生業として、日常的にインパールの市場とのやりとりをするような集団も現われている[SINGH 1968a, 1968b]。

(1) カブイ(Kabui)族

カブイ(Kabui)族は、マニプール盆地の両方からカチャール(Cachar)にいたる山地に住んでいる。マニプール州に住むナガ諸族のうちでは比較的勢力ある部族である。彼らの言語はロンメイ(Rongmei)語であり、ナガランドに住むものは、ゼミ(Zemi)族、リアンメイ(Liangmei)族とともに、ジュリアンロン・コミュニティをつくっている。Kwaphi, Koupui, Kowpoee などとも綴られる。

(2) コイラオ(Koirao, Khoirao)族

コイラオ族は、比較的少数のグループであり、マニプール盆地の北部山域に住んでいる。Kolya, Mayang Khong, Miyangkhang などとも呼ばれる。ハドソン(Hodson)によれば、彼らはマラム(Maram)族から分かれたという伝承を持ち、マオ族、マラム族とよく似ている[HODSON 1911: 4]。

(3) カチャ・ナガ(Kacha Naga)族

現在カチャ・ナガとして知られるのは、ゼミ(Zemi)族とコイレン(Koireng)族からなるグループである[SEN 1987: 43]。カチャは森を意味し、「森の住民」という呼び名がイギリス人によって与えられた。コイレン族は、Quoireng, Kowireng, Kwoireng などとも綴られる部族であり、ナガランドにおけるリヤンメイ族に対応する部族かと思われる[SREEDHAR 1974: 15]。しかしコイレン族をナガのグループではなく、オールド・クキのグループに含めている文献もある。

(4) マラム(Maram)族

マラム族はマニプール盆地の北部山域に住んでいる。マオ族によく似ているがブタ肉を食べることをタブーとしている[HODSON 1911: 84]。

(5) マリン(Maring, Marring)族

マリン族はマニプールの東部山域に住んでいる。彼らの言語はクキ語との関連があ

るとみなされている [HODSON 1911: 18]。

(6) マオ (Mao) 族

マオ族は比較的大きな勢力を持ち、ナガランド州と接する、州東北部に住んでいる。ソプボマ (Sopvoma) と呼ばれる。出自伝承は、他のナガ諸族やクキ諸族との関わりを持つものなど様々であるが、言語の上ではナガランド州のケザマ (Khezhama チャケサン・コミュニティの一部) と似ているという [HODSON 1911: 4, 11-13]。

(7) タンクール (Tangkhu) 族

タンクール族はマニプール州のナガ諸族のうち最も大きな勢力を持っており、ビルマとの境界をなす、州東部の山域に住んでいる。出自伝承については、マオ族などのようにマイケル (Maikel) からやってきたという説や、タドー (Thadou) 族とかつては同族であったという説などが伝えられている [HORAM 1977: 21-22; HODSON 1911: 8-11]。

(8) アンガミ (Angami) 族

マニプール州の北辺にも若干のアンガミ族が住んでいる。

(9) ジェリアンロン (Zeliangrong) 族

1961年の分類では存在しないが、前記のカブイ族、カチャ・ナガ族などは、ナガランドのみならず、マニプールにおいても連合してジェリアンロン族を形成している。1947年の独立以降、ジェマイ (Ze Mai, ゼミ Zemi), リアンメイ (Liangmei, Liang Mai), ロンメイ (Rongmei, Rong Mai) を総称して、ジェリアンロン・ナガという名称が使われている。

1989年の栗田の調査によると、ジェリアンロン・ナガは、アッサム、ナガランド、マニプールにまたがった西部丘陵地帯に居住している。18世紀はじめ、マニプール王国はビルマと戦争を行っていた。ロンメイは、マニプール王国の軍隊に傭兵として王に使えた。19世紀には飢饉が起こり、より多くのジェマイやロンメイがインパールに出てきた。彼らの仕事は、薪木を集める役目、軍隊のトランペット吹き、掃除の仕事などであった。1891年イギリスがマニプールを征服して以来、ジェリアンロンはより一層平原に出てきており、1940年にはインパールにも進出した。そして1980年以降この傾向はより大きなものとなって、現在マニプール州には84から85か所のジェリアンロンの集落がある。中央政府の発表では、人口は32,000人と言っているが、現実には42,000人から44,000人がマニプールに居住している。言語はチベット・ビルマ語族であり、ボド・ナガ語群に属し、ボロ・カチャリ族やカチャリ族の言葉にたいへん似ている。

3 ティラップ・ディストリクトのナガ族

ノクテ (Nocte), タンサ (Tangsa), ワンチョー (Wancho)

パトカイ山脈の山懐に住んでいる。比較的早くから東部ナガ (Eastern Naga), シブサガル・ナガ (Sibsagar Naga) などとして知られていた。ナガランド州のアオ (Ao) 族, ポム (Phom) 族, レングマ (Rengma) 族などについてもそれが言える。

4 アッサム地方のその他の州のナガ族

ミキール (Mikir), レングマ (Rengma), ゼミ (Zemi) など

これらのグループは、比較的早くから、カチャリ (Kachari) などのアッサム平原の人々に知られていた。

5 ビルマ側のナガ族

レンペン (Rengpen), クワ (Kuwa), フタナガン (Htanangan), ハイミ (Haimi), ポンヤ (Ponya), ピェング (Pyengu), ウェラム (Welam), ノカウ (Nokaw), センカドング (Senkadong) など [SREEDHAR 1974: 29]

これらについては情報が少なく、ほとんど知られていない。イギリス陸軍の記録のほか、スティーン (Steen) による報告などしか実見していない [STEEN 1948]。ベーコン (Bacon) はビルマ側のナガ諸族はインド側のナガ諸族と違ってシャン族やカチン族などに同化しつつあると述べている [BACON 1979: 709]。

さて、本書では、1961年センサスに基づいて部族ごとの分布域を表した図を添付しているが、ナガ諸族に関してはよく表現されているとは言えない。まず、統計上ナガランド州のナガ諸族は一つにまとめられてナガとして取られているために、ナガ諸族の内の各部族の人口が明らかにされていない。ただ、ナガランド州以外の州においてもナガとして人口がまとめて把握されているのであればアッサム地方全域にわたるナガ諸族の分布状況が表示されるのであるが、マニプール州においては部族単位で人口があらわされているため、統一が取れていない。

<36 集落> ナガ諸族が居住しているのはアッサムとビルマの間に横たわる山岳地帯である。この地域の標高は数百メートルから3,000メートルぐらいで、雨の多い地域である。集落が作られるのは尾根の上である。典型的には、家屋は密集しており、周囲を塀で囲まれている。また、同一集落の中でも、ケル (khel) ごとにその境が明確

である。ケルはアホム王国の行政制度においてつくられた集団の単位であり、数10人ほどの成人男子(パイク)を含む家族からなる。尾根上の集落の周りの斜面は焼畑に利用されている。この地方の谷は深く、とくに雨期には谷に入るのは困難なほどの斜面となってしまう。また、古くから首狩りなどにみられる集落間の政治的対立が深刻であったこともあり、各集落は地理的孤立性が高い。コヒマなどは、尾根上に発達した巨大な集落の一例である。

<142 身体諸形質の情報> ナガ諸族はモンゴロイドであり、日本人にもよく似ている。ナガ諸族は部族によって服装に大きな変化があり、部族を識別するための有力な指標になっている。ハイメンドルフ (Fürier-Haimendorf) が報告したコニャック族などは最も未開の部族と言われ、ほとんど全裸であることから「裸のナガ (Naked Naga)」といわれている [FÜRER-HAIMENDORF 1976]。

<167 移入と移出> 言語の項にみたように、ナガの諸言語の整理は十分になされているとはいえないが、ハットン (Hutton) 作成の図 (図8, 115頁参照) に見られるように、各部族の伝承から追うことのできる歴史的な移動経路が知られている [HUTTON 1921a: 7]。これらの資料から知られることは、ナガ諸族の歴史的な移動経路についてほぼ二つに大別できることである。ポム (Phom) 族以北のナガ諸族は、ビルマ側を含むパトカイ山脈方面、すなわち東方から移住してきた伝承をもっているのに対し、それ以南の大半のナガ諸族は、ケザケノマの石 (Kezakenoma Stones) の伝承に象徴されるように、南または南東方向から移住してきたという伝承をもっているのである。

この南のルートをとってきたという伝承をもつ諸部族に関する優れた民族誌を残しているハットンは、木をくり抜いた太鼓やアンガミ族の籾段耕作、巨石文化、その他の文化要素が、東南アジア島嶼部のいくつかの部族のそれと類似していることに注目して、ナガ諸族の故郷はそのあたり、つまり海に接していたところであるという説を支持している [HUTTON 1921a: 8]。しかし、この説に対しては、リーチ (Leach) がまったく空想的だと述べているように、批判もある [リーチ 1987: 31]。

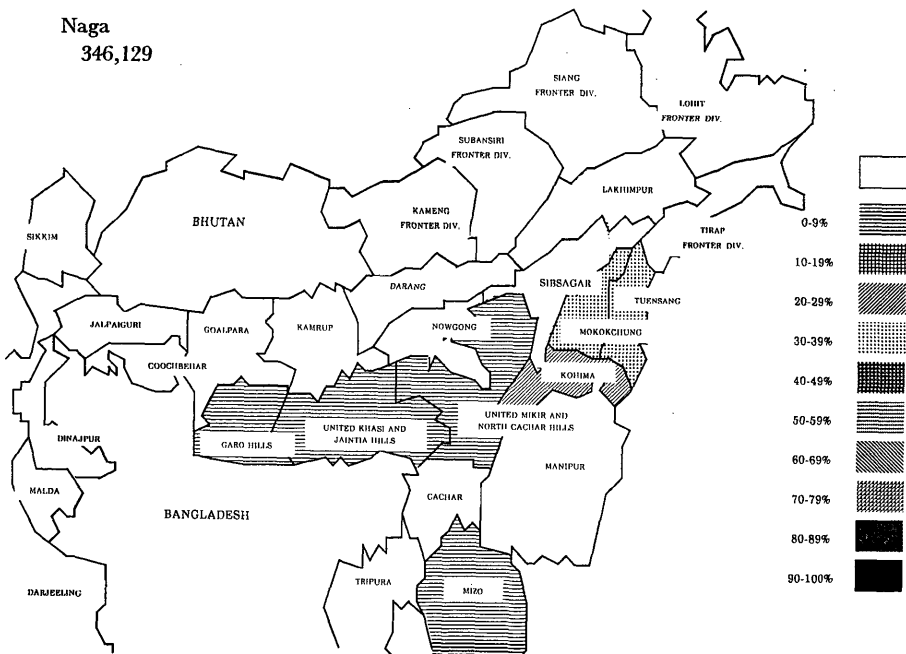
北のルートの諸部族に関しては、言語研究において、これらのもつ言語と北アッサム群やカチン語との親縁性が指摘されている。

<24 農業><437 交換取引> ナガ諸族の主たる生業は、他のアッサムの山地諸部族と同様、ほとんどが焼畑耕作である。ただし、さきに記述したように、アンガミ族やそれに接した部族には籾段耕作 (棚田水田での水稻耕作) を行っているものもある。主な作物にも地域、部族によって違いがある。焼畑の休閑期間はふつう10年以上であるが、近年短くなりつつあり、他のアッサム周辺の諸山地と同様、現在の産業課

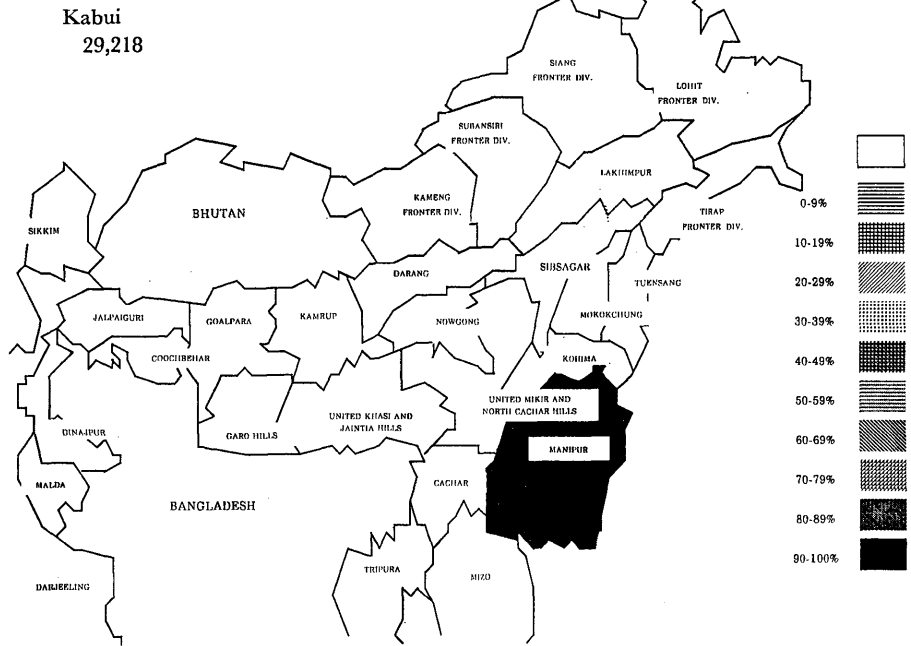
題の一つになっている。北部のノクテ (Nocte) 族, タンサ (Tangsa) 族などの比較的早くからアッサム平原と関係を持っていたところでは, 茶, 塩などを生産することを発展させたものもある。

<621 コミュニティの構造>イギリスの官吏がナガ諸族に対して納税を要求し, 政治的な服属をさせる過程は, 部族内の権力関係を変容させることでもあった。官吏としてナガ諸族に関わり, 彼らを研究したハットン (Hutton), ミルズ (Mills), エルウィン (Elwin) などは, おのこの部族の権力構造を越えたところに位置する立場にあり, ハイメンドルフが記しているように, 部族間, 村民間のもめごとの仲裁役までしなければならなかった [FÜRER-HAIMENDORF 1976: 2-44]。

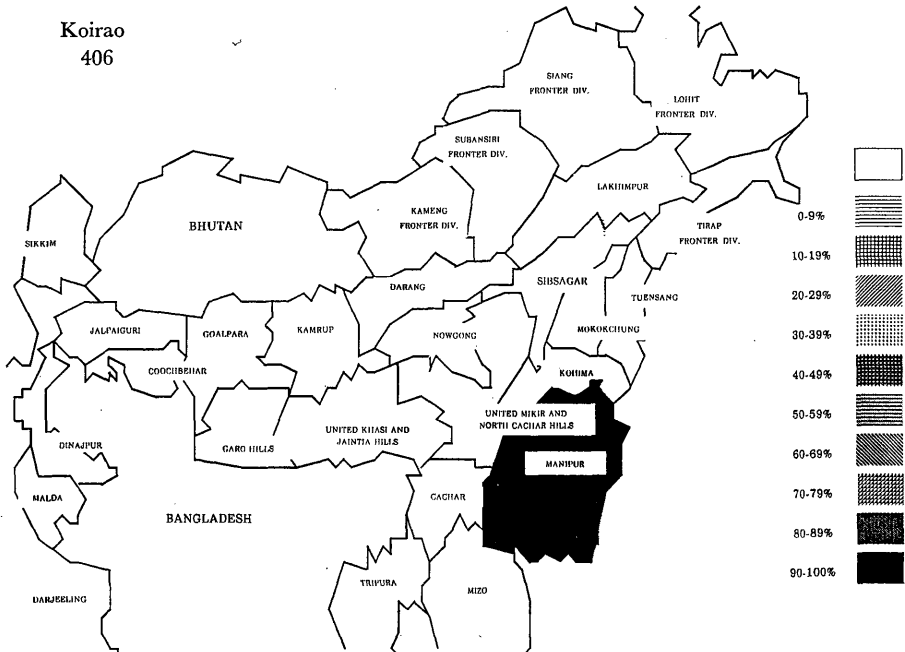
(月原敏博)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

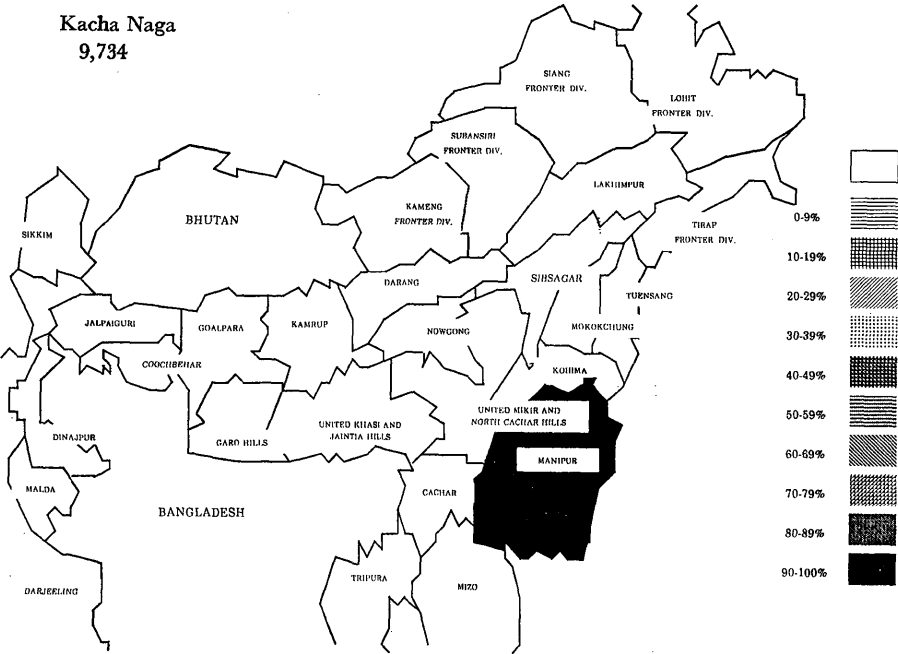


Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。



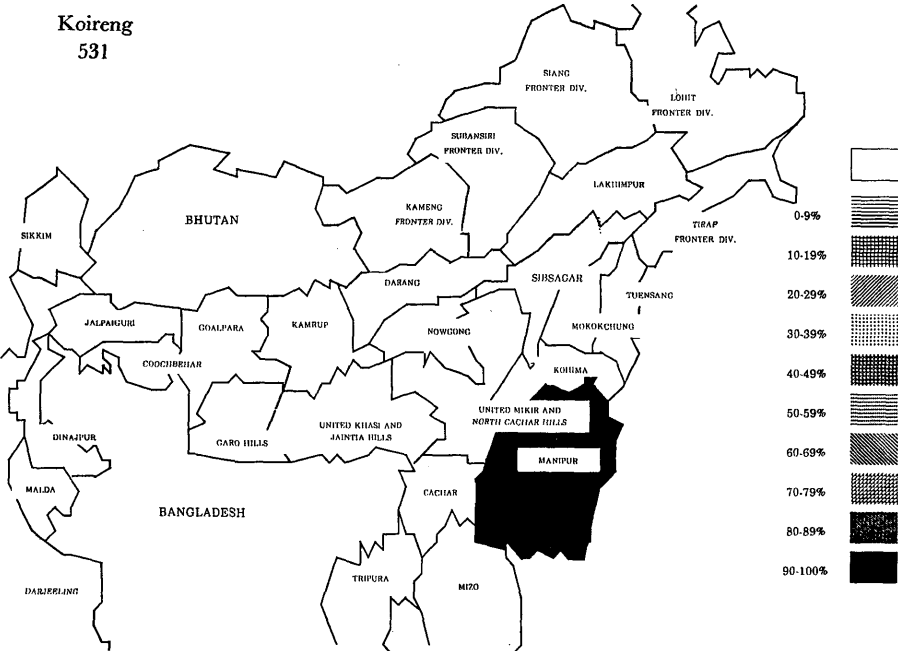
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

Kacha Naga
9,734



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

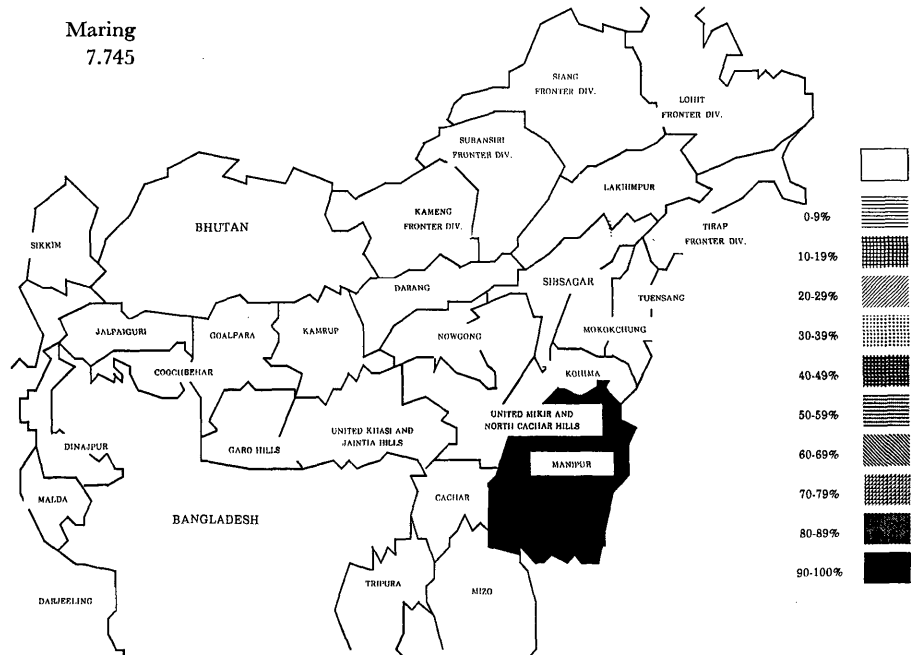
Koireng
531



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

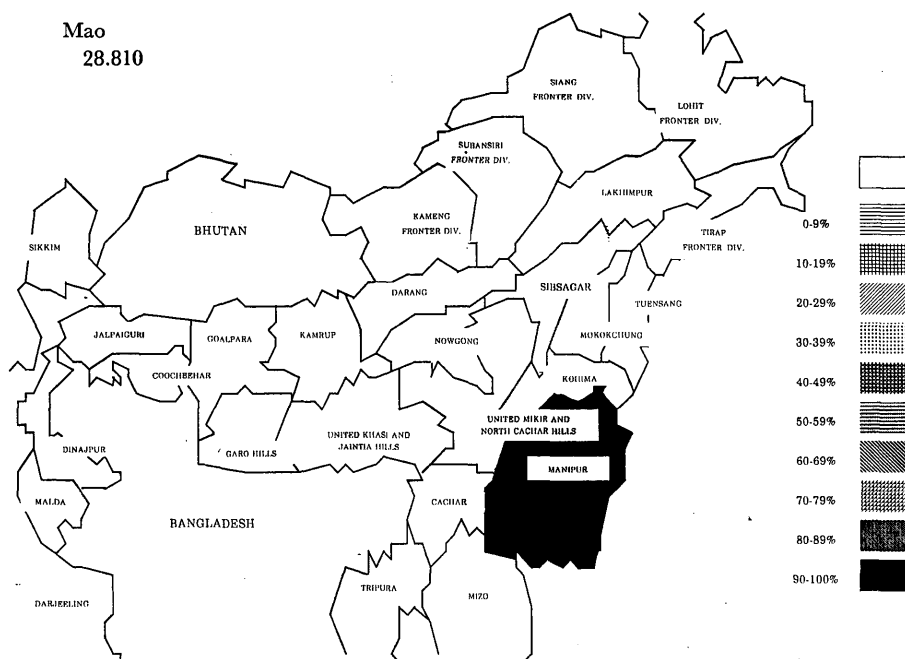


Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。



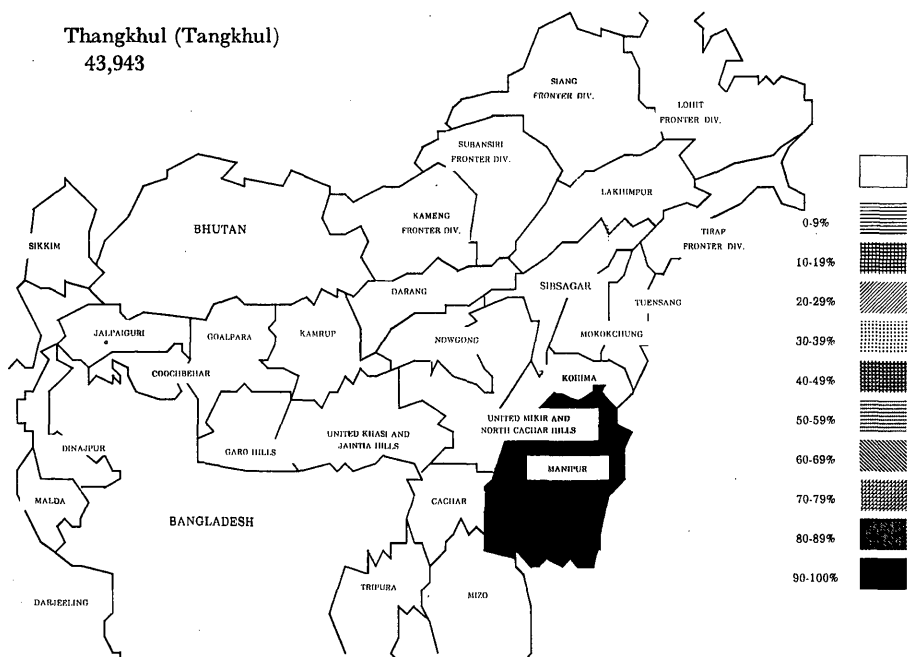
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

Mao
28,810



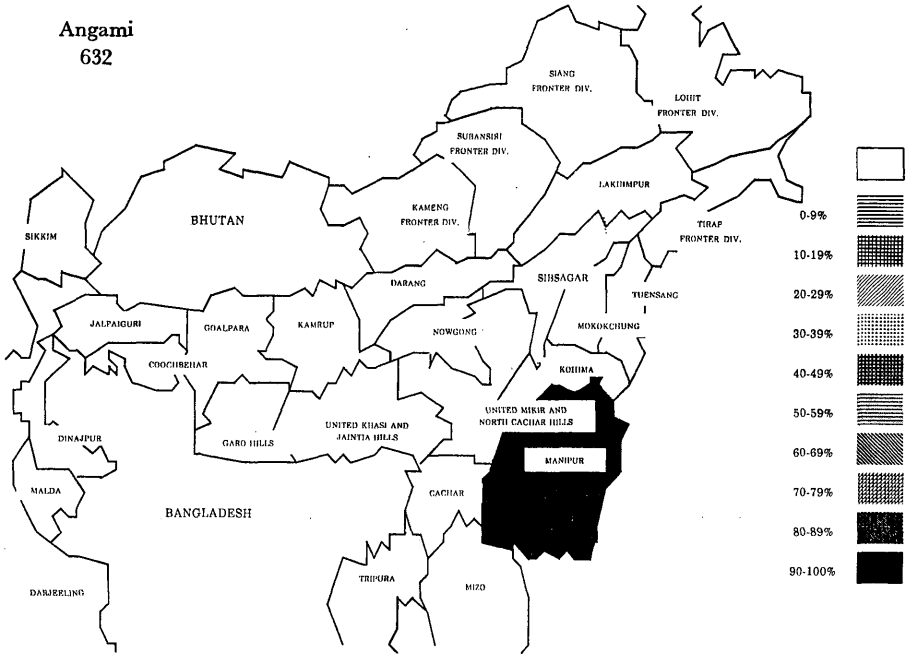
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

Thangkul (Tangkul)
43,943



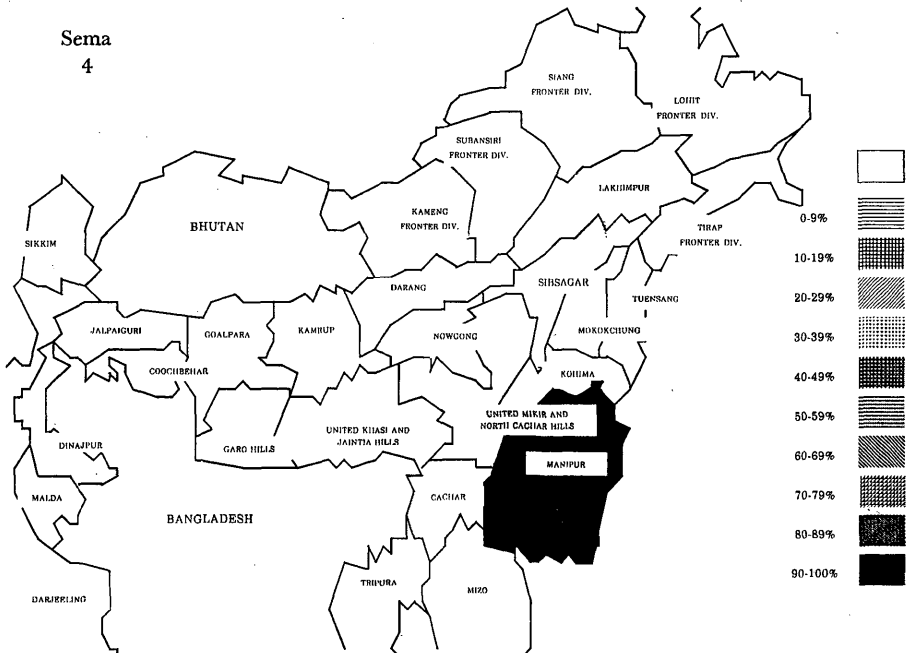
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

Angami
632



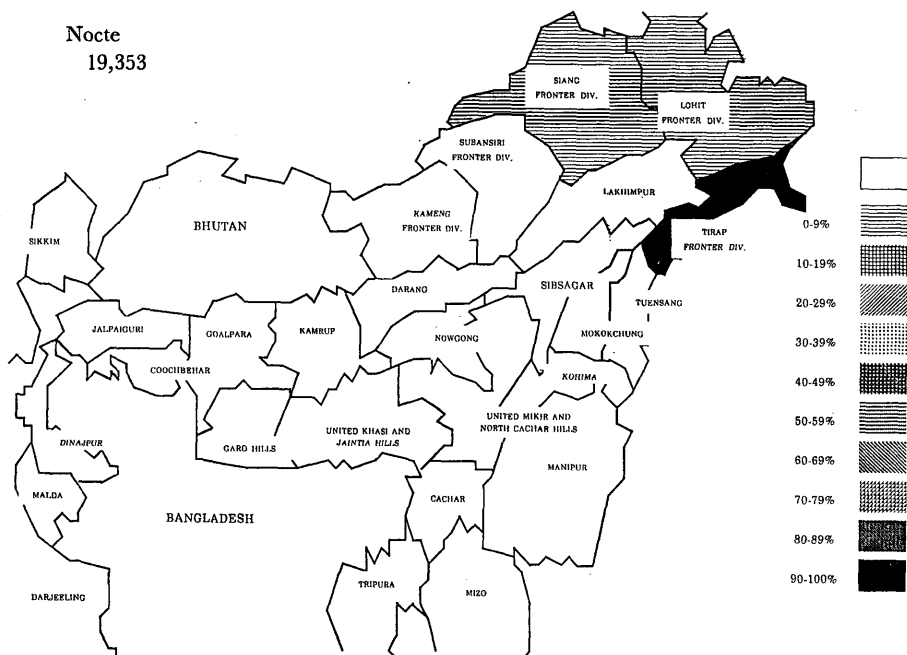
Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

Sema
4



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

ノクテ (Nocte), ナムサンギア (Namsangia), ボルドワリア (Bordwaria, Borduaria), モホンギア (Mohongia)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

ノクテあるいはノクテ・ナガといわれる部族は、アッサム平原の上部に隣接した山域に住んでいるナガ諸族の一つである。アホム・ブランジなどを資料として書かれたゲイトによる『アッサム史』にも、ナムサン・ナガ (Namsang Naga) の名があらわれている [ゲイト 1944: 120, 206]。古く、アホム王国の時代からアッサム平原との関係をもっていたらしく、ヴァイシュナヴァ派の影響をも受けているらしい。ナガ諸族全体の中では他にあまり例をみないことのように思われる。<11 参考文献>ノクテ族に関しては、セン (Sen) の文献目録によれば、すでにダッタ (Dutta) によるモノグラフが出されているようである [SEN 1986: 93; DUTTA 1978]。しかし、実見していないので、ここでは、チョーダリー (Chowdhury), セン (Sen), ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf) による記述を要約することにする。

<131 位置>ノクテ族は、ティラップ・ディストリクト (Tirap District) の中央部に住んでいる。<217 古記録>今日、このディストリクトにすむ部族 (現在、タンサ, ノクテ, ワンチョーの3部族に分類されているもの) は、初期の文献では、東部

ナガ (Eastern Naga), パトコイ・ナガ (Patkoi Naga), シブサガル・ナガ (Sibsagar Naga) といった名で総称されていた。それらのなかで、ナムサンギア, ボルドワリアと呼ばれていたものが、ノクテ族にあたる。〈77 宗教的信仰〉ノクテ族は、アッサムのシャンカルデヴァ (Shankardeva) によって伝道されたヴァイシュナヴァ派の影響下に入っている [CHOWDHURY 1983: 34-35]。

〈621 コミュニティの構造〉ノクテ族の社会は、数村を支配する強力な首長たちによって支配される。旧 N. E. F. A. (North-East Frontier Agency 北東辺境地方) の行政下にはいる1945年までは、しばしば首狩りを行っていた。若者宿や娘宿がみられる。ノクテ族は、2つの社会階級に分かれている。首長とその親族のなす階級と、それ以外の者という2つである。祭のなかで主要なものは、チャーロ・ロク (chahlo-loku) である。一夫多妻はふつうであるが、一妻多夫婚はみられない [SEN 1986: 38-39]。

〈34 建造物〉ノクテ族の村落は、山地の頂に立地しており、家屋は不規則に集合している。家屋はチャン (chang) 様式と呼ばれ、地表から高く延びた杭上に建てられている。柱は木で、屋根はトコ (toko) の葉を用いて葺かれている。屋根のない部分はベランダになっている。タケやトウで作られる道具はすぐれている [SEN 1986: 38-39]。

〈142 身体諸形質の情報〉身体は中背で頑健である。モンゴロイド系であり、淡黄色の皮膚をもっている。〈291 一般的服装〉男は腰巻きをつけていて、腰の周りにトウで作った無数のベルトをする。女は膝まで届く布を腰に巻き付けているが、今日では、上半身に短いブラウスを着るのを好む。また、額の髪の毛を剃って、髪の毛を後ろに出して結び、南インドのブラーミンのように、頸まで垂らしている。女は色玉を好む。なかには入墨をしているものもある。

〈24 農業〉生業は、水稻耕作をするとともに焼畑耕作もおこなっている。〈76 死〉死体は風葬にする [SEN 1986: 38-39]。

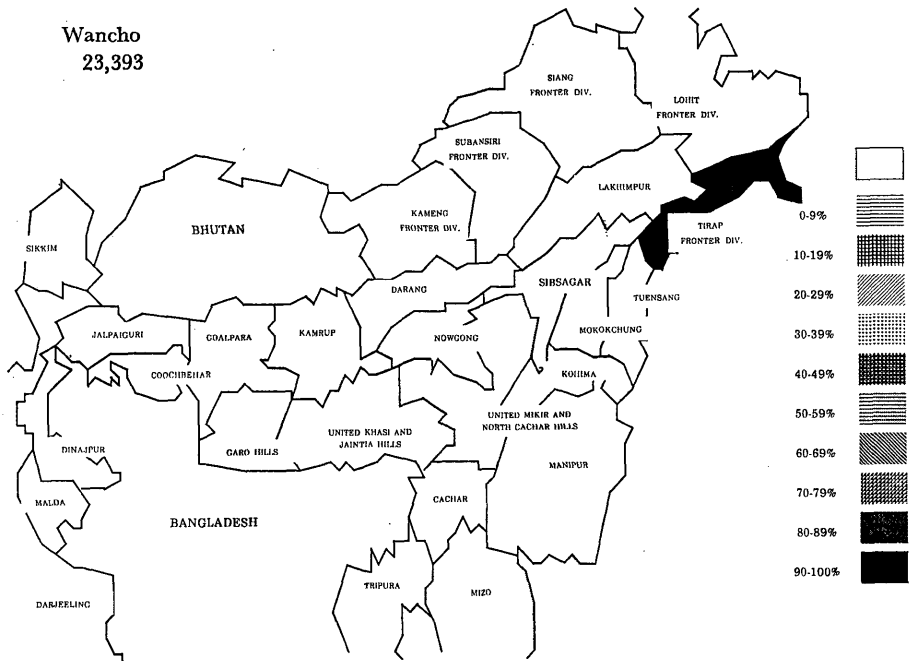
〈437 交換取引〉ティラップ・ディストリクト (Tirap District) の地方事務所がおかれているコンサ (Khonsa) はノクテ族の住む地方に入っている。ノクテ族の村落、外観は、コニャック・ナガ (Konyak Naga) 族を思い出させる。人種的、文化的に、ナガ諸族のグループに入ることはまちがいない。彼らに特徴的なことの一つは、塩泉 (salt spring) から、塩を生産していることと、それに基づいた物々交換の交易をおこなうことである。アッサム平原で塩と交換に布地を得て、また、ビルマのラングペン・ナガ (Rangpan Naga) 族との間では、ニワトリや農作物を塩と物々交換して得

ていたのである。インド政府の行政制度が整うまでは、彼らは、山向こうに住む交易の相手や友人と自分たちとの間にインドービルマ国境があるなどとは、ほとんど意識していなかった。コニャック・ナガ族のテンドゥー (Thendu) 村のグループの社会に似て、ノクテ族の社会は、厳格な階層制をもっている。首長の属する氏族の男たちは、正妻は他村の首長の娘のなかから捜すが、第2以降の妻を、自村の平民氏族 (commoner clan) からめとってよい。ワンチョー (Wancho) 族の村と地理的に大変接近している場合でも、両部族間の通婚は行われない。双方とも他方を異なるものと意識しているが、必ずしも敵意を抱いているというわけでもない [FÜRER-HAIMEN-DORF 1976: 214]。

<19 言語>なお、グリアーソンの言語分類 (Eastern Naga Sub-Group) において、ノクテ族の言語にあたるものは Mohongia (Borduaria), Namsangia である [GRIERSON 1927: 67; SREEDHAR 1974: 27]。またこれらは、ノクテ族に対する古い呼称でもあった。

(月原敏博)

ワンチョー (Wancho, Wanchu), バンパラ (Banpara), ムトニア (Mutonia)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<11 参考文献>ワンチョー族に関しては、セン (Sen) の文献目録によると、すでにダッタ (Dutta) によるモノグラフが出されているようである [DUTTA 1983; SEN 1986: 94]。しかし、実見してないので、ここでは、ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf) による調査記録などに従って記述することにする [Fürer-Haimendorf 1976]。

<101 アイデンティフィケーション>ワンチョー族は、ティラップ・ディストリクト (Tirap District) の南西部に住んでいる。北東に隣接してノクテ (Nocte) 族が住む。ワンチョー族は、ジャン (jan) と呼ばれる11のグループに分かれており、36の村に住んでいる [CHOWDHURY 1983: 35]。

<29 服装>身体は、長身で頑健である。外見はモンゴロイドである。男は、ネックレスを身につけており、それには人の頭や手を彫刻した木がとりつけられている。衣服はほとんど身につけない。男はレングティ (lenghuti) という腰巻きを着ており、女は小さなスカートをつけて、髪を短く切っている。男女ともにショールをよく用いる。<30 装飾品>象牙の飾りや、骨から作った玉を身につける。入墨は男女ともに

重要なものであり、男は成年に達した時、女は初潮を見たときに彫り込む。かれらの作る彫刻、手織のバッグ、玉などは有名である。〈36 集落〉家屋は、通常、山地の斜面に建てられる。〈621 コミュニティの構造〉ワンチョー族の社会は、ノクテ族に似ており、長老会議によって支持された首長を中心とした、伝統的首長制である。かつては、ノクテ族のように首狩りをしばしば行っていた。ワンチョー族には4つの社会階級がある。祭のなかで、もっとも有名なものは、オジアレ (oziale) である。死体は死後1日たってから、風葬される [SEN 1986: 40-41]。

〈117 現地調査データ〉ハイメンドルフは、コニャック・ナガ族の住む地域を1930年代に調査しているが、60年代に同地域を再訪したさい、ワンチョー族の住むニアウヌ (Niaunu) 村を訪れ、「ワンチョー族は、コニャック・ナガ (Konyak Naga) 族と密接な関係にあり、現在、行政地区が異なっているのは、単なる歴史上の偶然である。」として、両者はほぼ同一の文化、社会構造をもつことを指摘した。以下、彼の記述を要約する [FÜRER-HAIMENDORF 1976: 213-216]。

〈14 人種的類縁性〉ニアウヌ村は、高い山地の頂に立地している。ニアウヌ村周辺に住む人々は、オティンギ (Othing), ロンカイ (Longkhai) といったコニャック・ナガ族に属する村の人々とそっくりな衣服、入墨をしている。テンドゥー村のグループ (Thendu Group) のコニャック・ナガ族とワンチョー族は、ほとんど違いはない。

〈17 歴史と文化変化〉インド政府は、ワンチョー族の住む区域を、1947年まで、実質上の行政下に入れなかったため、彼らはそれまで自分たちの伝統にしたがって政治的運営を行ってきた。ニアウヌ村は、コニャック・ナガ族の場合のモン (Mon), チュイ (Chui), タン (Tang) などのように強力な独裁支配者によって統治される村である。それらの周辺部にあって、比較的小きな勢力しか持たなかったテンドゥー村の例よりもスケールが大きい。N.E.F.A. (North-East Frontier Agency) の役人のために、首長の権力は小さくなりつつあるが、ニアウヌ、ミントン (Mintong) などの村では、社会構造や階層構成は影響を受けていない。

〈565 社会階級〉〈628 コミュニティ相互の関係〉ニアウヌ村には4つの階層がある。これらは、コニャック・ナガ族のテンドゥー村のグループが持っていた4つのそれに相当する。

ニアウヌ村のグループ	テンドゥー村のグループ
1 ワンハム (Wangham)	1 グレート・アン (great Ang)
2 ワンサ (Wangsa)	2 スモール・アン (small Ang)
3 ワンス (Wangsu)	3 中間階級 (intermediate)
4 ワンペン (Wangpeng)	4 平民 (commoner)

<611 出自規制><582 婚姻規制>首長家は、最高階級であるワンハム (Wangham) に属している。これは、コニャック・ナガ族におけるグレート・アン (great Ang) に相当している。ワンハム階級のメンバーは、首長リネージに属する男と、首長リネージが異なる他の村の、同様の地位にある女との結婚によってできた子孫である。同一村落のワンハム・リネージ内での結婚は認められなかったので、双方の配偶者がワンハム階級であるような婚姻は、すべて、他の領土をもっている首長家となされねばならなかった。ワンハム階級の男は、ワンペン階級の女を、第2の妻とすることができ、その子はワンサ階級の者となった。ワンハム階級の女は、決して、同一村内のワンペン (平民) の男とは結婚しなかった。理想的には、その女たちは、別のグループの村の、すなわち異なる首長家に嫁がねばならないが、相手のいないときには、ワンサ階級の者に嫁ぐこともできた。しかし、この場合も、別のグループの村の、リネージの異なる相手でなくてはならなかった。一つの村の中に、二つのリネージが共存することはないからである。ワンサ階級の男は、別のグループの村の同じ階級の女、または、同じ村の平民階級の女とも結婚できる。どちらの場合も、その子供はワンサ階級に属する。平民の血がいくら混じっても、ワンハムの血をいくらかひいている事にはかわりはないからである。<428 相続>首長と平民の妻との間にできた子は、ワンサであるが、父の財産の一部を相続することはない。首長が、それらの子に耕地を与えることがあっても、それはその子の子孫へは相続されないのである。もっとも問題のあるのは、ワンス階級である。これに属する者は、首長の子孫ではない。しかし、服装や髪は、首長の階級をまねている。ニアウヌ村には、この階級に属する氏族は3つあったが、これらはおたがいに通婚しなかった。男は、他の村のワンスの女か、同じ村の平民階級の女と結婚していた。ニアウヌ村には、多くのワンペン階級の氏族があった。この平民階級は、ニアウヌ村内ではたがいに通婚出来ず、同じ村のワンス階級の者か、他の村のワンス、あるいは平民階級の者と結婚していた。<162 人口構成>ニアウヌ村では、人口全体からみると、ワンハムはごく少数であるが、ワンペンも、ワンサやワンスに比べるとかなり少ない。そのため、少数特権階級による多数平民支配という社会ではない。

<262 食事>食べ物に関しては規制がある。グレート・アンは、ウシ、ヤギ、イノシシ、トラの肉は食べなかったが、スモール・アンは、ウシの肉を食べていた。平民は、トラとヒョウを除いて、どんな動物の肉も食べていた。階級の異なる者は、同じ皿から食事をとることはしないが、首長は平民の作った物を食べてもよい。グレート・アンの妻の中には平民出身の妻がいて、首長と他のグレート・アン出身の妻の食

事を作っていた。

<622 頭領>ニアウヌ村13代目の首長ニェクポン (Nyekpong) の家は大変大きく、もっとも大きな若者宿くらいの大きさの広間があり、多数の親族、妻、子供の住む小室は、暗室の迷路をなしていた。客室である大部屋には、サイチョウの模様をつけた大きな木に首長の座席があり、ここには首長しか座れない。<29 服装>首長ニェクポンは、イノシシの牙を飾りつけたトウ（籐）の帽子を被り、耳は白いトリドファクナ (tridfackna) 貝の円盤でおおっていた。高価な首飾りをして、黒絹のチョッキのような服を着ていた。

<58 婚姻>かれは平民階級から24人（12人はニアウヌ村の者、残りの12人は子村のニアウサ (Niausa) 村出身の者）の妻をめとっていたが、1962年当時そのうち7人のみが生きていた。彼は13代目の首長であり、ニアウヌ村は初代の首長マイプパ (Maipupa) によって開かれた。マイプパは、ツァングヌー (Tsangnu) 村からやってきた。マイプパからニェクポンにいたるまでの各首長の名も伝えられている。

<582 婚姻規制>ニアウヌ村の首長たちは、これまでに4つの村を作ってきた。これらは、同じ首長家の子孫によって統治されている。これらの村々の首長は、すべて父系同族に属するため、ニアウヌ村の最高首長家との通婚相手とはならない。ニアウヌ王家の者は、同じニアウヌ・グループには属さない他の村の首長の娘、つまり、同じ王家の格を持った最高のリネージュである他のグレート・アンの家系の娘をめとる。

<63 領土機構>開拓以外の方法によって、首長の領土が広がる場合もある。ある村の首長家が病氣などで途絶えると、村民は、近くの村の首長家から首長を選ばなければならない。この伝統が根強い限り、ワンハムの血統を受け継ぐ首長のみが、統治者としての政務、儀式を遂行できる。ただ、小さな村においては、アン・クランと平民出身の妻との間にできた息子が、首長になることがある。しかし、ある程度の大きさを持つ村では、ワンハムの純血をもつ首長捜しに努力が払われるのである。

<72 戦争>首長の領土は征服によっても拡大される。7世代前に、ニアウヌ村は、隣接していたゾロング (Zolong) 村を襲撃して全首長家と平民の半数を一掃した。残った平民はニアウヌ村の王家の分家である新首長のもとで村に残り、村名はミントン (Mintong) と変わって、ニアウヌ・グループの村となった。

村民の記憶に残っている首狩り事例は幾つもある。例えば、1世代前に、ミントン村とミヌー (Minu) 村の間で、婚姻問題を発端とした闘争が起こった。ニアウヌ村はミヌー村側の部隊に加わり、双方が死者を出したまま和解することなく、N. E. F. A. 行政の統治下に入った。

<796 組織だった儀式>首狩りの記憶は、敵の頭を狩ったり、敵を待ち伏せすることを模したダンスにもあらわれている。これは、村の若者宿の前の広場で行われる大がかりなもので、顔を塗ったり、さまざまな振付けをした男たちが叫び、踊ったりしながら集まった後、実際の戦闘を模して、隠れている敵を警戒しながら忍びより、仮想の敵に最接近したところで、息を殺していっせいに飛びかかって、銃を向けたり、刀(dao ダオ)を振り回したりして、仮想の敵を、叫び声をあげて殺したように演技して、戦果をもって叫び、踊るという、たいへんリアルなものである。若者宿には過去の戦闘で得た敵の頭を集めているところもある。

<464 労働供給と雇用>首長は大きな経済力を持っているが、これは、自由に人手を徴発できることによる。とくに、ニアウヌ村の首長のように支村を持つものは、それらの人手も徴発できたのである。首長の持つ耕地での生産、首長家の建設、補修などに参加した者には飲食物を与えるが、賃金を払う必要はない。

<623 評議会[カウンシル]> N.E.F.A. 行政下にはいる以前の村内での裁判に関しては、首長は裁判長ではなく、ニアウヌ村には非公式の長老会議があった。なにか法に触れることが起こると、首長が会議を開いて相談をした。罰を課しても盗みを犯し続ける者や、同じ村の者を殺した者、他人のミタン牛を殺した者が、水刑にされた例があった。

<76 死>ワンチョー族は、明確な死後の観念を持っている。人が死ぬと、その魂(dzaban)はあの世ルンプ(lumpu)にゆく。ルンプは、この世とそっくりなレプリカであり、全く同じ様な社会がある。ルンプへ行くには橋を渡らなければならないが、そこには、子のない老人夫婦(Tsailopa, Tsailonu)がいて、やってくる人の帳簿を持っている。橋の向こう側で道は分かれ道になっており、自然な死に方をした者は右の道、不自然な死に方をしたものは左の道を行かねばならない。左は困難ではあるが、最後には右と同じ場所にたどり着く事が出来る。シャーマン(a-sepa)は夢の中でルンプに行くことが出来る。

<776 精霊と神々>ワクチン(Wakching)地方のコニャック・ナガ族と同じように、ワンチョー族は最高神ザン・バウ(zang-bau)をもつ。ザン(zang)は空に住んでおり、バウ(bau)は地にいる。ザン・バンは、嘘、悪行に対して怒り、それを犯した者を急死させる。

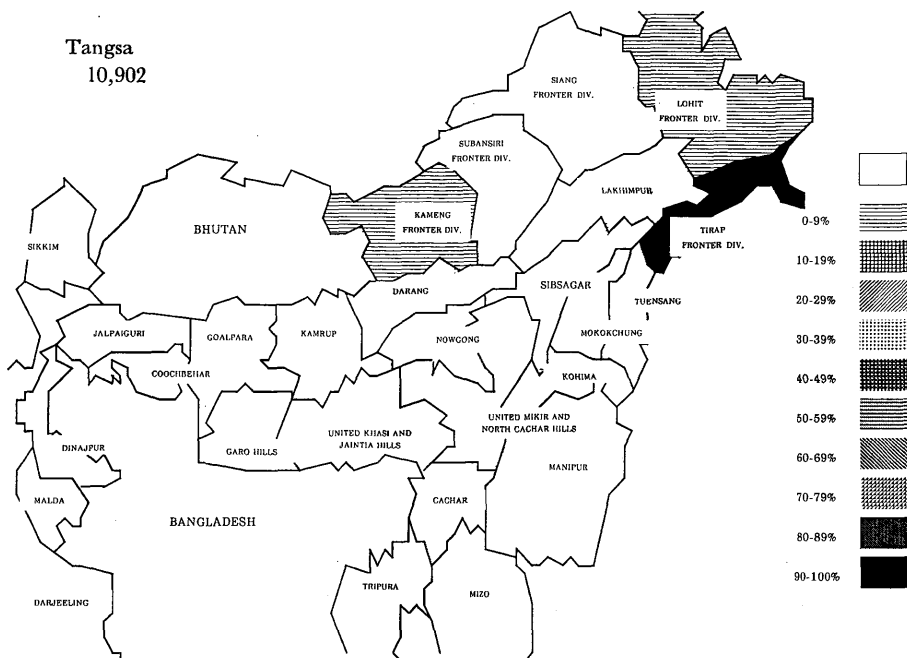
<52 レクリエーション>ある夜、若者の一団がニアウヌ村のアンの巨大なホールにやってきた。炎を囲んで首長家や周りの家の娘たちと掛け合いで歌を歌った。その歌詞の意味からくみ取れるのは、未婚の男女の間の自由な関係である。そして、男は

生涯の伴侶となってくれることをのぞむ一方、女は多くの恋人と短いロマンスを楽しむことで満足しているのは、母方の叔父の息子と結婚するという慣習を意味しているのであろう [FÜRER-HAIMENDORF 1976: 213-216]。

<19 言語>なお、グリアーソンの言語分類 (Eastern Naga Sub-Group) において、ワンチョ一族の言語にあたるものは Banpara, Mutonia である [GRIERSON 1927: 67; SREEDHAR 1974: 27]。これらはワンチョ一族に対する古い呼称でもあった。

(月原敏博)

タンサ (Tangsa), モシャン (Moshang), シャンゼ (Shangge)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

タンサ族は、アルナチャル・プラデシュのティラップ・ディストリクト (Tirap District) に住む部族である。このディストリクトには、主要な部族でかつナガ・グループに含まれるものとして、ほかにワンチョー (Wancho), ノクテ (Nocte) といった部族があるが、いずれもその実態に関する情報は余り多くはない。<11 参考文献>ここでは、実見できた数少ない文献のうち、唯一の民族誌といってよいダッタ (Dutta) によるタンサ族に関する小著に基づいて、すべて記述することにする [DUTTA 1969]。セン (Sen) の文献目録を見ても、いまのところタンサ族についてのまとまった著書はこれしかないようである [SEN 1986]。ただし、ダッタが調査したのは、ロン・ラン (Rong-Rang), ケムシン (Khemsing), モサン (Mosang), ルングリ (Lungri), ヨグリ (Yogli) の5つのサブ・トライブのみである。

<197 言語の同定>ナガ諸族の項に記したように、例えばグリアーソンによれば、ナガ群の中に入るものとして取り扱われているが、ダッタは、シンボー (カチン) 語との関連性を示唆している [GRIERSON 1927: 67-69]。なお、グリアーソンの言語分類 (Eastern Naga Sub-Group) においてタンサ族の言語にあたるものは、Moshang

と Shangge である [GRIERSON 1927: 67; SREEDHAR 1974: 27]。またこれらはタンサ族に対する古い呼称でもあった。

<10 オリエンテーション>タンサ族は、ティラップ・ディストリクト中央部に住んでいる。付近は、パトカイ (Patkai) 山脈から派生した山地で、深いジャングルとなっている。この地帯一帯は、パトカイ山脈のなかでも雨の多い地域である。

<36 集落>村落は、ほとんどの場合、山地の斜面に立地している。村落の場所の選定は、水源地と豊かな耕地への近接性を考慮したもので、家屋は、無秩序につながって集まっている。防衛に適したような構造、配置を持ち、ガードハウスもあったが、現在ではもはやそのような構造はもっていない。

<161 人口>調査した範囲内の村落は、どれも人口は少なく、20戸を越えるところは数えるほどであった。<34 建造物>村落の中には、住居のほかに、穀物倉、出作り小屋、娘宿などがある。住家は、全体の敷地は長方形をなす妻入り・切妻型の杭上家屋である。住家の大きさは、家族の構成員の数に従って変化する。

<342 住宅>住居は、主に三つの部分に分けられる。一番前の部屋には、中央から少し寄った所に火床があり、居間として使われるほか、客間としても使われるが、同じサブ・トライブに属さないものはここに入ることはできない。<353 室内装飾と配置>またこの部屋には、スイギュウの頭、ブタの頭といった、いろいろな祭礼の際に殺された動物の骨が飾られている。まん中の部屋は、廊下と片方に並ぶ複数の小部屋からなる。小部屋にはそれぞれ火床と便所がある。夫婦、未婚の娘、老夫婦などは小部屋に寝るが、未婚の男は、結婚するまで前の部屋で寝る。

長い廊下には、水汲みのための竹筒など、さまざまな道具がおかれる。一番奥の部屋には、杵を置くことが多く、ここではニワトリも飼っている。床下の空間は、豚舎となっている。

<348 産業用建造物>穀物倉は、小さな方形の高床式建物で、かなり支柱はたかい。また、ネズミよけのために、支柱に円い木の円盤をつけたり、支柱をバナナの葉でくるんでいる。家族はそれぞれ穀物倉を持っており、住家や畑の近くに建てている。村の一角に建てられた娘宿には、小さな入口があり、部屋は四方とも壁に囲まれている。中央には火床があり、その周りに高くなった寝床がたくさんある。これらの住居はすべて共同して建てられる。タンサ族は、ジェングパット (jengupat) と呼ばれる植物を使って屋根を葺く。その他に用いる建築資材は、タケと木である。

<101 アイデンティフィケーション>タンサとは、「山 (Tang) の人 (Sa)」を意味する。タンサ族は、他の山地部族のことをタンサとは呼ばない。

<167 移入と移出><173 口碑・伝説による歴史>出自伝承については、5つのサブ・トライブとも、ほぼ同じような伝承を持っている。「マソイ・シンラプム (Masoi Sinrapum) というところで人は生まれた。」という伝承で、ダッタは、タンサ族は数百年前にビルマ側から移住してきたとしている。移住の動機となったのは、よりよい可耕地を求めること、他の部族（あるいはサブ・トライブ）との闘争を避けることであった。<437 交換取引>なかにはビルマ側の親戚、友人を記憶していたり、またいまでもパトカイ山脈を越えてそれらの人々と交易をしている者もあるという。

<142 身体諸形質の情報>タンサ族は、身長は中背で身体は壮健である。皮膚は黄色で、まぎれもなくモンゴロイドである。

<29 服装>男性の髪型は、昔ながらのスタイルであれば、長く伸ばした髪を頭の先のところで結ぶもので、シンポー（カチン）族に似ている。また、頭の周りにはクパク (khuphak) と呼ばれる布切れをしぼりつける。女性の場合も髪は長く伸ばして頭の後ろで結んでいて、白い布切れで頭を被っている。

服装は、ビルマ人に似て、ルンジーを着る。男の服装は、格子じまの手製のルンジーである。色は、緑と黒で、赤、白、黄などのラインが入っている。かつては、腰巻き、袖なしのシャツを着ていた。女も、かつては、幾何学的な模様の入ったカラフルな一枚布 (1.2×0.4メートル) を下半身に着け、上半身には2枚の布 (1×0.5メートル) を胸と背にあてていたが、現在は、バザールから手に入れたブラウスなどを着ている。儀礼用の服はない。飾りは、かつて、男は赤や黒のトウの輪を腰につけ、儀礼の際にはサイチョウの皮とイノシシの角で作ったものを頭に被った。女は、ヤギの角のような形をした物をトウや木で作って黒く塗り、耳飾りとしていた。タンサ族は、隣接するノクテ族、ワンチョー族と違って、入墨をすることはない。

<197 言語の同定>サブ・トライブによって異なる方言を話す、その違いはそれほど大きなものではないので、1言語とみなしてよい。しかし、共通語として、シンポー語を用いている。タンサ族は、シンポー語をたやすく身につけるので、両言語は似ていると思われる。また、タンサ族は、ずっと以前にはシンポー族と関係があったと信じている。言語分類上、ローカチン・グループに属すると思われる。文字は持たないが、彼らの生活態度には、伝統的な教育レベルの高さが感じられる。

<61 親族集団>タンサ族には数多くのサブ・トライブがある。Lungchng, Yogli, Mosang, Rong-Rang, Khemsing, Moklum, Tikhak, Ponthai, Longphi, Sanke, Lungri, Taipi, Have などである。

<618 クラン>個々のサブ・トライブは、多くの外婚クランにわかれており、クラ

ンは、リネージ・グループと呼んでよいサブ・クランからなっている。このサブ・クランも外婚集団と呼んでよいものである。

<59 家族>タンサ族の家族は大家族である。なかには、20人以上が一つの家に住んでいることもある。分家が行われるのは、構成員が増え過ぎたときや、ケンカ別れの時である。タンサ族は父系に従って親族を考えており、彼らの用いる親族名称はそれを反映している。<582 婚姻規制>結婚のときには、同一クラン内でサブ・クランが異なっている場合でも、通婚することは許されない。また、特定のクラン間では、通婚が禁じられている場合がある。このように、結婚においてはクランのもつ意味が重要であるが、政治的にはクランは特別な力は持たない。<471 資本の所有権と管理>家の全財産の管理は父親が行う。ただし、他の構成員の同意なしに、売ったり、分配したりできない。父親が死ぬと、長男がそれを相続する。

<344 公共建造物>かつては、若者宿、娘宿に象徴されるモルン (morung) 組織は、政治的に、重要な役割をもっていた。若者はみな村の入口にある若者宿 (looppong) に泊まっていた、そこは、軍事基地、武器倉庫、集会所、遊戯場、教育の場などの機能を持っていた。娘宿 (loop, likpya) はまだ残っているところもあり、若い男たちは、夕べにここを訪れて娘達とゴシップを楽しむ。

<623 評議会[カウンスル]>個々の村には長老議会がある。メンバーは、多くのクランを代表するものからなる。首長は、特定のクランの中から、富や知性を考慮されて選ばれる。長老議会はもめごとを裁決し、村内の法と秩序を維持する。おもなもめごとは、盗み、婚資の不払い、他人の土地への侵入などである。首長の発言力は強く、その裁定は最終的なものとなる。体罰はなく、金品を支払う義務を課す。課された者がそれを支払えない場合、友人や親戚が保釈金を積んで、将来完納することが約束されると解放される。そうでなければビナサ (binasa) と呼ばれる村の使用人となる。ビナサは村内で、生活や結婚はできるが、家族もビナサとなる。ビナサの娘が結婚するときは、夫方からもらう結納は、主人のものとなる。

<24 農業><262 食事>タンサ族の経済状態は比較的よく、ほとんど年中コメを食べている。ほとんどの村は自給自足している。農産物にたよるほかに、余剰生産物や工芸品などを交易することによって金銭収入を補っている。最近、道路工事などの労働者として平原地方へ出稼ぎに行く者もある。一般に、タンサ族は働き者で、物乞いは恥辱と考えている。

<252 食物の調理>食物はコメ (ahu) とミレットを主食とする。コメは、蒸して食べることもある。<263 調味料>住民のもっているスパイスはおよそ12種類であり、

トウガラシ、ニンニク、タケノコ、ハッカ、ショウガ、ターメリックなどがある。茶は欠かせない飲物であり、食後、接客時にはかならず飲まれている。タケのカップを用いる。マンマオ (Manmao) 地区は茶生産のセンターとなっており、どの村にも茶畑がある。摘み取られた新芽は、火にかけられた鍋のうえで、水を少し加えていためられてから、タケのむしろのうえで日干しにされたり、いろいろのうえで乾かされたりする。その後、手で揉んでこなごなにして、タケの筒（直径6センチ、長さ30センチ程度）に詰め込まれる。この竹筒は、外側が少し燃えるまで火に入れられてから保存される。

<273 アルコール飲料><252 食物の調理>茶について重要な飲物はライス・ビール (sai) とその蒸留酒 (laho) である。コメを炊いてからバナナの葉のうえにひろげ、そこへ、ピー (pi) という発酵剤をいれる。ピーは発酵したコメの粉である。これは、コメの粉と水を混ぜてかたまりを作り、それがあまる期間保存されて自然に発酵したものである。さて、ピーとまぜられた飯はしっかり葉でくるまれたのち、3日ほどしてから容器に入れられ、水が注がれる。バナナの葉などで口をしっかりと閉じられて、さらに2、3日保存するとライス・ビールができる。飲む際には、タケやトウの濾過器で濾過される。蒸留酒を作るにはそのための道具を用いる。また、蒸留酒はタピオカの根の汁から作られることもある。阿片、タバコが栽培されており、阿片はタバコよりも好まれている。

<437 交換取引>タンサ族の村落間での交易はよく行なわれている。また、パトカイ山脈をこえるいくつかの峠は、ナムチク谷、ティラップ谷のタンサ族と、ビルマ側住民との交易のために使われている。手織物、茶、塩などを交換して、ビルマのダオ (dao 山刀)、漁網、ヤリ、ペンナイフ、阿片などを手に入れる。これらの品物は、物々交換されたり、貨幣によって売買されるが、貨幣の役割をはたすものとして、茶葉の入った竹筒も用いられる。つまり、竹筒のひとつが1単位となって交換の媒介の役目を果たすのである。しかしこれは、徐々に貨幣にとって替わられつつある。

<426 借用と貸与>アッサム方面との交易では、農産物、手織物、ヤギ、ニワトリなどを売って得たお金で、塩、糸、衣料品、身の回り品などを購入している。勘定の付け方、つまり帳簿操作にあたるものについては、あるシステムがある。タケの輪の一つ一つが、お金や品物をあらわす単位となるのである。貸し手と借り手が合意に達すると、借り手は、貸し手と村の有力な長老何人かのいるまえて必要数のタケの輪でチェーンをつくる。この時には双方の保証人たちも同席している。そしてチェーンは、借り手自身が自分の家に保管する。返済がなされると、相当分のタケの輪がチェーン

からはずされ、燃やされるのである。負債があれば、家の中にチェーンがぶらさげられることになるが、それぞれについて証人がいるために問題となるようなことはめったにないという。

＜243 穀物栽培農耕＞タンサ族は、基本的に農耕民であり、焼畑を主としている。野生ゾウに荒されることから、定着農業は好まれない。主要な農作物は表のとおりである。

穀物名	耕地の準備期 (森林の伐開含む)	播種期	収穫期
イネ	1～2月	5月	9～10月
ミレット (アワ)	12～1月	2～3月	6～7月
ミレット (シコクビエ)	1～2月	5月	11～12月
トウモロコシ		2～3月	6～7月
タロ (arum)		2～3月	10～12月

＜243 穀物栽培農耕＞ミレットは投げ播きする。稲は掘棒で掘った穴に播かれる。収穫時には穂刈りされる。トウモロコシ、イモは、ミレットの育つ畑の縁に植えられる。野菜には、カンショ (甘藷)、カブラ、ナス、ヒョウタン、カラシナ、タケノコなどがあり、近年になってから、ダイコン、ジャガイモなどが導入された。農具には、多目的に使われるダオ、クワ (jangkho)、掘棒 (san-khai 長さ75センチ)、カマなどがある。

＜224 狩猟とわな猟＞共同作業で行われる狩猟は、ガムトムカイ (ngamtomkai) と呼ばれる。適期は夏で、男たちが行なう。イヌを使って獲物を追い込む。武器は、ダオ、ヤリ、銃である。分け前は均等で、しとめた者が獲物の首をもらえらる。＜226 漁労＞漁労でよく行うのは、蔓草から汁をとり、あらかじめ石で水流を囲ったところにそれを投げこんでとる方法である。

個人的にやるものには、銃、弓矢、輪網などで鳥をとったり、漁網、投げ網、エビとりかご (lobster-pot)、釣り針で魚などをとったりするものがある。狩猟を行なう前には、占い師がタケと葉を用いて結果を占う。凶兆があれば、その日は中止される。

＜32 原材料の加工＞タンサ族は、工芸に秀でている。女の手による織物は、カムティ族のものと似ているが、幾何学模様や花柄が好んで用いられる。多色の格子縞のルンジーは、平原のバザールでも有名である。木彫りはほとんどやらない。しかし、タケやトウ (籐) を使ったかごづくりはたいへん上手である。

＜341 建築＞＜796 組織だった儀式＞家屋を建てる時には、共同作業で建てる。

建築資材は、その家の持ち主が、近くのジャングルから取ってくる。彼らは、手伝ってくれた人々を、ライス・ビール、コメ、豚肉などでもてなす。家を建てる場所は、占い師が選定する。新築の家に入居するのは、建築が終了した月の1日、あるいは11日か21日にするのが吉である。この日には儀式が行なわれる。たとえば、マンマオ地区の Rong-Rang サブ・トリブの場合は、入居前に、イヌがダオで殺され、その首が竹槍の先に突き刺されて、家の前に立てられる。その後、家の中では盛大な宴がもたれる。この儀式は、悪霊を家の中から追い出すために行なわれる。

<24 農業> <788 儀礼>サブ・トリブによって呼称は異なるが、農耕に伴う主な祭は年に3回ある。その3回というのは、Yogli サブ・トリブの呼称に従えば、サムファング (samfang 播種前の祭)、モルロー (morroo 田植前の祭)、ラムラ (lamra 収穫前の初穂の祭) である。サムファングは各戸で行なわれる。時期は2月、3月の種まきの前で、2、3日続けられる。モルローは稲が30センチ程に伸びた頃に行なわれ、各戸で3日から5日続けられる。

ラムラ (lamra) はタンサ族最大の祭であり、村全体で行なう。8月に行なわれ、2、3日続く。祭の日は、村の古老が決定する。1週間前に村全体でライス・ビールが作られる。各戸から金を集めて、儀礼に用いるブタ1頭を用意する。初日、若者たちが村の入口の道のところを掃除してそこに門が建てられる。門の両わきにはタケの台 (lamrasing) が作られる。各戸の女は、それぞれ畑に行って稲束を刈り、タケの台のところへ持ってくる。稲束は地面の上に敷かれたカウパット (kaupat) の葉の上におかれる。村の長老たちが来て、道の両側に尖った棒 (lamra thung) を何本か刺す。ブタ1頭が殺され、血は稲束の上に撒かれる。すると女は稲束を持ってめいめいの家に帰り、家の柱にそれをぶら下げる。コメと肉の食事が若者たちによって作られる。この日は女たちは調理をしない。村の全員が加わって供宴がもたれる。食事を始める前に、祭司 (dingwa) は神 (sikia) と精霊 (thang) にたいして、2つのタケの台の上にお供えをする。2日目には、特別なことはしないで飲食、歌などで楽しむ。この祭が終わると稲刈りが始まる。Rong-Rang, Khemsing サブ・トリブは、バレ (bare) とよばれる祭を家単位で行なっている。これは、ジャングル伐開の1週間前に行なわれる。ライス・ビールを作り、祭の日にはブタ1頭が殺される。肉は他の村人にもふるまわれる。

<58 婚姻>タンサ族が結婚する年齢は、男25歳から30歳、女15歳から25歳である。単婚が基本である。交叉イトコ婚、レヴィレート婚、ソロレート婚は多い。たがいの両親の合意による結婚がふつうである。この場合、夫婦交渉は結婚後である。ふつう、

若者に結婚したい相手がいれば、友人か親戚のものを通して自分の親に伝える。すると、親が相手の親と相談して婚資を決めるのである。

<583 婚姻の様式> 恋愛婚もタンサ族の社会では認められているが、娘の親の同意が欠かせない。

<584 婚姻成立までの諸習慣> 娘の親の要求する婚資を払えるか否かで、結婚できるかどうかが実質上決まる。婚資の次に大切なのは結婚式である。婚資は金銭や家畜（水牛、ブタなど）のかたちをとるが、ふつう、100ルピー、水牛1頭である。離婚は認められていない。

<836 婚前性交渉> 結婚前の性体験は、正常なこととはされないが、よくあることである。この場合、男に責任があり、婚資を払って結婚しなければならない。

<585 婚姻儀礼> サブ・トライブによって異なるが、Mosang の場合、結婚式は3日間にわたって行なわれる。初日、新郎は、親戚か友人を伴って娘の家に行き、娘の親にブタ1頭と蒸留酒数杯をわたす。親は酒と食事をふるまう。新郎は新婦を伴って自宅に帰るが、そのとき新婦は自分の家から娘2人を伴う。新郎の家では供宴が催されるが、その夜は、新婦は2人の娘と共に小部屋でやすむ。2日目、親が新郎らを引き連れて新婦の家を訪れる。供宴がもたれて、カップルの左手には結婚の紐が結ばれる。新婦の父親は2人の腰の周りをライバン (raiban) と呼ばれる植物の繊維でできた紐でしばる。この紐には殺されたブタの尻尾の先とビーズが結ばれる。儀式が終わると、新郎の家に帰る。3日目、2人は新婦の家を訪れて終日そこに滞在する。供宴がもたれる。夜帰るときには、ヤリ、ダオ、布、バスケットをもらう。恋愛婚の場合は、婚資の支払いだけで終わる。

<72 戦争> タンサ族はかつては、首狩りに象徴される戦争を行っていた。原因は、土地問題が主である。同一サブ・トライブ内での戦争は少ない。長老会議が攻撃対象とする村を決めると、男たちが部隊をつくる。出発前には、ブタを殺し、食事をとりライス・ビールを飲み、襲撃のリーダー (serai) はニワトリを殺して吉凶を占った。凶兆だと襲撃はとりやめた。未明に襲撃をかけることが多かった。穀物倉はさけて家屋には放火し、男女の区別なく首を狩り、子供は捕虜とした。戦いが終わると、戦利品である首と手は村境の巨石の横に埋められるが、7日たつと村の中に持ち込まれて供宴がなされる。敵の首と手にコメとライス・ビールが施された後、それらは村人の間で分けられる。首はすべてリーダーのものとなった。タンサ族は、首狩りは村に豊穡をもたらせるものと考えている。

<776 精霊と神々> タンサ族は、「最高神」の存在を信じている。それは、目に見

えないけれども、世界を創る力を持ったものであり、シキア (sikia)、プラ (pra)、ラング・カウ・ハワ (rang kau hawa) といった名前を与えられて人格化されている。空に棲み、人に恵みを与えるものとされる。これは、人に害をなさない。そのため、神に対して犠牲を供することはない。それをするのは、精霊、しかもその悪霊に対してである。悪霊に対しては、お供えや犠牲によって、機嫌を損ねないように、人に害をなさないようにしなければならない。

<793 祭司職>祭司職には祭司と占い師がいる。占い師は、木の杖によって占いをする。祭司や占い師は世襲のものではなく、技術さえ習得できれば誰でもなれるが、通常、男である。病気は様々の悪霊のせい引き起こされる。占い師はその悪霊をつきとめて、処方(儀式)の指示をする。ブタ、ニワトリ、ライス・ビールは儀式に欠かせない。また、粘土で作った像、タケ細工、卵なども用いる。

<778 聖なる事物と場所>タンサ族には太陽の崇拝がある。1957年2月、ナムチク谷では豪雨が続いた。この時、Lungri サブ・トリブの村では、太陽に対して、雨降りを止めてくれるように祈る儀礼が行われた。村内の巨石の前にタケを立て、その先には太陽を模したタケ皮のモデルを固定する。卵、種籾、飯を供えてから巨石の上に土をかぶせて、石の周りで火を焚く。そして、祭司が叫び、日が照らして、伐開地に火入れすることが出来るように祈った。また、タンサ族は、雨ごいをするときにも太陽を崇拝する儀式を行う。

タンサ族は、かつては Lung lang という石を崇拝していた。この儀式を Yogli サブ・トリブはカータン (khatang) と呼んでいる。これには、人身犠牲を伴っていた。犠牲に使うのは戦争時に捉えた捕虜、あるいは、村内で集めた金品で買った遠くの村の者であった。儀式は村の端に固定した二つの石のところで行い、儀式前には、犠牲にじゅうぶん飲食させたという。<173 口碑・伝説による歴史>これには伝説がある。昔、不作のため、飢饉が起こったときに、ブタ、ニワトリを犠牲にしたが利益はなかった。ある者が夢を見て、その中で最高神シキア (sikia) が犠牲にサルを欲した。石の前でサルを犠牲に供したところ、よい収穫があった。しかし、シキアはまた夢にあらわれ、母親を犠牲とするならもっと収穫がよくなると言った。再び石の前で母を犠牲としたところ、大豊作となりそれ以後習慣となった、というものである。

<788 儀礼>Rong-Rang サブ・トリブは、かつて、ダワン (dawan) と呼ぶ盛大な祭を行っていた。これは12月の縁起の良い日を選んで行われた。村内から金を集めて、人、ウシ、スイギュウ、ブタを買った。儀式の前日には村から森へ向かう所

が掃除される。当日、犠牲には十分飲食させた後、そこに立てた木の柱に縛り付ける。まず若者がヤリで突き刺し、ケワ (khewa) と呼ばれる者が首を狩る。首はシワ (siwa) と呼ばれる者に手渡される。柱の周りに人は集まる。シワは首を持ってそのまわりを回りながら叫ぶ。神に、自分たちの安寧を求める言葉である。頭は二分して、ケワ (khewa) は後ろをもらい、ダオの持ち主が前をもらう。他の骨も参加者に配られる。それらは各戸の屋根に吊される。肉や髪はムンソング (munsong) という巨木のもとに埋められて石が二つ置かれる。参加者は卵の白身を手に塗り付けた後、水で洗う。そのあと、飲み食いして楽しむ。殺した者は、その日は自分の手を使って飲食せず、人の手で食べさせてもらう。続く2日間は特別な儀式はなく、ウシとブタが殺されて供宴がもたれる。

<761 生と死> タンサ族は死を二分して考えている。老衰による自然な死は神の行為であり、事故死、若死などの不自然な死は悪霊の仕業とする。死に方の違いによって、葬送の方法もかわってくる。<764 葬式>自然な死の場合、ふつつ、一日家の内部に安置されてから埋葬される。死者が出ると、ニワトリを1羽殺して料理して、家の外に立てた長い柱の上に置く。これは死者へのお供えであり、また、死者の出たしるしでもある。その後、死者の用いた品物が、戸外に組まれた木に吊り下げられる。死者はまず、家の中で顔、胸、手を洗われる。その時、シングソイジャク (singsoijak) という葉が用いられる。他のクランの者は、死者に触ることも許されない。死体は木製の棺に入れられ、家の前の地面に埋められることが多い。棺の下にはタケで作ったマットを敷く。棘、石、土、丸太で棺を覆う。墓の近くに、ライス・ビール、飯、飲み水が供えられ、死者の衣類、ダオなどは木に吊される。埋葬が終わると、参加者は体を洗う。豚が殺されて、首は死者に供えられる。

<766 特異な死をめぐる慣行>不自然な死の場合は、村外の森に埋められる。裸で埋めるが、その時に、眼、手、足には棘をさしておく。そうしておく、死者の霊は、眼が見えず、物に触れられず、歩けないからである。これをやっておかないと、悪霊が村に帰ってきて、村人、特に死者の家族に害を為すのである。

<78 宗教的慣行>死者を出すと、家族にはケガレの期間がある。自然な死の場合は3日間、不自然な死の場合は5日から7日間である。この間、家の者は、外出せず、仕事もしない。他家の者は訪問しない。4日目に、村人をよんで供宴を行う。ブタが殺され、祭司は、その肉とライス・ビールを死者に供える。家の女は畑に行き、ジャガイモとタロを採ってきて、それを家の柱に吊り下げる。不自然な死の場合、ケガレの期間には悪霊の攻撃から身を守るために策を構じる。尖ったタケを家の周りに固定

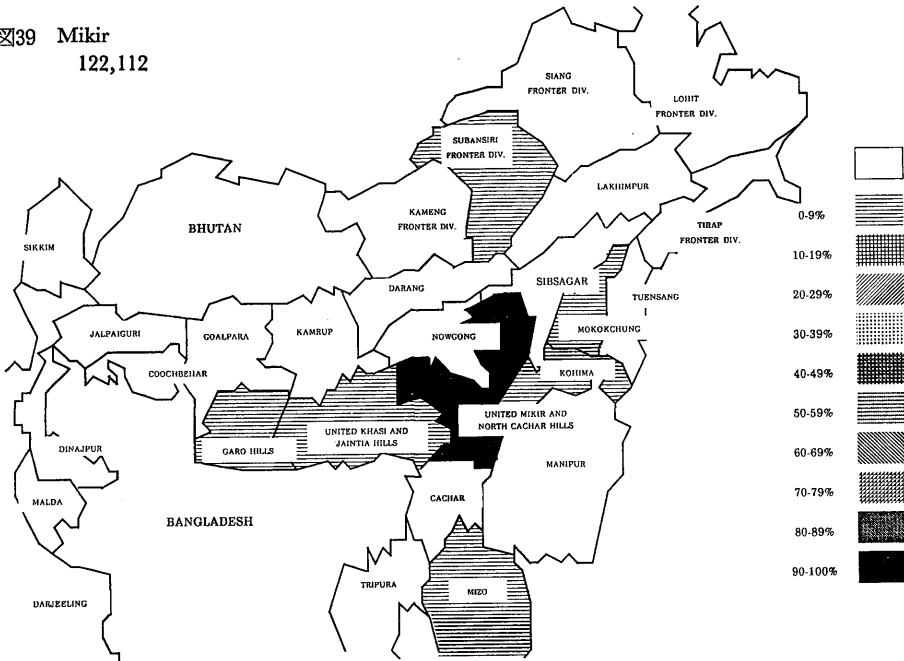
し、バスケット、漁網、棘、尖ったタケなどで家の入口などを覆う。そうして悪霊の害を防ぐのである。

<776 精霊と神々>タンサ族は、非物質的な存在としての魂を信じている。生きている時は頭の中にあり、死ぬと口から出ていく。自然な死の場合、魂は西方の空にあるウルム (ulum) という場所に飛んで行くが、不自然な死の場合は、悪霊となるという。

(月原敏博)

ミキール (Mikir), アルレン (Arleng), カルビ (Karbi)

図39 Mikir
122,112



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>ミキール族は、ミキール山地、ジャインティア山地などに住む部族である。 <156 社会的パーソナリティー>アッサムの山地部族の中では最も平和を好む部族と言われている。確かに、ゲイトの『アッサム史』をみても、アホム王国がミキール族と闘争した例は一例しかない [ゲイト 1944: 229]。他の多くの山地部族においては、アホム王国との間で多くの戦闘を記録しており、また部族内での闘争が激しく、しばしば孤立性の高い村落を形成していたのと比べ、大変対照的である。そのために、ナガ諸族にみられるような地域性の発達は少なく、ミキール山地を中心とする広い地域に居住しているわりには、言語や生活面での差異は少ないといわれている。 <11 参考文献>以下では主としてダス (Das) とスタック (Stack) による文献を参考に記述する [Das 1978: 60-151; Stack 1908: 1-13, 151-155]。

<10 オリエンテーション>ミキール族が集中して住んでいるのは、東西南北をそれぞれダンシリ (Dhansiri) 川, コピリ (Kopili) 川とカラン (Kalang) 川, ヤムナ (Jamuna) 川, ブラマプトラ (Brahmaputra) 川に囲まれたミキール山地を中心とする。これは、現在の行政区でいえば、ユナイテッド・ミキール・アンド・北カチャー

ル・ヒルズ (United Mikir and North Cachar Hills) と呼ばれるディストリクトに含まれている。そのほかにミキール族が住んでいるところとしては、ジャインティア山地、アッサム平原のノウゴン (Nowgong) やシブサガル (Sibsagar) などがある。

<132 気候>ミキール山地の気候は大変湿度が高く、カーシ・アンド・ジャインティア山地 (Khasi and Jaintia Hills) などの高原にあるようなそよ風もみられない。このため、外来者にとってはマラリヤにかかりやすい不健康な気候の土地である。

<137 植物相>ミキール山地では、標高の高い峰々は1,200メートルに達しているが、大部分はそれより低く、焼畑の二次林であるタケを中心とした植生がひろがっている。地質は花崗岩や片麻岩からなり、土壌はやせている。<136 動物相>山地の常緑林の中にはバッファロー、トラ、クマ、シカ、野生ゾウ、毒ヘビなどがすむ。サル、ウサギなどは焼畑を荒す。

<142 身体諸形質の情報>ミキール族は、チベット・ビルマ語族に属する一般の諸部族よりもアッサム人の下層階級の者に似ているといわれる。皮膚の色は黄色がかった褐色である。薄い口髭を除いては髭はない。髪の毛は後ろでくくって首筋までたらしめている。筋肉質のよい体格で、男は長時間労働や重荷を背負うことに強い。<29 服装>服装はカーシ族に似る。男の衣服は、リコング (rikong) と呼ばれる一枚布を腰に巻き付け、頭には、ターバン (poko) をまく。また、尻まで覆う長い縞模様の貫頭衣を着る。冬にはペインキ (peinki) と呼ばれる絹の布を着る。女はペニ (peni) というベチコートに腰に巻き付け、銀のコインのついた帯で縛っている。上半身にはペコック (pekok) という布を巻き付ける。男は入墨はしないが、女は年頃になると顔のまん中に額から顎まで一直線に藍 (indigo) で入墨を入れる。<301 装身具>脚につける飾りはないが、装飾品は好んでいる。特徴的な飾りは耳たぶにさす銀製のチューブでノタンピー (nohangpi) と呼ばれる。男も耳に金のイヤリング (norik) をつける。そのほか、腕輪、サンゴ石のネックレスなども好まれている。

<197 言語の同定>グリアーソン (Grierson) は、最初は、ミキール族の言語を西部ナガとボロ (Boro) の中間に位置するものとして分類したが、のちにスタックの主張を受け入れ、ナガとクキのリンク役を果たすものとする分類をしている [GRIERSON 1903, 1927: 69; STACK 1908: 151-172]。ミキール族と隣接して住むレングマ・ナガ族は、比較的新しい年代にダンシリ (Dhansiri) 川を越えて移入した。

<101 アイデンティフィケーション>ミキールとは周辺部族による呼称であるが、その語の由来は確定していない。彼ら自身はアルレン (Arleng) あるいはカルビ (Karbi) と自称し、ミキール族でないもの (ディマサ族、ボド族、アッサム人など)

をパロック (Parok) と呼んでいる。

<621 コミュニティーの構造> ミキール族は4つのサブトライブ (Chintong, Ronghang, Amri, Dumrali) に分かれており、これが内婚集団となっている。これらは共通の祖先をもつグループであるといわれている。このうちダムラリ (Dumrali) はノウゴンなどのアッサム平原に住みついて、犁を用いた定着農耕を営んでいるミキール族をさす。彼らはアッサム人にトルア (Tholua) と呼ばれている人々で、歴史的にはアホム王国との間での通訳などをしてきたと言われている。これら4つのサブ・トライブは、さらにクル (kur) と呼ばれる外婚集団に分かれている。クルの間に階層制はない。クルはさらにサブ・クルに分かれており、これも外婚集団である。クルとサブ・クルの区分に関しては多くの報告があるが、一様でないため、ここでそれを例示することはしない。

<17 歴史と文化変化> <167 移入と移出> ミキール族は、かつて北カチャールのバレイル (Barail) 山地の北に集中して住んでいたといわれる。この故地はニハング (Nihang) とよばれている。現在その辺りにはミキール族の村落はないが、彼らの言語による地名が残っている。バレイル山脈においては、数世紀にわたって、クキ・チン諸族と関わりを持っていたに違いないとダスは推定している。ミキール族は、かつてトン・ノクベ (Thong Nokbe) という王をいただいてディマサ・カチャリ族と戦ったが、その圧力に押され西方のジャインティア王の助けを乞うたという。また、ダルトン (Dalton) によれば、彼らはジャインティアにも安住できずラハ (Raha) のアホム役人も彼らを保護してくれないため反乱を起こしたが、すぐに鎮圧され、結果としてミキール族は北カチャールからジャインティア、ミキール山地へと移動してきたという [DALTON 1872: 54]。

<24 農業> ミキール族のおもな生業は農業である。主作物はマイカム (maikum) と呼ばれる稲であり、住民はそれに最も関心を払っている。それに続く作物として、トウモロコシ、ヒマの樹、綿花、ターメリック、赤トウガラシ、ヤムイモ、ナス、ラック (arhar の樹で育てる) などがある。ダムラリと呼ばれる平原に住むミキール族などは、水田耕作も始めるようになってきた。しかし、アッサム平原と同じ方法で山地での水田耕作を行うと土壤侵食の問題が起こるため、山地での水田は谷間に限られており、ほとんどはダオやコダリ (kodali クワ) を用いた伝統的な焼畑農業がなされている。これには、犁耕、灌漑、移植といった技術は伴わない。

<241 耕作> 焼畑耕作は以下のようなスケジュールでなされる。12月、1月に森林の伐開が行われる。切り倒された木は3月まで乾かされて火が放たれる。クワをつか

って灰がならされ、雨期の始まる4月、5月に種粃が散播される。これらの作業は家族単位でなされる。稲は11月、12月に収穫される。トウモロコシ、ミレットなどは稲の縁に作られる。稲の脱穀は穂を石にたたきつけてなされる。耕作地の割当は、各家族の労働力に応じて村長にあたるガオンブラ (Sarthe) が行う。問題が起こったときには村の長老会議が開かれる。

<224 狩猟とわな猟>狩猟、漁労は好まれており、漁労には男も女も参加している。狩猟の季節は農閑期である冬で、男が行なう。獲物はシカ、イノシシ、トラなどである。おもな武器は、ダオ、槍 (chir)、タケの弓 (thai)、矢 (thai aso) であり、獲物を追うにはイヌも使われる。<226 漁労>針と糸を用いた釣りも行われるが、多くはワナやカゴを使った漁労である。漁労は集団で行なわれる。めいめいがカゴ (hak) とワナを運んで水流に仕掛ける。ワナは流れの途中に仕掛けられ、男も女も水流に入り、水面を棒でたたきながら魚をワナへと追い立てる。他の方法としては、水中にカゴを仕掛けておいて入った魚を取る方法や、野生植物からつくった毒を流して捕るものなどがある。

<28 皮革、繊維、布類>熟練と労力の必要な織物、タケやトウによる工芸品があるが、住民はそれに部分的にすら頼ろうとはせず、経済的には小さな位置しか占めていない。これは、バザールから安価な製品を入手できるからでもある。そのためこれらの家内工業は片手間に行われており、市場向けではなく、自家消費用である。ただこれらの中で最も重要なのは織物である。彼らは綿のほかヒマ (castor-oil) の樹を育ててエリ (eri) 繭を飼っており、これから、毛布を織る。繊維は藍で染める。織る作業は女の仕事である。タケを材料とした道具には、水汲み用の竹筒、荷物を背負うときに額にかけるシナム (sinam) と呼ばれるトウの帯、各種の容器に用いるカゴなどがある。

村の周囲には森林資源は豊富であり、燃料や建築材料には事欠かない。<471 資本の所有と管理><42 財産>森林はコミュニティの所有物であり、誰でも無料で木を採ってもよい。しかし焼畑のための伐開には村落会議メイ (mei) の許可を必要とする。

<262 食事>ミキール族の主食はコメである。粃摺りには木でできた長い杵と臼を使う。どんな種類の肉も食べるがウシの肉は食べず、乳も飲まない。荷役用でさえウシを飼うものはあまりいない。これはトラなどに殺されてしまうからである。小屋で飼えるニワトリ、ヤギ、ブタは、食用、儀礼用として重要である。肉は干し肉にもされる。火床の近くで乾かした干し魚も好まれる。野生植物の根なども食されている。

<27 飲物, 薬物, 嗜好品>どの家でもホル (hor) と呼ばれるライス・ビールをつくっている。女, 子供はさほど飲まない。ホルから作る酒にアラック (arak), タップ (thap) などもある。貯蔵, 携帯にはヒョウタンが使われる。ホルは儀式や祭りに欠かせない。タバコ, 阿片も少し栽培されており, 男たちが吸っている。ベテル・ナット, パーンの葉はアッサム一般と同様好まれている。旅の時間や距離は, 噛むベテルの数で計られたりする。

<36 集落>村落は耕地の移動によって移動する。ふつう村落は50から60の家族からなる。個々の家屋には家族全員が住んでいて, 大家族制である。ダルトンは, ときには30もの夫婦を含む家族が一つの家屋に生活している例をあげているが, スタックによればこのような例はすでになくなり, 一つの家屋に一つの家族が生活し, 息子夫婦がとどまる場合もある程度だとしている [DALTON 1872: 54; STACK 1908: 7]。

<34 建造物>家屋はタケを材料にした杭上家屋で, 床は地上1.2メートル程である。壁や床は割りタケを堅く編んだものである。屋根は4年から5年乾かした草で葺かれる。窓, 煙突はない。一般に家屋は二つか三つの部屋に分かれており, 一端はベランダになっている。ベランダの側には入口はなく, 側面の入口がある一室が客室に充てられている。その奥が家族の居間や寝室になっており, 外側にはニワトリ, ヤギを飼う小屋が続いている。かつては村内にマロ (maro) あるいはテラング (terang) と呼ばれる若者宿があったが, もはやそれはなく, 若者は村長 (gaonbura) の家などに起居している。

<621 コミュニティーの構造>若者組は村長に統率される。各戸は自らに割り当てられた耕地のみを耕すが, 若者組は彼らに割り当てられた耕地を共同で耕すほか, 村内の全耕地の世話に当たる。このほか, 葬式, 歌と踊りなどの公共事において若者の果たすべき役割は大きく, 彼らは村の結束と伝統文化を守る主体となっている。

<58 婚姻>ミキール族はふつう単婚であるが一夫多妻がないわけではない。同一クラン (クル) 内では通婚できないが, ミキール族にクランの数が多いことは, そのタブーを避けるためにそうだったとも考えられる。交叉イトコ婚は好まれている。しかし, 父親の姉妹の娘, 母親の兄弟の娘と結婚してもよいのに対して, 異なるクランに属する母親の姉妹の娘, 父親の娘, 父親・母親の姉妹と結婚することはタブーである。<584 婚姻成立までの諸習慣>スインケバ (Suinkeba) と呼ばれる正式な結婚の手続きは以下の様になされる。若者に好きな娘ができると, 若者はその意志を両親に伝える。両親が娘の家を訪れ, 結婚の申し出をする。娘の両親の合意が得られれば, 若者の両親は娘に婚約の指輪か腕輪を渡すのである。

<764 葬式>ミキール族はふつう死者は火葬にして、その場合、儀式も行われる。土葬にすることはほとんどない。土葬になるのは死産の子、生後すぐに死んだ子、出産時に死んだ母親の場合である。これらの場合、儀式はない。天然痘、コレラのために死んだ者の場合もすぐに土葬にされるが後に儀式は行われる。死体あるいは骨が掘り出されて火葬されるのである。トラに殺された者の場合、村から少し離れたところに土葬される。

(月原敏博)

タイ (Thai) 系諸族概説

<13 地理>タイ系諸族は、現在東南アジアの大陸部において、もっとも大きな勢力をなしている民族であり、西はアッサム、北は雲南、南はチャオプラヤー・デルタ (Chao Phraya Delta) にまでひろがっている。一般にタイと自称し、タイ族と呼ばれている人々である。かつて、南詔、大理といった国の主要住民のひとつであったが、谷合いの低地で水稻を作るという生業を持って、インドシナ半島を徐々に下ってきたことでも知られている。とくに、アッサムにアホム族が侵入した13世紀は、各地で「タイ族の沸騰」が起こった時代として東南アジア史では重要な意味を持っている。

<105 文化の概要>タイ族は、その分布範囲が広いわりには言語的、文化的に等質的である反面、形質的には地方的差異があると言われている。

<144 人種の類縁性>タイ族の中に、シャン (Shan) 族と呼ばれる人びとがある。シャンとは、ビルマ人が、北ビルマに住むタイ族に対して用いる呼称である。この人々は、現在のタイ、ラオスなどに住むタイ族のことを、タイ・ノイ (Tai-noi リトル・タイ) と呼んで、自らはタイ・ヤイあるいはタイ・ロン (Tai-yai, Tai-long グレート・タイ) と称しており、比較的颜色が白く、タイ族の中では、より古い人々とされている。

<167 移入と移出>インド北東部にいるタイ系諸族は、すべてビルマとの境をなす山脈を越えて移住してきたものであり、シャン族である。その主たる移入のルートは、イラワジ川上流部のカムティ・ロン (Khamti-long) やフコン (Hukawng) 谷からパトカイ (Patkai) 山脈を越え、ティラップ (Tirap) ならびにロヒット・ディストリクト (Lohit District) 付近からアッサム平原上部へといたるものである。そして、その移動の背景には、つねに、上ビルマにおけるシャン族の政治、社会的条件が関係していたようである。

<173 口碑・伝説による歴史>しかし、シャン族の古い歴史については不明なことが多く、研究者の間で様々な推測もなされている [ゲイト 1944: 88-97; コクレン 1944: 31-49; GRIERSON 1927: 43-44; LeBar et al. 1964: 193; Leach 1954; ハーヴィー 1943]。シャン族が雲南の南部から北ビルマに勢力を伸ばしてきた時期は、紀元前に遡るとの説もあるが、詳しいことはわかっていない。しかし、6, 7世紀頃からは、マオ川 (Nam Mao, Shweli 川) 流域にシャン族が侵入し始め、メン・マオ (Mông Mao, Măng Mao, Mung Mao) を中心とする地域に国家 (Mao Lung, Mông Mao, Măng Mao) を作ったといわれる。彼らはマオ (Mao, Mau) ・シャンとよばれる。また、マオ・シャン族はこの後しだいに西方や北方にも進み、同

じマオ・シャン族の血を引き継ぐ諸王が上ビルマの河谷に徐々に広がったとされている。この過程は、アホム族などのシャン（タイ系）諸族が伝えている王統の神話時代に対応するものと言える。この王国は、ペンバートン (Pemberton) の発見したマニプールの文書の中でポン (Pong) 王国とされているものにあたり、また、シャン族自身はこの国をセン・セ (Hsen-hse) と称していたといわれる。ただし、これらの言葉は、必ずしも一つの王権のもとにあったマオ・シャン帝国を表わすのではなく、同系の独立した諸国を包括的に意味した場合もあったと理解する方が適切なようである。たとえばフコン谷のシャン族などは早くから独立性の強い国家を形成していたと言われおり、また、アホム族もマオ・シャン族の一部族であるが、アッサムに入ってから北ビルマのシャン族国家との従属関係は持っていない。しかし、いずれにせよ、6, 7世紀から13世紀にいたる時代に、南詔、大理などに見られるようなタイ族をふくむ雲南の勢力と、ピュー族やビルマ族といったビルマ側の勢力との間に存在したのがマオ・シャン族のグループであったとすることができる。

<175 記録された歴史>13世紀初頭には、依然として上ビルマのメン・マオ (Mäng Mao, Mung Mau) が都であった。この13世紀は、雲南、ビルマに元冠がおよぶことになるが、それにさきがけ、マオ・シャン族の一部族であるアホム族は、アッサムに入って、タイ系諸族の最西端を延ばし、同時に、この地域の名称であるアッサムなる言葉の由来をもたらすことになった。アホム族は、アッサムにおいてアホム王国を建て、ブラマプトラ平原上部を中心としたが、16世紀にディマプール (Dimapur) を陥してカチャリ (Kachari) 族に勝利し、実質的にアッサム全域の覇者となった。一方、マオ・シャン族の本拠であった地方では、13世紀初頭のころ偉大な王であったスカンパ (Sukempa) の死後、中国からの影響を強く受け、元王朝を助けてビルマを攻めている。また、14, 15世紀には中国軍 (明) と数度にわたって戦い、大きな損害を被り、16世紀にはビルマ軍の攻撃に屈して国土を占領されている。このような経過をへて、マオ・シャン族の帝国の力は衰え、地方ごとに半独立の諸州が生まれていったという。これ以降、メン・マオ地方はビルマの支配と中国からの侵攻にさらされることになった。

これらの経過によってマオ・シャン族勢力の一つの中心は北ビルマに移り、18世紀中葉には、上ビルマにおいて独立を保っていた最後のマオ・シャン王国は、モガウン (Mogaung) を中心としていた。この地方は、ムンコン (Mong Kawng, Moong-khong, Moon Maorong) と呼ばれる。しかし、これもビルマ王アラウンパヤ (Alaungpaya, Alomphra) によって征服され、これによって、いくつかのシャン族

のアッサムへの流入が促されることになる。北に移住したシャン族たちは、チンドウイン川やイラワジ川の源流部に住みつき、カムティ・ロンはその一つを中心となった。カムティ・ロンとは、「偉大なるカムティの土地」を意味するシャン語である。後に、この地方に住んでいた住民のなかの一部がアッサムに移住して、カムティ族として知られることになる。

ダルトン (Dalton) は、モガウンを中心としたマオ・シャン族の国の支配領域の大きさに関して、ティッペラ、雲南、シャムまでひろがるものだったとし、またこの王国の都は、ビルマ人によって Mogong, シャン族によって Mongmarong と呼ばれたと記している [DALTON 1872: 5]。またアホム族のアッサム侵入についてのポン王国内での記録に関しては、ポン王朝第13代目の王スカンパの弟サムロンパ (Samlonpha) は、カチャール、ティッペラ、マニプールを服属させてプラマプトラ河谷平原へと侵入し、サディヤからカムルップまでを支配したという記録があるという。

アッサムにおけるタイ系諸族に属する部族は以下の通りである。1. アホム (Ahom) 族 2. カムティ (Khamti) 族 3. ファキヤール (Phakiyal) 族あるいはタイ・フェイク (Tai-phake) 族 4. ナラ (Nara, Nora) 族あるいはパニナラ (Pani-nara) 族, カームジャーン (Khamjang) 族 5. トゥルン (Turung) 族 6. アイタン (Aitan) 族あるいはアイタニヤ (Aitaniya) 族 7. マン (Man) 族このうち、アホム族とカムティ族を除けば、人口数百以下の少数グループのみである。また、アホム族を除いて、すべてビルマ仏教の影響を受けている。

以下、順に各部族を概説する。

1. アホム族 別項参照。
2. カムティ族 別項参照。
3. ファキヤール族あるいはタイ・フェイク族 別項参照。

以下の記述においては、ゲイトならびにネオグによっている [ゲイト 1944: 96-110; Neog 1984: 85-87]。なおムンコン地方は、モガウンやフコン谷付近をさすと思われる。

4. ナラ族あるいはパニ・ナラ族, カームジャーン族

<101 アイデンティフィケーション>「ナラ族というのは、1891年センサスレポー

トにあるように、『アホム族によるムンコンのシャン族 (Mungkong Shans) の呼称』であり、それは、アホム年代記のなかでしばしば登場する。カームジャーン (Kham-jiang),あるいはカームヤーン (Khamyang) として知られる人々は、ナラ族の一部族であり、以前はパトカイ (Patkai) 山脈に住んでいた。しかし、シンポー (Shingpho) 族の圧力によって、今世紀 (19世紀) 初頭にアッサムに逃れてきたのである。1891年センサスでは、カームジャーン族として、35人のみが記録されている。しかし、彼らは、一般にはナラあるいはパニ・ナラという名称で知られているため、ナラ族の項目に含まれている者の中には、いくつかのカームジャーン族も混じっているであろう。また、彼らの多くは既に部族としてのアイデンティティーを失っている。1848年においてさえ、当時はまだ自らの言語、宗教 (仏教)、生活習慣を保持していたにもかかわらず、アッサム人との混血が大変進んでおり、言語もそうであると報告されている。アホム王国年代記であるブランジ (buranji) のなかには、ナラ族によるアホムへの敵対、アホム王とナラ族の王女の婚姻などが記録されている。これらの指す時代ごとに、多数のナラ族がアッサムへ入った可能性はある。1911年センサスでは、ある小さなナラ族村落の人口として348人が記録されている。」[NEOG 1984: 86]

「長らく自らをアホム族と認めてきた人々のなかには、シブサガル・サブ・ディビジョン (Sibsagar sub-division) のディサンパニ (Disangpani), チャラパタール (Chalapathar) といった村のナラ族も含まれている。彼らは仏教徒であり、村落には寺院 (vihara) がある。またタイ語を話すことができ、タイ語、パーリ (Pali) 語の読み書きを習っている。」[NEOG 1984: 86]

またゲイトは次のように記述している。「ナラ族は、アホム族によって彼等の近い親族だと考えられているが、ネイ・エリアス (Ney Elias) は、やや異なった見解をもっているようである。クーンルンとクーンライとの伝説的もしくは半伝説的な話では、前者がその国の西部、すなわちフコン河谷のムンカン付近に占拠していたと信じられている。この時代より、1215年頃サムロンパによって征服されるまで、シャン族の記録には、ナラ族の国としてこの地方に関しては僅かの曖昧な記述があるにすぎないが、その地方は全く独立した国を成していたようである。現地の資料から、ナラ族に関し拾遺し得るわずかの事実からすれば、彼等はいま問題としている地方の原住民として存在したが、後にマウ (Mau) 族やカムティ族、シャン族と混血するに至ったとネイ・エリアスは記述している。なお彼等の原住地はカムティにあったらしいという。いずれにせよ、ナラ族は比較的教養ある民族で、カムティ、モガウンおよび上部アッサムに今なお残存している少数のものは、一種の知識階級と見られている。彼等は仏教徒

であり、かつ一般に天体観測や書記の仕事に雇われている。」[ゲイト 1944: 100]
(現代かな使いに訂正)

なお、グリアーソン (Grierson) によれば、ナラ族の言葉はカムティ族のそれとは
ほとんど違いがないという [GRIERSON 1927: 52]。

5. トゥルン (タイ・ロン) 族 (Turung, Tai-rong)

「ジョルハット・サブ・ディビジョン (Jorhat sub-division) のティタバール (Titabar) 地方とゴラガート・サブ・ディビジョン (Golaghat sub-division) のバルパタール (Barpathar) 地方には、トゥルン族の村落がいくつかある。1881年センサスでは、独立した項目には入れられてはおらず、1891年センサスでは、301人、1911年センサスでは、541人が記録されている。トゥルン族は、1820年頃にアッサムに入った。トゥルン族自身の伝承によれば、彼らはもともと上ビルマ北東部にあるムンマン・カオサン (Mungmang Khaosang) に住んでいた。その後、トゥルンパニ (Turungpani) 川に移ってから、トゥルンという名で呼ばれるようになった。彼らは、すでにジョルハット付近に住み着いていたナラ族に導かれてパトカイ山脈を越えたが、シンポー族によって奴隷として5年間隷属させられた。ヌーフヴィル (Neufville) 大尉がアッサム人奴隷を解放した際に、彼らも解放されて、その後シブサガル・ディストリクト (Sibsagar District) に住み着いた。トゥルン族は仏教徒であり、僧には、チャンマン (chanman) とガオサン (gaosang) があり、共に独身である。トゥルン族の間では、一夫多妻婚は認められている。ゲイトによれば、婚資は40ルピーから80ルピーである。結婚の儀式は、アホム族のあいだで行われるものとよく似ており、新郎、新婦に一枚の布をかけるのが特徴である。トゥルン族は、ナラ族、シンポー族、カムティ族と通婚する。離婚者も再婚を許される。通常、死者は火葬にする」[NEOG 1984: 86-87]。

「トゥルン族は、カチン (シンポー) 族によって奴隷とされていたので、多くはその支配者の言語であるシンポー語を話している。また、彼ら自身の言葉はカムティ語に近い」[GRIERSON 1927: 52]。

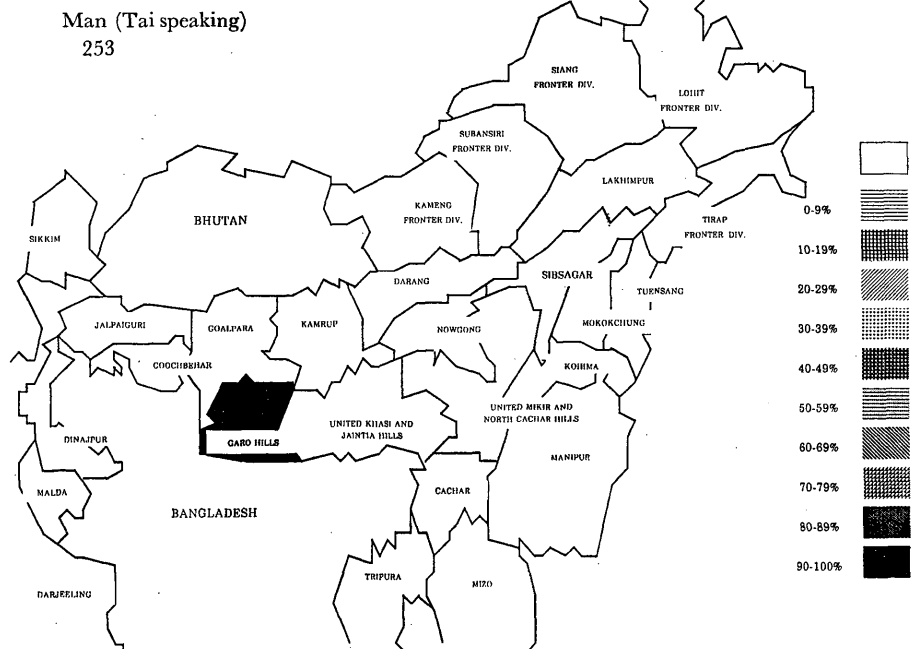
6. アイタン (アイトン) 族あるいはアイタニヤ (アイトニア) 族 (Aitan, Aitaniya, Aiton, Aitonia)

「アイタンあるいはアイタニヤ族は、ムンコン (Mungkong) のシャン族の一部族であり、その後宮の妻妾たちのための宦官をだしていた部族といわれている。1911年のセンサスレポートによれば、アイタニヤ族の血統は混じりあったものであり、カム

ティ語とアッサム語の混成語を話すとされている。彼らは13世紀にアッサムに侵入し、プラマプトラ河谷の支配者となったという説もあるが、おそらくは、チンドウィン (Chindwin) 川上部から、カムティ (Khamti) 族のあとを追って、アッサムに入ったのである。1891年には、この部族の村は二つ記録されており、一つはナガ山地 (Naga Hills), もう一つはシブサガル・ディストリクト (Sibsagar district) にあった。1911年センサスでは、人口 414 人が記録されている。現在は、ゴラガート・サブ・ディビジョン (Golaghat sub-division) のバルパタール (Barpathar) 地方, サルパタール (Sarupathar) 地方などに住んでいる。アイタニヤ族は仏教徒であり、僧は、ラキンプール (Lakhimpur) にあるカムティ族の村からやってきている」 [NEOG 1984: 87]。

「アイタン族はビルマのシャン語を話し、文字もそれを使っている」 [GRIERSON 1927: 52]。

7. マン (Man) 族とその他のシャン族



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

「1816年から1825年にかけてのビルマ軍のアッサム侵入と支配の結果、ムンコンの

シャン族 (Mungkong Shans) の外人部隊, 300人から400人がアッサムに残った。カムルupp (Kamrup), ゴアルパラ (Goalpara), ガロ山地 (Garó Hills) のシャン族やマン族は, それらの人々である。この人々はもと仏教徒であったが, もはや信仰は失われている。1921年センサスでは, ルシャイ山地 (Lushai Hills) とマニプールの仏教徒は, 最近になってからビルマより移住してきた者であることが指摘されている。現在でも, ガロ山地のプルバーリ (Phulbari) には, マン族の村がある」[NEOG 1984: 87]。

「アッサムに兵士として流入したマン族は, 男性のみであったが, アッサムにとどまることによって, ガロ, ラブハ, クーチ, ハジョン (Hajong) などの諸部族の女性と通婚した。現在は, 内婚集団をなす集団を形成しているが, 内婚制は厳密に実行されている訳ではない。形質的には, もとのシャン族に似るというよりも, ボロ・カチャリ族などによく似ている」[DAS 1987: 71-72]。

(月原敏博)

アホム (Ahom)

上ビルマを中心として広がるタイ系民族であるシャン (Shan) 族勢力は、ビルマの上座部仏教の影響を受けて仏教化していったという歴史をもっているが、アホム族は、シャン族が仏教化する以前にアッサムに侵入したシャン族の一部族であると一般に言われている。ただし、これについて綾部は、「もともと仏教徒であった」と述べている [綾部 1971: 25]。またコクレンやハーヴィも10世紀頃までに雲南のシャン族はチベットや中国の影響により、仏教化していた可能性を指摘している [コクレン 1944: 45-46; ハーヴィ 1943: 17]。しかしいずれにせよ、アッサムにおけるアホム王国成立期においてアホム族の基幹宗教となっていたものは仏教ではなく、固有の民族信仰であったと考えられている。彼らはその頃から文字を持ち、ブランジ (buranji) と呼ばれる歴史記録を残しているが、それがアッサム史解読のための重要史料となっている。ブランジには、彼らのもっていた王統降臨神話から、各時代の外交、戦役、儀式の記録までが、かなり克明に記録されている。神話や儀式からは、彼らの民族信仰を探ることもできる。

しかし、アホム族は、17世紀頃までにはヒンドゥー化し、言葉においても地元のアッサム語を使うようになったという。つまり、ヒンドゥー化して、ヒンドゥー社会の一階層として位置づけられるようになったのである。しかし、それと同時に、宮廷にはアホム語は残り、ブランジはアホム語で書き続けられ、また、非ヒンドゥー的な儀礼、慣習、つまり、民族固有のものも維持し続けているのである。アホム語は日常語としては廃れたが、祭司階級のもとには受け継がれ、伝統的儀式、宗教的儀式、占いなどではいまだに重要な役割を担っているようである。このことにみられるように、アホム族はアッサムに侵入して以来、時代と共に新たな文化を受け入れつつ、自らを変容させてきてはいるが、同時に古くからの文化も新たな形で維持し続けているのである。以下の記述は、主としてバルア (Barua) によりつつ、バス (Basu)、ルバー (LeBar)、ゲイトなどの著書も参考にしている [BARUA 1978; BASU 1970; LeBar et al. 1964: 187-97; ゲイト 1944]。

<10 オリエンテーション>現在、アホム族が住んでいる地域は、主として上アッサム、すなわちアッサム平原の上部であり、ディブルガル (Dibrugarh)、ラキンプール (Lakhimpur)、シブサガル (Sibsagar) の各ディストリクトである。<161 人口>バルアによれば、1881、1891年のセンサスでは、アホムにあたる人々の人口がそれぞれ、179,000人、154,000人と記録されていた。しかし、1901年センサスからは項目がなくなっている [BARUA 1978: 12]。

<197 言語の同定>グリアーソン (Grierson) は、アホム語とカムティ (Khamti) 語の関連性を指摘しており、シャン語、カムティ語とは密接な関係をもつといえるという [GRIERSON 1927: 51-52]。<177 文化変容と文化接触>アホム族は、アッサムの支配を確立し、臣下とまじわり、他部族と通婚した結果、自らの言語を捨て、その位置をアッサム語に譲った。初期に侵入したアホム族は、軍事遠征部隊としてやってきており、連れてきた女は少なく、また、通婚に関する集団的な、あるいはカースト的な偏見はなかったと言われている。初代の王スカーパー (Sukapha) は、自らボラーヒ (Borahi) 王の娘を妻に迎え、上アッサムの当時の有力な支配部族であったモラーン (Moran, Maran) やボラーヒとアホム族の通婚を奨励している。

<177 文化変容と文化接触> <77 宗教的信仰> 伝統的宗教を保持していたアホム族の生活様式がヒンドゥー化しはじめるのは、幼少時にブラーミンに育てられたスダーンパハー (Sudangpha) 王 (在位 1397-1407) の頃からである。これから後、アホム族の宗教は、その時その時の王権の採用する宗教に影響されていくことになる。臣下は王に倣って改宗していったからである。スフンムン (Suhungmung) 王 (在位 1497-1539) の頃からは、ブラーミンではなく、シャンカルデブらの広めたヴァイシュナヴァ (Vaishnava) 派へと改宗した。ガダーダハル・シン (Gadadhar Singh) 王 (在位 1681-1696) やルドラ・シン (Rudra Singh) 王 (在位 1696-1714) は、サクタ派 (Sakta Hinduism) を信仰した [BARUA 1978: 15-17]。

<793 祭司職> 一方、伝統的宗教は、祭司階級であるデオダハイ (Deodhai) やモハーン (Mohan) によって受け継がれてきた。このため、現在のアホムは、宗教的には3つの流れを引いてきている。すなわち、伝統的宗教、ヴァイシュナヴァ派、サクタ派である。

<621 コミュニティーの構造>アホム族の社会階層には、大きく分けて3つの階層がある。第1は首長・貴族階級 (Chamua) であり、第2は大多数の平民階級 (Kelua)、第3は下人階級 (Melua, Meldagiya) である。<618 クラン>また、もともとアホム族には7つのクラン (phaid) があった。第1はいくつかのロイヤル・リネージからなるラジャ (Raja) であり、第2、第3はそれぞれ Buragohain (大大臣 8家)、Borgohain (小大臣 16家) のリネージである。以下の4つに関しては、Duwara, Dihingiya, Lahon, Sandikai とする意見と、Deodhai (12家)、Mohan (7家)、Bailung (8家)、Chiring とする意見とがある [BARUA 1978: 17-19]。

また、ワデル (Waddell) は、3階級をそれぞれサブ・トライブとして、それぞれに属するクランを以下のようにあげている [WADDELL 1901: 17-19]。

サブトライブ

クラン

Chamua	Kunwar, Borgohain, Buragohain, Duara, Lohon, Sandikai or Handikai, Dangoriya
Kelua	Cheliya or Vetiya, Pator, Dihingia, Hatimuriya, Deodhai, Mohan, Bailung,
Melua	Chaddang and others

<621 コミュニティーの構造> アホム王国時代の社会においては、クランに相当するペイド (phaid) は官職と関わりをもつものが多い。王とそれに次ぐ官職である両ゴハイン (Gohain) は、上記のそれぞれのペイドから出た者でなければならないことが厳守されたが、それ以外の官職については、他の新たな血統の者が就くことがあった。これは、アホム王国が領土拡大するにつれて新しい官職が設けられた際、血統にかかわらず有能な者を選んで就かせていったことによる。このため、新たなペイドがアホム社会に参入し続けていたのである。アホム族が集团的偏見にとらわれていなかった例は、被支配民の信仰の自由を認めていたこと、征服地では有力な現地首長家の者をどんどん登用し、支配民としての特権と社会的地位を与えていったことなどにも現れている。バルアはこれを、アホム族のコスモポリタンの性格と表現している。なお、ペイド間の階層は特に明確ではない [BARUA 1978: 17-22]。

<601 親族名称> アホム族には名前に「姓」が存在し、それは個々人のペイドを表したものであった。しかし、ヒンドゥー化によって、ヒンドゥー的な姓が増えた。

<582 婚姻規制> アホム族の婚姻制度は厳格であり、特にアホム族本来の7ペイドに含まれる家系であるサトガリヤ・アホム (Satghariya Ahom) については、それが言える。彼らは、ペイドの下位区分であるサブ・ペイド (sub-phaid) の中では婚姻しない。婚姻すれば、社会的地位の低下を招くのである。彼らは家史 (family buranji) を記録して、バンシャワリ (banshawali) という家系図を保持しているため、祖先を正確にたどりうるものがこれを助けている。ただし、王家と大臣家は、平民 (Kelua) からも配偶者を取ることがあった。結婚が禁じられているクラン (phaid) の組合せは、Buragohain と Deodhai, Mohan と Borgohain である。

<36 集落> アホム王国初期から、村落は社会生活の基盤であった。また、アホム族にとって、現在にいたるまで農業、とくに水稻栽培が生業の中心である。そのため村落はふつう川畔にある。

<621 コミュニティーの構造> 基本的に、村落は経済的に自立しており、多くのカースト、職人を抱えていることも普通のようなものである。例えば、ブラーマン (Brah-

man), タケゴザ職人, 鍛冶屋, 陶器師などである。このため, 村落はある程度自己充足的な性格をもっているといえる。バルアは, アホムは都市的な文明を築いたとはいえず, それは, 都市化することのなかった文明であったとし, 個々の村落の住民にとって都市生活をするには村落生活以上の魅力はなかったとしている。

<626 社会的統制><63 領土機構>アホム王国時代においては, パイク (paik) あるいはケル (khel) システムと呼ばれるものがあった。当時, 土地と臣民 (paik) は国家のものであった。15から50才の成人男子はパイクと呼ばれた。パイクの義務は, 戦争時には兵士となること, 平和な時には国のための労働力を提供することであった。4人のパイク(後に3人に変更された)がゴット (got) と呼ばれる1つの集団をなしたが, 1つのゴットの中で, 常時1人のパイクを国の仕事に提供していた。この時, このパイクの耕地, 家族の世話は, 残りのメンバーが面倒を見た。1人のパイク当たり, 無賃労働に対する土地 (gamati) として, 2プラ (pura 約2.3エーカー) がただで認可されていた。屋敷地と菜園 (bosti, bari) は広さに関係なく査定はされず, 年に1ルピーを納めていた [ゲイト 1944: 292-294]。

<764 葬式>アホム族の伝統では死者は土葬 (maidam diya) にする。ヒンドゥー化した現在でもほとんどの村民はこれを行っている。記録によれば, 1769年, ラージェスヴァル・シン (Rajesvar Singh) 王は遺言によってヒンドゥー式の火葬にされている。当時から高貴なアホム族は火葬を行うこともあった。低い階層のものは土葬にしていたといわれている。またダルトン (Dalton) によれば, アホム王家はヒンドゥー化したにもかかわらず, 比較的最近まで旧来の埋葬方式を捨てなかったという。その方式は, 木の棺桶に遺体のほか金銀の装飾品をいれ, そのまわりには武器や農具などの副葬品をおき, これに土をもって丘墳状にして, その上に墓石をたてるというものである [DALTON 1872: 9]。

<105 文化の概要>現在, アホム族はアッサムの人口, とくに上アッサムの平原農民の中でかなりの割合を占めており, アッサム地方の社会全体の中でもつ意義は大きい。一般にアホム族は数百年間続いてきている社会変容を経験してきた人々を表しているといつてよい。

つぎに, バルア (Barua) の調査によるモランジャン (Moranjan) 村の事例を紹介する [BARUA 1978]。<117 現地調査データ>バルアは, シブサガル・ディストリクトのモランジャン村 (人口約600人, 74戸) を対象として, アホム族の社会, 宗教, 経済における伝統とその変容について記録している。これにしたがって, 現在のアホム族の実態を見てみたい [BARUA 1978: 26-52, 152-171]。

<10 オリエンテーション>モランジャン村はシブサガル (Sibsagar) とディブルガル (Dibrugarh) の中間付近にあり、面積は、長さ2キロメートルから3キロメートル、幅1キロメートルほどの比較的大きい村である。村の周りは同じアホム族の村落に囲まれている。<161 人口><621 コミュニティーの構造>村全体で74戸、598人が住んでいるが、村はさらに3集落に分かれており、5つのクラン (phaid) がちらばって住んでいる。Deodhai Chuk (26戸) には、祭司階級である Mohan と Deodhai、まん中の集落、すなわち本来のモランジャン村 (22戸) には、Mohan と Deodhai のほか、Chetia の家が2戸ある。3番目の集落、Changmai Chuk (26戸) には、これらより遅れてアホム社会に入った Changmai と Bhuyan が住んでいる。<19 言語>村内で使われる言語はアッサム語のみである。タイ (アホム) 語を話せるのはごく少数で、呪文だけはタイ語で語り継がれている。

<621 コミュニティーの構造> 個々の集落は独立した単位であり、明確な社会コミュニティを形成している。区別も明瞭である。

<173 口碑・伝説による歴史>村史はないが、伝承によれば、モランジャン村はもとはモラーン (Moran, Maran) 族の村であったという。<628 コミュニティー相互の関係>ゲイトによれば、マラーンは、「アホム朝後期にダンゴリ (Dangori) 川畔、ディブル (Dibru) 川畔に住み着いた部族であり、今や多くはアホム族と自称してアホム式の儀式を行ってはいるが、言葉は明らかにボド語である。」という [ゲイト 1944: 99]。

<243 穀物栽培農耕>生業上、ほぼすべての住民は水稻耕作を行っていて、アッサム平原一般の代表的な例として考えることができる。村民が作っているのは、おもに種々のサリ (sali) 種の稲である。<311 土地利用>村の北の低地にある耕地では、時には船を使うこともある。そのあたりでは水田の区画となる畦を作ることはできないので区画を示す指標としてセメントや木の柱を立てている。

<243 穀物栽培農耕>農事については、5、6月 (Bohag-Jeth) に犁起こしを始める。用いるのは伝統的な用具である。犁には3つのタイプがある。鉄の刃先がまっすぐなパリ・ナンガル (pali nangal)、刃の形がカーブしているマン・ナンガル (man nangal) あるいはアホム・ナンガル (ahom nangal)、水牛1頭曳きのものの3つである。モンスーンの雨がくる頃、苗床に3から5センチメートルの水を張った上に種粃を播く。1カ月ほどして苗が30センチメートルほどに成長した頃、田植えが行われる。収穫は11月に始められる。<251 食物の保存と貯蔵>脱穀にはウシをつかい、粃はドゥリ (duli) という大きなタケの籠に入れて貯蔵する。粃すりには杵 (dheki)

を用いる。農事暦の概略は以下の通りである [BARUA 1978: 58-60]

4, 5 月 (Chat-Bohag)	サリ米のための苗床の準備と犁起こし
6, 7 月 (Jeth-Ahar)	アフ米の収穫, サリ米耕作地の犁起こしと施肥, サリ米の種播き
7, 8, 9 月 (Ahar-Sawan)	サリ苗の田植え
9, 10 月 (Ahin-Kati)	フェンスの補修などの仕事, 家内安全のための宗教的儀式の遂行
11, 12, 1 月 (Aghon-Puha)	サリ米の収穫
1, 2, 3 月 (Magh-Phagun)	収穫の祝いや縁者の訪問, アフ米のための耕地の準備をするものはほとんど居ない。

<262 食事>村民の主食はコメであり, 農繁期は3食ともコメを食べているが, 冬の農閑期には朝食には押しゴメ (chira) やスナック (jalpan), ライス・ビール (laopani) などを食べている。特別な食べ物にモチ (bora bhat), 竹筒で蒸したコメ (chunga chaul) などがある。モチは客人の接待や, 他の社会的, 宗教的な機会にふるまわれる。また, 野良仕事の合間に食べるパット・パート (pat-bhat) というものもある。これは1人分のコメ適量をカウパット (kaupat) の葉に包んでゆでたものである。野菜としては, バナナの茎, タケノコなども食べている。客をもてなすときにふるまう茶にはミルクも砂糖もいれない。ライス・ビールを飲むことは男女を問わず好まれており, また, それは生活上重要な役割をもっている [BARUA 1978: 46-47]。

<34 建造物>村内の家屋には, 様式, 材料共にさほど違いはない。クラン (phaid) やサブ・ペイドによって家屋形式が異なることは, かつてはあったようだが今はない。ただし, デオダハーイ (Deodhai) の家系に伝統的なチャン・ガル (chang-ghar) というタイプの家屋は, く字形の区画を持つように建てられる。約1.8メートルのレンガの柱の上に建てられた高床式の家屋で床はタケである。床下は機織り, 薪置き場などに用いられている。入口の部屋は居室で, 未婚者の寝室でもある。火床は家の端の角にある。一般の家屋の場合は, 長方形の区画を持っていて, 屋根はカヤぶきで, 壁はタケやアシの芯の上に泥や牛糞を塗っている。屋根は毎年葺き替える必要がある。柱はレンガか木である。通常屋敷地に入るとまず牛小屋がある。住家の前か後ろには穀物倉があり, 大変大きい (6×3.6メートル)。それは約1.8メートルの高床である。そのほかにヤギ, ニワトリ, ブタ小屋などもある。住家の部屋は3つから5つである。屋敷地の選択についてはとくにルールはないが, 占い師が占う場合も多い。選定地には2本の長いタケを, 中間を交差させて立て, そのタケを両端として家を建てる。新

築した家に入居する場合には入居の儀式が行われる。

<764 葬式>死者は火葬にするが、村内に共同墓地はない。

<17 歴史と文化変化>最近の諸変化のひとつに、交通革命がある。道路の発達によって地理的モビリティが大きくなり、若者の中には遠くで仕事につくものが現れはじめ、子供は学校、高等学校への入学が認められてきている。これらによって村外の人々とのコンタクトが増えてきている。

<621 コミュニティーの構造>村落内の社会関係については、家系を調べることによって、容易に世襲・血統上の親族組織をたどることができる。ほとんどの社会・宗教活動は親族構成員の間で行われており、個々の村民間では親族組織が最強のきずなとなっている。村落は、外婚や内婚の単位ではない。親族名称は、年齢、性別に応じた呼び方が、実際上のクランメンバーであるかどうかに関わりなく、エチケットとして使われている。古い世代にはクラン(phaid)に関わる偏見があるが、若者はクランの違いには構うことなく、ほとんどの社会・宗教的活動に参加している。1つの村は1個の行政単位としての側面を持っているので、クランに関係のない事柄としては、村の道や学校などの改善のような公共事業がある。こういった仕事は、クランを越えて、村民が参加、協力するため、村民の結束を強める作用を持っている。また、教育施設の改善、都市への移住といった外部世界との関係が村民の中にも現れはじめ、親族の絆を弱めている。

<622 頭領>村民のほとんどが年長の親族リーダーにアドバイスを求めている。この親族リーダーは実際上の権力者と言うよりも相談役として扱われている。地域行政長など、教育を受けたエリートが政治的な実権を握り、かつ特定の世代の村民の信望をえてきている。宗教的には親族リーダーの権威は強いが、土地のことはエリートの権威にしたがってなされている。2つのリーダーの間で争いが起こりうるのはこの中間の事柄においてである。

<471 資本の所有と管理>経済上の変化については、次のような事が言える。職業上、農業が中心で就業者の72.67パーセントを占めているが、クランが違うからといって所有地面積にはさほど差異はない。1戸当りの耕地面積は十分ではなく、村民の中で大家族が占める割合が減るのにもなって、耕地面積は減少しつつある。息子の間で耕地は分配される。非経済的な土地保有が生じており、村民がかつて農業に対して持っていた全面的な信頼感が脅かされている。耕地(水田)面積当たりの産出量が低下しつつあるのは、非経済的な土地保有のほか、改善肥料、化学肥料を使用していないことによる。このため、多くの世帯は同じ親族の成員から借りたコメによって生

活している。このとき、利息はなく、返済はローンでなされる傾向がある。また、借り手の数が徐々に増大し、金融業者が村民の暮らしを侵しつつある。これによって、村民が第2、第3の職業を捜すという現象が加速化している。教育を受けた若者の増加、識字率の上昇などによって、もはや、伝統的な農業のみに頼るのでは不十分であるという自覚が広まりつつある。

<788 儀礼>儀礼、宗教上での変化に関して、死者が出た際の最後の浄化式であるサカム (sakam) は、かつては30日後に行っていたが、今では13日目に行われるようになっていいる。他の宗教的儀式に関しても、本来毎年すべきところのものが、経済的な制約のために、ほとんどは2、3年おきに行われるようになっていいる。

<628 コミュニティー相互の関係>政治と宗教の関わりについて観察されることは、モランジャン村で起きた変化の多くは外界での出来事によって引き起こされているということである。パンチャヤート (Panchayat) システムの導入によって村民の意識も変わりつつあり、とくに道路や水道施設に関しては、その恩恵を指摘する村民が多い。また、政治的な諸党派のリーダーのイデオロギーは村人の精神的構造を変えつつある。定期的な選挙を伴った民主主義、他の様々なコミュニケーション手段によって、種々の政治リーダーが、村民に近いものとなった。村民は政治的概念を獲得しつつある。最近の顕著な政治活動例として、Ujani Asom Rajya Parishad なる党派が支援した立候補者を大多数が支持した例などがあるが、この党派のスローガンは、上アッサムを独立州とすることを主目標としている。また、70年代以降、若年層による政治運動も目だつようになってきている。

<17 歴史と文化変化>これらは、親族組織の絆よりも、コミュニティの心情を生み出しつつある。この心情は、伝統的な社会・宗教的なものを復興しようという意識とも結び付いており、これが、アホム族としての新たなアイデンティティーとなりつつある。コミュニティの心情は村人の間にひろがり、これにともなって、伝統的な社会の宗教的行事もまた人気を博している。

かつて、ヴァイシュナヴァ派信仰は統合の力であった。ヴァイシュナヴァ派を受容することによって、全てのクランはその信仰と実践を同一のものとした。このことをよく示しているのが、各村に残る礼拝所兼寄り合い所であるナムガル (namghar) である。彼らはヴァイシュナヴァ派のルールに従うことによってヒンドゥー社会、アッサム社会に属しているという感情を培っていた。しかしこの数年、とくに古いクランである Mohan や Deodhai は、伝統的な生活様式を強く意識するようになっており、そのため、以前にもまさる熱意をもって伝統的な社会・宗教的儀式を行って、アホム

族としてのアイデンティティーを保持しようとする復興主義をみせている。その結果、ヴァイシュナヴァ派として、ナムガルを用いることは廃れつつあるのである。

若年層は、復興主義の過程を大変意識しているが、また同時に、受け入れたがらない伝統的な社会・宗教的儀式もある。例えば動物を犠牲としたり、死や病に対して魔術的な儀式を行ったりすることである。社会領域においても、祭司が司る伝統的結婚制度であるチャクロング (chaklong) を変えようという意識がある。チャクロングは、1969年から復活されたものであって、村民の記憶に残っている範囲では、それ以前にはチャクロングにしたがった結婚は一つもなかった。

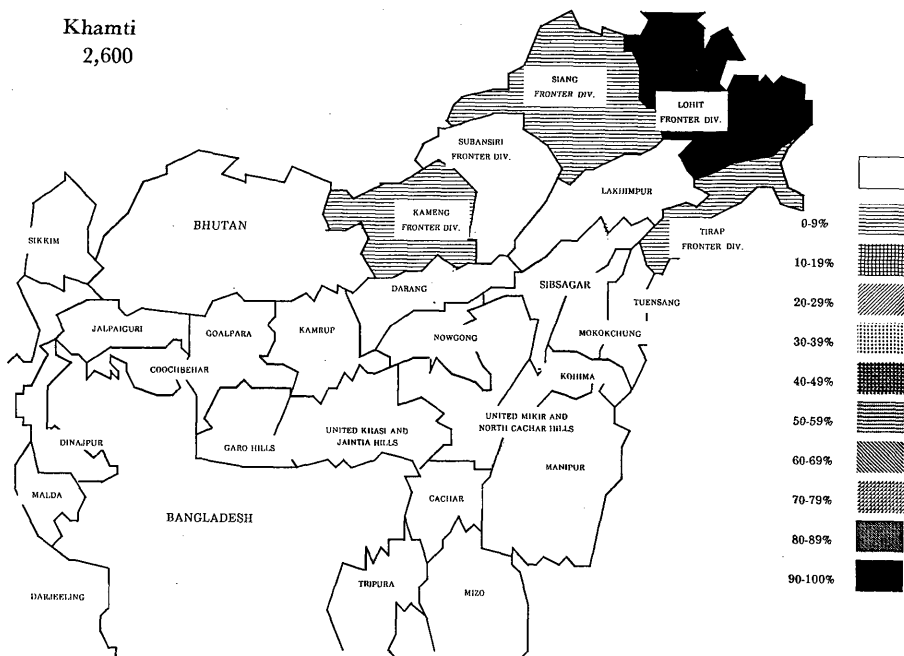
<621 コミュニティーの構造>とにかく、村民の社会関係は、比較的「閉じた」親族組織から「開けた」コミュニティへと変わりつつあるといえる。しかしこのことは、古いクランの Mohan, Deodhai, Chetia のみについて言えることであって、Bhuyan と Changmai についてはそうではない。それは、かれらが、アホム族本来の古い7つのクラン (phaid) であるサトガリア・アホム (Satghariya Ahom) の家系には属してなかったからかも知れない。あとからアホム社会に加わった Bhuyan や Changmai は、自らはアホム族であるという自覚をもってはいるが、Mohan や Deodhai のようには復興主義に影響されてはいない。おそらくかなり以前にアホム族の社会組織の中に組み込まれはしたが、アホム社会の中では Mohan や Deodhai の優勢が続いてきたために、このような違いが生まれてきたのであろう。

しかし一般的な経済状態は全てのクランにおいてほぼ同じであり、また、モランジャン村は、上アッサム一般の地方経済を代表するものと考えてよい。Bhuyan, Changmai においても、日常生活では親族組織が大きな役割を果たす。

社会・宗教的行事については、ヴァイシュナヴァ派の受容にともなって、Bhuyan と Changmai は、伝統的宗教儀式を全く捨て去っている。宗教的には、モランジャン村は2つのグループに分けることが可能である。一方は Mohan, Deodhai, Chetia であり、他方は Bhuyan, Changmai である。後者は伝統的宗教の実践を完全に捨て去ってヴァイシュナヴァ派を熱烈に信仰し、それによって自らを高い社会階層と見なしている。それにくらべ、前者もヴァイシュナヴァ派を受け入れてはいるが、ライフサイクルに関わる儀式に関しては、多分に伝統的宗教にたよるところを残している。彼らは600年間にわたってアッサムを支配してきたアホム族の子孫であることに誇りをもっており、伝統的なものをすべて捨て去ると Bhuyan や Changmai と同じ階層となり、社会的な地位が低くなると感じている。

(月原敏博)

カムティ (Khamti, Hkamti, Khampti)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>カムティ族は、タイ系諸族（シャン族）に含まれる一部族であり、ビルマの最北部を中心に居住している。一般的には、カムティ・シャンとして知られている。カムティとは、「黄金 (kham)」の「土地 (ti)」を意味するシャン語といわれる。現在、インド政府の指定部族に入れられているタイ系部族はカムティ族のみである。また、アッサム地方の指定部族の中で文字を持つのも彼らのみとなっている。カムティ族よりも約6世紀さきかけてアッサムに侵入したアホム族は、ヒンドゥー化して民族的にも拡散し、固有の文化を相当失っている。こういったことから、アッサムにおいて現在最もまとまった勢力を持つタイ系部族はカムティ族であるといってもよい。少なくとも、アッサムにおける、ビルマ上座部仏教の影響を受けているタイ系諸族の中での最大勢力である。ルバー (LeBar) らによれば、カムティ族が居住する地域は、北ビルマが中心で、イラワディ川源流のカムティ・ロン (Khamti-long, Khamti-lang) あるいはボー・カムティ (Bor Khamti, Bar Khamti) と呼ばれる地方、チンドウィン川上流部、同じくそのフコン (Hukawng) 谷、そして上部アッサムのロヒット・ディストリクト (Lohit District) である [LeBar et al.

1964: 190-191]。彼らはビルマ上座部仏教の影響を受けた 仏教徒であり、クーパー (Cooper) の指摘するとおり、トライブ (部族) という語につきまとう野蛮さ、文化の欠如といったイメージは彼らの性格からはほど遠いようである [COOPER 1873: 145]。ネオグ (Neog) によれば、カムティ族は、現在、およそ16村に住んでおり、それは、ロビット・ディストリクトのチャオ・カム (Chau-kham), ケレム (Kherem), イムパング (Impang), ニングロ (Ningro), ナナム (Nanam), インテム (Inthem), ラタオ (Lathao), ママウン (Mamaung), マハング (Mahang), 北ラキンプール・ディストリクトのバー・カムティ (Bar-khamti), バリガオン (Barigaon), デオトラ (Deotola), トニジャン (Tunijan), スリブヤン (Sribhuyan), バルパタール (Barpathar), ティプリング (Tipling) などであるという [NEOG 1984: 93]。以下、クーパー, ダルトン (Dalton); ネオグ (Neog) などに従って記述するが、前の二つは古い記録であるので現状とは必ずしも合致しないものもあるであろう [COOPER 1873: 123-151; DALTON 1872: 5-9; NEOG 1984: 79-104]。

<167 移入と移出><174 歴史の再構成>カムティ族のアッサムへの侵入は、18世紀半ばに、ビルマ王のアラウンパヤ (Alaungpaya, アロンプラ Alomphra) が、上ビルマのシャン族の国、モガウン (Mogaung, Mogoung, Maugong), 即ち、ペンバートン (Pemberton) がポン (Pong) 王国と記録した国を破った後に起こったとされる。ネオグが収集した伝承によれば、彼らはカムティ・ロン地方を数世紀支配していたが、同じタイ系のマンチェ (Manche) 族によって征服された。この時、モガウンの王統の血を引いていた王、プラ・タカ (Phra-taka, Chau-ai) は、ビルマ王 (アヴァ Ava 王朝) から贈られていた仏像などを持ち、パトカイ山脈のタン・チャウ・カン・パス (Tang-chau-kang-pas) を越えてアッサムにはいった。おおよそ1781年頃のことであるという。そして、最初はアホム王国の許しを得てテングパニ (Tengapani) 川に居住したというが、シンポー族であるビサ (Bisa) の長の敵対を退け、チャウ・フ・カップ・ンガ・カム (Chau-hu-kap-nga-kham) を長としてアホム王国内に侵入を始め、1780年代には、アホム王国のサディヤ知事であるサディヤ・コワ・ゴハイン (Sadiya Khowa Gohain) を駆逐し、1794年には自らの長をサディヤ・コワ・ゴハインと称し始めたという。アホム王国、後にイギリスも、事実上これを認めることになる。マッケンジー (Mackenzie) によれば、1835年には、230人のモングレイ・カムティ (Moonglay-Khamti) がアッサムに侵入し、1839年には、500人のカムティ族がサディヤのイギリス駐屯所を襲って、アダム・ホワイト (Adam White) 大佐を殺害した [MACKENZIE 1884: 57-60]。しかし英軍側の反撃により、数年間は山地部に

追いやられた。この時、ネオグによれば、多くのカムティ族はボー・カムティに帰ったが、居残ったものは、4つのグループに分かれて、当時のラキンプール・ディストリクトの、チュンボラ (Chunpora)、サイクホワガット (Saikhowaghat)、デマジ (Dhemaji)、ディ克蘭・ナーラヤンプール (Dikrang-Narayanpur) に住んだという。また、1850年には、300人から400人のカムティ族がビルマから移住して住み着いたという [NEOG 1984:94]。

ダルトンによれば、1826年にカムティ・ロン地方をはじめて訪れたウィルコクス (Wilcox) は、アッサム移住の原因は、同地方で50年間に渡って続いていた2大クランの勢力争いによると報告したという [DALTON 1872: 6]。

<19 言語>ワデル (Waddell) は、かつてアホム族を出した種族とカムティ族は同族と見なしてよいとしている [WADDELL 1901: 47]。また、ルバーらは、カムティ族の言葉は、シャン州の言語や、アホム族のそれと似ていると述べている [LEBAR et al. 1964: 190]。バルア (Barua) によれば、アホム族の表音文字は、現在カムティ族が使うその古形であり、カムティ族がアホム族の子孫であるとまでは言い切れないものの、両者は関係が深いという [BARUA 1978: 14]。

<77 宗教的信仰>カムティ族は熱心な仏教徒である。クーパーは、僧(bapu)はビルマの僧界から任命、派遣されていると記録している。また、ネオグによれば、彼らは常にアヴァ (Ava かつてのビルマの都) の仏教界とのつながりを持ち続けてきており、クーパーの記録した当時よりも、その後のビルマ仏教の受容によって、かなり彼らの仏教は変化してきているという。村にはそれぞれ寺院 (vihara) がある。ネオグによると、寺院は木と草葺の屋根でできているが、外装は念入りに彫刻が施され、ビルマのパゴダに似せてあり、内装も整っている。村内の建築物のなかでは高く際だっており、なかには、ビルマふうの屋根を持つものもある。また、僧 (比丘) は教育者でもあり、一般人に仏の教えを説き儀礼を司るほか、読み書きも教えていて、カムティ族の公民の年少者は、その寺小屋に出席せねばならず、そこでは、ビルマ語の文字を用いて、カムティ語とビルマ語の読み書きを習う。そのため、カムティ族の識字率は高い。ダルトンも、カムティ族は、俗人でも大部分の者が自らの言語を読み書きできると記録している。<78 宗教的慣行>ダルトン、ネオグによれば、僧は肉食妻帯せず、毎朝各戸をまわって、その日の食を請う。僧は世襲ではなく、苦行を行って、世を捨てることができるならば、誰でも僧になることができる。僧は首長 (ゴハイン) よりも尊敬されており、僧を養うのは村人の義務だと考えられている。実際、重要な儀式の折には、いつでも彼らが占いによって日時を決定する。僧はまた、優れた彫刻師で

もあり、木、象牙、骨などに、ヘビ、龍などを彫るのが得意である。

<76 死>ダルトンによれば、カムティ族は、村から離れたところに墓地を持っている。墳丘状の土盛りの上に墓石がおかれており、この形式のものは、アホム族のものと同じであるという。また、セン (Sen) によれば、死体は火葬にされるが、土葬にするときもあるという [SEN 1986: 36]。

<788 儀礼>儀礼については、ダルトンによれば、年に2回の宗教的儀式がある。それぞれ、仏陀の誕生と死に関わるものである。これらの儀式では、男の子が女の子の様に装い、踊りを踊る。仏陀の出産が演じられるときには、横たわった者の衣の下から産声が聞こえ、子犬が取り出されて赤ん坊同様に扱われるという。ネオグによれば、その他に、サムケン (samkyen) と呼ばれる儀式がある。この時には、寺院の仏像を持ち出して、水をかけて洗う。

<58 婚姻>結婚については、クーパーとネオグによれば、どの村にも両端に大きな建物があり、若者宿 (deka-cang) と娘宿 (gabharu-cang) になっている。娘は、初潮をみれば娘宿を寝所として、結婚するまでそれ以外のところで泊まることはしない。昼間は生家に帰って働く。若者の場合も同じである。娘宿は神聖であり、男が入ることは許されない。若者に結婚したい相手ができると、彼は双方の親に同意を求めて、それが得られれば、嫁を入居させる家を用意することができるようになってから求婚してよい。求婚期は長いのが普通で、朝夕の逢瀬を楽しむ光景がよく見られる。ダルトンによれば、カムティ族の男は、複数の妻をもってもよいが、正妻に主権がある。女たちを他人から特別に隔離するという意識はないので、女たちはよくバザールに出てきている。センによれば、結婚は、ふつう、親が決める。離婚は少なく、未亡人の再婚は認められている。また、主食はコメであり、僧でないものは、鶏肉や魚肉を食べる [SEN 1986: 36]。

<24 農業><43 交換><433 生産と供給>クーパーによれば、カムティ族は熱心な交易民であり、また、北アッサムの良質のコメと野菜、とくにジャガイモは、彼らの勤勉さの賜である。土地の領主は首長であるが、村全体の共同作業で土地は耕される。首長にも自分の割当分がある。そして収穫時には、耕作に参加した働き手の数にあわせて、家ごとに平等に分配されるのである。奴隷を用いるのは慣例になっており、裕福なものは決して労働しない。共有地の他に、個々人で耕作する土地も少しある。穀物の貯蔵には公共の倉庫があるが、川の堤に建てられている。これは、火事の際に消火のための水を得るためである。倉庫は首長の部下である役人(収税吏)が管理していて、毎朝各戸にコメを配分する。また、ここからマーケットに送られる穀物は、

首長が計算して、各戸に平等に配分する。家畜としては、犁耕、および、ミシュミ族との交易のための駄獣として使うために、スイギュウ、ウシを飼っており、そのほかに、ブタ、イヌ、ニワトリがいる。公民で小作の仕事をする男はほとんどない。カムティ族は漁師としても優れており、急流で筏を扱う技術には並ぶものがない。若者たちは自分のクランを守る兵士でもあり、また、アッサム人と交易する商人でもある。年をとると、村の相談役として首長を補佐する。

<32 原材料の加工>ダルトンによれば、首長は工芸をしなければならない。金、銀、鉄を使って、武器や、妻の装飾品を作るほか、スイギュウ、サイの角も彫る。また、銀メッキや漆を塗る技術も持っている。女は刺繍が上手であり、交易のための刺繍入りのバックやヘアバンドを作る。男たちは山に入っても強く、すばやくタケを使って筏を作り上げたり、鍋がなくともタケの節目を上手に利用して飯を炊く技術を持っている。

<34 建造物>家屋は、クーパーによれば、ビルマにおけるのと同様に、すべてタケの柱の上に建てられ、梯子で入ようになっている。床と壁は、編んだタケからなっていて、屋根は草で葺かれており、軒は床の高さまで延びている。内部は多くの部屋に分かれており、客室は端にあって、外はバルコニーのある開けた空間になっている。個々の部屋には移動できる火床があって、自由に動かせるようになっている。その火床の付属物として、荒っぽい造りの木の寝椅子があり、それには、女たちが得意とする刺繍の入った布がかぶせられている。食器には漆を塗ったおわんを用いる。調理は女のいる部屋で行われる。

<142 身体諸形質の情報>クーパーとダルトンによれば、カムティ族は、肌の白さとその体格の良さにおいて、周辺の部族とは際だっている。しかし、ダルトンによれば、カムティ族は他のシャン族と比較すればむしろ色ぐろであり、ラオ人などよりもモンゴロイドらしい特徴がよく出ている。アッサムに侵入して以後、しばしばアッサム人の女を妻として混血がすすんでいる。

<29 服装>女の場合、上着は、長袖の白い綿か絹であり、胸のところでボタンで止めるようになってる。下半身には折り目のついたスカートのようなものを身に着けており、くるぶし迄の長さがある。前面には開くところがある。髪の毛は巻き上げて頭の上のところで大きな塊にして飾りのついた大きな銀のピンで留めている。耳には金や銀の円盤や円筒状のコハクをつけていて、耳たぶは完全に割れている。腕輪は重たい金や銀の輪である。この金銀は、ビルマとの境界の山地の中にある金鉱、銀鉱から採られたもので、金銀細工は、村の金銀細工師である首長たちの独占となっていて、

彼らの巨大な富のもととなっている。男の服装は、上着は白や青の綿で作られており、袖は長く、手首の所で折り返している。胸のところはボタンで留めるようになっている。下半身には、色のついたチェック地の布を腰に巻き付けて、両足の間を絞っている。髪の毛は頭の上に結び目を作って留めて、その上から白い布をターバンのように縛りつけ、両端は額の上に突き出させている。武器としては、カミソリのように鋭く、硬く焼き入れした蛮刀（刃の長さ約45センチメートル、巾5センチメートル）を鞘に入れて携えている。この鋼は、北ビルマのカムティ族の土地で作られた物である。

<62 コミュニティ>クーパーによれば、カムティ族は無数のクランに分かれており、個々のクランは村を持ち、首長を戴いている。村の大きさはそのクランの勢力によってきまる。

（月原敏博）

ファキヤール (Phakiyal); タイ・フェイク (Tai-phake)

ファキヤール族はタイ系民族のうちのグレート・タイと呼ばれるグループに属するといわれている少数の部族である。ビルマの王アラウンパヤ (Alaungpaya) が、フコン (Hukawng) 谷のムンカン (Mungkang) 地方を征服した直後、1760年頃に、ファキヤール族はそのムンカン地方からアッサムに入ったといわれている [NEOG 1984: 85]。現在、指定部族には入っていないが、結束の強いコミュニティを維持し、集団としてのまとまった意識、伝統をまもっているようであるので、ここに取り上げる。タークル (Thakur) による人類学的な調査報告がなされているので、以下では、明記しない限り、すべてそれに従って記述することにする [THAKUR 1982]。

<167 移入と移出>ネオグ (Neog) によれば、ファキヤール族は、アッサムに入ると、まずブリ・ディヒン (Buri-Dihing) 川に住み着いたが、アホム族によって追われ、ジョルハット (Jorhat) 付近に移った。もともとアッサムに入った時には150戸があったといわれている。1848年には戸数は50戸くらいに減っており、1872年と1881年センサスではファキヤール族の項目は消えているが、ここではカムティ族のなかに入れられていたのであろう。1891年では、人口565人が数えられているが、1911年には506人となっている。主要村落は、ナハールカティヤ (Naharkatiya) 近郊のナム・ファキヤール (Nam-phakiyal) とティパム・ファキヤール (Tipam-phakiyal)、マルゲリタ (Margherita) 近郊のバルファキヤール (Barphakiyal) とマンマウ (Manmau)、レド (Ledo) 近郊のナングライ (Nanglai) とラング (Lang) である [NEOG 1984: 85-86]。

<131 位置>タークルが調査したのは、ナム・フェイク (Nam-phake)、ティパム・フェイク (Tipam-phake) の2村であり、共にディブルガル・ディストリクト (Dibrugarh District) のブリ・ディヒン川畔にある。

<628 コミュニティ相互の関係>タークルは、ファキヤール族は少数の集団の社会維持の好例であるとしている。その原因としては、仏教に深く帰依した意識、制度、優れた教育システム、経済的に充足していて他村との土地問題などのもめごとのないことのほか、周囲のヒンドゥー教徒 (アッサム人) のカースト意識の存在を指摘している。つまり、ファキヤール族はヒンドゥー文化を嫌悪している訳ではないが、ヒンドゥー教徒は、ファキヤール族を部族 (非ヒンドゥー部族) とみて交わろうとはしないからであると説明している [THAKUR 1982: 237]。

<19 言語><87 教育>ファキヤール族の日常語はタイ語であり、ファキヤール族以外の者としゃべるときにはアッサム語を使う。村の僧はパーリ語を習得していて、

上座部仏教の経典を読む。ファキヤール族の識字率は、アッサム全体の28パーセントに較べて高く、男49パーセント、女43パーセントである。高等学校、大学の教育を受けているものは少なく、男女それぞれ9.2パーセント、1.6パーセントである。子供は幼少の頃から年長者の教えを受け、プ・ソン・ラン (pu son lan) などの本で自分たちの言語を学習するので、成長してから他の社会、宗教を評価するのにバランスのとれた見方ができるようになっている。

<174 歴史の再構成>ファキヤール族の出自に関しては、彼らはマオ (Mao) 族であるといわれる。マオというのはシュウェリ (Shweli) 川をさす。シュウェリ川は6世紀頃に起こった南雲南からのタイ族の移動において、その移動先の中心となったところである。マオ族は、タイ族の古いグループであり、ファキヤール族のもっている伝承は、アホム族が記録している起源説話と同じく、クーンルン (Khunlung) とクーンライ (Khunlai) の話から始まり、クーンルンの子孫であることがあらわされている。アッサムに入る前にはナムチク (Namchik) 川上流のナム・トゥルン (Nam Turung) 川に住んでいた。アッサムと交易してアホム王国の役人と接触し、アホム王の許しを得てディソイ (Disoi) 川に連れてこられた。ビルマ軍がアッサムに侵入した時、ビルマ軍は、すべてのシャン人に対してモガウン (Mogaung) 地方へ戻ることを命令した。ファキヤール族は、ビルマ軍と共にナムチクまで戻ったが、すでに雨期に入っていて山地での旅は不可能となっていた。ビルマ軍はファキヤール族を解放したため、彼らはブリ・ディヒン川畔に戻り、イン・トン (Ing Thong) という村を作った。数年後、一部は川を下り、ジョイプール (Joypur) 付近で1村を作って、これが勢力のあるマン・チョウパ (Man Choupha) 村となった。

<175 記録された歴史>ファキヤール族は家史を記録する伝統をもっており、それによって家系に関する歴史を知ることができる。タークルが調べた家史によれば、モガウン地方内のファキヤール公国 (Mung phake) は、チンドウィン上流のフコン谷にあって、トゥルン (Turung)、タラム (Taram)、シリップ (Silip) という三つの河川が合流するところであったという。

<29 服装>伝統的な服装は、男はルンジー、シャツ、ターバン、白のチャッドル (ショール) であり、女はチン (chin) と呼ばれるガードル、ブラウス、胸にあてる布、白いターバンである。女は、ブラウスを除いて、マーケットから手に入る服を着ることとはない。

<34 建造物>村落環境については、どの村にも寺院 (buddha vihara) がある。高床の建物で、内部はブッダの人生と教えを描く壁画で彩られている。1家族が住家

を1軒だけ持っており、家は高床である。屋根を葺くのにタカウ (takau) の葉を用いるほか、タケ、木を用いて建てている。家の前室は開けたベランダになっている。その奥に廊下と小部屋があり、一番奥の部屋は、台所になっている。奥の部屋の柱には、家の神 (chao fi nam) が住むとされるものがある。小さい仏間もある。どの家にも2つの火床があり、奥の部屋の方にあるものは木枠に取り付けられており、神聖視されている。他家の者は、その部屋に入ることはできない。家に入るには梯子を用いるが、段の数は奇数である。死者を埋葬するために家から運び出す時には偶数とするので、普段は、階段の数を偶数にするのは忌避されている。

<24 農業>農業が主生業である。昔ながらの農業経済が保存されており、近代的な農法は知っていても実行されていない。自然の耕地は肥沃で、必要は充分満たされと考え、化学肥料は土地をいためるとして肥料には牛糞を用いている。大部分の家は冬に収穫する作物であるサリ (sali) 種の水稻栽培によって充分必要な収穫量を得ており、二毛作は行わない。すなわち、ファキヤール族は夏に収穫する稲であるアフ (ahu) 米を栽培せず、それを食べることもない。農事を中心としたファキヤール族の一年は以下の通りである。

<24 農業><788 儀礼>11月から1月にかけて、稲の収穫、脱穀、貯蔵が行われる。稲を刈り始める日は縁起の良い日に行われるが、この日、家の一番高齢の男が、初穂を家に持ち帰る。新米を食べる祭は僧を招待して行われる。稲は根元と穂先のまん中辺りで刈り取られて束にされ、何日間も日干しにされたあとで家に持ち帰られる。脱穀のやり方には2通りある。ひとつは、牛糞を塗って固めた庭に藁を広げて、その上を数時間ウシに歩かせるもので、もう一つは、女が足で揉んで籾を落とす方法である。籾はウィ (wi) といううちわであおいで集める。脱穀された籾は倉に貯蔵される。籾を摺るときは、木でできた臼 (高さ50センチメートルくらいで、中央に杵の先が入る穴があいている) と杵を使う。2月からは農閑期に入る。結婚式や家屋の補修、遠くの縁者を訪ねての旅行などが行われる。女は染色に使うために、森で薪や植物を採ってくる。また、ナハールカティヤ (Naharkatiya) のマーケットに出かけてバッグを売ったりもする。牛糞は雨期に入る前に田畑に小高く積み上げられる。4月に入って雨が降り始めると自然とひろがる。このころ、最初の犂き起こしをする。2回目の犂き起こしは5月で、田の一角が苗床に選ばれる。苗床が準備されるとサカレット (sacaret) という暦の本によって日が決められて、播種がなされる。家長が種籾をまき、牛の頭蓋骨で作られた案山子が苗床の中央に建てられる。田の犂き起こしは6月中ずっと続けられる。雨が十分に降らないときには7月の第2週まで続けられる。15

から20日の間隔をおいて、あわせて3回犁きかえされる。雨がしみこんで、土の表面の9センチメートルほどが泥になると、水を張るための低い畝が作られる。田植えは6月の後半から9月まで続く。10月、11月は、女はナハールカティヤのマーケットで糸を買ってきて機を織ったり、森で根菜、薪、つる植物などを採集する。男は、タロ掘り、マスタードのための畑地準備などをする。11月から12月には再び稲が実り始める。

<437 交換取引>マスタード、タロ (arum)、ジャガイモが商品作物であり、トナ・カポール (tona kapor) という固有のバッグやタカウの葉が交易品として重要であり、かなりの副次収入を得ている。

<294 衣服製造>女は織物が得意であり、自家生産している。伝統的な染め方の技術を持っているが、現在は、マーケットから容易に色糸を入手できるので、あまりやらなくなってきている。

<46 労働>ファキヤール族は日雇い労働を好まず、同じ雇われるなら政府の役人になる方がましだと考えている。

<23 家畜飼養>家畜としては、各戸に最低2頭の去勢牛またはスイギュウを所有している。1958年まではブタ、ニワトリが飼われていたが、ビルマ僧が禁じたため、現在は飼っていない。農繁期には、ほとんどすべての家では、少なくとも1人の使用人を近隣の茶園労働者の中から雇っており、犁耕、去勢牛の世話、田植え、飼料の草刈りなどに使っている。

<224 狩猟とわな猟><226 漁労>動物の殺生は、仏教によって禁じられているため、狩猟は原則として行われないが、ファキヤール族以外の者が殺した獣の肉は、僧を含めて、村人の間で分配されることがある。魚捕りはよく行われる。結婚式で必要な料理であるパソム (pasom) の材料として捕る時などは、共同で漁をする。せき止めて水をかいだして捕る方法のほか、タケで作った各種のワナ、アミなどの漁具を用いることもある。

<262 食事>食べ物については、コメが主食であり、日常的に蒸した御飯を食べる。肉、魚、卵、根菜類、ツタの類などを食べる。ゆでた野菜とマスタード・オイルを好み、儀式用に準備される特別な料理がある。宗教上の理由から飲酒は禁じられている。ミルク、砂糖の入った茶を飲むが、年長者はブラック・ティーを好む。

<263 調味料>マーケットで手に入るスパイスは使わず、塩、トウガラシと、カンサン (kansang)、マカット (makat) という伝統的スパイスを用いる。このほかにも森林から採集するスパイス類は、根菜、ツタの類を含めて種類は多い。タカ、カラスな

どほとんどの鳥、ハチの子も食べる。

<26 食物消費>儀礼と関係する料理には以下のようなものがある。

日干し魚 (panao)	粉にひいて竹筒 (mok) に保存。日持ちするのは1, 2 か月。
日干し肉 (ngu haing)	接客用。日干した肉に塩を加えて竹筒に保存。日持ちするのは1 か月。
魚醬 (pasom)	結婚の時、生魚2キログラムと飯1キログラムに塩を加えて竹筒に保存。日持ちするのは1 か月。
魚肉の肉片を保存 したもの (patek)	魚を小片に切り、塩、ターメリック、伝統的スパイスを加えて竹筒に保存。日持ちするのは1, 2 週間。
野菜の漬物 (pakat som)	冬季に多く作るライ・サグ (lai sag) という野菜を日干しした後、殿粉、塩を加えて竹筒に保存。7日経てから食べる。
ライスケーキ (paing)	偉い客をもてなす時、米粉とグル (gur) を混ぜて塊にしてからタケの葉に包み、それを平たくしてフライパンで焼くと甘いケーキになる。
一種の焼き米 (aakhoi)	
カオテク (khaotek)	仏教のプルニマ (purnima) 祭で欠かせない。アクホイ (aakhoi) 2キログラムを平にしてタケの容器に入れ、糖蜜1キログラムをかけ、塊にして食べる。
カオ・ハイン (khao haing)	前日の冷飯を日干しする。乾ききったら昼の軽食とする。

<515 個人の衛生>環境衛生についての観念には乏しいが、体と衣服は充分清潔といってよく、規則的に入浴している。

<538 文学>民話、民謡はたくさんあり、娯楽であるほか、道徳意識を高めるものとなっている。老人は諺やなぞかけを使って子供たちを教えている。

夢占いについて記したフェファン (fefan) という写本があり、老齢の者はこれを重視する。

<78 宗教的慣行>ほとんどの社会的宗教的活動は家族単位でなされている。社会生活面での特徴をあげれば、ファキヤール族は、客人をよく歓待し、礼儀正しい。僧に対して、合掌して頭を垂れる。村人同士がすれちがう時には必ず挨拶をする。親族

名称は、年齢、世代に気をつかったものである。古い世代は細かな年齢差にこだわることなく決まった名称が当てられており、常に尊敬されている。

<59 家族>家族構成は、大家族制 (joint family) を特徴とする。父親が所有する耕地と屋敷の不動産は、息子の間で均等される。財産分け以後に父が持っている不動産は、死ぬまで共に生活した息子のものとなる。

<626 社会的統制><69 司法>行政機構は単純で、民主的である。村長を長とする長老議会が最高の司法権力を持ち、宗教に関しては、僧侶の命令が絶対である。

<621 コミュニティの構造>社会組織の面から言えば、ファキヤール族の社会は二分して捉えることができる。一つは平民の世俗的社会組織であり、他方は僧侶による宗教的組織である。それぞれのために、係が決められている。しかし、社会的宗教的な機会を除けば、違いは認められず、地位の確保などをめぐっての争いはない。地位は世襲的なものというよりも、特定の知識に明るいか否かによっている。

<67 法>ファキヤール族の道徳的意識の高さは顕著である。最も特徴的なのは、タマチャット (thamachat) という成文律があることであり、法の侵犯に関する意識は高い。地元の犯罪は、これにそって裁決される。

<58 婚姻>結婚する年齢は、男は20から25歳、女は16から20歳である。単婚であるが、男に養う能力さえあれば、複婚は可能である。ファキヤール族には外婚クランがたくさんあり、同一クラン内での結婚は禁じられているが、結婚時にはクラン間の差別はほとんどない。クラン名は、自然物や先祖の性格から名付けられている。<583 婚姻の様式>結婚にはフォーマルとインフォーマルの二種類があり、前者の場合、事細かな儀式が行われる。後者の方が数は多い。インフォーマルな結婚が、妻や子供に社会的な差別、疎外をもたらすことはない。<582 婚姻規制>ファキヤール族は他のカースト、部族と通婚はしない。カムティ、アイタニヤ、トゥルン、カームヤーンといった同じタイ系諸部族とは、宗教的にたいへん似ており、僧侶も行き来しているが、それらの部族との通婚もほとんどない。レヴィレート婚、ソロレート婚は認められているが両村には一例もなく、交叉イトコ婚が行われている。婚資はおよそ140ルピーで、インフォーマルな結婚では280ルピーまで上がることがある。<586 婚姻の解消>離婚はよくあることではない。夫婦のどちらかが村長 (gaonbura) に離婚願いを出すと、村長は長老会議を開いて裁決する。この裁決は最終決定であり、その承認を得てのみ、離婚は成立する。

<771 宗教の一般的特性>ファキヤール族は、熱心な仏教徒である。宗教事に関しては僧侶が最高の権威をもっており、村人の尊敬を集めている。<788 儀礼>仏教信

仰に関わる儀式は年に6回あり、決まった日に行われる。村の寺院はあらゆる儀式が執り行われる場所となっている。＜79 聖職者組織＞ビルマ、タイ、スリランカからの僧も訪れるために、ファキヤール族はこれらの国の出来事や仏教の動向をよく知っている。

＜776 精霊と神々＞ファキヤール族は、仏教以外の宗教的な信仰をもっているが、村人は仏教と混合して矛盾なく捉えている。これに関わる儀式は各家の家長が遂行する。一例として、家長は、柱の一本に宿っている家の神フィナム (finam) を拝む。僧は、非仏教的な儀式には出席しないが、フィナム崇拜の翌日に家長たちが遂行する祈りを統括しており、間接的に、非仏教的な信仰も認めているようである。ファキヤール族は精霊の存在を信じており、悪霊を宥めるための儀式を行うときがある。交感術が行われて、呪文 (mantra) は効き目あるものと信じられている。病気の時に、仏を拝んでも効果のないときには魂を呼び戻す儀式が行われることがある。

＜76 死＞死は自然現象と見なされており、幼児の死は悪霊によって引き起こされるものと考えられている。死者の魂は、ホン・コワン (hon khowan) という儀式で呼び戻せるものと信じている。＜764 葬式＞葬り方によって、自然な死と、不自然な死に分けられる。前者は火葬、後者は土葬である。10歳以下の死は不自然な死とされている。清めの儀式は、前者の場合、死後7日目に行われるが、後者の場合は死の翌日である。この時には、村人を招いて供宴がもたれ、僧にはお礼を渡す。ただし、ネオグによれば、土葬にするのは15歳以下の死者の場合で、それ以上の者は火葬にするという [Neog 1984: 85-86]。僧の葬り方は特別で、棺桶に一年ほど保たれた後に大きな祭礼がもたれて、他村の者も招いて儀式的に火葬が行われる。

(月原敏博)

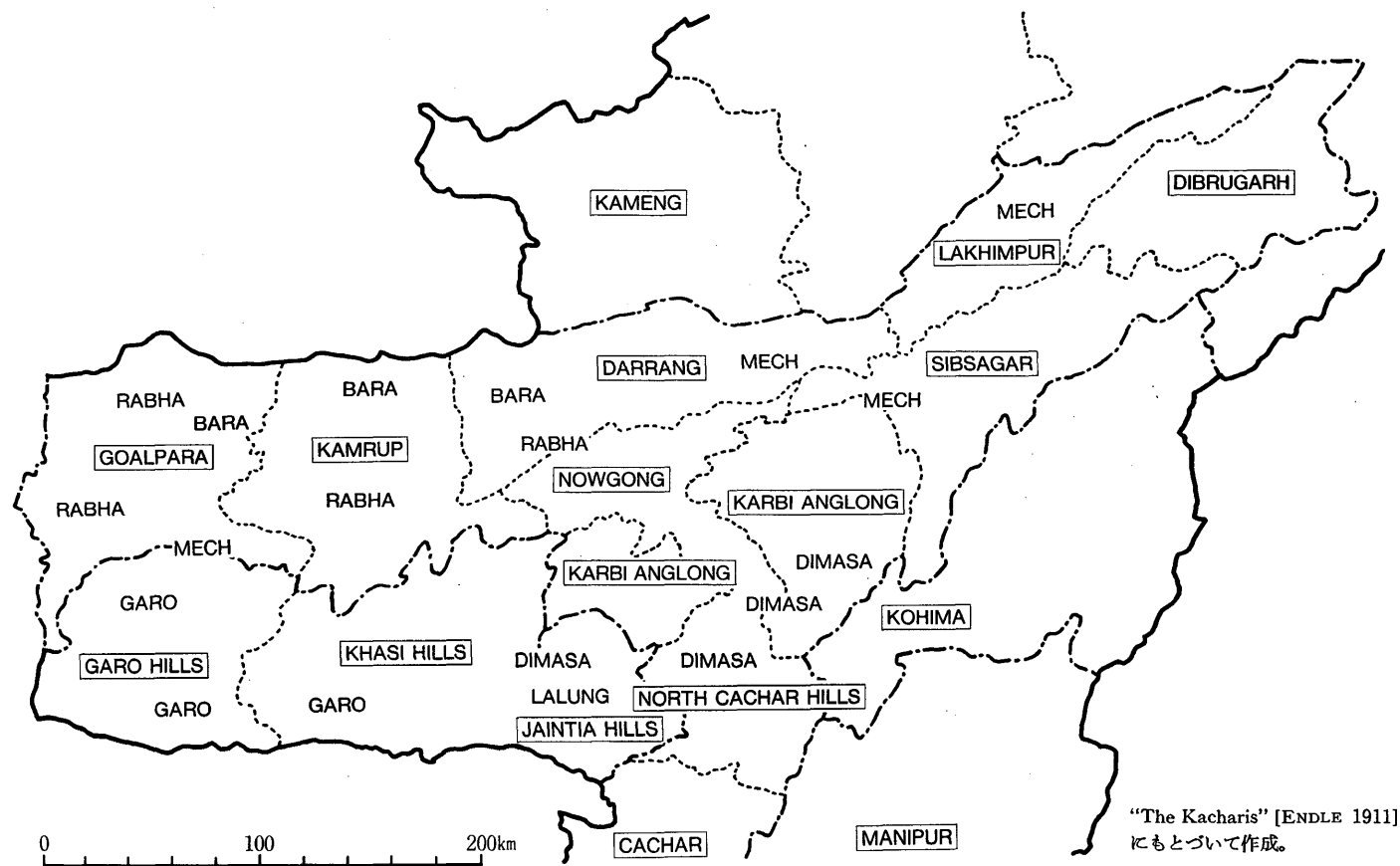


図 9 カチャリ諸族の分布

カチャリ族概説

<101 アイデンティフィケーション>ブラマプトラ川中流域, および周辺山麓の広範な地域に住むモンゴロイド系の民族を一般にカチャリと総称している。「カチャリ (Kachari, Cachar)」という名称は外部から与えられた名称で, その語源をたどることは困難であるが, サンスクリット語で「国境地方」という意味を持つ。エンドルは, カチャリ族をブラマプトラ川を境に南北に大きく分け, 以下の部族に分類した [ENDLE 1911: 5]。

1 北方グループ

(名 称)

(居住地)

- | | |
|--|--|
| 1 バラ (カチャリ)
(Bara, Kachari) | 西ダラン (West Darrang), カチャリ・ドゥアール (Kachari Duars) および北カムルップ (North Kamrup) |
| 2 ラブハ (トラテ)
(Rabha, Tolate) | ゴアルパラ (Goalpara) |
| 3 メチ (Mech) | ゴアルパラ (Goalpara) |
| 4 ディマール (Dhimal) | 北東ベンガル (North East Bengal) |
| 5 クーチ (Koch) | ジャルパイグリ (Jalpaiguri) から北西ダラン (North-West Darrang) までの北方辺境地域 |
| 6 ソラニミヤ
(Soranimiya) | マンガルダイ・サブ・ディビジョン (Mangaldai Sub-division) のみ |
| 7 マハイヤ (Mahaiya)
プリガリヤ
(Phulgariya)
サラニヤ (Saraniya) | } 西ダランに点在 |

2 南方グループ

- | | |
|--------------------|--|
| 1 ディマサ (Dimasa) | 北カチャリ山地 (North Cachar Hills) |
| 2 ホジャイ (Hojai) | 北カチャリ山地とノウゴン (Nowgong) |
| 3 ラルン (Lalung) | 南西ノウゴン (South-west Nowgong) と隣接したディストリクト |
| 4 ガロ (Garo) | ガロ山地 (Garo Hills) とその山麓 |
| 5 ハジョン
(Hajong) | ガロ山地の南方斜面とそれに隣接した平原 |

6 ヒル・ティッペラ トリプラ (Tripura)
(Hill Tippera)

<19 言語>エンドルの分類は、言語的側面からグレート・ボド・グループを構成するものとして、チベット・ビルマ語族ボド・ナガ語群のボド群の諸部族を一括してカチャリ族と総称したもので、言語の共通性以外の歴史的な民族移動等の出自に関する裏付けがあるものではない。さらにヒル・ティッペラ (トリプラ) の諸族は歴史的にもカチャリ王国との関わりは明瞭ではなく、またリアン (Riang) 族などのようにトリプラ (Tripura) 地方に移住したのち、トリプラ王国に組み込まれる過程で彼らの部族固有の言語を捨て、ボド語を話すにいたった部族もある。このようにボド語を使用することのみでカチャリ族を分類することには問題があろう。

インドのセンサス (Census of India) においても、カチャリ族の分類はかなり不明瞭で、ディマサ・カチャリ族、ボロ・カチャリ族と同列に「ソンワルを含むカチャリ族 (Kachari including Sonwal)」という分類があり、かなりの混乱が見られる。

エンドルの分類以外には、ダスのようにアッサム谷の部族をカチャリ族とガロ族に分けて分類しているものもある [Das 1986]。さらにマジョンダのようにカチャリ族という範疇にはまったく言及せず、個々の部族を単独でとらえているものもある [MAJUMDAR 1979]。

以上のように、カチャリ族と総称される諸部族がどの範囲におよぶかについてはまだ定説はない。またはたして「カチャリ」という名称が妥当であるかどうかについても疑問が残る。

<11 参考文献>カチャリ族に関する信頼しうる歴史文献は非常に乏しい。彼らの過去の歴史に関する唯一信頼できる歴史記述は主としてアホム (Ahom) の歴史を記した14世紀から15世紀までのブランジ (buranji) のみで、これにおいてもカチャリ王国とアホム王国間の戦争の記述に限られているため断片的なものでしかない。

ブラマプトラ河谷およびそれより西に隣接する諸地方の川の名称がボド語で「水」の意を示す di あるいは ti という接頭語を多く用いられていることから (例, Dibur, Dikhu, Dimula など), アホムの侵入以前, かなり広範にボド語を使用する部族がこの地方に占めていたと推察される。またカーマルルーパ (Kamarupa) 王国はカチャリの一部族によってつくられたとも考えられている [Gait 1905: 299]。

<175 記録された歴史>カチャリ王国についての記述を追うと、13世紀頃にはブラマプトラ川南岸の首都ディマプール (Dimapur) を中心にデクー川からカラン川にかけてカチャリ王国が勢力をもっていた。1490年までデクー川がアホム王国との国境

であった。1490年以降アホム王国と衝突し、1536年アホムの侵入によってディマプールの追われ、マイボン (Maibong) に新都を建設した。ディマプールの遺跡は煉瓦の城壁をもち、回教建築のベンガル様式を取り入れるなどアホム王国にくらべかなり高い文明を誇っていた。16世紀当時のカチャリ王国の支配圏は現在のノウゴン・ディストリクト (Nowgong District)、北カチャール山地 (North Cachar Hills) およびカチャール・ディストリクト (Cachar District) の一部であった。マイボンに移って以降もジャインティア (Jaintia) 族の侵入をうけたり、アホム王国との衝突もあり、1750年マイボンからさらにカスプール (Khaspur) に都を移さねばならなかった。

カチャリ王国のヒンドゥー教化は18世紀ごろから始まった。そして1790年クリシュナ・チャンドラ (Krishna Chandra) 王、その弟ゴービンド・チャンドラ (Gobind Chandra) によって改宗令が出され、彼らはクシャトリア・カーストに属するヒンドゥー教徒であると声明した。

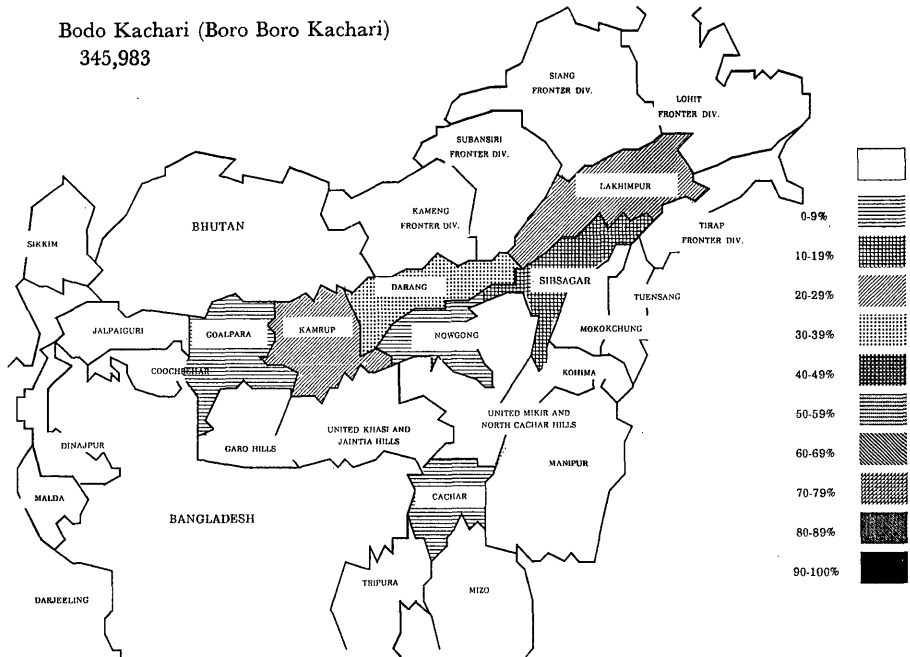
クリシュナ・チャンドラ王の後、ゴービンド・チャンドラが王位を継承したが、マニプール人、ビルマ人の侵入を受けて窮地に陥り、1829年マニプール人の刺客によって殺された。彼は後継者を有していなかったため王家が途絶した。そして1832年イギリスに併合統治された [GAIT 1905: 299-310]。

ここで述べたカチャリ王国の歴史はディマサ族の歴史といった方が妥当であろう。ブラマプトラ川流域の諸部族等についての歴史記述はブランジには書かれていないようである。他の諸部族については出自伝承があるのみで、これについても各部族ともいくつかの伝承をもっているのが通例で推測の域をでない。これらの出自伝承については各部族の項で述べる。

現段階では上記の諸部族の関係は十分に解明されてはいない。またカチャリなる言葉は外部から総称として与えられたものであり、その使用にはかなりの限定が必要と思われる。歴史上のカチャリ王国を構成していたボド語諸部族にたいしてカチャリの名称を与えるのがもっとも妥当と思えるが、この場合もカチャリ王国の歴史そのものが不明瞭であるため、限定は非常に困難であろう。

(人見五郎)

ボド・カチャリ (Bodo Kachari), ボロ・カチャリ (Boro Kachari),
ボロ・ボロ・カチャリ (Boro Boro Kachari), ボド (Bodo), バラ (Bara)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<13 地理>ボド・カチャリ族はブラマプトラ (Brahmaputra) 川中流域の北部平原, 西ダラン (West Darrang), ゴアルパラ (Goalpara), カムルップ (Kamrup) 各ディストリクトに居住し, 人口は約35万人である。このブラマプトラ川中流域を占める民族は (1)アッサム人やベンガル人, (2)ボド語を話すカチャリ・グループ, (3)プレーン・ミリ (Plain Miri) 族, (4)山岳地域から近年平野部に移住してきた諸部族の4つに分けることができる。

<11 参考文献>ボド・カチャリ族を単独で扱った文献は少ない。本稿は1961年のセンサス・オブ・インディアのゴアルパラ・ディストリクトのティタグリ (Titaguri) 村に関する村落調査レポートに依拠している [PAKYNTEIN 1965]。

<131 位置>ティタグリ村は周辺の平野部からわずかに高いところに立地しており, 村の東側に川が流れている。ゴアルパラは森林資源に恵まれた地域ではあるが, 村の周辺は水田などの耕地となっており, 森林地帯までは5キロメートルほど離れている。集落戸数は49戸で比較的大きな村に属し, 全員ボド・カチャリ族である

[PAKYNTEIN 1965: 1-2]。

＜19 言語＞言語は周辺のアッサム人と接することが多いため、必要に応じてアッサム語を話す。部族内ではチベット・ビルマ語族に属するボド語を話す。上記のセンサスによると部族のアイデンティティーを確立するためボド語を積極的に使うという動きがあり、小学校教育においてもボド語が母語として教えられている [PAKYNTEIN 1965: 5-6]。

＜342 住宅＞一般的な家屋は一家族に一軒の様式ではなく、ひとつの敷地にいくつかの家屋が建てられている。これは他の世代と一緒に寝起きすることを好まないの。各世代ごとに家が建てられているのである。そのほか台所、穀物倉庫、家畜小屋などの建物が別々に建てられている。トイレはない。家の構造は壁はタケやアシを骨組みにして泥の漆喰が塗られ、屋根はタケなどでふかれている。各家の間取りはひとつ部屋ないし二間か三間で簡素である [PAKYNTEIN 1965: 6-8]。

＜77 宗教的信仰＞住民の宗教はふたつのグループに分かれており、ひとつは土着宗教とヒンドゥー教とがミックスされたもので、これが多数を占める。このグループの宗教は土着の神をヒンドゥー教の神になぞらえて信仰し、また自然災害や病、不幸をもたらす悪霊の存在も信じている。他はブラフマ・サマジ (Brahma Samaj) の改宗派の影響を受けたヒンドゥー教グループである [PAKYNTEIN 1965: 5]。

＜24 農業＞生業は農業が中心である。焼畑は行われず、平地での稲作が主に行われている。稲作は水稻と陸稲の二毛作である。5月から6月に苗床で稲を育苗し、7月から田植が行われる。田植は苗を4株ないしは5株ずつ植えていく。収穫は9月からはじまり、稲穂だけを刈り取る。刈り取った穂は日にさらして乾燥させる。陸稲は2月頃から耕起がはじまり、播種の後さらに耕起して種子と土壌を混ぜ合わせる。15センチメートルくらいに成長した後、除草のための中耕が行われ、6月ごろ収穫される。その他の作物としてはジャガイモ、オイル・シード、マスタード、マメ類、タバコ、ジュートなどで、ジュート以外は自家消費用である。＜311 土地利用＞大部分の生活を農業に依存しているのであるが、多くの村人は自作地を持たず、農業労働者として働いており、生活はかなり苦しい [PAKYNTEIN 1965: 17-24]。

＜23 家畜飼養＞主な家畜はウシ、ブタ、ニワトリで、ヒツジ、ヤギは少ない。ウシ小作も行なわれている。＜226 漁労＞漁は冬季、タケで編んだ漁具をもちいて周辺の河川で行なわれる。＜286 織布＞家内工業はどの家にも綿の機織機があり、女性の仕事となっている [PAKYNTEIN 1965: 17-24]。

＜26 食物消費＞食事は簡素で、主な食べ物はコメである。また牛肉以外のあらゆる

る肉類が食される。コメをゆがくとき、ときには野菜、豆なども加えられる。野菜の料理には少量の塩、カラシ油のほか、燃やしたバナナや炉の燃えがらを水でろ過して作った炭酸カルシウムが加えられる。魚の保存はタケの網に載せ、炉の上の天井から吊して乾燥させる。乾燥した魚は砕いてタケの筒に入れ、保存される。茶は朝夕や客のもてなしに飲用される。茶受けとして米粉を蒸して作られた菓子 (pitha) が食べられる。酒はズー (zu) とよばれ、コメから作られる。ズーはボド族の社会生活のなかで重要な飲物である。食事と酒づくりはおもに女性の仕事であるが、祭など客をもてなす場合は男性も料理に参加する。もてなしの時の食器にはバナナの葉が用いられる [PAKYNTEIN 1965: 9-10]。

<59 家族>家族は夫婦と子供の核家族が基本である。住民の大多数は父系家族であるが、母系家族も見られる。一夫一妻が一般的であるが、まれに一夫多妻がある。一妻多夫は存在しない。夫や父が家族の中でいちばん権威を持つ。クランの名は父から子に伝えられる [PAKYNTEIN 1965: 11]。

<58 婚姻>結婚は協議結婚がおもで、略奪結婚などはない。養子縁組も行なわれている。結婚の儀式は、まず若者の父が娘の父を訪問する。この時は双方が知り合いになるためのもので、結婚の申し込みはなされない。そのあとアチャン・タプナイ (achan-thapnai) という結婚申し込みの儀式が行なわれる。これは若者の母が村の女性たちと娘の家を訪れる。このとき銀の腕輪や硬貨、コメなどが入った包みを娘の家の屋根の上に置く。これが正式な結婚の申し込みである。この日から7日過ぎても包みが返されない場合は結婚申し込みが受諾されたことになり、7日以内に返却されたら拒否されたことになる。受諾された場合は若者の父が村の男たちと娘の家を訪れる [PAKYNTEIN 1965: 11]。

<844 出産>女性は妊娠中も8カ月までは通常の仕事を行なう。それ以降は食事の用意以外の仕事から解放される。妊婦は死者にふれることと、死者の安置してある部屋に入ることが許されない以外は行動の制限はない。妊娠にともなう宗教的儀式はない。出産後7日間は母親と子供は家の外にでられない。7日目にウンドリナ (undorina) という清めの儀式が行なわれる。この儀式では母子の身体を清め、子どもの命名が行われる。またこの日、出産を手伝った者をもてなす [PAKYNTEIN 1965: 13-14]。

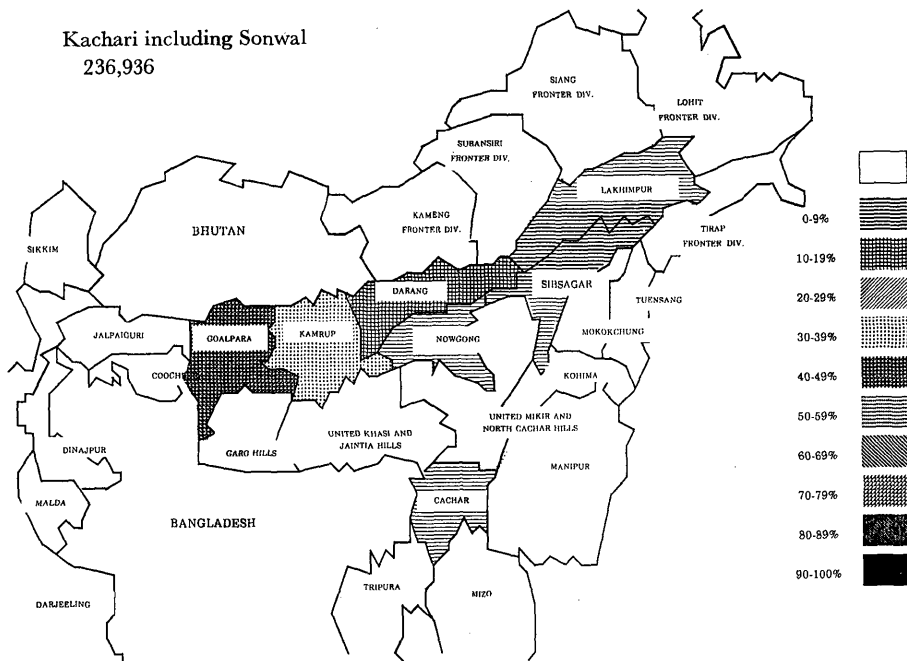
<764 葬式>死者がでると、ただちに死者を清め、ハトカニワトリの肉でつくったカリーが供えられる。葬制は一般に土葬であるが、身分の高いものは火葬にふされる。土葬の場合、埋葬地につくと、まず神から土地を買うために硬貨が投げられる。つき

に穴を掘る際、死者が男性の場合は5回、女性の場合は7回、親戚、友人がその穴の周りを回る。埋葬地に死者を横たえたあと死者の霊が呼吸できるようにするため、死者の鼻に地面にとどく長さの中空のアシを立てかけて土をかぶせる。火葬の場合は、5人の男性と7人の女性が木を積んで火葬の準備を行う。死者をその上に載せ、土葬の場合と同じようにその周りを回る。火葬された灰はそのまま四隅に木を立て布で覆われる [PAKYNTEIN 1965: 13-14]。

<56 社会成層>村は、ガオンブラ (gaonbura) と呼ばれる首長を中心としてまとめられている。村の意志決定はミール (meal) と呼ばれる寄り合いによって決定される。ミールが必要な場合、ガオンブラの下につくハルマージ (halmaji) が伝令として各家の家長を召集する。ミールは男性だけで構成され、女性は傍聴はできるが、議論には参加できない [PAKYNTEIN 1965: 33-34]。

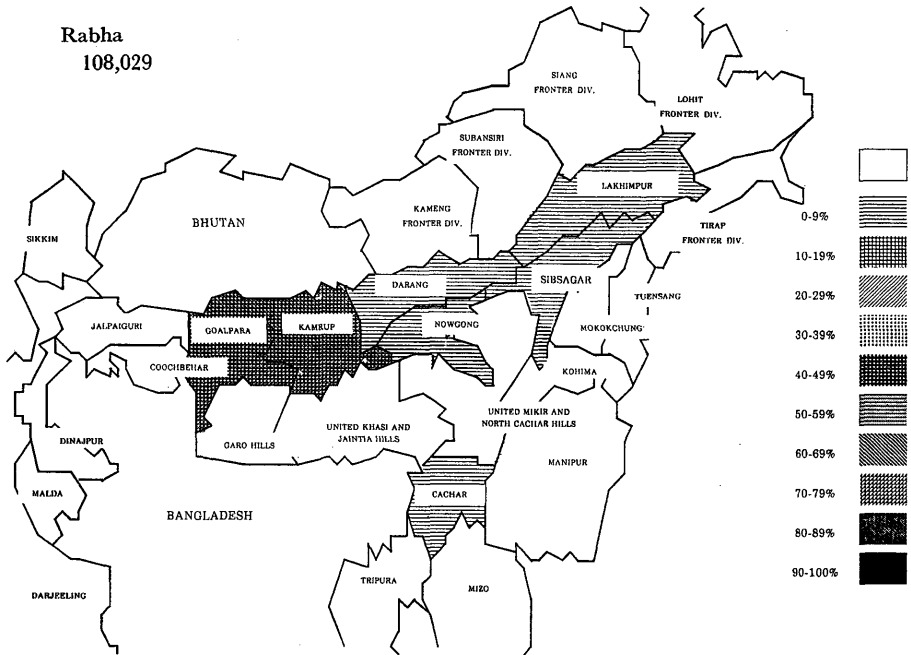
(人見五郎)

(参考資料) センサスでのカチャリ族の分類に重複がみられるので参考として次の地図を掲載する。



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

ラブハ (Rabha), トラテ (Tolate), ダティヤル・カチャリ (Datiyal Kachari)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<13 地理> ラブハ族はブラマプトラ (Brahmaputra) 川中流域のゴアルパラ (Goalpara), カムラップ (Kamrup), ダラン (Darrang), ガロ山地 (Garo-Hills), メガラヤ (Meghalaya) の平野部に居住する部族である。<61 親族集団> ラブハは以下の5つのサブ・トライブに分けることができる。第1はランダニ (Rangdani), 第2はマイトリ (Maitori), 第3はパティ (Pati), 第4はダホリ (Dahori), 第5はコーチャ (Kocha) である。

この5つのサブ・トライブのうち、ランダニ、マイトリ、パティは上流階層とみなされ、相互の婚姻関係は認められるが、ダホリ、コーチャは他のサブ・トライブとの婚姻は許されていない [SAIKA 1970: 7]。

<19 言語> ラブハ族の言語は他のカチャリ・グループと同じくチベット・ビルマ語族のボド語を話す。ラブハ族の固有の方言はもはやなくなっており、他のボド語グループが部族内では固有の方言で話されているのとは異なり、アッサム語のみを使用している [SAIKA 1970: 8]。

<173 口碑・伝説による歴史> ラブハ族の出自に関しては依然不明である。1961

年のインド・センサスにおける村落調査では、低地アッサムにおいてはラブハ族はガロ族から派生したものと考えられており、またカムラップ、ダランではカチャリ族のヒンドゥー化したものと考えられている [SAIKA 1970: 6]。マジョンダによるとランダニ・ラブハ族の出自伝承は、自らの起源はガロ山地にあり、ガロ族のサブ・トライブ、アトン (Atong) 族と血族関係があったが、その後ガロ族との衝突によって平野部に降りてきたと記述している [MAJUMDAR & Sharma 1979: 42]。

＜361 集落形態＞ラブハ族は必ずしも単独で集落を構成するわけではなく、他の部族と混住して集落を構成する場合もある。先のインド・センサスの村落調査ではゴアルパラ地方のカーラ (Khara) 村は、ラブハ族、カチャリ族 (Kachari)、クーチ族 (Koch) の三部族で構成されている [SAIKA 1970: 7]。

＜342 住宅＞ラブハ族の住居は、アッサム平野で一般的である敷地内に3ないし4つの家屋を建てる構造である。そのほか家畜小屋、穀物倉庫などが別にもうけられる。屋根はタケや木で葺き、壁はタケの骨組みに泥と牛フンで漆喰をする。窓はなく、換気のための小さい穴があいているだけである。敷地はタケなどで塀がはられ、塀の外側に堀が作られている [SAIKA 1970: 10]。

＜24 農業＞ラブハ族の生業は農業である。1951年まではザミンダール制の支配下におかれていたが、以後村人は自作農化している。稲作にはアフ (ahu) と呼ばれる陸稲、サリ (sali) と呼ばれる水稻、バオ・ダン (bao-dhan) と呼ばれる浮稲の三種の種類がある。陸稲は小高い丘で栽培され、2月頃から耕起が始まり、3月播種、7月頃収穫する。水稻は低湿地で栽培され、集落の近くで苗床をつくり、5月頃苗が30センチメートルぐらいになったところで田植えが行なわれる。収穫は12月頃である。浮稲は雨期の間、洪水などで稲が完熟するまで灌水している場所で栽培され、5月頃播種、12月頃収穫される。陸稲にはボギ (bogi)、ランガ (ranga) の2品種、水稻にもラヒ (lahi)、バル (bar) の2品種があり、これらは早稲、晩生、品質、収量などにおいて異なる。

収穫されたコメは直接穀物倉庫に運ばれるか、ドゥリ (duli) と呼ばれるタケで編んだ表面に粘土と牛フンを塗り付けた容器に保存される。

稲作のほかに雑穀、カラシナ、ジュート、ジャガイモ、大根などの野菜類、タバコなどが作られる。バナナ、キンマ、タケはどの家にもある [SAIKA 1970: 39-59]。

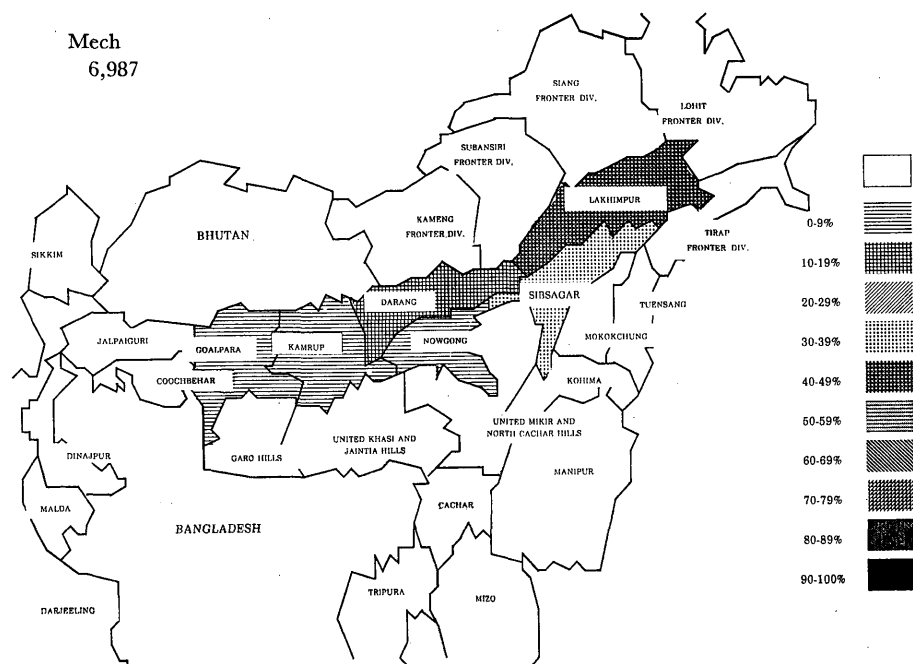
＜23 家畜飼養＞家畜はスイギュウ、ウシ、ブタ、ヤギ、アヒル、ニワトリ、ハトなどが飼われている。スイギュウには畜舎はないが、他の家畜には別々の畜舎がもうけられている。飼料は河川沿いの草地を利用するほか、雑穀、コメクズ、稲わらなど

が与えられる。ブタにはライス・ビールの酒粕なども与えられる。家畜育種，病理などに関する知識は低く，搾乳量なども低く，生産性は悪い [SAIKA 1970: 40, 56]。

<226 漁労>漁業は冬の間に行なわれる。魚をとることは日々の食事に彩りをそえる意味のほかに，娯楽としても楽しめる。漁はグループで行なわれる。採り方は手づかみから様々な道具を使うものまであり，それらの道具はタケなどで自作するもののほか，漁網などはマーケットで購入される [SAIKA 1970: 57]。

(人見五郎)

メチ (Mech), ミシュ (Mish)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<13 地理>ブラマプトラ (Brahmaputra) 川中流域の少数部族にメチ族がある。いわゆるカチャリ族の一員と考えられ、以前はかなりの大きな部族であったと推定されるが、なんらかの大きな変化があり、アッサムでは非常に少数になってしまった。

ゴアルパラ (Goalpara) の都市メチパラ (Mechpara) は明らかにメチ族と関連している。また現在メチ族はアッサムのほか、ネパール、シッキム、ブータンにも居住している [DALTON 1872: 88]。

<173 口碑・伝説による歴史>アッサムにおいては非常に少数になっていることと、さらにクーチ (Kochi) 族との異族結婚により部族としての区分はいっそう不明瞭になっている。

メチ族の起源は不明であるが、ガロ (Garo) 族の一支族マチ (Machi) との関連も考えられる。またメチ族は、自らをミシュ (Mish) と称している [WADDELL 1901: 57]。

<24 農業>メチ族は固定した集落に定着することはまれで、処女林をもとめて移動し、そこで焼畑を行なっている。<26 食物消費>ヒンドゥー教化する前はゾウの

肉以外の食物のタブーはなかった。

<77 宗教的信仰>メチ族は最高神としてシジュ (Sij) を崇拝する [DALTON 1872: 89]。

(人見五郎)

ディマサ (Dimasa, Dima-Fisa), ディマサ・カチャリ (Dimasa Kachari)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

ディマ・フィサ (Dima-Fisa 大河の息子) と自称する一族をディマサ族, ディマサ・カチャリ族という。一般にディマサ族はカチャリ王国を構成する一部族とされている。<142 身体諸形質の情報>身体的特徴はモンゴロイド系の特徴を有し, 身長は160センチメートルぐらいで髪は毛はややウェーブしている [Das 1978: 18]。

<131 位置>ディマサ族がもっとも多く居住している地域は北カチャル山地 (North Kachar Hills) とミキール山地 (Mikir Hills) の両地域で, そのほかガロ山地 (Garo Hills), カーシ・アンド・ジャインティア山地 (The United Khasi and Jaintia Hills), ミゾ山地 (Mizo Hills) にも若干分布している。人口はダスによると約21万人である [Das 1978: 16]。

<13 地理>ディマサ族が居住する北カチャル山地, ミキール山地は, 緩やかな斜面を持つ標高 1,000 m ほどの丘陵地がうねるようにつづいている。これらの丘陵地には露岩が少なく, 全体が厚い森林に覆われている。気候は年間を通じて湿潤である [GANDA 1978: 10]。

<19 言語>言語はチベット・ビルマ語族ボド・ナガ語群ボド語系に属する。しかし

近年アッサム語の浸透でディマサ固有の言語はかなり崩れてきている [Das 1978: 6]。

<36 集落>ディマサ族の集落は、これら丘陵地を流れる河川にそって点在する。これらの集落はすべてディマサ族によって占められており、他部族との混住はない。

<342 住宅>家屋はタケでできており、窓や煙突はなく、中は2部屋に分かれている [Das 1978: 47]。

<24 農業>もっとも重要な生業は農業である。土地利用は山間斜面の焼畑、平坦地での畑作、河川沿いでの水田の3つのタイプに分けられる。主な作物はコメ、綿、カラシ、ゴマなどで、ほとんど自給用で換金作物はあまり作られない。多くの場合、焼畑は村人の共同作業によって行われるが、ディマサ族は家族指向が強く、焼畑の用地は村の合議により各家族単位に割り当てられ、ほとんど共同作業は行われない。また割り当てられる区画面積は家族数、働き手の人数に応じて決定される。焼畑は数年行われたあと10年から12年間休耕される。畑作地と水田は所有者が決まっている。農作業は男子の伐採作業を除いて男女の別なく行われている [Das 1978: 19-25]。

<23 家畜飼養>家畜飼養も重要な生業であり、ニワトリ、ブタ、ヒツジが食用と供儀のために飼養され、また乳用、役用のためにウシも飼養されている。<226 漁労>漁業はタケの籠を用いて行われる。<224 狩猟とわな猟>狩猟は大きな網を用いてシカや野ブタなどを囲い捕ることが行われている [Das 1978: 21]。

<286 織布>重要な家内工業として機織りがある。エリ (eri) 種、ムガ (muga) 種のカイコから絹織物が作られる。機織りの技術は女性の必須技術で、機織りができない女性は低く見られる。

<56 社会成層>ディマサ族の村の社会組織はガオンブラ (gaonbura) あるいはクナン (khunang) と呼ばれる首長のもとに以下のような村役が伝統的に構成されていた。

長老グループ：ガオンブラ (gaonbura, クナン khunang)ーディレク (dilek)ーダウラフ (daurahu)ーハバイサガオ (habaisagao)ーパライ (pharai)

青年グループ：マントリ (mantori)ーハンセオブク (hangseobukhu)ージャライロ (jalairo)

長老グループは個人の資質、人徳にかかわらず年齢順に決定される。すなわち村の最長老がガオンブラに、2番目がディレクという具合である。青年グループは長老グループによって選出される。これらの村役が焼畑区画決定等の行政、裁判、祭を執り行う。現在では州行政の末端機能を担うようになったため、ガオンブラの選出も最長老から政治手腕のある有力者に変わり、またいくつかの村役は有名無実となり、な

くなったものもある。ディマサ族は、個々人が同等の権利を有しており、村の様々な取り決めも個人の権利や発言が尊重されている。〈59 家族〉ディマサの家族は一夫一婦の核家族が基本である [GANDA 1978: 98-111]。

〈173 口碑・伝説による歴史〉ディマサ族の歴史に関しては「カチャリ族概説」の項を参照されたい。ディマサ族の歴史は基本的にはカチャリ族のそれに含まれるのであるが、ディマサ族と他のカチャリ諸族との歴史的な関係については推測の域を出ていない。ここでディマサ族の伝承をあげておくと、「ディマサ族は幾多の戦いに敗れ、撤退を続けた。そして深くて大きな川にさしかり、進退に窮した。ディマサ王はある夜夢をみる。夢の中に神が現れ、次のように彼に告げた。『明日アオサギが堤にいればそこだけ川が浅くなっている。そこから川を渡ることができるだろう。ただしけっして後ろを振り向いてはならない。』翌朝王が川を見るとアオサギが堤にいる。さっそく全軍が川を渡りだした。川の途中にさしかかったとき、ある兵士が自分の息子のことが気にかかって、つい後ろを振り向いてしまった。その瞬間川は深さを増し、兵士たちは流されてしまった。ある者は対岸にかろうじてたどり着き、ある者はそのまま流され、ある者は岸に引き返した。そして対岸にたどり着いた者がディマサ族である」 [Das 1978: 15]。

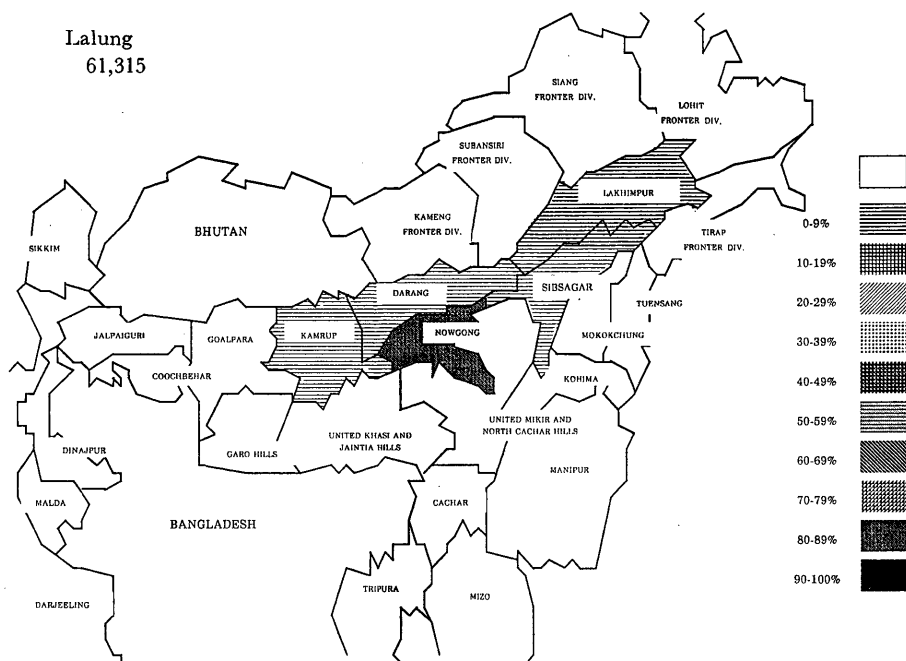
〈77 宗教的信仰〉ディマサ族は自らヒンドゥー教徒であると称しているが、実際はヒンドゥー教とアニミズム信仰の混ざったものである。ヒンドゥー教化は18世紀になされたが、これも当時ごく一部の上流階級だけであった。ディマサ族が最高の神と崇拝するのはダイコ (daikho) である。さらにその下に多くのマダイ (madai) がある。神の伝承についてはメスの大鳥アイレキディーマ (airekhidima) がこの地に巣を作り、7つの卵を抱いた。6つはかえったが、最後のひとはかえらず、その液体が地面に飛び散った。それが悪霊である [Das 1978: 26-27]。

祭は3年から4年に一度行われる。ホジャイ (hojai) と呼ばれる司祭が祭を執り行うが、ホジャイはどの村にもいるわけではなく、いない村では近くの村から連れて来る。このホジャイは司祭のクランではなく、司祭の技術を修得した者は誰でもなれる。祭にはブタやニワトリが犠牲に供される [Das 1978: 27]。

このホジャイに関して、「カチャリ族概説」の項でエンドルは一部族として取りあげて分類しているが、司祭のホジャイと部族のホジャイとの関連を述べている文献は見あたらなかった。

(人見五郎)

ラルン (Lalung), ティワ (Tiwa)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

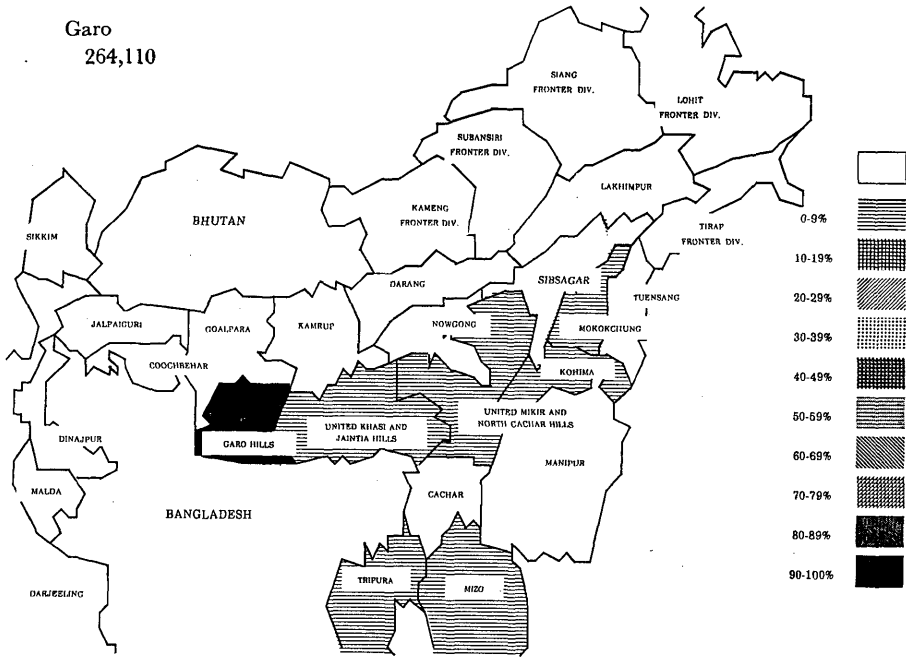
<131 位置>ジャインティア (Jaintia) 山地の北斜面の山裾に居住する小さな部族である。平野部と山麓部の2つのグループに分けることができ、伝統的な習慣を保持しているのは、山麓部のラルン族である。<173 口碑・伝説による歴史>ラルン族の起源については不明であり、ラルン族自身もカチャリ (Kachari) 族の一支族、チベット起源、ミキール (Mikir) 族との血族関係など、いくつかの説をもっている。

<361 集落形態>彼らは小さな集落をつくり、チャマディ (chhamadi) と呼ばれる若者宿を中心に家が建てられている。チャマディでは村の寄り合いも開かれる。

<618 クラン>ラルン族は多くのクール (khul) とよばれるクランがある。それぞれのクランには、一軒の主だった家族があり、それがボルジェラ (borjela) と呼ばれている。ボルジェラは今日では選挙で選ばれている。ボルジェラの勤めは、儀式をつかさどることと、クランの神をまつことである [Das 1986]。

(人見五郎)

ガロ (Garo), アチック (A'chik), マンデ (Mande)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>ガロ族は、メガラヤ (Meghalaya) 州東部のガロ山地 (Garo-Hills) を中心に居住している。<101 アイデンティフィケーション>ガロ族は自らのことを、アチック (A'chik), マンデ (Mande) と称している。ガロは12のサブ・トライブに分けることができる。ガロ山地の北斜面のゴアルパラ・ディストリクト (Goalpara District) に接する平坦部にはアウェ (Awe, Akawe), チサック (Chisak), カチュ (Kachu) がおり、古くから水稻作を行い、ブラマプトラ川流域の平野部の諸族からの影響を強くうけている。ガロ山地の中央部にはマチ (Machi), アベン (Abeng), アティアグラ (Atiagra), マタベン (Matabeng) がおり、最も人口が多く、かつ最もガロ族らしい特徴を有する。南西部にはガンチン (Ganching, Gara), アトン (Atong), チバック (Chibak), ルガ (Ruga), デュアル (Dual) がおり、かれらの方言など他のガロ族とはかなり異なった特徴を有している [NAKANE 1967: 19-23]。

<19 言語>言語はチベット・ビルマ語族ボド・ナガ語群ボド語系に属する。しかし周辺のボド語諸族とはかなり方言が異なり、これは他のボド語族がヒンドゥー教の影響などを受けてきたのに対し、ガロ族は独自の方言を形成してきたためである。ま

たアトンなどはクーチ (Koch) 族、ラブハ (Rabha) 族の言語と非常によく似ている [MAJUMDAR 1978: 17-18]。

<173 口碑・伝説による歴史>イギリス統治以前のガロ族についての歴史はアッサム、ベンガル諸文献に記述されることはほとんどなく、まったくわかっていない。ガロ族は自らの起源をチベットから移動してきたと考えている。伝承では、ガロ族はチベットを出たあとセラ (Sela) 峠を越えてアルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) 州のタワン (Tawang) にたどりついた。あるものはタワンに留まったが、さらに南下し、カムルupp (Kamrup) に至った。当時カムルuppはアホム族の支配下にあり、アホム族と衝突を繰り返した後、カマキャ・ヒル (Kamakhya Hill) に根拠地を築き長らくそこに住みついた。この地にカマキャ寺院を建設し、この寺にはガロ族の男女の彫像があるという。ここを根拠地としたものの、アホム (Ahom) 族の圧力には抵抗しきれず、ガロ族はアホム族の支配権を認めざるをえなくなった。アホム族に屈服する際、ガロ族はその証として土を食べさせられた。この行為を「アコチキ・ムクセタ (Ackochiki Mukseta)」といい、そこからガロ族の自称名アチック (A'chik) ができた。その後ガロ族はブラマプトラ川を越え、ゴアルパラ・ディストリクトに移動し、さらにガロ山地にたどりつき、苦勞の末ここを定住の地とした。その当時のガロ族の社会は父系社会で相続人は息子であったが、時の王ボネパ (Bonepa) はガロ族の人びとを集め、3つの決定を行なった。第1に、ガロ族をふたつのグループ、マラク (marak) とサングマ (sangma) に分け、同じグループでの結婚を禁じた。第2に、男は戦いに出ていくので、相続は末娘が受けること。第3に、ガロ族以外の男性と結婚した女性は相続権がない。以上がガロ族の伝承であるが、こういった伝承以外にも、チベット起源をうたいこまれた歌もある。

イギリス統治以前には、ガロ族はザミンダール (zamindar) に対しても激しく抵抗しており、ザミンダールやその徴税人を殺害したりしており、首狩り族として恐れられた。そしてその調停を契機にイギリスの統治が始まっていくのである。そしてテュラ (Tura) が行政の中心になるとヒンドゥー文化、キリスト教などがはいる、ガロ族の伝統的生活形態が変容していったのである [PAKYNTEIN 1967: 3-4]。

<36 集落><342 住宅>ガロ族の集落は10戸から60戸ほどで人口は多くても300名までである。丘陵地のガロ族は村の領有地アキン (a'king) 内で焼畑耕作を行なう。ガロ族の集落は人口が増加し、集落周辺での焼畑が困難になると、領有地内の収穫に都合のよい別の場所に新しい集落をつくり、そこに何家族かが移り住む。この新しい集落は自立できるまで母村の支配下におかれる。このような集落が母村を中心に行く

つか形成されている。ガロ族の家屋は縦4メートルから5メートル、横15メートルから30メートルの非常に長い杭上家屋で、これが山の傾斜地につきでて建てられている。柱などに使われる木材の他、タケ、屋根にはアシが使われている。ガロ族の集落はクリスチャンのガロ族は教会を取り囲むように、またノン・クリスチャンのガロ族は若者宿を取り囲むように家屋が建てられている。中根が調査を行なったモンバギリ(Mombagiri)村ではクリスチャンとノン・クリスチャンが各々教会と若者宿を中心に集落が形成されている。伝統的な家の中は3つの部分に分かれており、入口部分は家畜が夜休むようになっている。家の中央部分には囲炉裏があり、ここが生活の中心である。囲炉裏より入口側は女性が占め、奥は男性が占める。奥には小さな部屋があり、そこに貴重品が保管されている。また奥にはトイレがあり、夜間はそのトイレが使われる。これは野獣から身を守るためである。これらの家には夫婦と子供の他、妻の未婚の兄弟姉妹、妻の両親が加わる。集落内の家の他に、焼畑地の近くに小屋がつくられる。この小屋は野獣から身を守るため木の上につくられる [NAKANE 1967: 38-41]。

<24 農業>丘陵地のガロ族の生業は焼畑であり、谷筋では水稻作が行なわれている。主な作物は自給用としてコメ、モロコシ、タロイモ、バナナなどで、また換金作物として綿、トウガラシ、ショウガなどが栽培されている。土地は村の領有地であり個人の所有権は原則的に与えられていない。土地は村の首長ノクマ(nokma)の支配下にあり、毎年焼畑の区画がノクマによって分配される。収穫物は各自に帰する。焼畑は12月から1月ごろ伐採され、4月の雨が降る前に火入れ、雨の後種蒔が行なわれる。収穫期は8月から11月である。焼畑は毎年移動し、数年間放置される。

<23 家畜飼養>家畜はウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリなどで、使役の他、食用、犠牲に用いられる。ガロ族には食肉についてのタブーはなく、家畜の他、野生動物も好んで食べる。ただし死んでいる動物の肉と、トラやオオカミに襲われた動物の肉は食べない。<224 狩猟とわな猟>ガロ族は非常に狩猟が上手く、ワナを使って捕る。<226 漁労>また漁も食糧供給のほか、楽しみとしても好んで行なわれる。タケで編んだ漁具や毒が用いられる [PAKYNTEIN 1967: 19]。

<61 親族集団><56 社会成層>ガロ族は母系外婚氏族をもつ。この氏族には5つの氏族があるとされ、伝承にもあったサングマとマラクの2氏族が最大で、他の3つの氏族は非常に小さい。この氏族の分類をチャトチ(chatchi)と呼び、ガロ族にとってのもっとも重要なアイデンティティである。この氏族のもとに各地域ごとに多数の血族があり、さらにこれはマハリ(mahari)とよばれるリネージにわかれる。婚姻

はこのサングマとマラクのマハリを通じて行なわれる。集落には1つないし2つのマハリによって構成されており、そのなかにいわゆるマハリの「本家」があり、他の家はそこから派生したものであると考えられている。この「本家」が集落の首長でもあるノクマであり、集落の領有地を取り仕切っている。マハリが2つ存在する集落ではノクマも2人存在する。このようなノクマの性格から政治的な面のほか、貧しい者を養ったり、村人の世話を行なう。またノクマが貧しい場合は他の豊かな者がその役割を代わり、彼もまたノクマと呼ばれる [LAGACE 1977: 140]。

このような氏族、リネージを中心とした伝統的な社会組織は、イギリス統治以降新しい行政体に組織され、十数か村を一つの単位としてそこにロスコー (loskor) と呼ばれる首長が選出されるようになった。ロスコーはノクマによって選出される。この制度はインド独立以降も存続している [NAKANE 1967: 38]。

<58 婚姻>婚姻には交叉イトコ婚があり、財産、家屋は末娘ないし娘の中のひとりに相続される。この娘とその夫が両親、未婚の兄弟姉妹の面倒をみる。相続人でない娘は、結婚すると新しい家をかまえる [NAKANE 1967: 43-55]。

<77 宗教的信仰>宗教は現在ガロ族の平野部を中心に3分の1ほどがクリスチャンになっているが、他は伝統的な土着宗教を信仰している。彼らは超自然界の霊ミテ (mite) の存在を信じており、病はこのミテが身体をむしばんでいるためとされている。ミテを身体から離すため、供犠が行なわれる。また神の存在も信じ、神は作物の収穫に影響を与えるとされている。伐採、火入れ、種蒔、収穫時には供犠ともてなしの祭が行なわれる。すべてのガロ族の男性は、供犠の儀式がとりおこなえ、特別の呪術師はいない。村中で行なう儀式についてはノクマがこれを取り仕切る [PAKYNTEIN 1967: 32-33]。

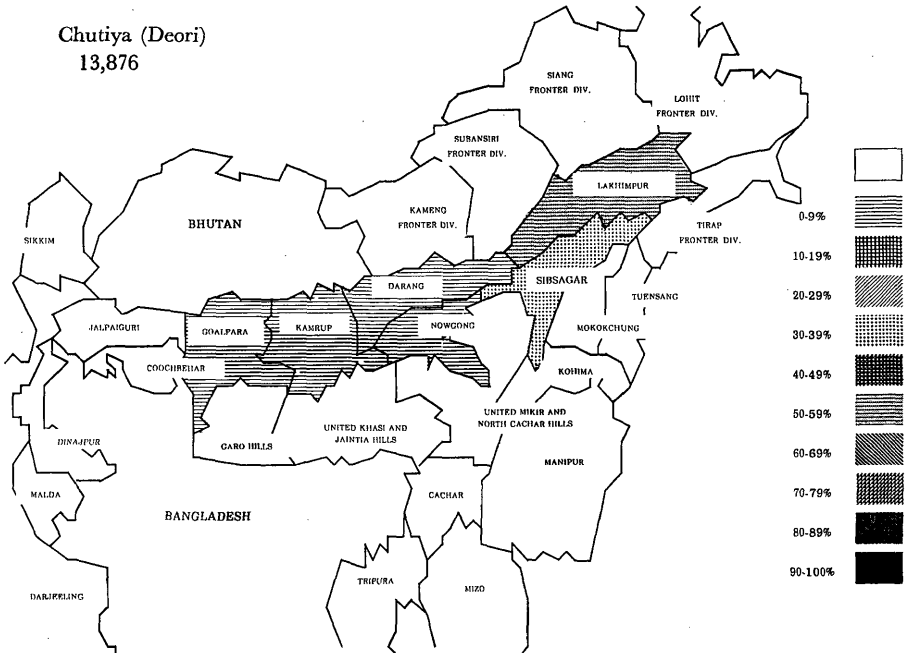
<29 服装>ガロ族の服装は現在では洋風のスタイルに変わっているが、伝統的な服装、装飾は非常に特徴的である。男性はガンド (gando) と呼ばれる太ももまでの腰巻を身につける。上半身は寒いとき以外は何も身につけない。男性のヘアースタイルは女性と同じように長く、後ろに縛りつけ、その上にターバンを巻いている。ダンスの時はパンドラ (pandra) と呼ばれる黒い布を腰に巻く。女性はリキン (riking) と呼ばれるベティコートのようなものを腰に巻き、寒いとき以外は上半身は何もつけず、胸も隠さない [PAKYNTEIN 1967: 12-13]。

<30 装飾品>男性も女性も装飾具を好み、耳たぶや耳の上にまで数10個のイヤリングを付けている。女性の場合、男性より大きなイヤリングをし、あまりに数が多く重いので、頭の上から糸で耳を吊ったりしている。こういったイヤリングはガロ族に

とって非常に重要であり、夫が死ぬと未亡人はイヤリングをはずし、また不義をはたらいた女性にはイヤリングを取り上げられるという罰がある。女性はそのほか腰にはビーズの腰紐、プレスレット、またダンスの時にはピルニ (pilni) と呼ばれる竹製のかんざしをつける [BAHADUR 1977: 14-17]。

(人見五郎)

チュティヤ (Chutiya, Chutia), デオリ (Deori, Deuri)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<13 地理>チュティヤ族はラキンプール (Lakhimpur), シブサガル (Sibsagar), ダラン (Darrang) 等, アッサム谷上流部に居住する。ダランにはチュティヤという地名が存在する。

チュティヤ族はエンドル (Endle) の分類によれば以下の4つのサブトライブに分けられる。第1にはヒンドゥー・チュティヤ (Hindu-Chutiya), 第2にはアホム・チュティヤ (Ahom-Chutiya), 第3にはデオリ・チュティヤ (Deori-Chutiya), 第4にはバラヒ・チュティヤ (Barahi-Chutiya) である [ENDLE 1911: 91]。

これらのサブトライブはチュティヤ族の歴史の変遷によって形成されたものである。ダルトンはチュティヤ族のグループにビヒヤ (Bihiya) を含めているが, エンドルのバラヒとダルトンのビヒヤが同じものか否かは不明である [DALTON 1872: 77]。

現在, ほとんどのチュティヤ族はアッサム人社会にとけ込み, 独自の文化, 習慣を保持しているものは, 僧侶階級であったデオリ・チュティヤのなかのディボンギヤ (Dibongiya) のみである。

<173 口碑・伝説による歴史>伝承によると, チュティヤ族はアルナチャル・ブ

ラデシュ (Arunachal Pradesh) の山岳地帯に居住していたが、隣接する部族のミシュミ (Mishmi) 族、アボル (Abor) 族との抗争にやぶれて平地にくだったとされている。その後スバンシリ (Subanshiri) を経由してサディヤ (Sadiya) に定着した。当時サディヤはヒンドゥー教の支配者によって統治されていた。伝承ではヒンドゥーの支配者が自分の娘とチュティヤ族の若者とに弓の試合をさせ、そのときチュティヤ族の若者が勝ったことから、この若者に娘をあたえたとされている。そしてこのヒンドゥーの支配者とチュティヤ族との間で、チュティヤ王国が形成された。このチュティヤ王国は、アホム (Ahom) 族の侵入によって1350年滅亡し、チュティヤ族は各地に散らばっていった。

こういった歴史的背景から、ヒンドゥー化したチュティヤ族をヒンドゥー・チュティヤ、アホムの支配下におかれたチュティヤ族をアホム・チュティヤ、王家の伝統を守り続けた僧侶階級をデオリ・チュティヤと呼ぶようになったのである [DALTON 1872: 77-78]。

ここではデオリ・チュティヤに属し、宗教的伝統を現代まで保持しているディボンギア (Dibongiya) に関する文献を通じて、チュティヤ族の特徴をおさえることとする [SAIKA 1976]。

<596 拡大家族>ディボンギアの社会組織は、ジュパ (jupa) と呼ばれる家族が単位となっている。ジュパには二つの形態があり、スキア・ジュパ (sukia jupa) は夫婦と子どもとの構成で、ジャカルア・ジュパ (jakarua jupa) は兄弟夫婦が何組かとその子供達と両親が同居しているものをさす。多い場合は40名ほどのジュパになることもある。この二つの割合は4対6である [SAIKA 1976: 9]。

<591 居住>家屋は杭上家屋で、葦などでふいた三角形の屋根にタケなどで壁が作られている。家屋は東西の向きに建てられ、入口は東側に面している。部屋数はジュパの構成によって異なる。入口に面した東の部屋は、ジュパの長である長男家族によって占められ、その部屋に接して客をもてなす部屋がある。弟家族は西側の他の部屋で寝起きする。家屋の中には女性達が調理を行なう炉のあるモジャ (mojia) と呼ばれる部屋と、男性たちがそのまわりで酒食を行なうデデュパティ (dedupati) と呼ばれる炉のある部屋が別々に存在する。男性は子供をのぞいてモジャには入れず、またデデュパティでは調理は行なわれない。弟が結婚すると弟夫婦のために部屋が建て増しされるのであるが、その場合西側につくられ、家族が増えるにしたがって家は西に延びていくのである。青年期の未婚の女性は独立の部屋があてがわれ、未婚の男性は年齢に関わらず若者宿のミチョン (michon) で生活する [SAIKA 1976: 10]。

<618 クラン>ディボンギアは父系のクランをもち、これをジャク (jaku) という。多くのクランがあるが、これらはひとつの先祖から派生したと考えられている。クランは宗教上の役割が決められており、供犠の儀式を行なうクラン、供物をつくるクランなどに分かれる。ただしこれらのクランは、役割は異なっても階層の上下は存在しない [SAIKA 1976: 16]。

<584 婚姻成立までの諸習慣>結婚には協議結婚と駈落ち結婚のふたつがある。駈落ちの場合、男の親戚や友人の手助けによって娘を家から連れ出す。結婚が成立すると、花婿は若者宿から自分の両親の家に戻り、そこで生活を始める。また花婿の両親は彼らのために新しい部屋を建て増したりして、彼らに部屋を与えられる [SAIKA 1976: 22]。

<77 宗教的信仰>ディボンギアはアニミズム信仰をもち、超自然界の生き物の存在を信じている。これらの霊はしばしば村に現れ、洪水や病気、疫病などをもたらすと考えている。村には信仰の場として、ミディク (midiku) とよばれる5つの建物からなる社がある。村人は伝統的な信仰暦にそって祭事を取り行っている。祭事は各々の神をあがめ、怒りを鎮めるもので、神によって犠牲の種類が異なる [SAIKA 1976: 36-39]。

(人見五郎)

トリプラ地方における諸族概説

<131 位置>トリプラ (Tripura) 州はバングラデシュにつきでた州である。インド独立以前の人口は約30万人 (1921年) ほどで、そのうちの50パーセントが部族民で占められていた。独立以降、パキスタンからヒンドゥー教徒ベンガル人の大量流入によって急速に人口が増加し、1971年センサスによると総人口は約155万人となり、その結果部族民が占める人口の割合は30パーセントに低下している。

<162 人口構成>トリプラ州に居住する諸部族は1971年センサスによると以下のごとくである。

部 族 名	人口 (人)
1 トリプリー (Tripuri)	250,382
2 リアン (Riang)	64,722
3 ジャマティア (Jamatia)	34,192
4 チャクマ (Chakuma)	28,622
5 ハラム (Halam)	19,076
6 マグ (Mug)	13,237
7 ノアティア (Noatia)	10,297
8 クキ (Kuki)	7,775
9 ガロ (Garó)	5,559
10 ムンダ (Munda)	5,347
11 ルシャイ (Lushai)	3,672
12 オラオン (Oraon)	3,428
13 サンタル (Santal)	2,222
14 ウチャイ (Uchai)	1,061
15 カシア (Khasia)	491
16 ビル (Bhil)	169
17 レプチャ (Lepcha)	177
18 ブティア (Bhutia)	3

これらのうち、ムンダ族、オラオン族、サンタル族、ウチャイ族、カシア族、ビル族などは、茶園の労働者として近年移住してきたものである。

<17 歴史と文化変化>トリプラ地方の諸族の歴史は、トリプラ王国の歴史としてとらえられる。トリプラ王国が成立したのは13世紀ごろといわれる。それまでのトリ

プラ地方は、南西部では東ベンガルの一部として、さまざまな王朝によって勢力争いが行なわれてはいたが、北東部の山岳地帯はほとんど顧みられることがなかった。トリプラ王国が成立するのはこの山岳地帯である。トリプラ王家の史書『ラジュマラ (Rajmala)』によると、トリプリ族はノウゴン (Nawgong) 地方よりカチャール (Cachar) 地方を経てトリプラ地方に定着したとされている。その後徐々に勢力を平野部にまで拡大し、15世紀頃にはチッタゴン山地からシレット (Sylhet) までにおよぶ王国を形成した。そしてこの王国はマニキャ (Manikya) 王朝として知られ、19世紀前半に多くの山岳地帯の諸部族がイギリスに併合統治されたにもかかわらず、マニキャ王朝はマハラジャとして独立した行政権が認められた [GAN-CHAUDHURI 1980: 13-43]。

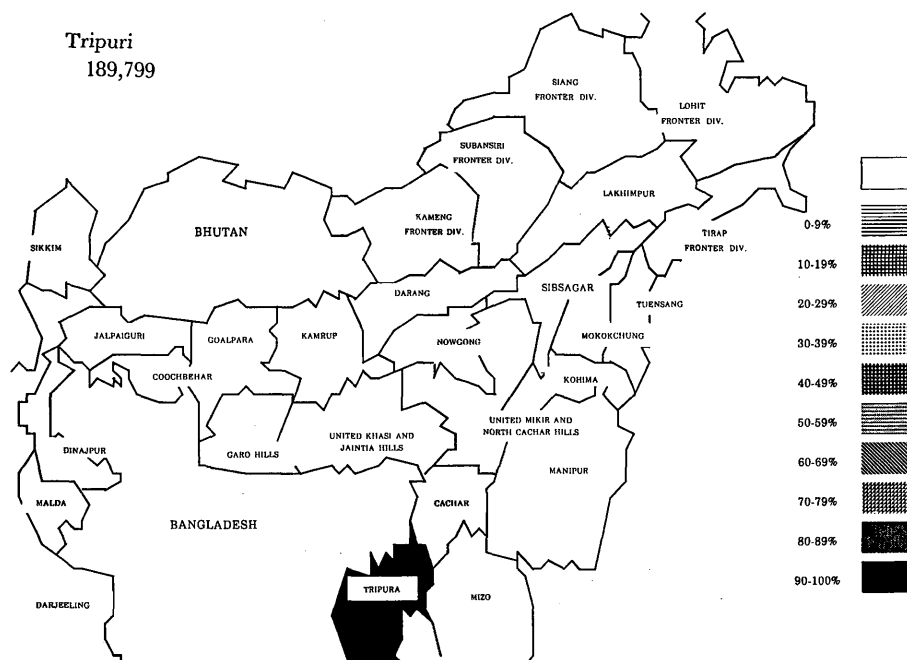
トリプラ王国は支配部族であるトリプリ族と王家に忠誠を誓う諸部族によって成り立っていた。トリプラ王国の支配形態は、王と臣民である諸部族の間に複雑なヒエラルキーが存在していたが、基本的には各部族、各集落に自治権が認められており、そのため独自の伝統的な社会組織、文化、宗教、習慣が守られていた。また王は年に一度すべての部族を集め、ハサム・ボジャム (Hasam-Bhojam) とよばれるもてなしを行い、王の支配力と各部族の結束を固めていた [GAN-CHAUDHURI 1980: 44-54]。

以上のような歴史的背景もあり、現代のトリプラ州においてトリプリ族、リアン族などは、指定部族に含まれてはいるものの、その社会的地位はかなり高く、都市部においてホワイトカラーの労働者になっているものも多くいる。

次項以下で各諸族の特徴を概説する。各部族の論述にあたってはおもにトリプラ・ディストリクト・ガゼットティア (Tripura District Gazetteers) に依拠している [MENON 1975]。

(人見五郎)

トリプリ (Tripuri, Tripura, Tippera)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>トリプリ族はトリプラ州のコワイ (Khowai), サダール (Sadar) を中心にトリプラ州全域に居住する。トリプラ州の人口の64パーセントはベンガル人によって占められており、トリプリ族はベンガル人につぐ人口を有しているが、もはやトリプラ州における少数派となってしまった。伝統的な居住地は丘陵地にあったが、現在は平野部、都市部に居住する者も少なくない。

<56 社会成層>トリプリ族はプラン・トリプリ (Puran Tripuri) とナトゥン・トリプリ (Natun Tripuri) のふたつのグループに分けることができる。プラン・トリプリは古くからこの地に住み着いている土着の部族で、過去においてトリプラ地方を治めていた支配者は、このプラン・トリプリの一員であった。ナトゥン・トリプリはプラン・トリプリとベンガル人の混血によって生じた部族である。どちらも丘陵地に居住するが、両者における言語、習慣、文化はかなり異なり、ナトゥン・トリプリはベンガル人の文化、社会様式の影響下にある [MENON 1975: 143]。

<19 言語>トリプリ族の言語はチベット・ビルマ語族のボド語群に属する。ボド語は文字を持たないが、15世紀頃から王国支配のためベンガルの行政機構を取り込ん

であり、その過程でベンガル語が公用語として用いられ、書き言葉はベンガル語を用いていた。そのためほとんどのトリプリ族はベンガル語を自由に話することができる [MENON 1975: 144]。

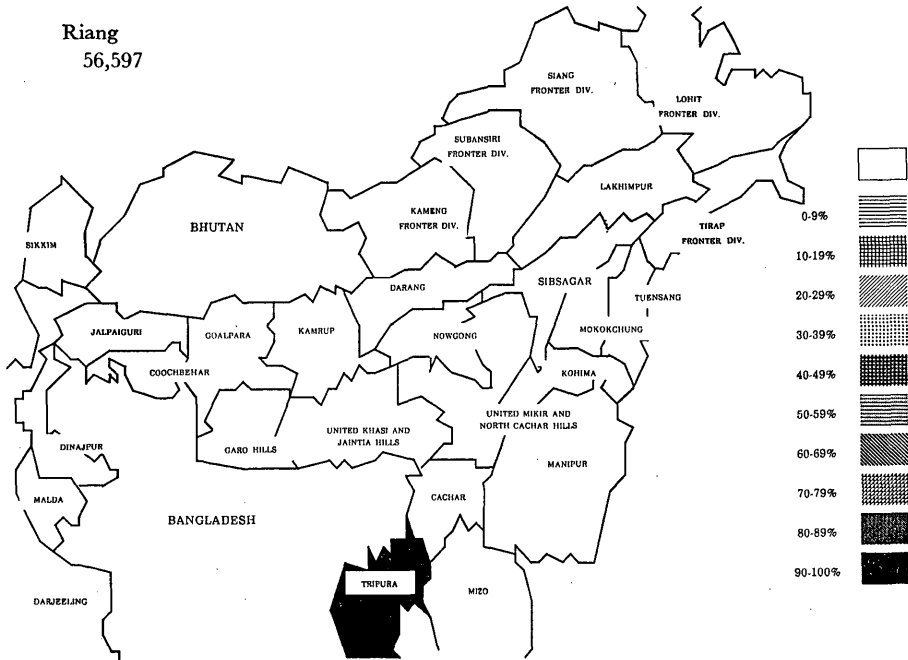
<342 住宅>トリプリ族の住居は丘陵地の斜面に、地面より1メートルから2メートルほど高くした杭上家屋で、おもにタケで作られている。<24 農業>伝統的な生業は焼畑であるが、今日では平野部、平坦部で水稻作も行なわれている。女性は機を織る。

<61 親族集団>トリプリ族の社会は、ハダ (hada) と呼ばれる12のグループに分けられ、各ハダのもとに多くの父系クランが存在する。<58 婚姻>トリプリは結婚に際し、花婿は花嫁の両親の家で1年間奉仕する習慣があった。しかし今日では結納によって置き換えられている。<62 コミュニティ>集落にはチョウダリー (chowdhury) と呼ばれる首長がおり、彼を中心に長老の合議によって村の取り決めがなされる [MENON 1975: 144]。

<77 宗教的信仰>宗教に関して、彼らは自らをヒンドゥー教徒であるとみなしているが、ヒンドゥーの神のほかに川の神、森の神といった土着の神をも崇拝している [MENON 1975: 144]。

(人見五郎)

リアン (Riang, Reang)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<17 歴史と文化変化>トリプリア族について大きな部族がリアン族である。リアン族は15世紀頃、チッタゴン (Chittagong) 山地より移住してきた部族であると考えられている。トリプラ州全域に居住しているが、アマルプール (Amarpur), ビロニア (Bilonia) に多く住んでいる [MENON 1975: 145]。

王政時代、リアン族はトリプラ王国のなかでもっとも強力な軍隊であり、かつ王に対する忠誠心も強い部族であった。また歴代の將軍のなかに何人ものリアン族が含まれていた。そのためリアン族はトリプラ王国の一部を独立支配することを許されていた [MENON 1975: 145]。

<56 社会成層>リアン族の社会組織は、ライ (rai) と呼ばれる絶対的な首長が存在し、人々は彼に服従していた。ライには従者として、僧侶、書記、音楽演奏者が随行していた。ライは世襲制ではなく、能力によって新たなライが決められていた。

リアン族はメシュカ (Meshka) とマルチャイ (Marchai) のふたつのグループに大きく分けられ、さらにそれぞれマシャ (Masha) とライチャック (Raichaku), アペット (Apet) とチャンプン (Champung) にわかれる [MENON 1975: 145]。

<19 言語>言語はボド語を話す。リアンがチッタゴン山地より移住してきたとするならば、このボド語は母語であるとは考えにくいと思われる。入手し得た資料にはそれについての言及はないが、おそらくトリプラ王国に忠誠を誓ったことからボド語に言語を変えてしまったのではないかとと思われる。

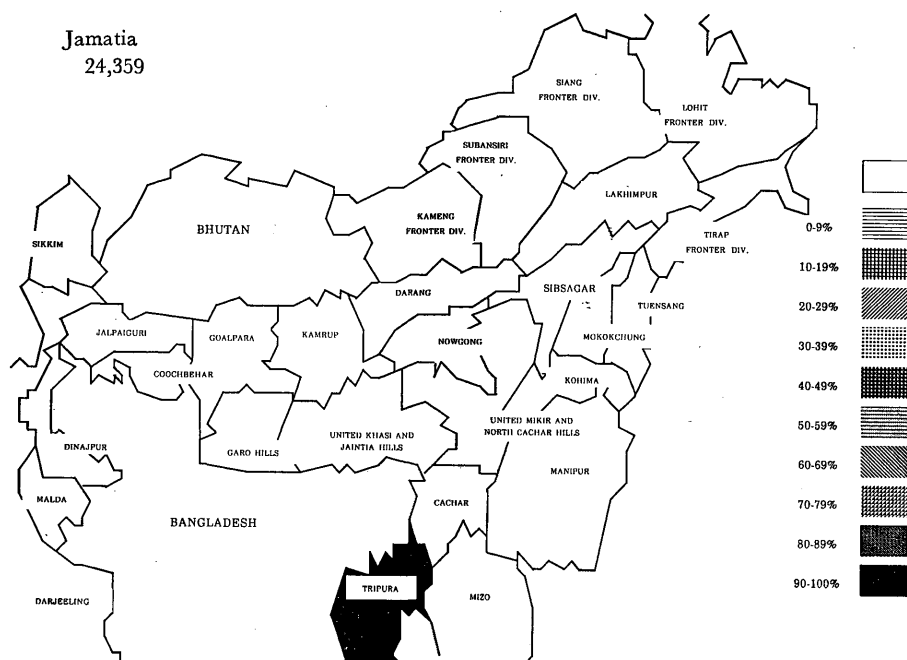
<77 宗教的信仰>宗教はヒンドゥー教とアニミズム信仰の混合したものである。すなわちシバ神のほか、丘の神、水と川の神、海と空の神、綿の神などを崇拝している。大きな祭りは焼畑の始まりと収穫のときになされる祭りのほか、年に一度各地に散らばっているリアン族全員が集まり、川の神トリプラ・サンダリ (Tripura-sundari) をたたえる祭が行なわれる [MENON 1975: 147]。

<24 農業>生業は焼畑であるが、現代では水稻作も行なわれている。<273 アルコール飲料>リアン族は酒を非常に好む [MENON 1975: 146]。

<58 婚姻>リアン族の結婚の形態はトリプリ族のそれとよく似ており、花婿は花嫁の家で2年間働かねばならない。この期間はいわばお互いがうまくやっていけるかを確かめ合う期間でもあり、うまくいかないときは花嫁の家を出て行かなければならない。そしてそのときは両者の関係はなかったものとされる。幼児結婚、複婚はない。離婚は双方の合意のもとでのみ認められ、姦通は厳しく罰せられる。未亡人は1年間すべての装飾品をはずし、喪に服す。その期間を過ぎれば再婚が認められる [MENON 1975: 147]。

(人見五郎)

ジャマティア (Jamatia)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

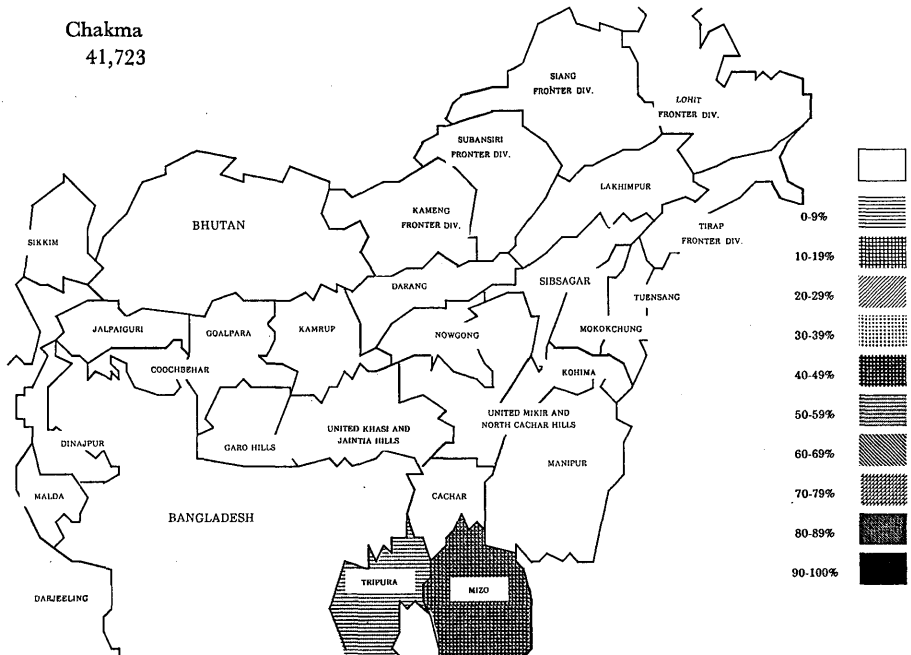
<173 口碑・伝説による歴史>トリプラ王国時代、ジャマティア族は軍隊の機動部隊であった。ジャマティアという言葉の意味は「集合し移動する」である。<131 位置>ジャマティア族はダルマナガル (Dharmanagar), カイラサハール (Kailasahar), カマルプール (Kamarpur) をのぞく全域に居住しているが、現在ではおもに平野部に移り、平野部のベンガル人と同じ様式の住居に住み、焼畑よりも水稲作を好んで行なっている [MENON 1975: 148]。

<77 宗教的信仰>宗教はヒンドゥー教とアニミズム信仰が混合しているが、ジャマティア族は自らヒンドゥー教徒であると宣言している。また様々な習慣はベンガル人の習慣と共通している。教育程度はトリプリア族よりかなり遅れている [MENON 1975: 148]。

<29 服装>男性の服装はベンガル人と同じであるが、女性は伝統的は服装を身につけ、高度な機織りの技術をもっている [MENON 1975: 149]。

(人見五郎)

チャクマ (Chakma, Chakuma)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>チャクマ族はおもにカイラサハール (Kailasahar), アマルプール (Amarpur), サブラム (Sabrum), ウダイプール (Udaipur), ビロニア (Bilonia) に居住している。<56 社会成層>チャクマ族はいくつかのグループに分けられるが、それらのあいだに顕著な違いはない。首長はデワン (dewan) と呼ばれ、彼は集落内部に非常に大きな権威と影響力を持っている [MENON 1975: 149]。

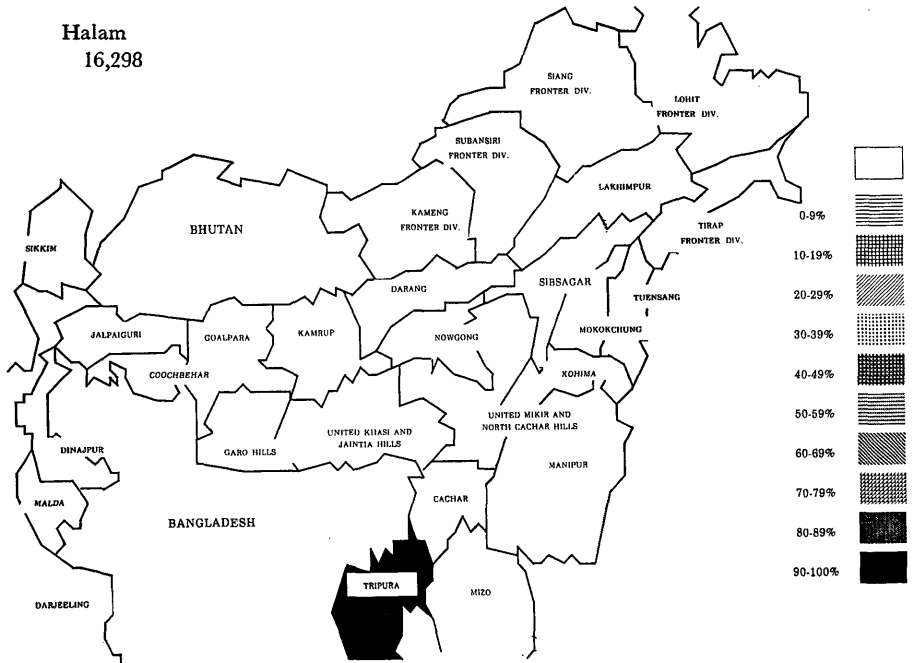
<77 宗教的信仰>宗教は基本的には仏教であるが、ヒンドゥー教、イスラム教などの影響をうけている [MENON 1975: 149]。<58 婚姻>結婚は一般に両親などの保護者によって取り決められる。妻は夫に尽くすことが美德とされ、焼畑などのほか多くの仕事で夫婦で助け合って行なわれる。

<29 服装>食事などの習慣はクキ族とよく似ている。女性は高度な機織りの技術をもっており、伝統的な服装をまとう。<30 装飾品>女性は金属の装飾品を身につけるほか、花を好み、しばしば花を髪の毛にさしたりする。<24 農業>生業はおもに焼畑であるが、水稲作も行なわれている。酒はあまり飲まれないが、男女ともタバコを好む [MENON 1975: 149-150]。

<764 葬式>葬式は盛大に行なわれる。遺体は木の棺に納められ、5日から7日後火葬される [MENON 1975: 150]。

(人見五郎)

ハラム (Halam, Hallam)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<173 口碑・伝説による歴史>ハラム族はクキ族を起源とし、トリプリ族がトリプラ地方に移住する以前から住んでいたと言われている。クキ族を起源としているが、習慣、社会組織等はトリプリ族のそれに類似している。ハラム族は過去においては非常に勇猛な部族といわれ、人肉を食するとも言われていた。しかし王に対する忠誠心は強く、多くのハラム族が兵士として王に仕えていた [MENON 1975: 150]。

<61 親族集団>ハラム族はダファ (dafa) と呼ばれる12のクランに分けられていた。今日ではさらに分割しており、16のクランが認められる。各クランにはクランの先祖の名やクランが始まった地域の名が付けられている [MENON 1975: 150]。

<19 言語>言語は基本的にはトリプリ族の言語と変わらない。ハラム族もトリプリ族との関係から言語が変化したと思われる [MENON 1975: 152]。

<77 宗教的信仰>宗教はヒンドゥー教と伝統的な土着宗教が混合している。また霊の存在も信じられており、儀式には供犠も行なわれている。祭に関してハラム族に特徴的なものはケル・プジャ (Ker-puja) で、この祭のときはハラム族以外の者が立ち入ることはできない。また4年から5年ごとにバラ・プジャ (Bara-puja) が行な

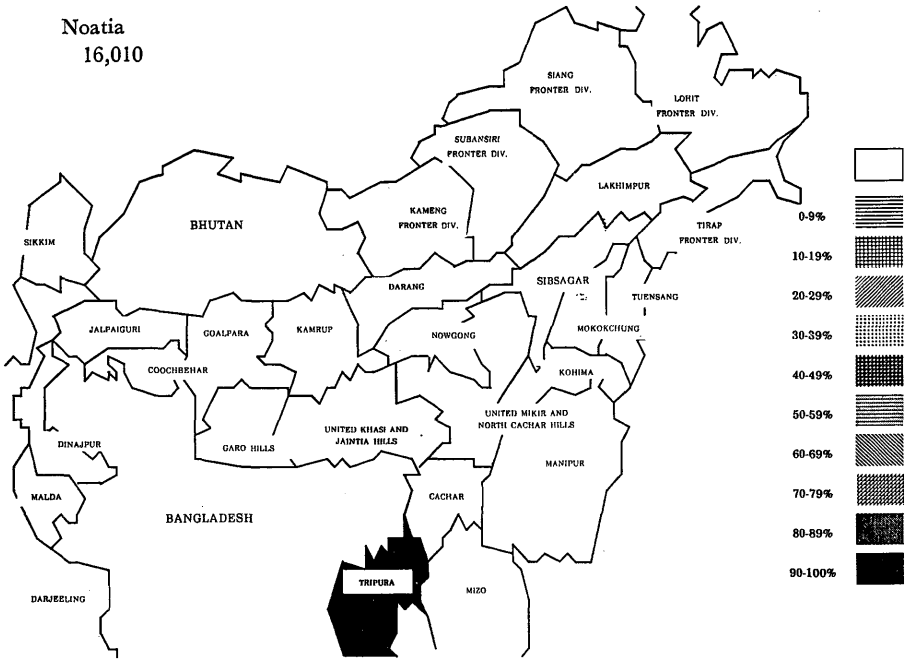
われ、すべてのハラム族が一同に会し、多くのヒツジ、ニワトリ、ブタが供犠され、盛大な供宴が行なわれる。

＜24 農業＞生業は焼畑が主で、労働は男女間で分業がなされ、焼畑など野外での作業は男性が担い、家事労働は女性が行なう [MENON 1975: 151]。

＜58 婚姻＞結婚はトリプリ族の場合と似ており、花婿は花嫁の家で4年から5年暮らし、仕事を助けねばならない。結婚の際には宗教的な儀式はとりおこなわれないが、食事、酒がふるまわれ、ダンスなどをして祝う。複婚はなく、幼児結婚も基本的には認められていないが、いくつかの地域で行なわれている [MENON 1975: 151]。

(人見五郎)

ノアティア (Noatia)

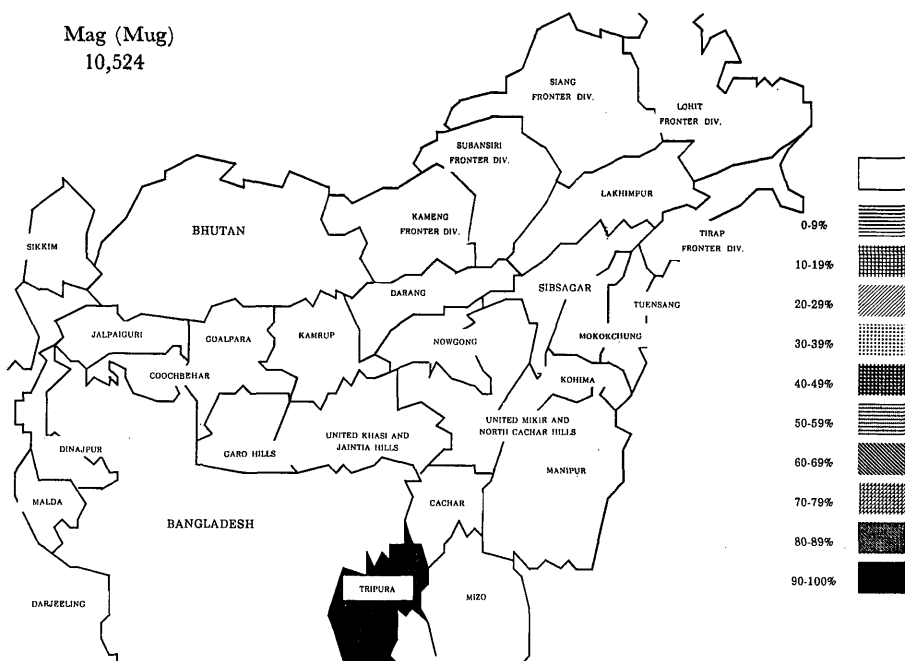


Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

ノアティアの語源は「新しい」であるが、トリプラ・グループの一部を構成しているとみなして差し支えない。習慣や生活様式はジャムティア族と非常によく似ている。宗教もヒンドゥー教である [MENON 1975: 153]。

(人見五郎)

マグ (Mag, Mug, Mogh)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<173 口碑・伝説による歴史> マグ族は17世紀ごろアラカン (Arakan) 地方から移住してきたとされている。仏教徒であり、言語はビルマ語とよく似ており、ビルマ文字を用いる。トリプラ王国時代のマグ族は部族間での調停役などをおこなって王に仕えていた [MENON 1975: 153]。

<56 社会成層> 部族内には、他のトリプラの諸部族のような強固なヒエラルキーはなく、ボマン (Bomang), チョウダリー (Chowdhury), タハシルダール (Tahasildar) などと呼ばれる首長も世襲制ではなく、一般に経済力、指導力のあるものが選ばれる [MENON 1975: 154]。

<61 親族集団> マグ族はふたつのグループに分けることができ、その下にふたつの父系のリネージがある [MEEON 1975: 154]。

<794 信徒集団> 各集落にはケヨン (Keyong) とよばれる僧院があり、僧侶はケヨンで子供に読み書きを教える [MENON 1975: 154]。

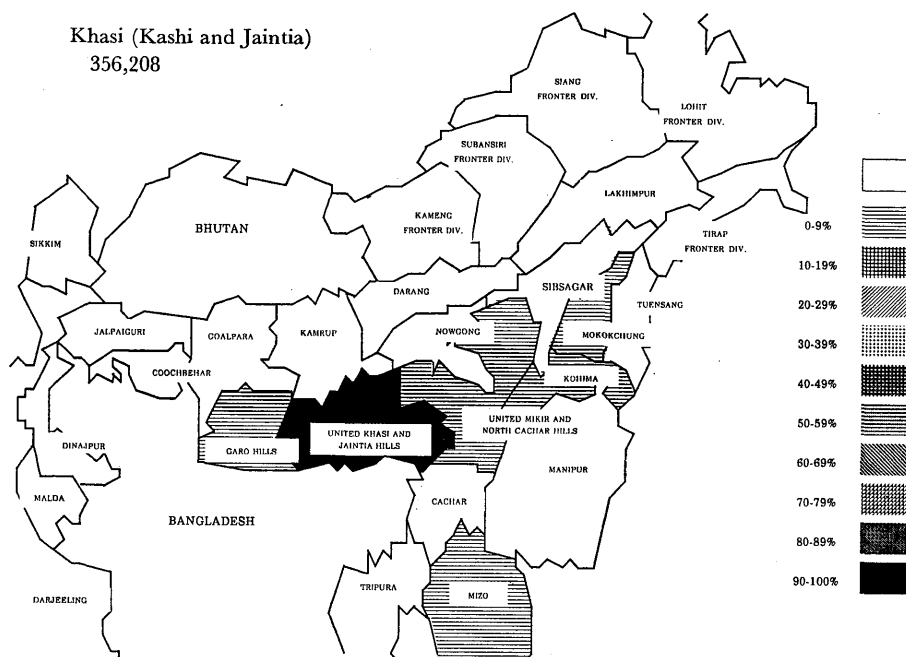
<24 農業> 生業は焼畑である。<262 食事> 食物のタブーはなく、特に発酵させた肉や魚を好む。<156 社会的パーソナリティー> 女性は活発で装飾品や豪華な服

装を好む [MENON 1975: 155]。

<58 婚姻>結婚の制限はなく、自由に結婚相手を選べる。結婚後は親と別に暮らす。一般に男性は20歳から22歳、女性は16歳から17歳で結婚する。<764 葬式>葬儀は火葬であり、僧侶がとりおこなう。葬式の7日後、僧侶、親戚、友人などに酒、食事がもてなされる [MENON 1975: 154]。

(人見五郎)

カーシ (Khasi, Cassia, Kasia, Khashia)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<19 言語>メガラヤ州のカーシ・アンド・ジャインティア (Khasi and Jaintia) 山地にすむオーストロ・アジア語系, モン・クメール (Mon-Khmer) 語族に属するもっとも重要な部族がカーシ族である。またカーシ族の名称は, 一般にはこのカーシ族のほかモン・クメール語を話す語族グループを全体を指している。このグループに含まれる部族には山地南東部のジャインティア (Jaintia) 族, 西部のリンガム (Lyngngam) 族, 南部のワー (War) 族, 北中央部のボイ (Bhoi) 族がある。これらの部族は, 基本的な言語と社会構造は同じであるが, この山地の地形が複雑なことから, ガロ (Garo) 族やラルン (Lalung) 族などの近隣部族の影響をうけて, 文化, 方言, 社会生活等異なったものとなっている [NAKANE 1967: 95-96]。

<17 歴史と文化変化>カーシ族の出自については歴史的な記述が欠如しているため不明であるが, カーシ語はインドにおける唯一のモン・クメール語の残存語であり, 山地名や河川名がカーシ語であり, かつ彼らの間で移動に関する伝承がないことからインドにおける最初のモンゴロイド系の移住者と推定される。1830年代にイギリスに統治されるまではカーシ族は小土侯国に分かれ, シーム (Shime) という首長が統治し

ていた。またジャインティア族はジャインティア王国を形成し、アホム王国やカチャリ王国との間で争いがあったことが記録されている [GAIT 1905: 311-320]。

イギリスの統治下、カーシ族にはキリスト教が普及し、ほとんどのものがキリスト教に改宗した。現在のカーシ族は無文字言語であったカーシ語をローマ字表記で表わすようにし、高い教育水準を保っている。またヒンドゥー教の支配下におかれることに反対し、1972年にこれまでのアッサム州から独立して新たにメガラヤ州が設立されたが、カーシ族はこの運動の中心であった。カーシ族はキリスト教を信仰しているが、一方で家族制度や祖先崇拜など伝統的な側面を色濃く残している [CHIB 1984: 130-133]。

<342 住宅> カーシ族の集落は山地の頂から少し下ったところや低地に設けられている。伝統的な家屋は平地家屋で石または木の壁とタケや葦で屋根が葺かれている。家の中は入口から3分の1が土間になっており、残りが一段高くなった板の床になっており、いくつかの部屋に仕切られている。家の中に炉が設けられ、窓はなく換気口がひとつある。集落には世襲または選挙による首長がいる [CHIB 1984: 137]。

<61 親族集団> 氏族関係は母系氏族でそれぞれの氏族は共通の女子祖先を持っていると考えている。日常生活で基本となるのはイイン (iing) と呼ばれる4世代の、つまり曾祖母の女系氏族が構成する血族である。以前は6世代までさかのぼっていた [NAKANE 1967: 119-121]。

<428 相続> 財産は一般に末娘に相続される。夫には財産相続の資格がない。娘が何人もいる場合は姉妹間で分配されるが、土地、家屋は末娘が得る。末娘は家族の中で特別な存在で、財産相続とともに支配的な地位を占め、家庭内での儀礼の長であり、祭司でもある [CHIB 1984: 139-140]。

<58 婚姻> 結婚は氏族外であれば自由に結婚ができる。末娘と結婚した夫は一般に花嫁の両親の家に暮らす。また末娘以外と結婚した場合も花嫁の出身の村で生活を始める。結婚式はキリスト教の教会で行なうほか、卵を割って日取りを占い、家畜のいけにえを行なうなどの伝統的な方法も行なわれる。家族の基本は核家族で、ただし末娘の家族は両親、未婚あるいは離婚した兄弟姉妹と同居する。夫に相続権がないこともあって、離婚もしばしば行なわれる。また通い婚や一夫多妻も見られる [CHIB 1984: 139]。

<844 出産> 出産の際、へその緒はタケまたは木のナイフで切り、鉄のナイフで切るとはタブーとされている。子どもの名前は、司祭がタケの容器に入った酒を滴らせながら呪文を唱え、最後の一滴の時に唱えられた呪文の言葉にちなんで名づけられ

る。そしてターメリックの粉を子どもと両親の右足にふりかけられる。この命名の儀式に参加した客には男女とも酒が振舞われる [CHIB 1984: 139]。

<24 農業>カーシ族の生業は農業で、丘陵地では焼畑中心で、低地では水稻作が行なわれている。焼畑では陸稻、トウモロコシ、雑穀、イモ類などのほか、1830年頃この地に導入されたジャガイモは自給用のほか換金作物としてさかんに栽培されている。農具は低地の水田では犁が用いられるが、焼畑では鋤のほか簡単な農具しかない。

<23 家畜飼養>家畜はウシ、ブタ、ヤギ、ヒツジ、ニワトリなどが飼われ、食用のほか犠牲にも用いられる。食肉のタブーはなく、また生乳、乳製品はキリスト教が普及してから利用されるようになった。イヌは番犬と狩猟に用いられる。

<224 狩猟とわな猟>カーシ族は狩りがうまく、先に毒を塗った弓矢を用いたり、ワナを仕掛けて狩猟を行なう。現在では弓が鉄砲に変わったが、スポーツとしてアーチェリーが楽しまれている。

<226 漁労>漁もよく行なわれている。竹製の漁具のほか、毒を流して捕ることもある。

<25 食品加工>一般的な食事は、米飯と乾燥した魚、肉の料理である。ライス・ビール、キンマの実、タバコも好む。またカンライ (kanlai) と呼ばれるサゴの木の樹皮の内側を好み、これを乾燥して粉末にしたものをコメと混ぜて食べる [PANDAY 1979: 69-72]。

<322 木工>工芸品は一般的なものは竹製品、木工製品であるが、村ごとに鍛冶、エリ種の絹織物、陶芸品、染色など特色のあるものが作られている [PANDAY 1979: 69-72]。

<29 服装>カーシ族の伝統的な服装は男性はすそと胸に房のついた袖なしの服で腰布を巻き、頭には耳あてのついた帽子かターバンを巻く。女性は下着のうえに肩から足首までの長い服を身につける。

<30 装飾品>男性も女性も装飾品をつけることを好み、金製、銀製のものを含むイヤリング、ネックレス、ブレスレットを身につけている。特に女性は過剰なまでも装飾品をつける傾向がある [BAHADUR 1977: 11-12]。

<77 宗教的信仰>宗教はほとんどのカーシ族がキリスト教に改宗しているが、祖先崇拜が根強く残っており、また自然界のあらゆるものに霊が存在するとも信じられている。祖先崇拜を特徴づけるものに葬儀と巨大石碑の建設がある。カーシ族は現世の地上と死後の天国の観念があり、天国では祖先の氏族とともに平和に暮らせるとされている。しかし十分な葬儀と先祖崇拜を怠ると、魂は天国に行けず空中をさまよい、悪霊に悩まされるとされている [CHIB 1984: 140]。

<76 死>葬儀は長期間にわたって行なわれる。死者は火葬にふされる。このとき家畜をいけにえにし、死者の傍らには食事が供えられる。遺骨は村はずれの小さな箱型石墳にまず納められる。この石墳には最近死んだ者の遺骨が納められている。ここには氏族員が次の儀式のための十分な蓄えができるまで遺骨が保管される。ついで家の庭か近くに大きな石墳をつくり、村の石墳から遺骨を氏族の最年長の女性の家に運び、遺骨に酒を供え、ウシをいけにえにして、新しい石墳に納める。最後に氏族の納骨堂に運ばれる。ここには共通の祖先をもつ子孫の骨がすべて納められている。この最後の儀式のときに長方形の大きな石の記念碑が立てられる。記念碑は3個から5個の石柱が立てられ、このときもウシ、ブタ、ヤギなどがいけにえにされる。死者が死んでから氏族の納骨堂に納められるまで数年間費やされる [Godwih-Austen 1872: 125-133]。これらの石の記念碑は、現在もガウハティからシロンにいたる自動車道路沿いにみることができる。

<789 呪術> そのほかカーシ族の宗教を特徴づけるものとして、先にも述べた卵の占いがある。これは卵を割って、その殻の形で吉凶を占うもので、結婚、儀式、旅行、狩猟などあらゆるものの日取りがこの占いによって決められる [Bahadur 1977: 11]。

(人見五郎)



図10 クキ・チン諸族の分布 (1) —1912年—

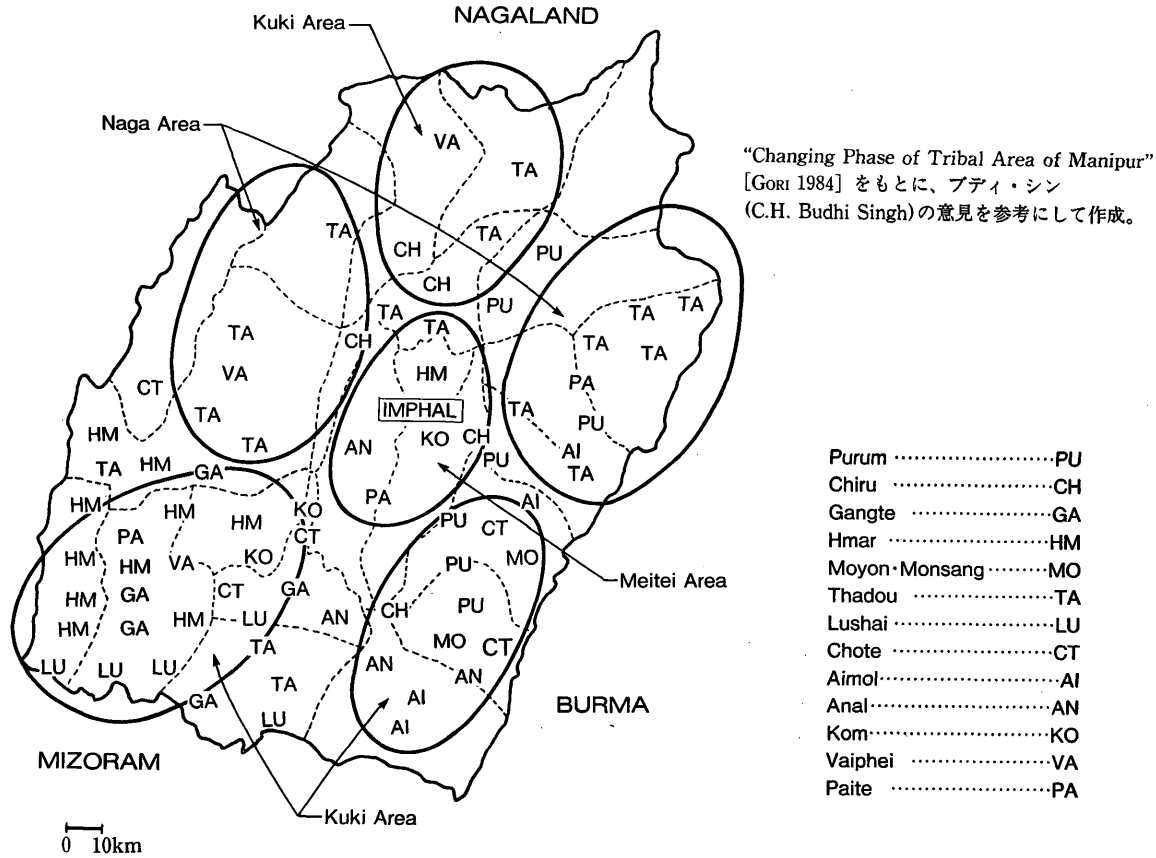
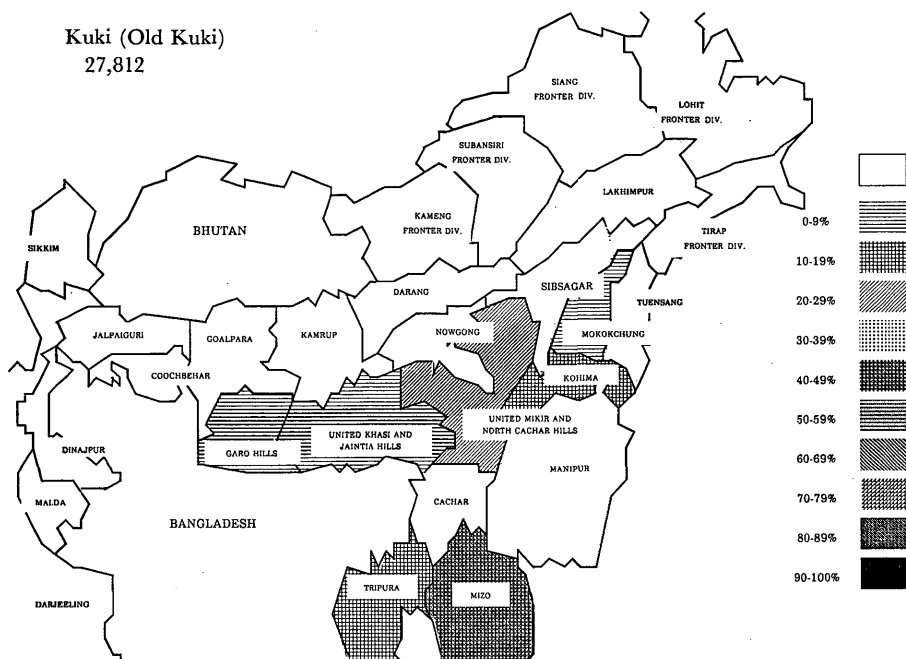


図11 クキ・チン諸族の分布 (2) —1984年—

クキ・チン諸族概説 クキ (Kuki), チン (Chin), キャング (Khang, Khyeng)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>クキ・チン諸族は、インド、バングラデシュ、ビルマにかけて居住し、その総称として、ビルマ語ではチン (Chin) とよばれ、アッサム語、ベンガル語ではクキ (Kuki) とよばれる。クキ・チン語群の言葉を話す集団は単一の呼称をもたず、レイゾ (Laizo), ミゾ (Mizo), アショウ (Acho), ゾー (Zo) など、「ゾー (Zo)」という言葉から派生したさまざまな言葉をもちいている。レーマン (Lehman) によれば、ゾーは「未開」を意味するという [LEHMAN 1963: 3]。クキ・チン諸族に関連して、「友人」を意味するビルマ語のキャング (Khyang) が、13世紀の中頃から記録されている [LEBAR et al. 1964: 49]。インドとイギリスとの接触がおこった初期の頃は、現在、Kuki とよばれる最初の形態として、Kookie あるいは Cuci という言葉がもちいられた。また、クキという言葉は、インドおよびバングラデシュの人々に対してもちいられるが、クキはチンと同義語である。クキは、狭義には、マニプール山地 (Manipur Hills) やカチャリ山地 (Kachari Hills) に住む部族に対して使用される [LEBAR et al. 1964: 49]。本稿では、ビルマ側に住むク

キ・チン諸族をチン、インド・バングラデシュ側に住むクキ・チン諸族をクキと以下、呼ぶことにする。

クキ・チン諸族として知られている部族の代表的なものは、次のとおりである。

○古クキグループ……アイモル (Aimol), チョウテ (Chote), コム (Kom), プルム (Purum), ヴァイフェイ (Vaiphei), アナル (Anal), チル (Chiru), ゾウ (Zou), コイレン (Koireng), ランガング (Lamgang), マー (Hmar), フランコル (Hrangkhoh), ハラム (Halam), ギャンテ (Gangte)
(モヨン (Moyon), モンサン (Monsang) に関しては古クキグループに含めるかどうか不明な点がある。)

○新クキグループ……タドー (Thadou), パイテ (Paite), シムテ (Simte)

○ルシャイ (Lushai)

○ラケール (Lakher)

○メイティ (Meitei)

○南方チングループ (Southern Chin)

○北方チングループ (Northern Chin)……ポイ (Poi)

<131 位置>クキ族は、およそ北緯24度から26度、東経92度から95度にかけて居住し、マニプール、カチャリ山地を中心に、一部ビルマ、トリプラ山地 (Tripura Hills), チッタゴン山地 (Chittagon Hills) にも住む。現住地への移住の順に、クキ族は、大きく古クキと新クキに分けられる。古クキグループは、数多くの小さな部族の集りで、新クキグループにくらべて半世紀はやく、ティッペラ (Tippera) やカチャリから移住してきた。新クキはタドー (Thadou) だけの単一部族であったが、最近ではギャンテ (Gangte) 族やパイテ (Paite) 族も、新クキグループに含める傾向がある。ルシャイ (Lushai) 族は、ルシャイ山地 (Lushai Hills) を中心に居住し、クキ族よりも遅れて移住してきたが、周辺の部族に大きな影響をあたえ、クキ族を北方へ追いやった。ラケール (Lakher) 族は、ミゾラム (Mizoram) 州の最南端に住む。メイティ (Meitei) 族は、マニプールで最大の人口をもつ部族である。14世紀頃から連合して、マニプール王国をつくった。18世紀に、ヒンドゥー教をとりいれて、クキ・チン諸族の他のグループとは、だいぶ異なる社会形態をもつようになった。チン族は、ビルマ・インド国境の山地を北緯25度30分から南のアラカン山地の北緯18度ぐらいまでに住む。レーマンは、ビルマ側のチン族について、北緯21度45分で、南方と北方に分けている。南

方のチン族は、物質文化が貧しく、単純な社会組織で、北方のチン族は、複雑な物質文化、社会組織をもち、アッサム地方のルシャイやラケール (Lakher) 族との関係が深いという [LEHMAN 1963: 14]。

<171 歴史と文化変化>クキ・チン諸族は、紀元後1000年のなかば頃から、東ビルマの低地に住んでいた。シェイクスピア (Shakespeare) は、古クキグループおよびルシャイ族の居住地を、マニプール川の下流域に想定している [SHAKESPERE 1912: 148]。16世紀はじめにビルマ人とシャン族の戦いの結果、西側の山の方へ移動した。平和的な奴隷交易があったのみで、ビルマ人とクキ・チン諸族のあいだの戦いの記述はみられない。18世紀のはじめに、マニプールにはいつてきたヒンドゥー教の影響で、クキ・チン諸族のあいだにヒンドゥー化した国家ができた。その代表的なものは、メイティ族である。

1780年頃、平原に住むクキ・チン諸族は西洋人と接触があり、その関係はゆっくり発展していったが、東ベンガルとアラカンの権益をめぐって、クキ・チン諸族がイギリス領に侵入した。1885年のビルマ王国の併合にともなって、イギリスとクキ・チン諸族は、全面戦争に突入した。1890年代には、イギリスはビルマ、アラカンとベンガル、アッサムからそれぞれチン山地 (Chin Hills) へ探検をおこなった。1918年までクキ・チン諸族の抵抗はつづいた。イギリスとアメリカのプロテスタント・ミッションナリーが19世紀のおわりに、ベンガルとビルマの境の両側で活動をはじめた。1948年の独立後、ビルマは以前のチン・ヒル・ディストリクト (Chin Hill District) とパコック・ヒル・トラクト (Pakkoku Hill Tract) を包合してチン特別区 (Chin Special Division) を形成した。ルシャイ族は、18世紀に現在の居住地へ移動してきて、クキ族を北方においやったが、20世紀になって、一部がビルマへもどった [LEBAR et al. 1964: 51]。ビルマおよびイギリスとの関係については、エンブリー (Embree) の著書に詳しい [EMBREE 1950: 15-16]。

<142 身体諸形質の情報>人種的には、モンゴロイド系である。ただ、一部、メイティ族には、アーリア系の人々がみられるという [HODSON 1908: 2]。

<173 口碑・伝説による歴史> 出自伝説でほぼ共通してみられるのは、祖先が地底にある洞窟からやってきたというものである。洞窟の所在地はビルマに想定されることが多い [SHAKESPERE 1912: 150]。

<621 コミュニティの構造> 古クキグループは、ルシャイ族やタドー族にくらべて、民主的に組織されている。古クキグループには政治に関する永続的な制度がなく、世襲の首長をもたない。ガム (gam) あるいはガリム (ghalim) とよばれる首長が、お

のおのの村の人びとによって選出される。首長の義務は、宗教に関連したものであり、すべての討議は、村の長老たちによる集会によって決められる。タドー族の内部は数多くの小規模のクランに分かれ、いくつかの村を治めるラジャ (raja) がいる。これらの首長には、現金であるいは労働の提供によって報酬があたえられる。首長には、何人かの補佐役がつく [SHAKESPERE 1912: 148-149]。メイテイ族は、ラジャにより統治され、軍の機構と密接にむすびついている。領土的国家というより、個人的なサービスにもとづいた封建的構造をもつ [HODSON 1908: 59]。

<565 社会階級>南方のチン族には階級は存在しないが、勲功祭宴の行為によってことなる階層が形成される。北方では、氏族は貴族と平民にわかれる。しかし、どちらも上昇したり下降したり、地位の移動がおこる。裕福な農民は、高いランクのリネージと結婚することをくりかえすことにより、貴族的な地位を獲得するが、首長職は継承できない。伝統的なチンの社会では、平民の下に農奴と奴隷の2つのランクがある。農奴は、裕福な人々に借金がある人々で、奴隷は、戦争でつかまった人々である。奴隷は、イギリス領となった時期に廃止された [LEHMAN 1963: 89-90]。

<61 親族集団>クキ・チン諸族の出自は、父系をたどる。チン族は、父系シブリングで父系リネージをもつ。北方のチン族のあいだでは、リネージは、母親のランクにしたがうが、南方では、この例ではない。クキ・チン諸族のほとんどは、一夫一妻である。一方で一夫多妻婚もみとめられ、貴族や富裕な商人のあいだでひろくおこなわれている。婚資が妻の家族と妻の叔父に支払われる [LEBAR et al. 1964: 54]。

<428 相続>クキ・チン諸族は、基本的に末子相続である。年少の息子が、年老的親の面倒をみる責任がある。結婚後、息子は家をでて自分の家をたてる。ふつうの世帯は、核家族である。ラケール族のあいだでは、第一子出産のときに家をたてる。ただし、一部の部族に長子相続がみられる [LEBAR et al. 1964: 54]。

<36 集落>クキ・チン諸族は、マニプール溪谷をのぞき、およそ1,000メートルから2,300メートルの高さに居住する。小山の頂きに居住するグループもあるが、ラケール族など、尾根の斜面に住むのを好むグループもいる。村落の形態は、ルシャイ族の大きな集中型の村落から、分散し、孤立した形態をもつマニプールの古クキグループまでさまざまである。ルシャイ族の村は、中央の広場から放射状にのびた道沿いに家が建ち、入口には柵と防塞をもつ。メイテイ族の村は、川の堤防にそってたてられており、それぞれの囲い地内に、散在した家屋の集まりをもっている。マニプール州の州都であるインパールは、「家屋の集合」を意味している [LEBAR et al. 1964: 51]。

<342 住宅>北方のチンは、めったに住居を移動させないが、南方のチンの村は、

永続的なものではない。共同の供犠のための広場があり、その近くに首長の家と議会のメンバーおよび富裕な人々が住む。クキ族の主要な村のいくつかは200世帯ほどで構成され、家屋は、地上から約1メートルの高さの壇上にたてられている。家はすべてタケでつくられ、屋根はタケの葉がまざった草で葺かれている。古クキグループでは、ゾウルブック (zawlbuk) という若者が宿泊する共同の建物がつくられている [LeBar et al. 1964: 51]。

<24 農業>生業は、焼畑耕作による農業が中心である。ビルマのチン族は、トウモロコシを焼畑でつくり、南方のチン族、ルンシャイ族、ラケール族はコメを主につくり、北方のチン族では、ミレットを補助的に栽培し、祭のさいに使用している。焼畑では、マメ科植物、ヒョウタン、サトウキビ、ヤム、タロ、香辛料、タバコなどがつくられる。菜園では、バナナ、ガーリック、チリ、インディゴを栽培している。クキ族は、焼畑耕作でコメと綿を主に栽培する。焼畑は、寒い季節に開墾し、3月から4月に燃やし、鍬でたがやす。一世帯で3エーカーから6エーカーの畑をもつ。北方のチン族では、3年から4年続けて畑を使用し、7年から9年休閑地にする [LeBar et al. 1964: 51]。

<23 家畜飼養>家畜は、ミタン牛、雄牛、雌牛、ヤギ、ブタ、ニワトリなどが飼われている。ミタン牛は、主に婚資用としてもちいられ、雄牛、雌牛、ヤギ、ブタ、ニワトリは、食肉および祭祀のさいの供犠としてつかわれることがおおい。牛乳を飲む習慣は最近のものである [LeBar et al. 1964: 51]。

<224 狩猟とわな猟>狩猟は、食べるためより、スポーツとしておこなわれ、儀礼的な活動に重要な役割をはたしている。クキ族は、狩猟を好み、獐猛な野獣を他の部族より狩るのが上手な熟練したハンターである。野生のゾウを狩って、牙をとり、市場で売る。弓矢や槍をつかって狩りをする [LeBar 1964: 52]。

<226 漁労>メイティ族の厳格なヒンドゥー教徒のあいだでは、漁労も狩猟もおこなわれない。しかし、マニプール盆地のロタ (Loktak) 湖周辺に住む部族は、漁労もさかんにおこなっている。魚は、網、罟、槍をつかってあるいは毒をダムに流して獲る [LeBar et al. 1964: 51-52]。

<77 宗教的信仰>クキ・チン諸族の宗教は、伝統的にはアニミステックなものである。パテル (Pather) あるいはパティアン (Pathian) などの最高神を中心に、森や山に住むさまざまな精霊の観念がみられる。祖先の村あるいは死者の村といった死後の魂の世界についての観念も共通してみられる。しかし、現在では、伝統的な形態を比較的よくのこしている部族もあるものの、ヒンドゥー教化した部族およびキリスト

教化した部族も多い。メイティ族は、ヴァイシュナヴァ派のヒンドゥー教徒である。カースト制に似た社会構造をもち、通過儀礼や不浄の観念など、ヒンドゥー教的な観念が濃厚である。メイティ族の近隣に住む古クキグループのうち、チルやモヨンなどの部族は、メイティ族の影響を強く受け、クランなども共通するものが多い。19世紀のミッションの布教活動により、キリスト教化した部族も数多い。ルシャイ族の35パーセントがキリスト教徒である。ギャンテ、マー族なども、伝統的な観念がうすれ、通過儀礼などにおいても、キリスト教方式を採用して簡単におこなわれるようになっている。

本稿では、以下、マニプール州、ミゾラム州に居住するクキ・チン諸族についてひとつづつみていくが、ビルマのチン族については、北東インドにおける民族誌要約という趣旨からはずれるので、単独であつかわない。

1961年のセンサスに、Kuki という部族名で、27,812人の人口が挙げられている。これは、古クキグループを一括したものと思われる。しかしながら、この数字には、クキ・チン諸族の本拠地であるマニプール州は含まれていない。逆にマニプール州においては、それぞれの部族ごとに人口が示されている。さきに、本誌冒頭の「はじめに」で示したように、インド政府のセンサスは、上位分類と下位分類が混在し、州の担当者によって、分類の仕方が異なっている。クキ・チン諸族についても例外ではない。したがって、以下、古クキグループのそれぞれの部族について、センサスに掲げている数字は、マニプール州に居住する人口のみを示すことを、あらかじめおことわりしておく。

(八木祐子)

アイモル (Aimol)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>アイモル族は、マニプル州の南東部を中心に居住する、クキ・チン諸族の古クキグループの一部族である。しかし、1989年2月の栗田の調査によれば、アイモル族は、最近、自らのアイデンティティをクキ・チン諸族よりもナガ (Naga) 諸族に求める傾向があるという。<161 人口>1961年のセンサスでは、108人、1971年のセンサスでは、836人の人口がマニプル州において記録されている。<112 参照された文献>アイモル族に関する文献は、非常に少なく、シェイクスピア (Shakespeare) の "The Lushei Kuki Clans" に若干記述されているだけである [SHAKESPERE 1912]。

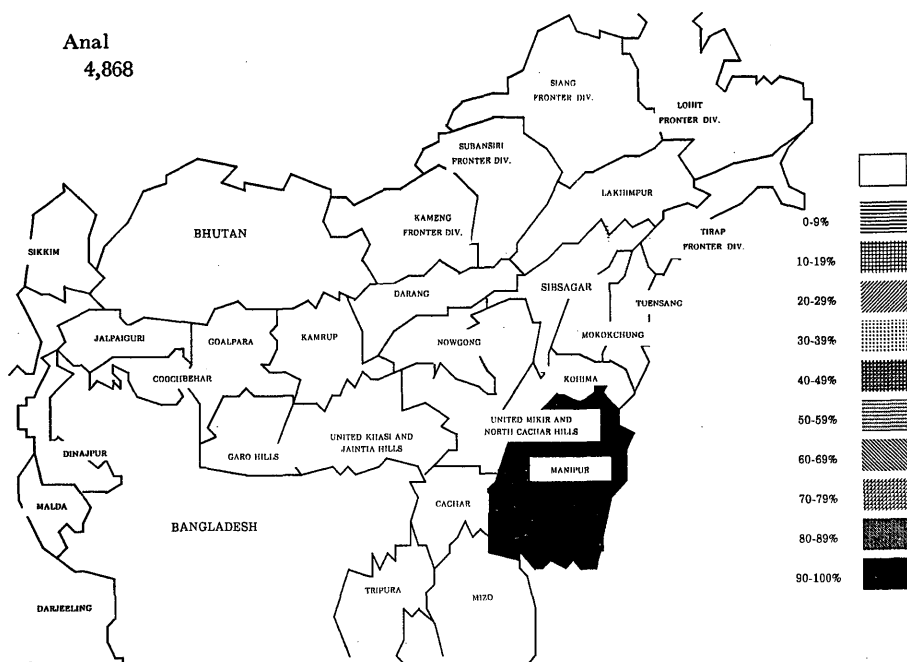
<175 記録された歴史>マニプル年代記には、1723年に、最初の記述がみられる。Aimol は、もともと Ai-mual という、古い村のあった場所の名前であろうと言われている。Ai は、ルシャイ語で、イチゴあるいはカニを意味し、Aizaul や Aijal という地名に使用されている。mual は、ルシャイ語で、丘の支脈をあらわす言葉である。Ai-mual の原住地は、ルシャイ山地 (Lushai Hills) の中心部であろうと推測されている [SHAKESPERE 1912: 151]。

<621 コミュニティの構造>アイモル族の社会には、トムパ (thompa) というクランの首長がいるが、特別の権力はなく、何の報酬も受け取っていない。各村ごとに、4つの村落機関があり、狩猟でとらえた獲物の一部を、報酬として受け取っている。その1つが、クル・ラクパ (khul-lakpa) とよばれる村長で、世襲制である [SHAKESPERE 1912: 152-153]。

<616 半族 [モイエティ]>社会は、優劣の差のある半族で構成される。<618 クラン> 半族は、外婚集団としてのクランをもつ。<582 婚姻規制>出自は父系をたどり、母の兄弟の娘との婚姻がおこなわれ、父の姉妹の娘との婚姻は、禁止されている [レヴィストロース 1975: 495]。

(八木祐子)

アナル (Anal)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>アナル族は、クキ・チン諸族の古クキグループに属する集団で、マニプール盆地の南東側、おもにロタ (Logtak) 湖の東側を中心に居住する [GORI 1984: 23]。しかし、最近では自らのアイデンティティをクキ・チン諸族よりもナガ族に求める動きがみられる [KABUI 1985: 10-11]。<161 人口>アナル族は、1961年のセンサスにおいては、4,868人、1971年のセンサスでは、6,592人の人口が、マニプール州において記録されている。

<175 記録された歴史>マニプール年代記には、チン族とともに、16世紀の半ばに最初の記述がみられ、ハウピ・ピーク (Haupi Peak) からやってきたと言われている。

<173 口碑・伝説による歴史>アナルの伝説では、二人の兄弟が、ハウピ・ピークの洞窟からやってきて、兄はアナルの祖先となり、弟はマニプール河谷へ行き、王になったという [SHAKESPERE 1912: 150]。また、カブイ (Kabui) は、Hansu と Hantha という洞窟から逃げた2人の男が、アナル族の祖先となり、現在の半族に結び付いているという伝説を紹介している [KABUI 1985: 8]。

<61 親族集団>アナル族は、外婚集団の単位となる半族組織をもち、それぞれの

半族は39のクランをもつ [KABUI 1985: 14]。村には、以前にはコラブ (kolapu) とよばれ、現在ではクル・ラクパ (khul-lakpa) とよばれる首長がいる。厳密な世襲制ではないが、しばしば父から息子へ首長の地位が受け継がれる。メイティ族の習慣が入って、呼称が変化したといわれる [KABUI 1985: 30]。

<24 農業>生業は農業が中心であり、焼畑耕作と水稻耕作がおこなわれている。コメ、ゴマ、トウモロコシ、ダイズ、カボチャ、ヒョウタン、ショウガ、トマト、トウガラシなどが栽培されている。<23 家畜飼養>家畜は、バッファロー、ミタン牛、ブタ、雄牛、ニワトリなどを飼っている [KABUI 1985: 44]。

<844 出産>出産に際して、妊婦は、夜に外出したり、ヘビを殺してはならないなどのさまざまな制限が課せられる。妊婦の夫も狩猟が禁じられる。出産は、村の女性を手助けして家でおこなわれる [KABUI 1985: 16]。出産に関して、古クキグループのいずれについても、シェル (sherh) とよばれる産婦の行動が制限される期間がみられるが、アナル族については、3日間である。子供が生まれると、クルプ (khulpu) という呪術師が呼ばれ、彼が呪文をとえたあと、ズー (zu) という酒と魚が村中に配られる。酒と魚を配っているときに、家の守り神、サクア (Sakhua) が目覚め、子供の魂が呼び寄せられるという [SHAKESPERE 1912: 160-161]。出産後、7日目にテンプ (thempu) とよばれる司祭がよばれて、名づけがおこなわれる。<553 命名>第1子から第5子まで、男女別にそれぞれ特定の名前がつけられる [KABUI 1985: 16]。

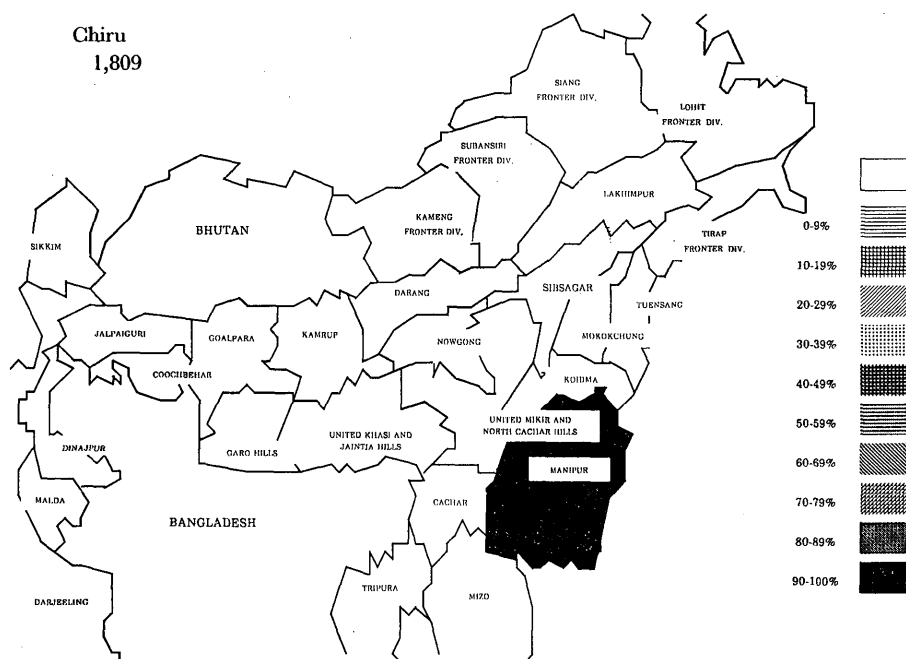
<58 婚姻>結婚には、見合い結婚、恋愛結婚、秘密結婚の3種類の形態がある。婚約の後に、ズプム (zupum) という結婚式がおこなわれる。花嫁の家に花婿側の家族が出向き、コメとブタが参列者に配られる。このときから、若者は、花嫁の家にこのり、花嫁の父に、3年間、労働奉仕をする。これは、花嫁代償の一種である。この労働期間が終わると、ミタン牛と大きなダオ (dao) とよばれる刀が花嫁の父におくられる。結婚に際して、婚資が花婿側から支払われる。以前は30ルピーに相当する青銅の鐘であったが、現在では、3,000ルピーの婚資が支払われている [KABUI 1985: 19-20]。<595 複婚>シェイクスピア (Shakespeare) によれば、以前は、一夫多妻が認められており、最初の妻は、夫と5夜、二番目の妻は4夜、三番目の妻は3夜をともにする慣習があったという。<428 相続>相続は、数人の息子で財産を分けるが、基本的には、末子相続である。離婚は、簡単におこなうことができるが、妻から離婚をのぞむ場合は、50ルピー払うか、村人に宴会をひらかなければならない [SHAKESPERE 1912: 154-159]。

<76 死>死には、自然な死と事故死や殺人による死などの不自然な死の2種類の観念があり、それぞれ葬式のやり方が異なっている。村の司祭によって葬式がおこなわれ、クランごとの共同墓地に埋葬される。不自然な死の場合は、村の外に埋葬される [KABUI 1985: 20]。

<77 宗教的信仰>シェイクスピアによれば、アナル族の信仰についての観念は、ルシャイ (Lushai) 族と類似している。パテル (Pathel) という空に住む普遍的な創造神が認識されている。<775 来世観>また、人が亡くなると、その魂は、しばらく墓のまわりをさまよったのちに、新しく赤ん坊として生まれ変わるという信仰も持っている [SHAKESPERE 1912: 157]。カブイによれば、アサパワン (Asapavan) が最高神であり、危険に際して、人々は彼の名をとる。また、チュワ (Chuwa) とカワ (Khawa) が、宇宙の創造者であり、それぞれ大地と天をつくったと信じられている。シェイクスピアの指摘した創造神パテルは、家内の神として信仰されている [KABUI 1985: 23-24]。1917年にキリスト教がもたらされ、伝統的な信仰も変化しつつある [KABUI 1985: 27]。

(八木祐子)

チル (Chiru)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>チル族は、クキ・チン諸族の古クキグループに属し、マニプール盆地を中心に居住する。1989年2月の栗田の調査によれば最近では自らのアイデンティティをクキ・チン諸族よりもナガ族に求める傾向があるという。

<112 参照された文献>チル族についての単独であつた文献は入手できなかった。本稿は、1966年のヴィレッジ・サーベイ・モノグラフのタングジング・チル (Thangjing Chiru) 村の村落調査に依拠し、1912年に書かれたシェイクスピア (Shakespeare) の "The Lushei Kuki Clans" で補って記述する。この村は、インパール (Imphal) の西11マイルのところに位置している [SINGH 1966; SHAKESPERE 1912]。

<175 記録された歴史>チル族に関して、マニプール年代記に16世紀半ばに最初の記述がみられ、フラングル山地 (Hranglal Hills) から、マニプールの方へ移住してきたといわれる [SHAKESPERE 1912: 149]。

<618 クラン>チル族は、外婚的な父系の5つの集団をもつ。そのうち、タングジング・チル村には、Rezar をのぞく Chongdur, Dingthoi, Danla, Rhaja の4つの

クランがある。メイテイ (Meitei) 族の村が近いので、その影響を強くうけ、それぞれのクランが、メイテイのクランの Angom, Khumal, Ningthouja, Luwang に同化している。クラン・ヒエラルキーはなく、クランはさらに、サブ・クランにわかれている [SINGH 1966: 3]。しかし、ボース (Bose) によれば、Danla が上位にあり、次に Rezar がつづき、のこりの3つは、同格であったといわれる [BOSE 1937: 160-162]。また、シェイクスピアによれば、Rezar からすべてのクランが出自したので、Rezal が、もっとも上位にあるという [SHAKESPERE 1912: 150]。

<19 言語>言語は、チベット・ビルマ語族のクキ・チン語群に属するチル語が話されるが、村人は、マニプール語にも精通しており、第2言語として実際に使用されている [SINGH 1966: 3]。

<621 コミュニティの構造>社会組織は、首長制をとる。村の首長は、クル・ラクパ (khul-lakpa) とよばれ、村の長老と相談して村を運営する。首長は世襲制で、首長が亡くなると弟があとを継ぎ、弟がいなければ、息子があとを継ぐ。首長は、実際の権力をもたず、村の秩序や法を維持する責任をもち、村人の意志にそむくことはできない [SINGH 1966: 3]。

<342 住宅>家屋は、骨組みにタケを使用し、平均的な大きさは、4.5×7.5メートルである。地面から廂の高さは、最低でも1.2メートルある。各家は、床面積の5分の1から6分の1の大きさのベランダをもつ。家の内部は、各部屋ごとに仕切られていない。家の中ほどに料理用の炉がつくられ、ベッドは、家の後方におかれている。中心部に、4本から5本の小さいタケが互いにむすばれ、柱のように立っている。これは、チル族の家内の神であるサナマヒ (Sanamahi) であるといわれている。家屋には、浴室、トイレはない [SINGH 1966: 3-4]。<882 青年の地位>古クキグループに共通してみられ、独身の若者が寝泊まりするゾウルブック (zawlbuk) が、チル族にもみられる [SHAKESPERE 1912: 151]。

<29 服装>服装は、西洋化されており、男性は、マーケットから買ったベストやシャツを着て、ズボンをはいている。クテイ (kutei) という腰布を身につけることもある。2.4メートルの長さで、75センチの幅の布を腰に巻く。女性は、ブラウスとパンベ (panbe) という1.8メートルの長さで、1メートルの幅の布を胸や腰にまく。<301 装身具>また、ネックレス (rithei)、腕輪 (mulok)、腕輪 (khuli)、指輪 (sumke)、耳飾り (rukor) を身につけている。<302 身だしなみ>男性は、髪を短かくきっているが、女性は、長く伸ばし、真ん中あたりでわけ、首の後ろで結び目をつくる。男性は、以前は、馬のしっぽでつくったサムチェ (samche) という太いロープ

を頭に巻いていたが、今ではみられない [SINGH 1966: 5-6]。

<262 食事>食事は、朝と夕方の2食である。<263 調味料>コメ、野菜、肉などに塩味をつけて煮る。油や香辛料はほとんど使われない。<27 飲み物、薬物、嗜好品>ライス・ビールをよく飲む。紅茶を飲む習慣は新しいものであり、ミルクをいれないで飲む [SINGH 1966: 5-6]。

<24 農業>生業は、農業が中心であり、稲は、平原部でも丘陵部でもつくられる主要な作物である。他には、コショウ、バナナ、ショウガなどが丘陵部につくられている。平原部では、水牛、雄牛をつかって耕作している。2月から土地が耕されるが、5月や6月の激しい降雨の時期にも耕作される。灌漑設備はない。稲は、10月と11月の間に収穫される。丘陵部では、耕作のために犁や牛は使われず、木を伐採し、燃やして、種をまく。焼畑耕作によって、コショウ、綿、ショウガ、トウモロコシ、マメ類をつくる [SINGH 1966: 11]。

<23 家畜飼養>家畜は、雄牛、ヤギ、ブタ、ニワトリが飼われている。家畜は、村内で、放し飼いにされ、特別な世話はない [SINGH 1966: 11]。

<286 織布>機織りは、女性の大切な仕事である。各家は、機織り部屋をもつ。女性の腰布とショールが、綿でつくられる。1枚の布を毎日1時間、7日から8日間かかって織る。つくられた布地は、家で使われ、売られることはない [SINGH 1966: 12]。

<582 婚姻規制>婚姻は、クラン外婚制でおこなわれる。シェイクスピアによれば、それぞれクランごとに結婚できる相手のクランが規定されている [SHAKESPEARE 1912: 154]。しかし、1966年のシン (Singh) の報告によると、婚姻規制はかなり緩やかになってきているようである。自分の所属するサブ・クラン内をのぞいてすべてのクランと結婚できるが、イトコ婚が多い。母方の兄弟の娘との結婚が好まれる [SINGH 1966: 7]。<592 世帯>一つの家族は、4人から6人が一緒に住む。<428 相続>末子が、他の兄弟よりも多くの財産をうけつぐ [SINGH 1966: 16]。

<58 婚姻>一般に、花婿の両親によって、結婚の相手を選ばれる。花婿の両親が、花嫁の両親に結婚を申し込む。同意されると、花婿は花嫁の家に宿泊まりして、農業の手伝いなど、3年の間労働奉仕をする。花婿の両親は、綿のショール、金属の食器、ライス・ビールと2ルピーを贈る。これは、マンカット (mankat) とよばれる。吉兆の日(月曜日か水曜日)を選んで、花嫁は、両親、親戚などに付き添われて、花婿の家へ行く。宴会がおこなわれたあと、花嫁の一行は去り、花嫁は、花婿の家族と生活をはじめる。男性は18歳から20歳で、女性は15歳から16歳で結婚するものが多い

[SINGH 1966: 8]。

<843 妊娠>息子の誕生の方が、娘の誕生より歓迎される。息子は、農業労働の手助けとなり、家計に多大な貢献をするためである。妊婦は、妊娠中もいつもの仕事をつづける。妊娠中は、新鮮な野菜や肉などを食べる。<844 出産>出産は、家屋内で、マイビ (maibi) とよばれる産婆の介添えでおこなわれる。産婆が削ったタケでへその緒を切り、後産は、土のつばに入れて、家の後方に埋められる。不浄とみなされる期間は、クランによって異なる。村の司祭であるテンプ (thempu) によって浄化儀礼がおこなわれる。午前中に、ニワトリが2匹、最高神パテル (Pathel) にささげられる。供犠されたニワトリは、家族が食べる。この儀礼のあとに、パテルに子どもの長命を祈る別の儀礼がおこなわれる。司祭が、ニワトリを殺して、子供の額にその血を数滴おとし、子供の口にライス・ビールを数滴たらす。この儀礼がすむと、ライス・ビールや肉やコメの御飯がふるまわれる。<553 命名>産婆と司祭が相談してこの日に名づけをおこなう [SINGH 1966: 6-7]。

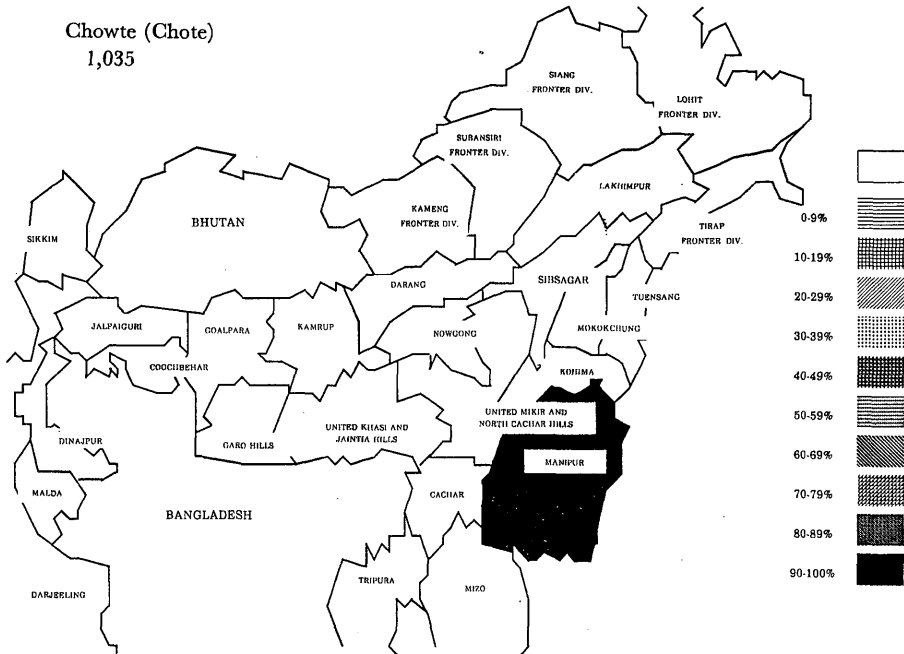
<764 葬式>遺体はお湯で洗い、新しい布でつつんで、村の南西の隅にある墓地に埋める。遺体は、上向きに棺桶にいれられるが、途中でひっくり返って、死者が再び家にもどらないように気をつける。参列者が土をかけ、司祭が、タイレン (tairen) の木の葉で水をかけ、参列者を浄化する。死者の家族は5日間、クラン内の家族も3日間、不浄であるといわれる。司祭が浄化儀礼をおこなう。家内の神サナマヒをあらわしたタケの束を、家の柱からとりはずして、新しいタケととりかえる。司祭が、ブタと雄鶏を数匹殺して、パテルにささげ、村人たちがあとで食べる [SINGH 1966: 9]。

<77 宗教的信仰>宗教は、パテルを最高神とするアニミズムの形態をとる。パテルは、居住地の北西の隅にあるウユング (uyung) というの木の根元にやどっている。祭のときには、村の司祭が、供犠をささげる。サナマヒは、すでにのべたように、家内の神で小さなタケの束であらわされる。病気のときは、ニワトリを殺してささげる [SINGH 1966: 170]。

(八木祐子)

チョウテ (Chote, Chowte, Chothe)

Chowte (Chote)
1,035



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>チョウテ族は、クキ・チン諸族の古クキグループに所属し、マニプール州の南部に居住する。1989年2月の栗田の調査によれば、最近では自らのアイデンティティをクキ・チン諸族よりもナガ族に求める傾向があるという。<161 人口>1961年のセンサスでは1,035人、1971年のセンサスでは1,905人の人口が、マニプール州において記録されている。<112 参照された文献>チョウテ族についての資料は、シェイクスピア (Shakespeare) の "The Lushei Kuki Clans" に断片的に記述してあるものしか入手できなかったため、それを引用する [SHAKESPERE 1912]。

<173 口碑・伝説による歴史>チョウテ族は、大地の洞窟から世界の人びとがやってきたとの出自伝説をもつ。物見高い猿が、洞窟の入口にかぶさっていた石をとりぞぎ、チョウテ族の祖先があらわれることになったという [SHAKESPERE 1912: 151]。

<342 住宅>家屋は、メイティ (Meitei) 族の影響を受け、アイモル (Aimol) 族、プルム (Purum) 族などと同様、伝統的な様式ではなく、土盛りの基台の上に家を建

てている [SHAKESPERE 1912: 151]。

<618 クラン>クランは、4つに分かれている。結婚相手の選択は、自分自身の所属するクラン以外の数家族に厳しく限定されている。婚資として、花嫁側は、ニワトリ、槍、ダオ (dao) という刀を受け取る。また、ズー (zu) という酒も、花婿側から振舞われる [SHAKESPERE 1912: 154-155]。

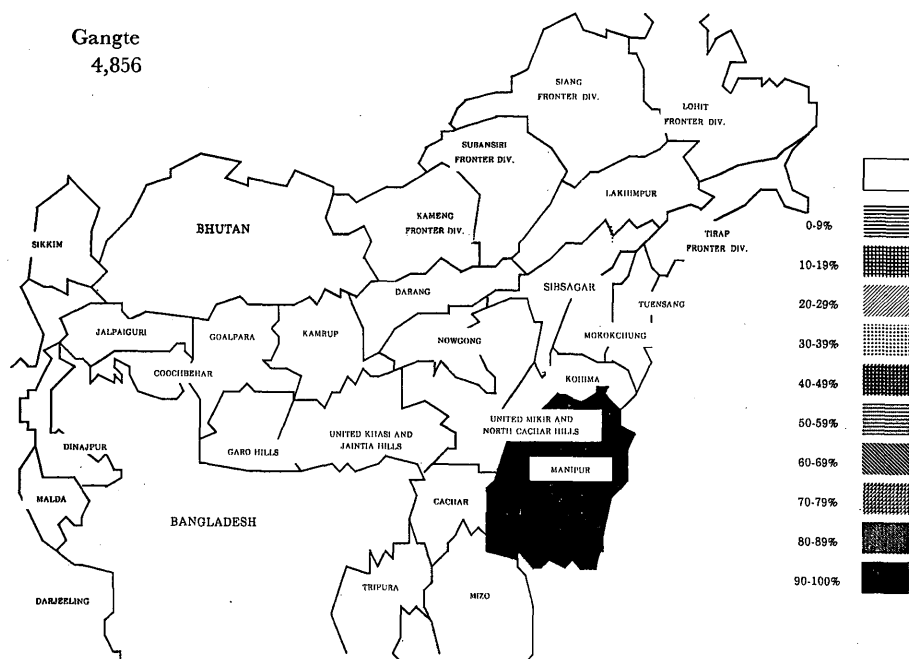
<844 出産>出産に際して、テンプ (thempu) という司祭が、ニワトリを供犠し、ズーをすすする。5日目にニワトリが殺され、選ばれた名前がつけられる。コメ粒3つを、水をいっぱい入れたコップにおとし、名前が適切かどうかを占なう。もしコメ粒が水のなかに沈めば、その名前は承認されたと考え、水に浮くようなら、別の名前をつけて、再び占う [SHAKESPERE 1912: 161]。

<764 葬式>チョウテ族は、墓を村から少し離れたところにつくる。それぞれの墓は、土で盛られ、竹格子で囲ってある。墓には、小麦をいれた籠と、水をいれたつばがおかれる。また、墓の後ろに、地面からの高さ1.2メートルのところに、家をかたどった建物をつくり、花や死者の服でかざり、中には、生米、ズー、きれいな水をおく [SHAKESPERE 1912: 165]。

<77 宗教的信仰>信仰についても、メイテイ族にかなり影響されている。パカングバ (Pakhangba)、ヌングチョングバ (Nungchongba) というチョウテ族の神は、メイテイ族のパティア (Patiar)、ヌングシャバ (Nungshaba) に対応しているといわれている [SHAKESPERE 1912: 158-159]。

(八木祐子)

ギャンテ (Gangte)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>ギャンテ族は、マニプル州南西部に居住する古クキグループの一部族である。しかしながら、1989年2月の栗田の調査によれば、ギャンテ族を新クキグループに分類する傾向がみられるという。ギャンテ族は、かつてビルマにあるギャング (Gang) という河谷に住んでいたことがあり、「人々」を意味するテ (Te) をむすびつけて、ギャンテ (Gangte) と呼ばれるようになったという [Das 1986: 295-296]。

<112 参照された文献>本稿では、単独の文献が入手できなかったので、1961年のセンサス・オブ・インディアのヴィレッジ・サーヴェイ・モノグラフにあるコウサブング (Khouasbung) 村の資料を中心にして記述する [SINGH 1972]。コウサブング村は、チュラチャンドプール・サブ・ディビジョン (Churachandpur Sub-Division) の行政下に属し、パイナップルの産地として有名である。村人は、パイナップルの売買で現金収入を得ている。<13 地理>村は、インパールの南西48キロメートルのところにある。村の東側は平原部だが、西側は丘陵部でパイナップルや他の農産物の耕作がおこなわれている。<161 人口>1961年のセンサスによれば、人口は62世帯、

346人(男性185人, 女性161人)である [SINGH 1972: 1]。

<173 口碑・伝説による歴史>この村は, 1931年につくられた新しい村である。プムポパオ (Pumphopao) という男が, 飢饉にみまわれた村を離れて, 新天地を求めた。彼は, 20人の仲間とこの地にやってきて, 荒れ果てていた土地を開いて住みはじめ, 最初の首長となった [SINGH 1972: 4]。

<618 クラン>村には, Thangjom と Thanglun の2つのクランがあり, 前者のクランは一世帯だけで, 後者のクランは12のサブ・クランに分かれている。クラン間にヒエラルキーはみられない。<582 婚姻規制>クランは, 内婚制をとるが, サブ・クランは外婚制である。結婚は, おなじサブ・クラン内では, 禁じられている。<592 世帯>平均的な家族は, 5.8人で, ほとんどが核家族であり, 8世帯だけが大家族である [SINGH 1972: 5-6]。もっとも, ダス (Das) によれば, ギャンテ族の社会は3つのクランがあり, クラン内部は多くのリネージに分かれ, そこにはヒエラルキーがみられるという [DAS 1986: 296-297]。

<19 言語>言語は, チベット・ビルマ語族クキ・チン語群に属するギャンテ語を話す。マニプール語を第2言語として使用し, 若い世代は, 英語とヒンディー語も話す [SINGH 1972: 6]。

<621 コミュニティの構造>政治組織は, 現在では形だけの首長制をとっている。村の首長に過去の権威はみられない。村にパンチャヤートはないが, かわりに1958年から村落議会がその役割を果たしている。これは, 選挙で選ばれた5人の人々によって構成されている。任期は3年である。村内の係争や村の発展, 福祉にかかわることをおこなっている。また, 1959年にユースクラブが有志によってつくられた。おもな目的は, 文化的, 教育的問題について若者を啓発することにある。社会的, 教育的テーマで討論したり, ゲームやスポーツを定期的におこなっている [SINGH 1972: 31]。

<87 教育>村内には, 4つの学校があり, 2つはミッション, 1つは政府, のこりは村人自身によって運営されている。この20年間に, 村の教育分野では, 著しい進歩がみられた。村の学校では, ギャンテ語で書かれた教科書を用い, 聖書もギャンテ語に翻訳されている [SINGH 1972: 33]。

<361 集落形態>居住形態は組織だっておらず, すべての家は, それぞれの都合により, いろいろな方向を向いて建っている。家屋は分散せず, 集住している [SINGH 1972: 4]。

<342 住宅>多くの家は, 杭上家屋で, 床は木の板かタケでできている。いくつか

の家は、土台の上にたてられている。およそ3分の1にあたる20世帯は、料理と食事に、離れ小屋をもっている。雄牛やニワトリなどの家畜小屋が家の近くに建てられている。トイレは、家の後方の隅に分離してつくられ、タケをあんだ壁と木の板で囲われている。脚柱、壁、屋根はタケか木の板でできている。地面から床までの高さは、60センチメートルであり、木の柱は、白アリの外を防ぐために、直接、地面に建てられず、平たい石の上に建てられる。家の大きさは6×9メートルの床面積で、ドアは、1.2×1.8メートルである。多くの家は、少なくとも2つの窓をもち、家の換気は良い。家のなかには、分離されていない。家の建築は、村人自身か近くの村からマニプール人を雇っておこなわれるが、建築のための特別の儀礼はない [SINGH 1972: 6]。

<29 服装>服装は、男性は西洋の服装を着るが、女性は伝統的な服装を着るものが多い。年配の女性はスカートの上に腰布を着るが、若い女性はスカートとスモックを着る。男性は、老人も若者も、家では伝統的な服装をするが、外では、ズボンとシャツを着る。腰布には、ポンピ (ponpi) とポンヅム (pondum) の2種類がある。前者は、手織りの綿で、キルトのような布である。布の大きさは、1.8×2.1メートルで、冬期に身体を暖かくするのに使われる。後者は、村人の公共の服装であり、大きさは1.2×2.1メートルで、7.5センチ幅の赤と黒の平行した縞模様が入っている。縞は、黒6本、赤5本で、1本の赤い縞が中央にくる。黒と赤の太い縞のあいだに、細い黄色い縞がある [SINGH 1972: 8]。

<301 装身具>装飾品は、儀礼的な場で多く身につけられる。女性たちは、金の飾りはつけず、プラスチック、メタル、ガラス製の飾りを市場で買う。装飾品には、指輪 (jungu)、腕輪 (chaocha)、耳輪 (bilcum)、首輪 (khivel) などがある。ツクパ (tukpa) とよばれる頭のバンドは、トラなどの野獣を殺した勇気ある男性がかぶる。これは、緑、赤、青、白、黒色の2重の羊毛の紐でできている [SINGH 1972: 8]。

<262 食事>食事は、1日2回、朝と夕方で、コメ、野菜、ブタ、ニワトリ、魚が食べられる。<263 調味料>肉と野菜は、菜種油と塩を味つけにもちいる。塩のかわりにカリ (khari 灰をとかした水を籠で漉したもの) が使われることもある [SINGH 1972: 9]。

<24 農業>生業は農業であり、稲とパイナップルがこの村の主要作物である。村の耕作地は平原部と丘の頂上にある。平原部では、水牛や雄牛と木製の犁をつかって耕作され、丘陵部では、雄牛や犁は使われず、スコップや鍬が使用される。稲の耕起をはじめるのは、雨の降りはじめる2月頃で、種まきと植え付けは5月から6月、収

穫は10月の始めである。パイナップルの耕作は、家の仕事の大部分をしめる。パイナップルは、丘の斜面でつくられ、7月から9月に多量に収穫される。農産物とくにパイナップルはモイラン (Moireng) かインパール (Imphal) の市場で売られる。漁業はおこなわれていない [SINGH 1972: 15-16]。

<23 家畜飼養>家畜は少ない。ブタとニワトリは食料として、雄牛も食料にされるが、主に農作業用に飼育される。家畜飼育のために特別な技術は必要とされず、放し飼いにされている。<286 織布>織り物が、女性の手によって自家消費用につくられている。70パーセントの世帯が織機をもち、腰布や綿のショールを織っている [SINGH 1972: 18-19]。

<844 出産>出産に関する儀礼は以下のようなものである。妊婦は、通常の仕事から解放される。食事の制限はない。出産は家族の女性によって介助され、後産は、家の外ならどこに埋めてもよい。また、政府の組織に所属する産婆が手伝うこともある。子供は、温かいお湯で洗われ、布につつまれて母親のそばにおかれる。2歳頃まで、母乳をあたえる。<553 命名>子供の名づけは、1歳までの間におこなわれる。名づけの日、近親者が集まり、名前を決める。子供の名前は、そこに集まっている人のなかからとられなければならない [SINGH 1972: 9]。

<582 婚姻規制>一般にガンテ族の社会は単婚制であるが、実際は、首長などに一夫多妻の形態をとるものがある。ガンテ族は、単系出自をとる父系社会である。婚姻は母方の兄弟との結婚がすすめられる。父方の姉妹の娘との結婚は、きびしく禁じられている。以前は、もし母方の兄弟との結婚がおこなわれなかった場合には、その男性は慣習に従わなかったとして、雄牛1頭を罰金として支払わされた。現在では、長男をのぞいては、そのような慣習を強制されない。ソロレート婚、レヴィレート婚はみられない。キリスト教に改宗後、単婚の制度と結婚の神聖さの観念が強くなった。未亡人の再婚は認められている。離婚はめったにみられない [SINGH 1972: 10-13; DAS 1986: 297-298]。

<58 婚姻>結婚には、お見合いと駈落ちの2つの形態がある。お見合いによる結婚の場合は、若者の側から申込みがおこなわれる。若者の家族と近親者、若者の姉妹の夫が結婚の申し込みに娘の家へゆく。一行は、娘の家族にふるまうために紅茶を持参する。申し込みが受入れられたら、若者の家族がポンピ1枚、ポンツム1枚、3頭の雄牛の婚資を贈る。これらの品物のかわりに、お金が贈られることもある。村人はキリスト教徒であり、結婚式は教会でキリスト教の方式でおこなわれる。結婚式の日取りは、両方の家族によって、日曜日以外のいつれかの日に決められる。結婚式の日、

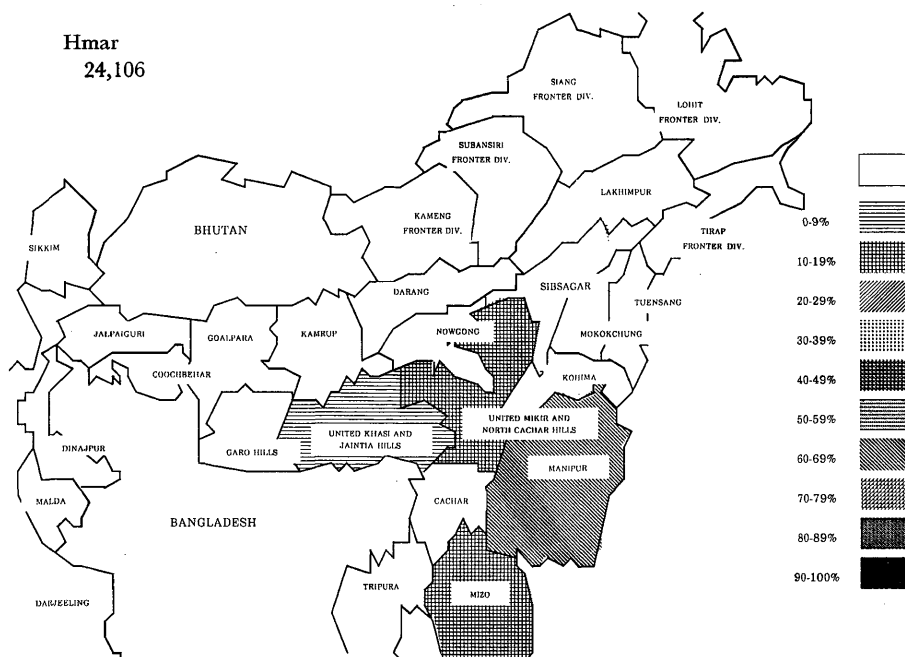
若者と娘は両親にともなわれ、近親者や招待客とともに教会に行く。司祭が聖書を読んで式をとりおこなう。式がおわると、若者の家で食事をだして客をもてなす。駆落ちによる結婚の場合は、若者と娘が駆落ちしたら、夫と妻とみなされ、何の儀礼もおこなわれない。しかし、若者の家族は、娘の家族に婚資を贈らなければならない。駆落ちがおこなわれたら、若者の家か長老の家に、近親者と友人を招いて、紅茶と食事でもてなす。招待された客は、お返しに、夫婦に化粧品、衣類、万年筆、お金などを贈る [SINGH 1972: 10-13]。

<764 葬式>葬式は、キリスト教に改宗後、短かくて簡単におこなわれるようになった。もし、病気のような自然の死の場合は、家のなかのベッドの上で死が迎えられる。亡くなってすぐに、司祭は、遺体のそばで魂の安らかな旅立ちのために祈る。その間に、男性が棺桶の準備をし、若者は墓を掘りにいく。遺体は棺桶にいれられて、3人から4人にかつがれ、墓に運ばれる。墓にいれるとき、司祭が最後の祈りをおこなう。なかに埋葬品はいれられない。十字架がたてられる。死の不浄はみられない [SINGH 1972: 14]。

<77 宗教的信仰>村人は、すべてキリスト教徒である。村には、インド独立教会などの2つのミッションがあり、3つの教会がある。各教会には、司祭がいる。しばしば、彼らは教会の面倒をみにくるが、司祭のかわりにウパ (upa) とよばれる長老が、教会の通常の仕事をおこなっている。教会は村人にいつでもひらかれているが、公共の礼拝は水、金、土、日曜におこなわれる。しかし、キリストやマリアの絵を拝むために、壁にかけている村人はいない [SINGH 1972: 33]。

(八木祐子)

マー (Hmar), カトラング (Kwatlang), コトラング (Khotlang)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>マー族は、古クキグループに属し、マニプール河谷を中心に居住する。マーは、ミゾ山地 (Mizo Hills) から移住してきた人々を指す言葉として、ミゾ (Mizo) 族によって使用されている。また、ミゾ山地では、フランコル (Hrangkhoh), ベイテ (Beite) も、マー族の一部として知られている [Das 1985: 5]。

<112 参照された文献>マー族を単独に扱った文献は入手できなかった。ここでは、1965年のインド政府のセンサスにあるフェルザウル (Pherzawl) 村の記述を引用する [SINGH 1965c]。

<13 地理>村は、マニプールの南西部にあり、インパールの南西150キロメートルのところに位置している。山の平たい頂上部にあり、海拔は1,200メートルである。西側がスルマ河谷の気候に影響をうけ、他の地域にくらべて雨量はすくない [SINGH 1965c: 1]。

<173 口碑・伝説による歴史>この地には、1894年頃、移住してきた。かれらは、自分たちがガルシャイ山地 (Lushai Hills) からやってきたと信じている。ブルフマン

グ (Bulhmang) という男が、食料の欠乏のため、仲間をつれてルシャイ山地をはなれ、新天地を求めてこの地にやってきた。そして、ブルフマングが村の第一代首長となった [SINGH 1965c: 1]。

<618 クラン>マー族には、21のクランがあり、それぞれが数多くのサブクランをもつ。調査地の村には、21のクランのうち6つのクランがある [SINGH 1965c: 4]。

<19 言語>言語は、チベット・ビルマ語族クキ・チン語群に属するマー方言を話し、教育をうけた若者は、英語およびヒンディー語をすこし話す [SINGH 1965c: 4]。

<621 コミュニティの構造>社会組織は、世襲的な首長制をとる。村の首長は、ラル (lal) とよばれ、村の耕作にかかわる事項の相談にのり、助言をあたえる。ラルの近親者や友人から構成されるシーマン・ウパ (siehmang upa) という15人の補佐役がいる。ラルは、村の利益を守り、村人から報酬をもらう。ラルは、収穫が終わったら、狩猟した動物の4本の足と5ルピーをもらう。現在では、ラルのリーダーシップや村落組織もその構造や機能を変えてきた。シーマン・ウパは、もはや首長によって選ばれるのではなく、村人たちが投票によって選ぶ。選挙は25歳以上の人によって、3年おきにおこなわれる。25歳以上の人には、被選挙権をもつ [SINGH 1965c: 16]。

<561 年齢階層>また、ゾウルブック (zawlbuk) という別の組織がある。男性は、6歳から15歳、16歳から29歳、30歳以上の3つの年齢集団にわけられる。それぞれが、村を守るための主要な機能をもつ [SINGH 1965c: 16]。

<342 住宅>平均的な村の家は、土台のうえに、地面から30センチメートルから90センチメートルの高さに建てられる。ほとんどの家は、それほど大きくはなく、1.2×6メートルの大きさである。家屋は、近くの森から手にいれたタケ、木、草でできており、木やタケは床と柱に、屋根には、タケと草が使われている。家の壁はタケで編まれ、自然の光と新鮮な空気が簡単にとりいれられるようになっている。各家にはベランダがあり、戸口の右手の隅には、水を貯蔵するタケのパイプがある。左側の中央部に炉がつくられている。薪が燃料である。左側の部屋の後方は、レイクナハムン (reiknahmumun) とよばれ、寝室にあてられている。多くの家には、ベランダがあり、洗濯物を干したり燃料を乾燥する場所としてつかわれる。家の内部では、プライバシーは保たれない。トイレはない [SINGH 1965c: 4]。

<262 食事>食事は、朝、午後おそくと夜の3回とり、コメと煮た肉と野菜を食べる。<27 飲み物、薬物、嗜好品>タバコは、非常に好まれる。かつて村人は、ズー (zu) とよばれるライス・ビールを好んでいたが、キリスト教に改宗後、そのような嗜好品をやめ、紅茶を飲むようになった [SINGH 1965c: 4]。

<29 服装>服装は、キリスト教が入ってきてから、人々は、西洋的なスタイルを好むようになった。男性は、長いズボン、シャツ、冬季には、羊毛のコートを着る。祭のときには、ネクタイをしめる。年長の男性は、女性が織ったフレンペレング (hrenpereng) という長さ1.5メートルで、60センチ幅の長い布をズボンのかわりに着る。上半身には、長さ1.8メートルで、1.2メートル幅の布をまく。女性は、ブラウスを着て、約1メートル幅で1.2メートルの長さのタルライザウン (tharlaizawm) という腰布をまく。寒い時期には、2.4メートルの長さで1.2メートルの幅の広い布を上半身にまく。また、タンウロプオン (tanwlopuon) とよばれ、未婚のものだけ着ることが出来るものがある。2.4×1.2メートルの大きさに、赤い縁どりで、5本の太い赤い色の縞がはいり、その縞の間に黒、白、青の縞が入っている。<301 装身具>装身具は、現在ではあまり注意をはらわれていない。イヤリング (nabe)、ネックレス (thi)、腕輪 (sumkol) が一般に身につけられる。<302 身だしなみ>髪は、男性は短かくし、女性は長くのばしてなかほどで分け、結び目をつくる [SINGH 1965c: 5]。

<843 妊娠>誕生に関する信仰や儀礼は、次のようなものである。妊娠中の女性は、畑を耕したり、衣類を洗ったり、食事をつくるなどの通常の仕事は制限されない。特別な食事はない。妊婦は、流産しないように川を渡ることを禁じられている。腹部を露出させると、悪霊が子宮に入り、子供を殺すと信じられている。<844 出産>出産は、ベッドのうえでおこなわれる。産婆はいないので、経産婦が介助する。へその緒をとがったタケで切り、妊婦の兄弟が、出産した場所の床の真下の地面に後産を埋める。男子誕生の場合は、弓のミニチュアが家の中央につるされる。これをおこなわないと、将来、その子が家を離れていくといわれる。出産後、3日間は、何も家から持ちだすことはできない。出産のあった家では、草を入口につるし、子供の誕生を知らせ、家のなかに誰も入ってこないようにする。<553 命名>4日から5日後、子供の祖父が名前をつける他は、特別な名づけの儀礼はない [SINGH 1965c: 6]。

<58 婚姻>結婚は、見合いによるものが一般的である。結婚には、4つの形態がある。まず、カウングダウ (kawngdaw 奉仕による結婚) は、若者が結婚相手の娘の家で、2年から3年、労働奉仕をおこなって結婚を認められるものである。つぎに、マクパ Sungkhum (makpasungkhum 侵入による結婚) は、若者あるいは娘がどちらかの家に入って、そこに夫や妻としてとどまることを主張し、結婚を認めさせるものである。サニ (sani 駆落ちによる結婚) は、若者がパーティーに友人を招待し、駆落ちした娘を紹介して成立する。レング (leng) あるいはインビエ (inbie 見合いによる結婚) は、花婿の側から結婚の申し込みがあり、花婿の近親者が仲介する。花婿の父、

兄、姉妹の夫が花嫁の家へ行き、結婚を申し込む。もし、申し込みが受入れられたら、婚約のしるしとして、鉄の鍬と女性のペチコートが花嫁の家族に贈られる。この日に宴がひらかれ、花婿の側が、ズー (zu キリスト教に改宗後は紅茶) を客にふるまう。花嫁の父親は、1匹のブタの半分に分け、片方をあつまった客にふるまい、残りの片方ともう一匹は、花婿の家へおくられる。花婿の家から婚資が贈られるが、その額は、クランによって異なっている。Zote クランは、もっとも多く、ミタン牛7頭で、Lughtau クランはもっとも少なく、ミタン牛3頭である。それに加えて、さまざまな額のお金が、花嫁の側へ贈られる [SINGH 1965c: 6]。

<582 婚姻規制>マー族は、姉妹、母親、叔母、祖母をのぞいて、いかなるクランの人とも結婚できる。しかし、実際には、母方の兄弟の子との優先婚がみられ、また親族が拡大するという理由で、クラン外婚制が好まれる。父方の兄弟の娘との結婚は除外されている。レヴィレート婚は、兄弟の未亡人と結婚する形態で時々みられる。ソロレート婚はほとんどみられない [SINGH 1965c: 8]。

<428 相続>遺産は、末子だけがうけつぐ権利をもつ。実際には、結婚後、息子たちは、ブタやニワトリや布を分配して相続する。娘は相続しない [SINGH 1965c: 8]。

<775 来世観>死に関して、マー族のあいだには、次のような伝統的な信仰がみられる。死者の魂は、マニプールとビルマの間にある想像上の場所であるリー (Rih) をとおって、トゥランピェルコット (Thlanpielkot) またはピエラル (Pielaral) とよばれる死者の地にたどりつくという。生前のおこないの結果によって、死後の生活が幸福になるかどうかが決まる。マー族は、魂の不滅を信じている。ある人がトラなどの野獣に襲われたら、その人は、不義の結果として生まれた人だと信じられている。また、雷の音は、死者の渇きのあらわれと考えられている [SINGH 1965c: 8]。

<764 葬式>遺体は、死者の家族の友人や近親者の年長者によって、お湯で洗われる。もし、午前中に亡くなったら、その日に埋葬するが、午後であれば、次の日に埋葬する。しかし、村の首長が亡くなった場合には、2日から3日、家におく。2か月未満の子供が亡くなった場合には、家の床下に埋める。墓を掘るのは、少年たちの仕事である。遺体は、老人や死者の娘や兄弟の夫によって運ばれる。運ぶあいだ、遺体の頭は墓の方へ向いていなければならない。キリスト教徒であれば、埋葬のときに、村の司祭が聖書を読む。埋葬するときには、死者の私物、パイプ、飾り、衣類も一緒に埋める。死者の家族は財力に応じて、動物を供犠する。死者の家族に、死の不浄はみられない。しかし、村の家族の誰かが死んだら、死者の近親者は、死者の家族に死者の代用としてミタン牛1頭または40ルピーをあげて、死者の家族をなぐさめる

[SINGH 1965c: 8-9]。

<24 農業>農業は、この村の人々の主要な生業である。一年間、焼畑耕作がおこなわれた土地は、再耕作される前に5年から6年間、放っておかれる。耕作のための用地の選択は、個人的な問題ではなく、村の首長とその補助者によって決められる。耕作用の土地の大きさは、家族の人数とその家族が一年間に管理できる土地の大きさによって決められる。土地の耕作は、男と女が共同しておこなう。他の人々の土地の耕作も手伝う。1月のなかば頃、木が切り倒され、燃料として家に運ばれる。小さい枝は残しておき、耕作地にばらまく。枝が乾いた3月頃に、火がかけられる。その灰が肥料となる。鉄の鍬で土を耕し、掘った穴に稲の粃を入れていく。あるものは太鼓をたたき、笛を吹き、歌を歌う。12月の収穫時にも、人々は共同して働く。耕作地は、村から20キロメートル以上離れたところに位置しているので、穀物の貯蔵のために家から半マイル離れたところに、出作り小屋をつくる。コメが主要な作物だが、トウモロコシ、綿、コショウ、ショウガ、オレンジもつくられる。コショウは、この村の重要な換金作物であり、4分の3をマーケットで売る [SINGH 1965c: 9]。

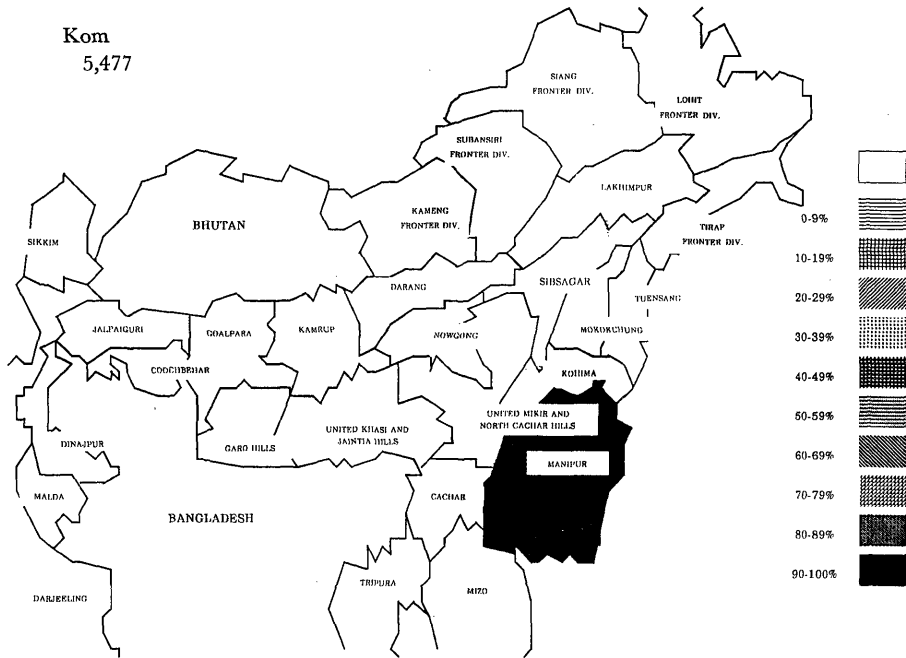
<23 家畜飼養>家畜は、ウシ、スイギュウ、ブタ、ニワトリ、ヒツジが各家で飼育されている。豚肉と鶏肉は非常に好まれる。ウシは、ミルクと肉を供給するために飼育される。家畜は組織化された形で飼育されているわけではない。市場用ではなく、自家消費のために飼われ、儀礼や祭と結びついている [SINGH 1965c: 10]。

<286 織布>副次的な職業としては、女性が織物業に従事している。女性は、小さいときから、自分用の小さい織機で練習し、織物を習得する。10代のなかばにはすべてのタイプの織物に熟達し、綿をつかって自家消費用に織物を織る。

<77 宗教的信仰>村の神には、パティエンタック (Pathientak 最高神)、バンフリット (Vanhrit 出産と死後の魂の神)、クヌ・クパ (Khunu Khupa 生物と物質の神)、カウチャワン (Khawchawan 夜にあらわれる悪霊) などがある。キリスト教が普及してから、非キリスト教的な神への信仰は、衰退している。村の人々は、クリスマス、新年などのキリスト教の行事を祝う。この村にキリスト教が入ったのは、1913年のことである。村には、2つの教会がある。1913年から1960年のあいだに821人のキリスト教徒への改宗者がいた。1960年には、50周年を祝う記念碑がつけられた [SINGH 1965c: 17]。

(八木祐子)

コム (Kom)



Sen, D. K. 1971 “Annexure to the Tribal Map of India” Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>コム族は、古クキグループに属する集団で、マニプール州の南西部におもに居住している。

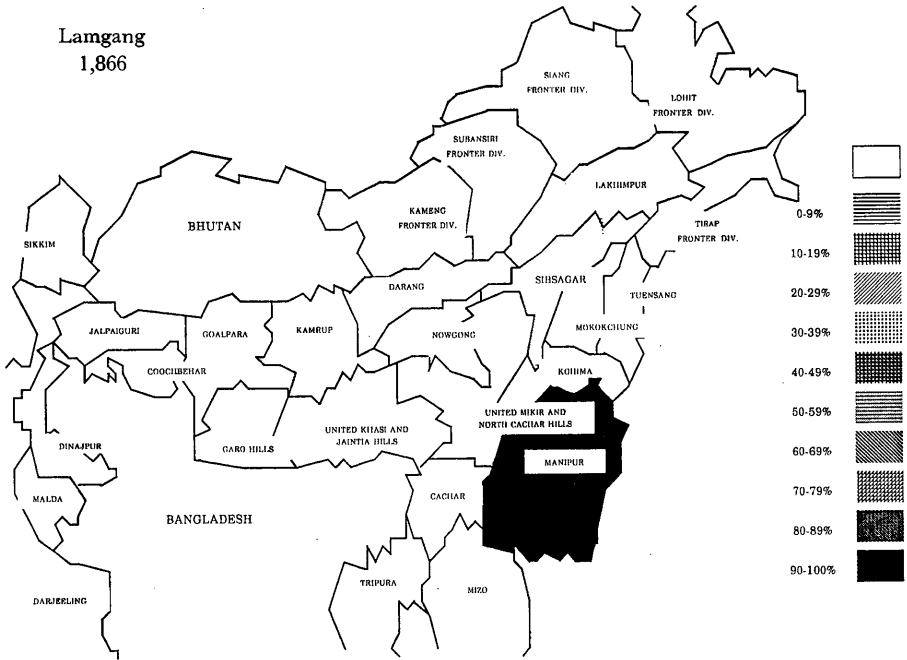
<161 人口>1961年のセンサスにおいては、5,477人、1971年のセンサスでは、6,550人の人口が、マニプール州において記録されている。コム族に関する情報は、シェイクスピア (Shakespeare) の “The Lushei Kuki Clans” に、断片的な記述がみられるだけである [SHAKESPERE 1912]。

<173 口碑・伝説による歴史>彼らは、チン山地 (Chin Hills) にあるサクリプング山地 (Sakripung Hills) からやってきたといわれている [SHAKESPERE 1912: 150]。

<882 青年の地位>コム族は、チル (Chiru) 族などとともに、若者宿であるゾウルブック (zawlboek) を建てることで知られる。そこには、女性は入れず、若者が宿泊して、酒宴をおこなう [SHAKESPERE 1912: 151]。

(八木祐子)

ランガング (Lamgang)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>ランガング族は、古クキグループに属する集団で、マニプール州の南西部に居住する。最近、ランガング族はクキ・チン諸族よりもナガ諸族に自らのアイデンティティを求める傾向がある [KABUI 1985: 10-11]。

<173 口碑・伝説による歴史>彼らの出自伝説は、古クキグループに共通してみられる洞窟伝説である。カングマング山地 (Kangmang Hills) の南の方に洞窟があり、ここから出てきた男女がトラに食べられた。この光景をみた2本の角をもつ神がトラを打ち負した。次に洞窟からあらわれた男女を逃がして、ランガングの祖先とした [SHAKESPERE 1912: 150]。

<621 コミュニティの構造>ランガングの社会組織は、アナル (Anal) 族、プルム (Purum) 族と共通したものが多い。7人の村役によって政治がおこなわれる。これは、世襲制である<58 婚姻>婚姻は、クラン内婚制、家族外婚制である。花婿は、結婚に際して、花嫁の父に、3頭のブタまたはスイギュウ、雄牛、さらに巻き貝のジュズダマ、鉛の腕輪、黒か青色のペティコートを支払わなければならない。<595 複婚>一夫多妻は、認められている。<428 相続>相続は、死者の遺産を息子で分け、

末子が家を受け継ぎ、未亡人の面倒をみる [SHAKESPERE 1912: 153]。

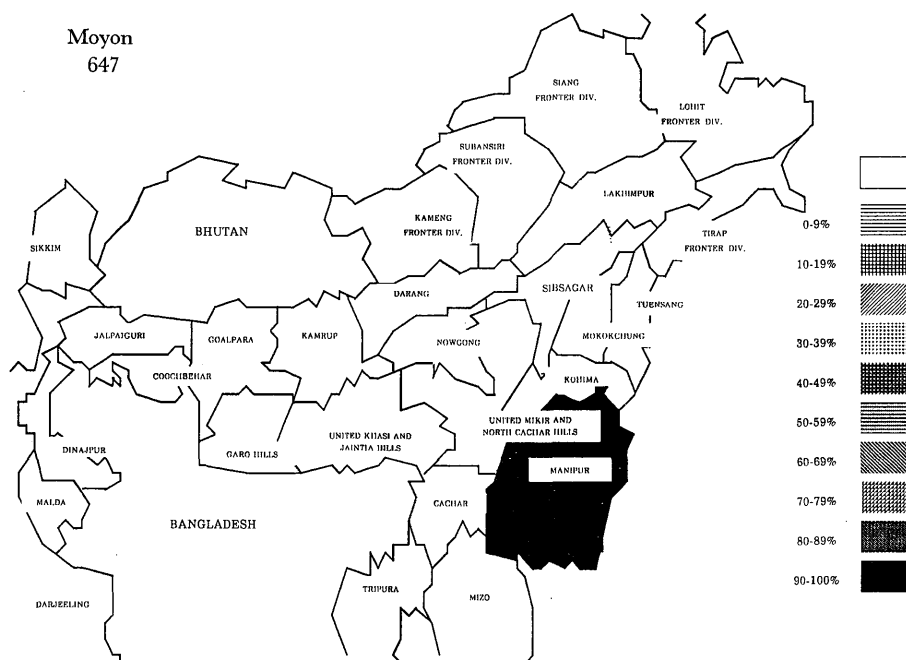
<844 出産>通過儀礼の様式や観念も、アナル族と共通するものが多い。しかし、出産後の忌みこもりの期間、父親は行動を制限され、ニワトリの肉を食べてはならないが、母親の方は、食事に関しては何の制限もみられない。この期間は、いかなる動物も供儀されない [SHAKESPERE 1912: 162]。

<775 来世観>死者の魂が、墓のまわりをうろつき、再びこの世に赤ん坊として再生するという信仰もアナル族と共通している [SHAKESPERE 1912: 158]。

<788 儀礼>また、穀物の収穫後、すべての穀物が穀倉に蓄えられた段階で、祭をおこなう。10日間、村に入らず、何もせず、ひたすら飲食に費やす。これは、ランガング独特のものであるとシェイクスピア (Shakespeare) は指摘している [SHAKESPERE 1912: 170]。

(八木祐子)

モヨン (Moyon), モンサン (Monsang)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>モヨン族およびモンサン族の人々は、マニプール州のテングノ ウパル (Tengnoupal) 地区に住む。近接の部族には、アナル (Anal) 族, チル (Chiru) 族, チョウテ (Chote) 族がいる。1961年のセンサスでは、モヨン族が647人, モンサン族が1,342人, 1971年のセンサスでは、モヨン族が1,360人, モンサン族が930人の人口が、マニプール州において記録されている。この両部族は、非常に似通っているといわれるものの、その関係ははっきりしていない [Das 1986: 309]。

<101 アイデンティフィケーション>モヨン, モンサンとは、メイテイ (Meitei) 族によってあたえられた言葉である。モヨン, モンサン族を古クキグループに入れてよいかどうか諸説がある。また、最近では自らのアイデンティティをクキ・チン諸族よりもナガ族に求める傾向がみられる [KABUI 1985: 10-11]。モヨン, モンサン族は、自分たちのことをシルティブジュル (Sirtibujur 洞窟の人) とよぶ。これは、シール (siir 洞窟) とジュル (jur 人) という言葉から派生している [Das 1986: 310]。

<173 口碑・伝説による歴史>出自伝承によれば、彼等の祖先は、中国の中央部のどこかにある洞窟からやってきたといわれている。人々は、何世代ものあいだ、地下

の世界に住んでいた。人びとは、洞窟をでて地上のもっと住みよい生活をもとめていたが、洞窟の入口で一匹のトラが見張り、洞窟からでてきた人びとを食べていた。あるとき、ミラング (Mirang) という勇敢な男が、オンドリを偵察につかい、鳥たちに人間のつくった穀物を食べてもよいと約束して手助けをしてもらった。ミラングは弓矢で首尾よくトラを殺し、それからモヨン・モンサン族の人々は地上に出ることができるようになったという [DAS 1986: 310]。

<112 参照された文献>モヨン族に関するまとまった文献資料は、1965年にインド政府が発行したヴレリッジ・サーヴェイ・モノグラフのリワチャンニン (Liwachangning) 村の資料しか入手できなかったのもので、以下、これにしたがい、記述をおこなう [SINGH 1965b]。モンサン族に関する単独の資料は得られなかった。

<618 クラン>モヨン族は、2つの外婚クランにわかれている。Wangchar と Bungru である。それぞれ、サブ・クランを7つずつもつ。メイティ族の村が近接しているので、かなりメイティ族の影響を受けており、Wangchar のクランは、メイティ族の Ningthouja というクランに同一化されている。クランの間にヒエラルキーはみられない [SINGH 1965b: 3]。

<19 言語>言語は、チベット・ビルマ語族クキ・チン語群に属するモヨン語を話すが、マニプール語にも精通しており、第2言語として、マニプール語を実用的に使用している [SINGH 1965b: 4]。

<621 コミュニティの構造>各クランは、それぞれ1人の代表者がいる。代表者の地位は、肩書きだけであり、実質の権力をもたない。村の首長は、村落議会の議長であり、議会は12人の成員によって成りたっている。議会では、財産にまつわる論争を解決し、盗みなどの犯罪を処理する [SINGH 1965b: 18]。

<361 集落形態>集落は、一か所に集中しているわけではなく、地域全体に分散している。<342 住宅>家屋は、タケと木で枠組がつくられ、平均の大きさは、約5×9メートルである。土台から廂までの高さは、最低で1.2メートルあり、地面からの高さは1.8メートルである。各家は、床面積の5分の1のベランダをもっている。家屋の内部は、部屋ごとに区切られていない。炉は、玄関の左側におかれ、ベッドは、家の後方におかれている。浴室およびトイレのための建物はない。家畜小屋は、一般に居住家屋の後ろにつくられている。家を建てたいと思うものは、村人に協力を頼む。入居式は、吉兆な日を選んで、ウシとニワトリをザトゥラ (Zatra) という家の柱に宿る神にささげてとりおこなう [SINGH 1965b: 4]。

<291 一般的服装>服装は、男性はベストとシャツを着て、ズボンをはき、さらに

ダル (dar) とよぶ腰布も着る。布は1.5メートルの長さで、75センチの幅である。ピイン (piin) は、モヨン族の伝統的な服装であり、イニイ (inii) とよぶ黒と白の上着とハル (har) という1.5メートルの幅の下着によって構成されている。ふつう、女性は、ベストとブラウスを着て、布を下半身に巻く。また、カネ (kane) は、1.5メートルの長さ、0.9メートルの幅の布でできており、既婚の女性は、胸の上に巻く。＜302 身だしなみ＞男性は、髪を長くのばさない。顎髭、口髭も一般にみられない。女性の髪は、ヘアピンや櫛を使ってととのえられる。＜301 装身具＞昔は、男性も飾りを身につけていたが、現在は、女性が首と腕輪と耳につけるだけである [SINGH 1965b: 4-5]。

＜262 食事＞食事は、コメと野菜と肉を常食としているが、村人は貧しいので、肉を毎日食べる余裕はない。キャベツ、カリフラワー、カボチャ、ジャガイモを食べている。一日、2食である。＜27 飲み物、薬物、嗜好品＞紅茶を飲む習慣があり、約12センチの長さの木製のパイプでタバコを吸う。ライス・ビールはよく飲まれる [SINGH 1965b: 6]。

＜24 農業＞農業が生業の中心である。稲が主要な作物であり、アルム、オオバコ、コショウなども少量だがつくられている。丘陵部では、農地の90パーセント以上が、コメづくりに使われ、のこりは、他の穀物とバナナ、コショウが部分的に植えられる。平原部では、2月から耕作がはじまるが、激しい降雨の5月と6月にも再び耕される。6月に稲が正条植えされる。灌漑設備はない。10月、11月に稲が実る。稲の穂を茎からおとすために、広いタケのマットを農地にひき、そのうえで脱穀する。丘陵部では、乾燥した植物を燃やして、土を肥させ、そのあとに穴をあけて種をうえる。コショウやバナナ、アルムなどが市場で売られる [SINGH 1965b: 6]。

＜286 織布＞織物は、村内の経済的生活において重要な産業である。男性と女性のための腰布とショールがつくられる。織った布は、家で使い、また市場で売る。各家に1台は、織機がある。女性は毎日1時間、織り物を織り、1か月に2つの布を織る [SINGH 1965b: 15]。

＜844 出産＞息子の誕生は、娘の誕生より好まれる。というのは、息子は、娘にくらべて、長く家にとどまり、家族の労働の担い手になるからである。イトゥム (ithum) という産婆が、出産を介助する。お礼にライス・ビールと現金を少しもらう。産婆は、とがったタケでへその緒を切り、後産とともに小さな土の壺にニワトリの羽と一緒にいれ、家のうしろに埋める。不浄とされる期間は、Wangchar クランは1日、Bungun クランは、3日である。村の司祭であるテンプ (thempu) が浄化儀礼をおこなう。

ザトゥラ (Zatra) という神に、子供の長命を祈って供犠をする。3歳になると、母方の叔父が、耳に穴をあける儀礼をおこなう。ウシとブタが1頭ずつ殺され、人々をまねいて宴会が催される。このとき両親が子供の名づけをする [SINGH 1965b: 5]。

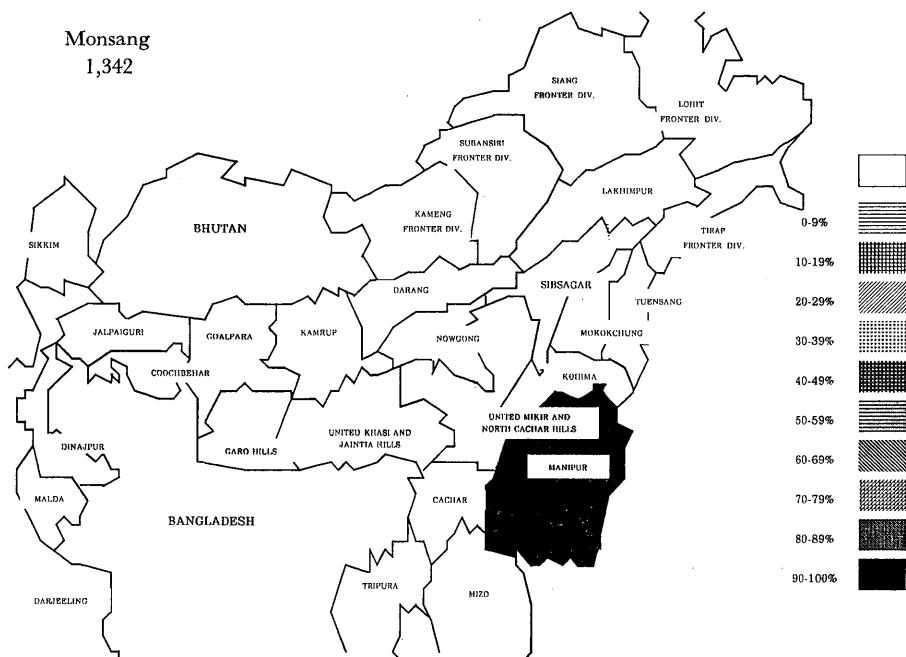
<582 婚姻規制>婚姻は、クラン外婚制である。結婚相手は、村内に限られていない。イトコ婚は、認められている。<595 複婚>一妻多夫の慣行も認められている。

<58 婚姻>花婿側の申し込みが、花嫁の家族によって同意されると、結婚式がおこなわれる。アメン (amen) という婚資が結婚式の前におくられる。婚資は、ブタ1頭、ミタン牛1頭、布類、ライス・ビールなどである。結婚式は、教会で、キリスト教の司祭により、指輪の交換などキリスト教の様式でおこなわれる。男性は20歳から25歳、女性は15歳から20歳で結婚する者が多い [SINGH 1965b: 6]。

<428 相続>結婚後、息子は両親から独立し、農地をすこしわけてもらって、新しい家で生活をはじめる。末子が家の大黒柱とみなされ、父親の不動産を相続する。のこりの財産は、息子達で等しくわける。娘には相続する権利はない。未亡人は、もし子供が小さくて再婚していなければ、一部の財産を相続する [SINGH 1965b: 6]。

<764 葬式>葬式は、死者の家族が、ザトゥラ (Zatra) に2頭のブタと一頭の雄牛をささげ、死者の霊がやすらかになることを祈る。遺体はお湯で洗い、新しい布で包んで、木の棺桶にいれ、村の墓地に埋める。死の不浄は、1日だけであり、死者の衣類はすべて燃やされる。司祭が、タイレン (Tairen) の木に水をまき、死者の家族に水をかけて浄化儀礼をおこなう [SINGH 1965b: 7]。

注 モンサン族に関しても、1961年度のセンサスに人口が挙げられている。



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

(八木祐子)

プルム (Purum)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>プルム族は、マニプール河谷に居住し、古クキグループに属する部族である。<131 位置>プルム族が住む東の地域は、ビルマの上部チンドウィン (Upper Chindwin) 地域につづく丘が広がっている。隣村の部族には、メイティ (Meitei) 族がおり、文化的に強い影響をうけている。また、プルム族の居住地域の南には、コム (Kom) 族、アナル (Anal) 族、東と北東には、アイモル (Aimol) 族、ランガング (Lamgang) 族、チョウテ (Chote) 族など古クキグループおよびタドー (Thadou) 族がいる。プルム族の村は、北緯24度23分と24度27分、東経93度56分と64度2分の間にある [Das 1945: 15-16]。

<19 言語>言語は、チベット・ビルマ語族クキ・チン語群に属するプルム語をばなす [GRIERSON 1927: 74]。

<173 口碑・伝説による歴史>古クキグループには、共通して洞窟出自伝説がみられるが、プルム族の場合も、プルムという言葉は、「トラからの隠れ場所」を意味し、ランガング族の出自伝説と類似している [SHAKESPERE 1912: 150]。

<592 世帯>家族は、核家族の形態をとるものが多い。拡大家族はまれにしかみら

れない。プルム族の家族は、父方居住である。＜428 相続＞相続は、末子相続であり、他の息子は、結婚すると家を離れる。末子が両親の面倒をみて、財産のほとんどを相続するが、たいていはほぼ平等に兄弟間で分けて、一番大きいとり分をとる [Das 1945: 111]。

＜618 クラン＞プルム族には、Marrim, Makan, Kheyang, Thao, Parpa の5つのクランがあり、各クランには、最大4つのサブ・クランがある。同じサブ・クランの成員は、血のつながりがあり、サブクラン内の出自は父系をたどる。サブ・クランの名前は、父から子へ受け継がれる。＜621 コミュニティの構造＞各サブ・クランには、クランの長であるピパ (pipa) がいる。ピパの子供は、父の死後、その仕事を受け継ぐ。クランの重要な社会的機能は、結婚の統制である。＜583 婚姻の様式＞5つのクランのそれぞれが外婚単位であるが、現在ではこの観念は消えつつあり、クランの観念はサブ・クランへと移りつつある。以前は、プルム族の若者と娘は、1つかそれ以上の選択されたクランとしか結婚できなかった [Das 1945: 117-121]。

＜601 親族名称＞プルム族の間では、異なるクランの間で構成される姻戚関係をもとにした多くの呼称がある。それぞれの男性にとっては、クランは、彼自身と彼自身の父親のクラン、母親のクラン、姉妹の夫のクランの3つのグループに分けられる。女性にとっては、彼女自身と彼女自身の父のクラン、母親のクラン、夫のクランの3つのグループに分けられる。このグループにもとづいて7つの呼称がある。たとえば、男性は、自分と同じクランの女性を、もし自分より年長ならアウ (au) と呼び、若いものなら名前と呼ぶ [Das 1945: 125-126]。

＜647 行政機関＞村には、8つの村落機構があり、村内の争いの解決や税の徴収、宗教的儀礼のために、それぞれのポストに応じてブタやコメを集めたりする仕事がある。ポストは世襲制でなく、高位の地位の人が死ぬと、自動的に下位の地位の人が繰りあがる。一番下位のポストには、死んだ人の息子がつく。新しい地位についたときには、ブタやズー (zu) という酒を、それぞれの村へ地位に応じて供給しなければならない [Das 1945: 172-179]。

＜29 服装＞男性のふつうの作業用の服は、腰布の1種で、45センチメートルから56センチメートルの長さで、60センチメートルから75センチメートルの幅である。すべて、焼畑で栽培した綿で女性達がつむいでつくる白い布である。寒いときには、厚い生地で色つきの上着を着る。プルム族の上着には、ランガンブスム (rangambusum) とアオア・アンピ (aoa-ampi) というものがある。前者は、若者も年長者も着るが、後者は、年長者だけが着る。しかし、村落共同体の高位の者は、40歳以下でも、権威

ある地位をあらわすために着る。女性は、どちらも着ない。後者は、水中に住むヘビの肌を模したデザインであるといわれる。プルム族の女性は、えりから胸まで一枚の布でおおっている。下に着るものは、白色の簡単なデザインだが、儀礼のときには、赤と黒の縞模様の布を着る。ほとんどのものは、家で作られるが、最近では、近くの市場やインパールから購入するものもある。シャツやパンジャビー・ドレス、ベストは、そのようにして購入されたもので、男性が儀礼のさいに着る。女性たちも儀礼のさいには、ベルベッドからつくった長袖のブラウスを着る [Das 1945: 97-98]。
<301 装身具>装飾品は、指輪、耳輪、ネックレスをつける。ほとんどがメイティ族の商人から買った真鍮製である。金や銀製のものはみかけない。男性は、真鍮製の首飾りをつける [Das 1945: 99]。

<342 住宅>家屋は、タケで作られ、床は土台から30センチメートルから60センチメートルの高さにある。家の大きさは家族によって異なっているが、ある村の首長の家は、およそ16メートルの高さで、幅はおよそ8メートルである。それぞれの家には、ベランダがあり、壁はタケのマットで作られている。屋根は草で葺かれ、屋根の格子はタケで作られて、寄せ棟の形式と妻切りの形式がある。戸口は、2つある。家の左手の中央の柱が最初に建てられるが、これは宗教的な意味があり、月曜日に建てられるのが吉兆だとされる。家の内部は各部屋に分かれていないが、観念的には、家の左側はプムリル (phumlil), 右側はニンガン (ningan) に分けられる。左側は、家の主人および未婚の娘と息子が眠る場所で、右側は、義理の息子、客、家に夜やってくる若者が眠る場所である。家族の炉は、家の後方にあり、炉のうえに干し魚と干し肉のための棚がつてある。牛小屋や穀倉が少しはなれたところにつくられている。プルム族の家は、戸外のベランダ、高い廂、寄せ棟形式の屋根などメイティ族の影響を受けている [Das 1945: 46-48]。

<24 農業>主要な生業は農業である。焼畑耕作と水稻耕作の両方をおこなっている。マニプール河谷の畑は、ほとんどメイティ族によって耕作されているが、丘の斜面にある畑は、プルム族やこの地域に住む他の部族によって耕作されている。耕作地は、各人が適当に選ぶが、選んだ土地の木を伐採し、そこに皮の一部をはがして印をつけた大きな木をたて、木をくみあわせてその土地を囲む。耕作地を選んだあと、夢でその耕作地が適当か占われる。耕作地の所有者が、夢のなかでラム・ヘル (Lam-hel) という土地の精霊と良い言葉をかわしたら、それは良い知らせで仕事をすすめてもよい。しかし、精霊が、不快なしるし、けんかのサインを示したら、その土地を捨て、新しく求める。もし、耕作地が肥沃であれば、最高4年間耕作され、そのあと10年間

放っておかれる [Das 1945: 52-55]。

ジャングルは、ファイレル (Phairel 2月から3月) 月に切り開かれる。大きな木は切られず、枝だけ刈りこまれる。ラムタ (Lamta 3月から4月) 月に、ジャングルの草が乾いたら、火がかけられる。ジャングルを切るときには、何人かの人々が、「ヘイホー、ヘイホー」とかけ声をかけながら、列をつくって進む。カレル (Kalel 5月から6月) 月に、雨が期待される頃、灰の上に播種される。ゴマもまた同じ時期に稲と混ぜてまかれる。同じ畑の一部にタマネギ、他の適当なところに、ヒョウタン、キュウリ、トウモロコシが植えられる。除草は、インガ (Inga 5月から6月) 月、インゲル (Ingel 7月から8月) 月、タオアル (Thaoal 8月から9月) 月の3回、おこなわれる。鋤の形をしたアツ (atu) とよばれる鉄の道具を使う。穀物が実ってきたら、出づくり小屋をたてて、動物や鳥から穀物を見張る。収穫は、メラ (Mera 10月から11月) 月から始まり、稲の穂の下から3センチメートルから5センチメートルのところで刈りとり、籠にいれて小屋に運ぶ。そこで、実を穂からたたきおとす [Das 1945: 55-58]。

水稻耕作もマニプール河谷でおこなわれている。犁耕作は、カレルの月にはじめられ、タオアルの月におわる。2回から3回、耕作されたあと、近くの小川から水をひく。水田は、7回ほど耕され、別のところで育てた稲が移植される。除草は、移植のち一回だけおこなわれる。パイヌ (Painu 12月から1月) 月に実りはじめ、ワクチン (Wakching 1月から2月) 月頃に穂が刈りとられる [Das 1945: 61]。

<788 儀礼>多くのプルの儀礼は、農業と結びついている。ヌングチュングバ (Nungchungba) の儀礼は、ファイレルの月におこなわれる。焼畑が切り開かれたときで、1年の農作業の始まりと関係している。この儀礼の間に、卵占いによって、次の年の村の将来が占われる。7日間、歌や踊りの宴が続く。この間、作業はタブーである。また、プル族の人々は、自分のクランの長であるピパが、最初の収穫をサナマヒ (Sanamahi) という神にささげる前には、収穫作業をはじめられない [Das 1945: 57]。

<23 家畜飼養>家畜は、雄牛、スイギュウ、ブタ、ニワトリが飼われる。雄牛、スイギュウは、朝に森に連れていき、草を食べさせ、夕方に連れかえって小屋にいれる。雄牛は、食肉用、荷役用で、ミルクは飲まれない。ブタ、ニワトリはふだんの食肉用、儀礼のさいの供儀用である [Das 1945: 55]。

<226 漁労>漁業は、職業としてはおこなわれていない。家で食べるために獲り、市場では売らない。網はなく、釣竿と罟がつかわれる。ある種類の魚は、サナマヒの

仲間と考えられ、獲るのはタブーである。ルピ (rupi) は、円錐形で、サトウキビでつくった紐がタケにむすばれている。2メートル75センチの長さで、口のまわりは、約2メートルである。罌の口は、片方は開き、もう片方は閉じている。魚がとりだしやすいように2つの部分に分けられている。浅瀬に仕掛けられる。カポウル (kapouru) は、円筒状で、80センチメートルの長さで、中央部で60センチメートルの幅である。タケとサトウキビでつくられ、中央部にバルブがある。一方の口が開き、もう一方が閉じている。仕掛けるときは、開いた口を草で閉じる。タイセプ (taicep) という罌は、タケとサトウキビの紐でできた四角い箱である [Das 1945: 68-71]。

＜224 狩猟とわな猟＞狩猟は、生計のためにはおこなわれず、農産物を守るためにだけ、鳥や野獣を殺す。銃はめったに使われず、弓矢を使うことが多い [Das 1945: 71]。

＜286 織布＞紡績と機織りは、プルムのあいだで、重要な仕事の一つである。男性は籠づくり、女性は機織りに従事している。プルム族は、マニプール製の織機も使っているが、もっとも一般的には、インドネシア製の改良型の織機を使っている [Das 1945: 100-102]。

＜262 食事＞食事は、1日に3回とる。犁耕作の導入以前は、焼畑に頼らなければならず、不安定な収穫であった。焼畑でとれる量は、家族をやしなうのに十分でなく、植物の根の採集がおこなわれ、酒を飲む量が多かったといわれる [Das 1945: 77]。

料理には、煮る、焼く、揚げるの3種類の料理法がある。ンガ・ンダイ (nga-ndai) は生魚のカレーで、ターメリック、チリ、コリアンダー、ゴマ油を使う。野菜は加えられない。ンガ・カンガ・アン (nga-kang-an) は、干し魚のカレーで、部分に切って、スパイスの入ったお湯で煮る。タロイモ、ヒョウタン、カボチャがくわえられる。ンガ・アン・ルン (nga-an-run) は、コメと干し魚のカレーである。アン・パル (an-pal) は、干し魚のカレーで、魚を小さく切って、ターメリック、オニオン、チリをペースト状にして、コリアンダーの葉を入れる。他にも、肉のカレーがある。干し肉も、塩もスパイスも使わず火にあぶただけで食べられる。マメのスープは、チリや塩のスパイスをいれてつくる。

＜273 アルコール飲料＞飲物では、ズー (zu) というライス・ビールが飲まれる。ズーには、発酵によるものと蒸留によるものの2種類がある [Das 1945: 87-89]。

＜843 妊娠＞誕生に関する信仰や儀礼は、以下のようなものである。生理がとまったら、妊娠の兆候だと考えられる。9か月から10か月目になると軽い作業しかおこなわれない。特別な儀礼はおこなわれない。＜844 出産＞分娩は、家のなかのプムリルの部分でお

こなわれる。マットの上にすわり、屋根からつるしたロープや柱につかまる。家の女性が後ろから妊婦をささえ、マイピ (maipi) という産婆がとりあげる。産婆は、分娩の前に5つの銅貨、3枚のラザー (lather) の葉、コメー握りを太陽と月にたいしてささげる。それから、妊婦の枕もとでマントラを唱える。産婆がタケでへその緒を切り、後産は、土の壺に入れて、稲の穂でふたをして、家の後方の隅に埋める。もし、動物に食べられたら、子供が泣き出して、短時間で死ぬといわれる。

<846 出産後の介護>子供が生まれると、お湯で洗い、母親のそばにおく。母親は、3か月間、食事の制限があり、ニワトリ、ブタの生肉、魚、野菜、マメ類が禁止される。コメ、魚のカレー、塩、コショウ、干した牛肉、ミタン牛の肉に火をとoshしたもののがすすめられる。出産は、タイレン (tairen) の枝かレイクム (leikhum) の木を壁につるして知らせる。10日間、母親は外出できない。産婆がレイクムの葉を燃やして浄化儀礼をする。また、ズーを火にかけてマントラを唱える。誕生後1か月で、耳たぶに穴をあける儀礼をおこなう [Das 1945: 229-232]。産婆が針で穴をあけ、8日目に鉄や真鍮製の耳輪をつける [Das 1945: 233]。

<553 命名>誕生後3日目に名づけの儀礼がおこなわれる。テンプ (thempu) という司祭が、3本の麦の穂をもち、穂を鎌で切る。麦の穂が水をいれたボウルにおとされるときに、子供の親が選んだ名前を述べる。麦の穂と一緒に沈んだら、良いしるしである。一緒に沈まなかったら、もう2度繰り返され、それでもうまくいかないときは、新しい名前が試される。たいていは、偉大な祖父の名前をつける [Das 1945: 233]。

<787 啓示と占い>名づけの儀礼のさいに、子供の将来を占う試みがなされる。男の子の場合には、司祭が、オンドリをつかまえて殺し、その脚の位置で少年の将来を占う。もし、右脚が左脚の上におかれたら、良い知らせとして考えられ、少年の母はもっと息子を授かる。しかし、逆であれば、少年は悪霊に襲われる。少女は、メンドリで同じように占われ、左脚が右脚に重ねられたら、少女の健康のしるしとされ、逆であれば、少女は病気になると考えられる [Das 1945: 233-235]。

<58 婚姻>結婚式は、若者が20歳に達した頃、娘の場合はそれより早くおこなう。結婚の相手は、若者の両親あるいは若者自身が選ぶ。<582 婚姻規制>母方の兄弟の娘との結婚はおこなわれるが、父方の姉妹の娘との婚姻は禁止されている。若者の父と若者が、ズーをもって結婚の申込みにいく。娘の父親はズーを飲んで申込みをうける意をあらわす [Das 1945: 239-240]。

<583 婚姻の様式>3年間、花婿は、花嫁の家で労働奉仕をする。3年間がすぎる

と、花婿は、自分の父親の家に花嫁をつれて帰る。自分の家に引っ越したあと、義父に対して宴をひらく。このとき、少なくともブタ1頭、ズー1杯をあげなければならない。花嫁の両親は、花嫁に布や真鍮の食器、織機をもたせる。花婿は、花嫁の出発のあとも5日間花嫁の家にとどまってから自分の家にもどる [Das 1945: 242-245]。一夫多妻は、ふつうにおこなわれないが、禁止されているわけではない。離婚はめったにみられない。再婚は、おこなわれる [Das 1945: 247-248]。

<764 葬式>死は、すべて悪霊の影響であるとみなされている。葬儀はつぎのようにおこなわれる。遺体は洗い、新しい腰布を着せる。ニワトリを殺し、料理して遺体のそばにおく。葬式に先立って、ブタが槍でころされる。棺桶は板でつくり縄でむすぶ。釘は使わない。遺体の頭部は、布でおおい、生前に使っていたターバンを巻く。男性の場合は、斧や真鍮製のカップを棺桶にいれ、女性の場合は、飾りをいれる。4枚の銅貨を布の端にそれぞれ結ぶが、これは来世への途中に食べ物を買うためであるといわれる。丘の斜面に墓地があり、クランごとに分かれている。墓を掘り、墓のうえにタケで仮設の台をつくって、あらゆる種類の食べ物をおく。仮設の台の下にヒョウタンにズーをいれてぶらさげ、さらに男性の場合は、籠に弓矢をいれてぶらさげる。埋葬したあと、参列者は家にかえり、手足を洗い、口をすすぎ、服を着替える。玄関にレイクムとカイチュ (Khaichu) の葉をいれた火を燃やし、葬式に参加した人は、その火にさわる。司祭は、タイレンの葉で水をまいて、家を儀礼的に清める。そのあと、家族はズーを飲み、ブタ肉を食べる [Das 1945: 251-255]。

<775 来世観>死後、3日間、死者の魂は、家にとどまり、それからカムング (Khamung) の方へ向かう。良い人の魂は、カムングに直接行けるが、悪い人の魂は、途中でとまって罰をうけるところへ行く。カムングは、空の西の方にあり、この世と変わらない生活であるといわれる。しかし、プルム族の人々は、死後の生活に関してあいまいな観念しかもっていないようである [Das 1945: 255]。

<77 宗教的信仰>宗教的観念は、河谷のヒンドゥー教徒の影響を強くうけている。Krishona (Krishna), Mahadeo, Aram (Rama), Durga, Kali, Yama などの神がいるが、実際には、礼拝されていない。Krishona は、最高神だといわれるが、特別に関係する儀礼はない。プルム族のあいだで重要な神は、サナマヒとヌングチュングバ (Nungchungba) である。後者は、村のはずれにまつられ、フェイレル(2月から3月)月とカレル(5月から6月)月の年に2回まつられる。実際的には、家の入場の儀礼である。ある人が新しく建てられた家に入るときには、最年長者のテンブが、竹の筒にはいったズーを床の中央にそそいでヌングチュングバにささげる。サナマヒは、

家族の神であり、サブ・クランの神でもある。家族の健康や繁栄を願って家にまつられているサナマヒをいつも拝む [Das 1945: 188–196]。

(八木祐子)

ラルテ (Ralte)



Sen, D. K. 1971 “Annexure to the Tribal Map of India” Anthropological Survey of India, Culcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション> ラルテ族は、古クキグループに属する集団で、マニプール州の南西部、ミゾラム州に近いところに居住している。1961年のセンサスによると80人、1971年のセンサスでは154人が、マニプール州に住んでいる。

<112 参照された文献>ラルテ族に関する文献は、非常に少なく、わずかにシェイクスピア (Shakespeare) の “The Lushei Kuki Clans” に断片的に記述されているにすぎない [SHAKESPERE 1912]。

<19 言語>言語的には、タドー (Thadou) 族に近く、また、ゾウルブック (zawl-buk) という若者宿をもたないところもタドー族に似ているものの、現在では、むしろルシャイ (Lushai) 族との関係が深い。<173 口碑・伝説による歴史>ラルテ族の出自伝説においても、彼らの祖先にあたる2人の兄弟のうち、弟の方が、ルシャイ族の慣習にしたがったため、クランが2つに分かれたといわれる。そのため、2つのクランは、供儀のやり方がすこし異なっている [SHAKESPERE 1912: 141-142]。

<175 記録された歴史>ラルテ族は、喧嘩好きで、大きな勢力をもつルシャイ族に吸収されるのを嫌って、かなり抵抗してきた。ラルテ族とルシャイ族の戦いの歴史は、

シェイクスピアに詳しい。＜62 コミュニティ＞アイジャル (Aijal) の北にあるルン
チャイ族のいくつかの村には、ラルテ族のクランがあり、村の首長もラルテ族がつとめ
ている [SHAKESPERE 1912: 139-140]。

(八木祐子)

ヴァイフェイ (Vaiphei, Vaiphui)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>ヴァイフェイ族は、古クキグループに属し、マニプール州の南側を中心に居住している。<161 人口>1961年のセンサスでは、8,215人、1971年には、12,347人の人口が、マニプール州において記録されている。

<173 口碑・伝説による歴史>アイジャル (Aijal) の東側に、ヴァイ・ツイ・チュン (Vai-tui-chhun ヴァイの水場) という村落居住地があり、そこがヴァイフェイ族の以前の居住地であろうといわれている。ルシャイ族が移住してきたために、以前の地を追われたのではないかと推測されている [SHAKESPERE 1912: 149]。

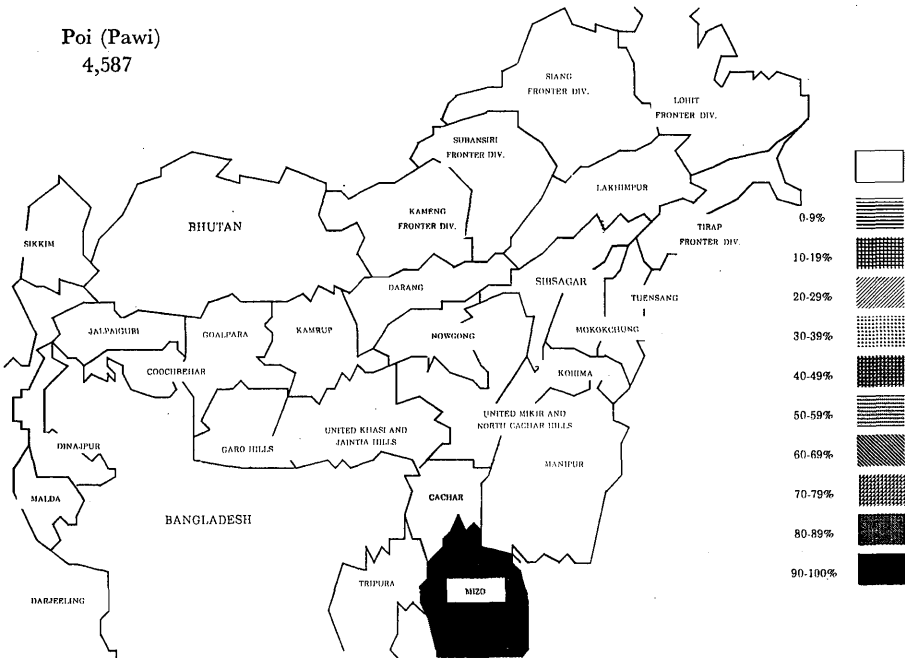
<112 参照された文献>ヴァイフェイ族に関する資料は、非常に少ない。ヴァイフェイ族固有の社会制度や政治組織などについての情報は、得られなかった。<58 婚姻>婚姻に関する情報は、婚資について、2頭から10頭のミタン牛が支払われ、この値段は、クランの相対的重要性を指摘しているとシェイクスピア (Shakespeare) が述べている程度である [SHAKESPERE 1912: 155]。ゴリ (Gori) の報告によれば、現在のヴァイフェイ族の大部分は、恋愛結婚で、のちに両親の承諾を得ているという。婚資を支払う習慣も、まだ残っている。結婚式は、キリスト教の様式でおこなわれている。

る [GORI 1984: 24]。

<764 葬式>葬式は、遺体をきれいに飾り、竹の枠に縛り、3日間、そのまわりで宴をおこなう。宴のかわりに、司祭が遺体の喉に、ズー (zu) という酒を注ぎ、安らかに出ていくように魂に告げる。それから、墓に運ばれる。<784 忌避とタブー>死者の出た家は、野獣を何匹か殺すまでは、髪を洗ったり、飾るのを避ける。また、母方の祖父が死にさいして、贈り物をあげる習慣があり、これはルシャイ (Lushai) 族にもみられるという [SHAKESPERE 1912: 166]。

(八木祐子)

ポイ (Poi), パウイ (Pawi), ライ (Lai)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>ポイ族は、ミゾラム州の南端に居住する。<161 人口>1961年のセンサスでは、4,587人、1971年には、20,682人の人口が、ミゾ山地 (Mizo Hills) において記録されている。

<101 アイデンティフィケーション>ポイ族は、ライ (Lai) と自称する。彼らは、ビルマのチン山地 (Chin Hills) にいるチン (Chin) として一般に知られている [CHIB 1984: 313]。ライは、「中央」を意味し、ビルマのチン特別区に住むハカ (Haka) のグループが、特に使用している [EMBREE 1950: 17; MATISOFF 1980: 39]。

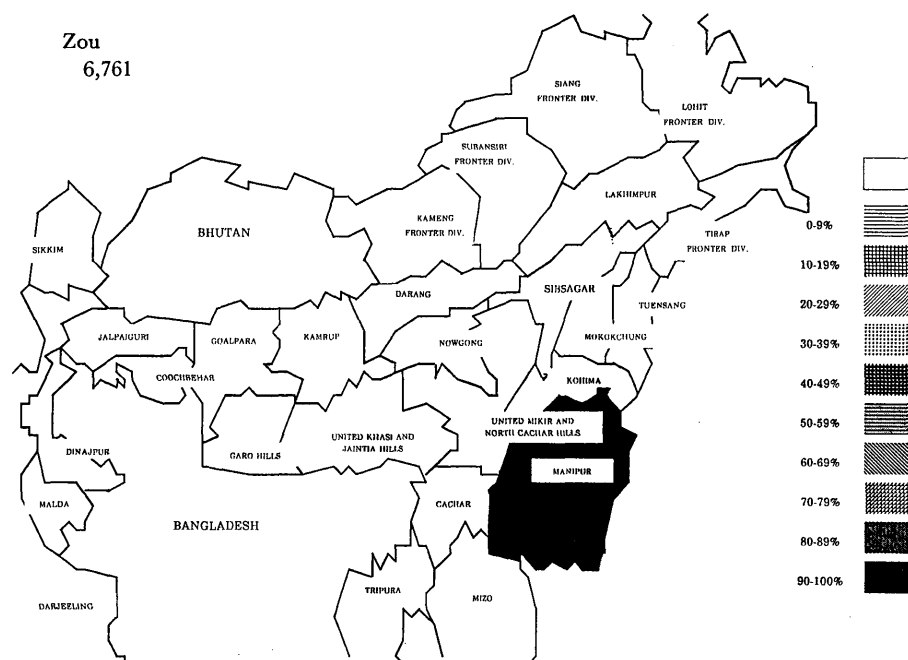
<19 言語>彼らは、ライ語を話すが、ミゾ (Mizo) 語も媒介語として受け入れている。ルシャイ族と生活様式、慣習などが、類似している。しかし、ルシャイ (Lushai) 族に比べると、ポイ族は、保守的である。一般に、ラケール (Lakher) 族とは友好的で、両者のあいだで婚姻がおこなわれることもある。ルシャイ族とは仲が悪く、ルシャイ族の若者は、しばしばポイ族の少女を誘拐する [CHIB 1984b: 313-331]。

<302 身だしなみ>男性は、長い髪を、額のところで髷をつくり、女性は、頭の頂上で髷を結っている。<428 相続>財産は、長男が相続する。<262 食事>トウモロ

コシや、タピオカを常食としており、コメはあまりつくられない [SHAKESPERE 1912: 313-314]。

(八木祐子)

ゾウ (Zou)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>ゾウ族は、古クキグループに属し、現在はシンハット・サブ・ディビジョン (Sinhath Sub-Division) に居住している。ゾウ族は、1961年のインド政府発行のセンサスにおいて、指定部族としてあげられており、1981年においても、指定部族として扱われているが、現段階においては、この部族に関して、記述するべきまとまった資料はない。マティソフ (Matisoff) は、ゾウ (Zou) 族とゾー (Zo) 族は同じ民族であるとみなしているが、他には資料がなく、確定的なこととは言えない [MATISOFF 1980: 77]。

(八木祐子)

タドー (Thadou)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>チベット・ビルマ語族クキ・チン語群の言語をもつ集団で、18世紀のなかばごろマニプール山地 (Manipur Hills) へ進出してきたタドー (Thadou) という民族を、先に現住地に移住していた古クキグループと区別して、新クキとよぶ。タドーは、好戦的な民族として知られており、タドーという名前は、「タト (that 殺す)」と「ドー (doh 戦う)」から由来したといわれている [SHAKESPERE 1912: 190]。1989年2月の栗田の調査によれば、最近では、新クキのグループにギャンテ (Gangte) 族やパイテ (Paite) 族もふくめるという。

<618 クラン> Dongel, Sit Lhou, Kipgen, Haokip が有力なクランとして知られるが、この他にも25のクランがある [DAS 1985: 47]。

<173 口碑・伝説による歴史>ももとは、現在、有力なクランとして知られる4つの家族からはじまったといわれている。すべての家族は、タドーに帰着し、さらにそれは、土のなかに住んでいたノイマングパ (Noimangpa) という神話上の英雄にあとがたどられる。Dongel はタドーの長男である。それゆえ、他の家族より、地位が高いといわれる [SHAKESPERE 1912: 189-190]。

<175 記録された歴史>この民族のもともとの居住地は、ソクテ (Sokte), パイテ (Paite), ラルテ (Ralte) 族との言語的類似などから、マニプールの南にあるコチュック (Kochuk) であるといわれる。カムハウス (Kamhaus), ソクテ, シイン (Siyin) 族などから追われて、18世紀のなかばごろマニプールへ進出した。一方、他のものは、西側へ移動し、カチャール・ディストリクト (Cachar District) の南の丘陵地帯に落ち着いた。また、1848年から1850年頃、ルシャイ (Lushai) 族によってカチャール (Cachar) へ追いたてられたという記録もある [SHAKESPERE 1912: 190]。

<19 言語>タドーの言語は、チベット・ビルマ語族クキ・チン語群の北方グループに属し、メイティ (Meitei), カチン (Kachin), ガロ (Garó), ルシャイ族の言語と古クキグループの話す方言に近いといわれる。タドーが話す言葉は、大昔、創造者パテン (Pathen) によってあたえられたといわれている。パテンは、タドー、ナガ、メイティにそれぞれちがう言葉を皮に書いてあたえた。しかし、なまけもののタドーは、ほうっておいたので、その皮をねずみやイヌやブタに食べられてしまい、文字をなくしてしまったという伝説がある [SHAW 1929: 94]。

<142 身体諸形質の情報>人種的には、モンゴロイド系である。タドーは、低い背丈で、比較的長い腕、短い足をもち、広い顔、高い頬骨、小さいアーモンド型の眼、広くてへいたんな鼻をしているといわれる [HUNTER 1879: 386]。

<131 位置>タドー族は、北は現在のコヒマ・ディストリクト (Kohima District), 東はビルマ領、南はチン山地 (Chin Hills) とルシャイ山地 (Lushai Hills), 西はカチャール・ディストリクト (Cachar District) に囲まれた地域に住む。主たる居住地は、インパール河谷 (Imphal Valley) やマニプール (Manipur) の丘陵地帯である [SHAW 1929: 11]。

<36 集落>村は、尾根の頂上か、尾根の少し下の傾斜地のジャングル地帯にある。
<342 住宅>家屋は、地上から1.2メートルから1.6メートルの高さの壇上にたてられ、木の柱とタル木でつくられている。壁はタケのマットでできており、草葺きの屋根に割ったタケがのせられている。家は大きい一部屋と玄関のベランダで構成されている。部屋の中央には、料理をするための炉がもうけられている。家の大きさは6メートルの長さで、幅は4メートルである。首長の家はひとまわり大きい。首長の家や裕福な人の家の前には、木やタケで集会場がつくられ、そこに男たちが集まって、村の政治などについて話しあう [SHAW 1929: 83-84]。

<618 クラン>タドーの社会は、小規模のクランに分かれ、さらにそれは、数多くのサブ・クランにわかれている。<62 コミュニティ>ひとつあるいはいくつかの村

を治める世襲的な首長、ラジャ (raja) がいる。これらの首長はすべて同じ出自であるといわれる。現金や労働の提供によって税金が支払われる。すべての人員が1年に4日、首長のために働く。いくつかのグループが一年中、穀物の手入れをしたり、家を修理したり、家族に水や薪を供給したりして、首長の家の使用人として働く。これらの労働の際には首長によって大きな宴がもよおされる [HUNTER 1879: 385-386; SHAKESPERE 1912: 193-194]。

<623 評議会 [カウンスル]>首長を補佐し、政治を運営していくものとしてツショー (thusho) やマントリ (mantri) とよばれるものがあり、彼らは労役からまぬがれ、彼らの手で徴税がなされる。この仕事は、厳密に言えば世襲ではないが、多くの場合、息子が父親のあとをつぐ。首長は長男にうけつがれる。マントリで構成された議会によって政治が運営される。常設の裁判所はなく、マントリが立ち会って、首長の前で訴えがきかれる。罰金が罪の程度に応じて、首長によって決められる [SHAKESPERE 1912: 194]。

<24 農業>タドー族の生業は農業である。多種類のコメがみられるが、すべて丘の中腹でつくられ、灌漑はされていない。他には、マメ類、雑穀、ジュズダマ、ゴマ、トウモロコシ、カラシ、綿、ショウガ、ターメリック、タマネギ、カボチャ、キュウリ、ヒョウタンなどをつくっている。タドーは、ナガ諸族のように、種をばらまかず、穴をほって、少しばかり種をいれ、上から土をかける。ジューム (jhum) とよばれる焼畑は、ジャングルを1月か2月ごろに切り開き、すっかり乾かして火をつける。畑の小石をとりぞいてから、種をまく。穀物が実ったら、年に3回から4回、除草する。一つの畑に多くの種類の穀物が混作される。10月に収穫がはじまり、12月のはじめにおわる。穀物は、早生、晩生の両方が栽培されるが、タドーは香りがよく、強い品種の晩生の方を好む [SHAW 1929: 87-88]。

<224 狩猟とわな猟>タドーは、狩猟の熟練者である。鉄砲や罠をつかって狩りをする。ゾウのような大きな動物を狩るときには、鉄砲に槍を込めて射ち、傷ついた獲物を追いかけて動かなくなったところを殺す。あるいは、大きな穴を掘り、なかに尖ったタケをしかけ、穴に獲物を追いこんで殺す。ゾウは、しとめた場所で解体をはじめ、牙をひきぬき、運べるだけの肉をかついで家にもどる。直接食べない肉は、干して燻製にして保存する。牙は市場で売る。トラは、ペル (pel) とよばれる大きな丸太でつくった罠を、上から落として殺す。小さい獲物は、ペルコプ (pelkop) という罠をつくってとらえる。これは、丸太を地面に互いに平行にたてて通路をつくり、その上に石をのせた重い大きな丸太をおき、獲物がとおったら、その通路がこわれるとい

う仕掛けである。リスやシカ、野ブタなどもつかまえられる。魚は、川にタケで柵をつくり、植物からつくった毒を流して獲る [SHAW 1929: 88; SHAKESPERE 1912: 196]。

<611 出自規制>タドーは、父系の単系出自で、長男が家督を相続する。<582 婚姻規制>結婚は、母方の交叉イトコ婚が優先的に選択される。家族は、妻をもらう側の家族と妻をあたえる側の家族にわかれており、妻をあたえる側の家族の方がもらう側より、地位が高い [DAS 1985: 47]。シェイクスピア (Shakespeare) によれば、「ミタン牛の供儀をおこなう家族」と「牡豚の供儀をおこなう家族」に分かれ、前者の男たちは、後者の娘たちと自由に結婚できるが、その逆はできないという [SHAKESPERE 1912: 198]。

出産・結婚・死に関しては、以下のような儀礼や信仰がみられる。

<844 出産>出産は、妊婦が布の上にすわり、夫が前から妊婦を介添えしておこなわれる。他の女性が手伝うこともある。へその緒は、削ったタケかきれいなナイフで切る。後産は、ヒョウタンに入れて、家の外壁につるされる。<553 命名>子供の名は、生まれてすぐにつけられる。男の子であれば、祖父か父、女の子であれば、祖母か母の名前をくみあわせてつける。産婦と子供は、男の子なら5日間、女の子なら3日間、外出できない。<788 儀礼>子供が誕生した直後に、キルハルホ (kilhalho) という儀礼がおこなわれる。まずテンプ (thempu) という司祭をよんで、病気にならないように、悪霊におそわれないように、首に羽根のついた紐をまく。つぎにニワトリを殺す。これは、テイルハス (Thilhas) という精霊に子供がなやまされず、丈夫に育つようにおこなわれる [SHAW 1929: 51-52]。

<583 婚姻の様式>結婚には、4つの形態がある。チョングム (chongmu) は、花婿の両親が花嫁の両親のところへ結婚を申込み、花嫁側が同意するなら、ブタを殺して花婿側をもてなす。結婚式の日、花婿が花婿側の代表者とともに、婚資をもって花嫁の家にむかう。花嫁の家族が盛大にもてなし、夕方から、太鼓や鐘をならし、歌をうたって、宴がおこなわれる。翌日、花婿の行列が花嫁をつれてかえる。サハパット (sahpat) の場合は、宴はおこなわれず、婚礼の日か翌朝はやく、花婿が花嫁をつれてかえる。ジョル・ラハ (jol-lha) は、結婚以前に妊娠した場合で、婚姻に関する儀礼はなく、若者が娘を妻として家につれていくだけである。キジャム・マング (kijam mang) は、両親の同意がなく、若者が娘と駆落ちして暮らしはじめる場合である。何の儀礼もおこなわれない [SHAW 1929: 57-59]。いずれの場合も結婚にさいして婚資が支払われる。3頭から30頭のミタン牛が花嫁の父におくられる。これは、

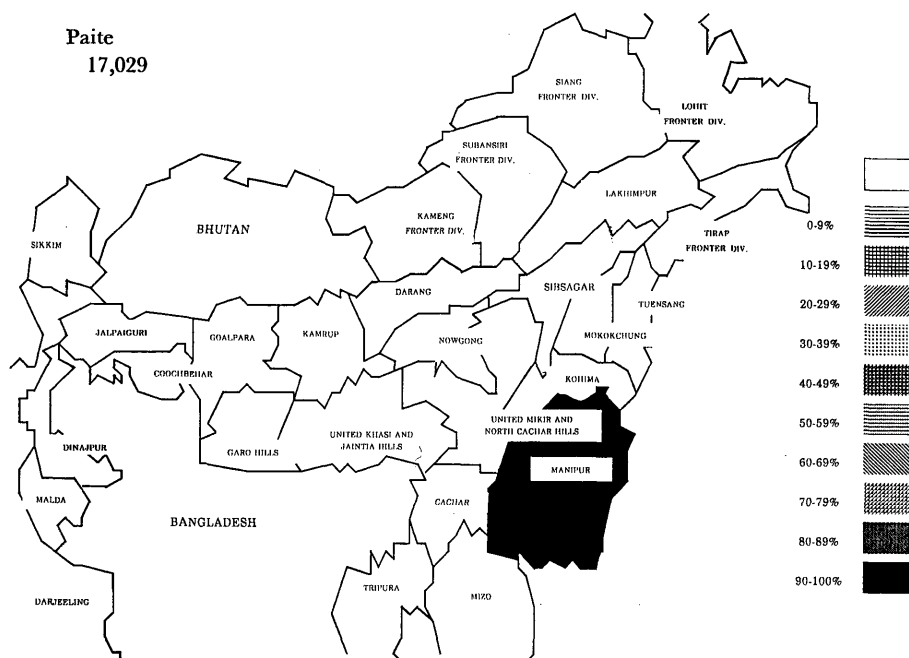
マンピ (manpi) とよばれる。花嫁の父の兄弟にはミタン牛1頭が、またお金も花嫁の家族に支払われる。さらに、夫の側は自分の妻が死んだとき、あるいは息子たちのそれぞれの死亡にさいして、妻の最近親者の男子へ、ロングマン (longman) という代価を支払わなければならない [SHAKESPERE 1912: 199]。

<764 葬式>人が亡くなったら、死者の家に人々があつまって遺族をなぐさめる。遺体は洗われ、布につつんで丸太の棺桶にいれ、埋葬される。墓には、死者が男性であれば、生前に殺した野獣の数をきざんだ柱をたてる。女性であれば、生前、愛用していた品物をつるす。死のさいには、クンスム (khunsum) という儀礼がおこなわれる。ミタン牛を殺し、司祭のテンプが死者の生前の善行をのべ、死者の村、ミティコー (Mithikho) へ死者の霊が旅立つのを祈る。もし、事故やコレラなどの流行病などで死んだ場合には、この儀礼はおこなわれない [SHAW 1929: 53-56; SHAKESPERE 1912: 203-207]。

<77 宗教的信仰>タドーは、宇宙を支配するパテン (Pathen) によってすべてに生命があたえられていると信じている。パテンには、ノングジャイ (Nongjai) という妻がおり、パテンと力をわけあう存在であり、同等の力をもつ。また、パテンの息子は、ティルハ (Thilha) とよばれ、丘や川や森に住む魔物であるといわれる。他にも、深い森に住むといわれるグモイ (Ghumoi) という魔物もいる [SHAKESPERE 1912: 71]。

(八木祐子)

パイテ (Paite), ブイテ (Vuite)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>パイテ族は、マニプール州の南西側に居住する。<161 人口>1961年のセンサスでは17,029人、1971年には24,755人の人口が、マニプール州において記録されている。パイテ族は現在、新クキグループとみなされている。シェイクスピア (Shakespeare) は、パイテをルシャイ (Lushai) 族に非常に影響を受けたグループに入れている [SHAKESPERE 1912: 142]。<101 アイデンティフィケーション>パイテは、ルシャイ族による呼称で、ブイテ (Vuite) は自称であり、マニプールでは、この言葉が使用される場合が多い [SHAKESPERE 1912: 142]。また、パイテという言葉は、ビルマのハカ (Haka) やファラム (Falam) に住むチン族によって使用されるという報告もある [EMBREE 1950: 17]。<618 クラン>1989年2月の栗田の調査によれば、もともとは Paihte という言葉が用いられ、北のグイテ (Guite) と南のシュクテ (Sukte) の2つのクランに分かれていたという。シムテ (Simte) 族はこの南の方のクランから派生したパイテ族の1クランであるという。

<173 口碑・伝説による歴史>最初のパイテの村は、ティッドディム (Tiddim) の近くにあったといわれる。パイテ族の祖先、ラムレイア (Lamleia) は、卵から生まれ

たといわれている。始めに、2つの卵があり、タドー族のものが1つを試したところ、苦かったので、投げ捨ててしまい、もう1つの卵は、貯蔵されたコメのなかにおかれ、そのうちにラムレイアが生まれたという [SHAKESPERE 1912: 142]。

<29 服装>彼らの服装や慣習は、ルシャイ族と類似している。<882 青年の地位>しかし、若者宿であるゾウルブック (zawlbuk) は、特別な建物をつくらず、有力者の家のベランダが利用されている。6人から12人の若者が、夜をそこで過ごす。若者は、有力者の家を建てたり、耕作を手伝う [SHAKESPERE 1912: 142]。

<582 婚姻規制>婚姻は一夫一婦制であり、父方の第一イトコとの結婚は許されている。<583 婚姻の様式>花婿側の両親が、ズー (zu) という酒をもって、花嫁の家にゆく。もし、それが受け入れられたら、花嫁は、花婿の家へ連れてこられる。しかし、若者は、2か月間から3か月間は、独身の友人と寝泊まりする。結婚は、第一子が生まれるまでは確定せず、いかなる婚資の支払いもおこなわれない。3年以内に子供が生まれなかったら、その夫婦は別れる [SHAKESPERE 1912: 143-144]。

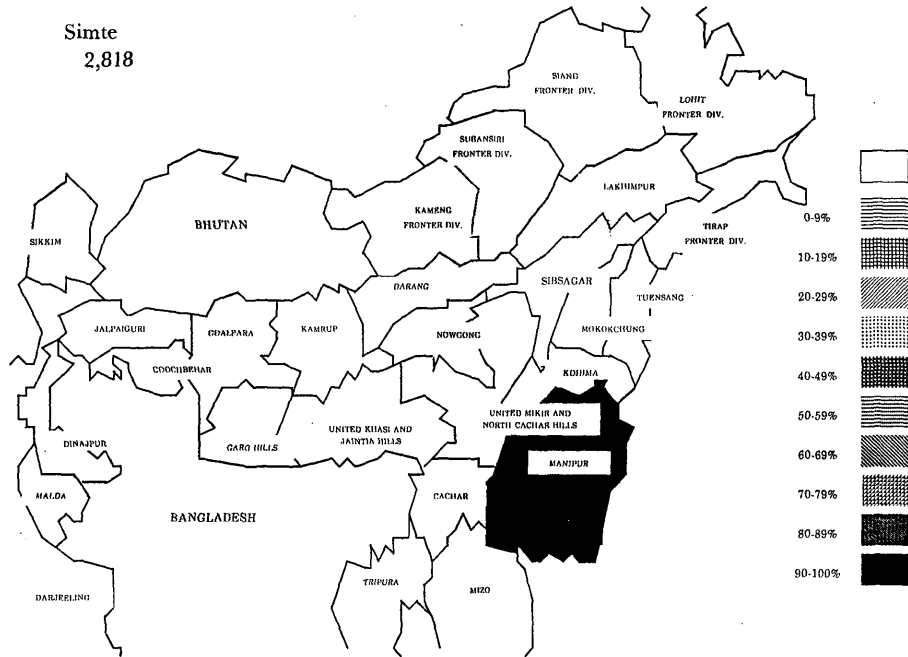
<77 宗教的信仰>宗教的信仰も、ルシャイ族と似ている。パティアン (Pathian) という創造神の存在を信仰している。彼らは、魂が2度も3度も生き返ると信じている [SHAKESPERE 1912: 144]。

<844 出産>出産後、子供の身体を洗い、母子の首に羽を巻く習慣がある。母親は、出産後4日間は、すべての仕事を避ける。<553 命名>名づけのときは、ブタが供犠され、ズーがふるまわれる [SHAKESPERE 1912: 145]。

<764 葬式>葬式の儀礼は、ルシャイ族と異なっている。死後、遺体に最上の服を着せ、昼間は家の中におき、夜になると外へ運び出される。人々は、そのまわりで、ズーを飲んで歌い踊る。これは、1か月以上つづけられる [SHAKESPERE 1912: 145]。

(八木祐子)

シムテ (Simte)

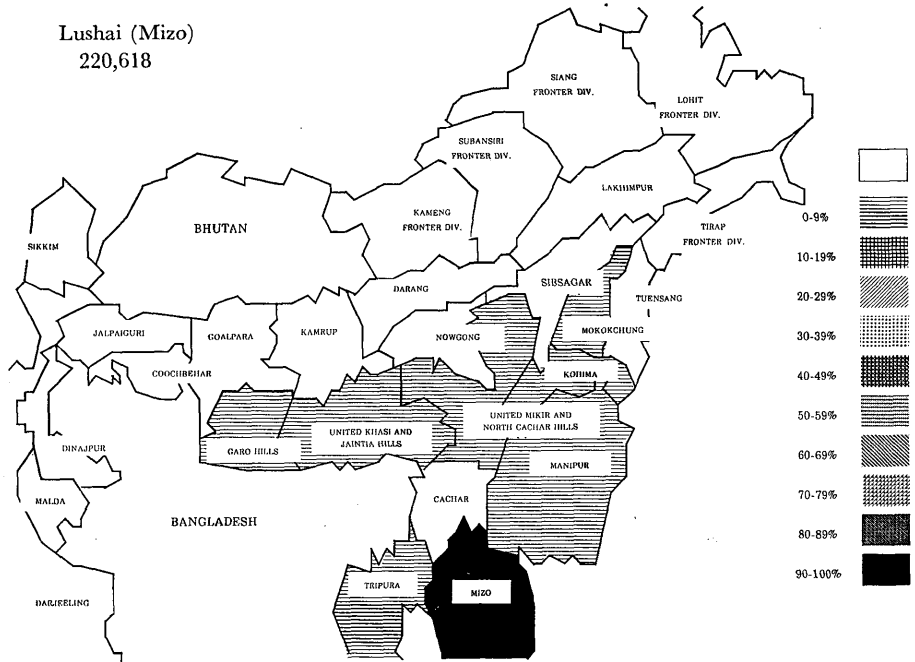


Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>シムテ族は、1961年、1971年、1981年のインド政府発行のセンサスにおいて、指定部族としてあげられているが、現段階においては、この部族に関して、記述すべきまとまった資料はない。しかし、1989年2月の栗田の調査によれば、シムテ族は本来はクキ・チン諸族に属するパイテ (Paite) 族の1クランであったという。このクランに対して、「南方からきた人びと」を意味するシムテという名称を与えた。現在は、タンロン・サブ・ディビジョン (Thanlon Sub-Division) に居住している。シムテ族は、現在は、南方に住んでいないため、この名前を変えたがっているが、なかなか中央政府から認められないのが現状であるという。

(八木祐子)

ルシャイ (Lushai, Lushei, Lusei), ミゾ (Mizo)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<101 アイデンティフィケーション>ルシャイ族は、チベット・ビルマ語族のクキ・チン語群の言語をもつ諸集団であり、ルシャイ山地を中心に居住する。もともとは、デュリアン (Dulien) 方言をはなす部族をルシャイと呼んだ。ルシャイは、「長い首をもつ人々」を意味している。だが、キリスト教の布教などによって、ミゾラムの北部・中央部に住む部族も、デュリアン方言を話すようになり、現在は、それらの部族もふくめて、高地人を意味するミゾ (Mizo) とよばれている [PAKYNTIN 1968: 5]。だから、ミゾと呼ばれるときには、ルシャイ族だけでなく、ラルテ (Ralte) 族、マー (Hmar) 族、ポイ (Poi) 族などをふくむ場合もある [SHAKESPERE 1912: 43]。また、ルシャイは、もともと Lusei で、10の部族を意味し、多くのクランをもつグループをあらわしているという説もある [CHIB 1984b: 301]。

<173 口碑・伝説による歴史>ルシャイの首長は、パイテ (Paite) の女性とビルマ人のあいだに生まれたタンク・ウラ (Thang-ura) から、出自しているといわれている [SHAKESPERE 1912: 2]。また、別の伝説では、中国の皇帝、チンロン (Chin-lung) が、部族の先祖だと信じられている。チンロンの子孫は、中国内部から、チベ

ットへ移動し、のちにその子孫が、ビルマへ移動し、チンドウィン溪谷とマニプール川流域に最終的におちついたという [PAKYNTEIN 1968: 5]。

<175 記録された歴史>1780年頃から19世紀はじめにかけて、クランの1つであるサイロ (Sailo) のもとで、ルシャイはファラム (Falam) 地域から、北西へ移住した。この移住は、おそらく他のクキ・チン諸族が強力になったためと思われる。ルシャイの移住の結果、それ以前にきていたビアテ (Biate) やコル (Khol) などの古クキグループやタドー族を北へ移住させることになった。1830年までに、部族内部の争いでサイロが支配権をにぎり、このときから部族全体を統括する言葉としてルシャイが使用されるようになった。1900年代はじめのイギリスの行政的な介入の影響とミッションの活動がルシャイ社会の大きな変容の要因となった [EMBREE 1950: 39]。

<618 クラン>ルシャイのクランは、Rokum, Zadeng, Thangluah, Pallian, Rivung, Sailo の6つのクランにわかれている [SHAKESPERE 1912: 3]。

<621 コミュニティの構造>村は、ラル (lal) という首長によって統治されている。首長の息子たちは、結婚可能な年齢に達したら、父の村から、いくつかの戸数をわけてもらい、独立した首長となる。<428 相続>シェイクスピア (Shakespeare) によれば末子が、デブとラヒリによれば長子が、父の村を相続する [SHAKESPERE 1912: 54; Dev and LAHIRI 1983: 3]。ウパ (upa) とよばれる2人から3人の年長の男性が、首長を補佐する [SHAKESPERE 1912: 44]。

<142 身体諸形質の情報>人種は、モンゴロイド系に属している。ルシャイ族の男性、女性とも、タドーや、他の同族のグループより、ほっそりした体型である。肌の色は、暗い黄褐色、暗いオリーブ色、黄色いオリーブの間の色をしている。<302 身だしなみ>髪は、男性も女性も、首のうなじあたりで結び目をつくる。年頃の若者は、髪に非常に注意をはらい、ブタのアブラ身で、毎日きれいにする [SHAKESPERE 1912: 1-2]。

<29 服装>現在の服装は、男性、女性とも西洋化されている。男性は、シャツを着て、ズボンをはき、教会に行くときや、特別の用事のさいには、スーツを着てネクタイをしめる。女性は、ブラウスとスカートを着て、プアン (puan) という布をスカートの上にかく [PAKYNTEIN 1968: 6-7]。

<361 集落形態>ルシャイ族は、尾根の上に、村をつくるのを好む。それは、外敵の侵入を防ぐためだと考えられている。各村は、タケの槍がうちつけられた丸太の防御柵でとりかこまれている。ナガ (Naga) 諸族のように集まって住むのとは異なり、クランごといくつかの地区にわかれて住んでいる。<882 青年の地位>村の中央

に首長の家があり、その反対側に、ゾウルブック (zawlbuk) とよばれる若者宿が建られている [SHAKESPERE 1912: 20-21]。

<342 住宅>伝統的な家屋は、丸太とタケでつくられている。床は、タケのマットが敷かれ、戸口や窓もタケのマットでとめられている。炉は、玄関のそばの隅にもうけられている。部屋は、タケのマットや布でいくつかに仕切られている。一軒の家には、夫、妻、未婚の子供が一緒に住む。一般に結婚した息子は、両親のもとを離れ、新しい家をたてて住む。<428 相続>末子が家にのこり、両親の面倒をみる。末子が土地や家などの不動産を相続し、布やお金、農具などは他の息子と分ける [SHAKESPERE 1912: 22]。

<24 農業>生業は、農業が中心である。コメ、トウモロコシ、ショウガ、タバコなどが、焼畑耕作でつくられる。ジャングルは、1月から2月のはじめに伐採され、切り倒された木は、十分に乾かされる。焼畑地の伐採は、村人総出あるいは、グループごとにおこない、焼畑がととのってから、各家ごとに仕事を始める。火入れは、3月から4月にはじめ、そのあとすぐに種まきをおこなう。稲を植えるのは、最初の雨が降る4月の末頃で5月なかばまでつづく。除草は、4月から5月と、トウモロコシが実ったころの8月から9月に再びおこなわれる。トウガラシ、ショウガ、タバコのとりにいれは、9月から10月である。主要作物である稲の刈りにいれは、10月の末にはじまり、11月なかばまでつづく。脱穀作業のための小屋をつくり、稲の穂は、棒でたたいておとす。焼畑のそばに、穀倉を建て、コメを収納して、少しづつ村へ運ぶ。<23 家畜飼養>村で飼っている家畜は、ミタン牛、乳牛、ブタ、ニワトリ、ヤギである。家畜は、日中は自由に村を散歩し、夕方になると餌をもらうために各家に帰ってくる [SHAKESPERE 1912: 32-33]。

<224 狩猟とわな猟>ルシャイ族は、新鮮な肉を好み、ワナ猟にたけている。キジやニワトリなどを仕掛けていたワナでしとめ、トラは、おとりのブタを籠にいれておき、トラがその籠をひっぱったら、重い土がトラにくずれおちるように仕掛けてつかまえる [SHAKESPERE 1912: 33-35]。

<462 性別による分業>籠づくりは、男の仕事であり、機織りは、女の仕事である。布類をもちほこぶクバウ (bukbau) と、コメをはこぶダウラング (dawrang) と、薪や野菜をはこぶパイクアング (paikawng) の3種類が、タケでつくられる。<286 織布>機織りは、女性の仕事であり、織り方を知らないとい人前ではないとされる。一般に14歳頃になると機織りに忙しい。花や縞模様のデザインが多く、赤と青色が好んでつかわれる [SHAKESPERE 1912: 19-20]。

<844 出産>出産・結婚・死に関する儀礼や信仰は、以下のとおりである。分娩が近づくと、妊婦はベッドに横たわり、経産婦が妊婦の身体をあたためる。へその緒は、付き添いの産婆が削ったタケで切る [PAKYNTEIN 1968: 7]。伝統的な出産のやり方では、難産のさいには、ニワトリを殺して2つに分ける儀礼がおこなわれる。また、出産後7日以内に、ニワトリを殺すアルテ・ルイラン (arte-luilan) といわれる供儀がおこなわれる。これがおこなわれるまで、産婦は家から外出できない。子供の魂は、誕生後7日間、鳥のように両親の身体や服にとまって時をすごすので、傷つけないように、両親はこの間、おとなしくしている。<553 命名>出産後2日目に、友人が親戚に飲物をくばり、7日目にも宴をひらく。このときに、名づけをする [SHAKESPERE 1912: 81-82]。キリスト教の導入後は、12歳に達すると、洗礼を受けるようになった [PAKYNTEIN 1968: 8]。

<582 婚姻規制>婚姻は、クラン内婚制である。男性は、家族以外の女性とならば、誰とでも結婚できる。しかし、母方の兄弟の娘との優先婚がみられ、父方の第一イトコとの婚姻は、婚資が少なく、兄弟から別の兄弟へ移動するだけにおわるので、望まれない。恋愛結婚がふつうである [PAKYNTEIN 1968: 5]。

<58 婚姻>花婿の両親が、パライ (palai) という2人の男性の友人に頼んで、花嫁の両親に結婚の申込みにいってもらう。花嫁の両親が同意したら、結婚の日取りと婚資を相談する。結婚式の日、花嫁は友人とともに、花婿の家につく。行列が村をとおるすぎるとき、泥を投げつける。花婿は、花嫁に「あなたの服は汚れている」といって新しい服をあたえる。ニワトリが殺され、花嫁と花婿が結婚の誓約する。花嫁とその友人は帰り、宴はつづけられる。翌日、花婿の母親が親戚が、花嫁の家へ花嫁を連れにくる。その夜、花婿の友人たちが、花婿の家にニワトリを追いたてたり、石を投げたりしてからかう。花嫁は、実家にもどり、数週間過ごして、夫の家にもどる [SHAKESPERE 1912: 82-83]。現在では、教会で司祭の仲介によって式をあげる。婚資の習慣もあいまいになり、かわりに、花婿から花嫁へ金の指輪がおくられるようになった [PAKYNTEIN 1968: 8-9]。

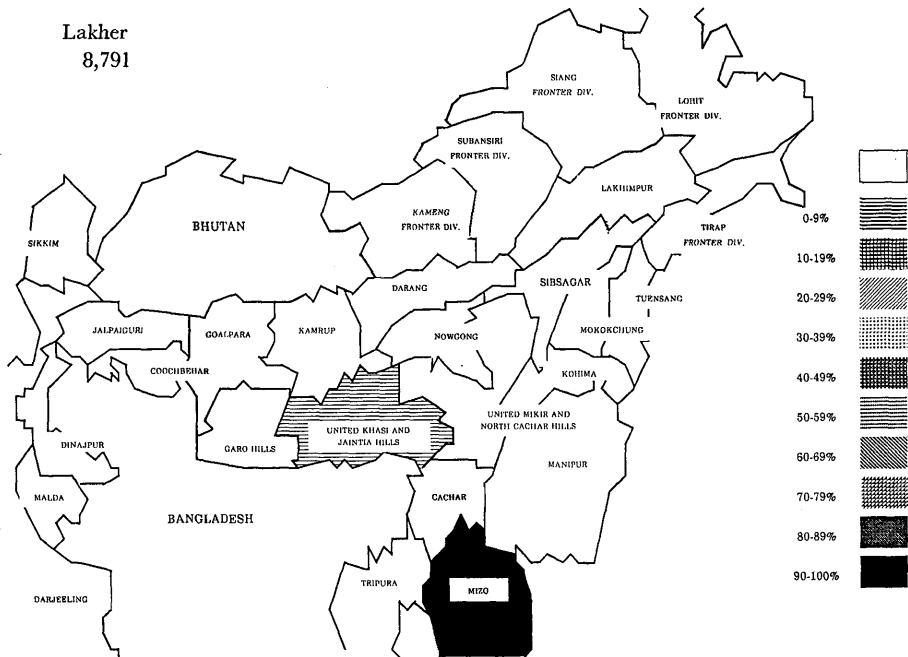
<764 葬式>死者の身体は洗われ、髪をきれいに飾り、竹の枠に結わえられて座った形にしておかれる。ミタン牛、ブタ、ヤギ、イヌを殺し、葬式に参加した人にくばる。歌や踊りが翌日の夕方までつづく。丸太で棺桶をつくり、壁の近くにおく。タケのチューブを床にとおし、棺桶の底に穴をあけて、遺体の胃にとおす。一方の端は、土のなかに埋め、特別な炉を棺桶のそばにつくり、3日間、燃やす。この間、未亡人が付き添う。火葬したのち、大きな骨は籠にいれて棚におく。墓のまわりに、動物の

頭骸骨をおく [SHAKESPERE 1912: 83-85]。1960年の段階では、教会の鐘によって、村人の死が知らされると、親戚や友人が死者の家にあつまり、聖書の歌をうたい、家族をなぐさめる。お湯で死者の身体を洗い、2日から3日、家においたあとで、棺桶にいれて、墓地に埋葬する。教会の長老が葬礼をとりおこなう。聖書を読み、祈りがささげる。十字架に死者の名前、生年月日、「安らかに眠れ」の文字を記入して、墓地にたてる [PAKYNTEIN 1968: 9]。

<77 宗教的信仰>宗教は、伝統的にはアニミズムである。パティアン (Pathian) とよばれる精霊が信じられている。パティアンはすべてのものの創造者であり、慈悲深い存在であるといわれている。また、あらゆる川、森、山に住むファイ (Huai) という数多くの悪霊がいる。すべての病気や災難は、このファイによってひきおこされると信じられている。また、ほかにも人間を守ったり、害をあたえる精霊がいる。これらにくわえて各クランは、サクア (Sakhua) という特別の精霊をもつ。すべての供犠は、このサクアにささげられる。また、ミティ・クウア (Mithi-khua) という死後の世界も信じられている [SHAKESPERE 1912: 61-62]。しかし、19世紀のおわりにミッションがこの地に入ってきて、キリスト教の観念が急速に広まった。1961年の段階では、クリスマスが祝われ、すでにのべたように結婚式、葬式などもキリスト教の様式によっておこなわれている [PAKYNTEIN 1968: 24]。現在は、ルシャイの95パーセントがキリスト教徒であり、そのほとんどがプロテスタントである [CHIB 1984b: 303]。

(八木祐子)

ラケール (Lakher), マラ (Mara), ゾー (Zo), クロンシャイ (Klongshai)



Sen, D. K. 1971 "Annexure to the Tribal Map of India" Anthropological Survey of India, Calcutta. より作図。行政区分は1961年当時のものによる。

<131 位置>ラケール族は、ルシャイ山地 (Lushai Hills) の南東端、チン・ヒル・ディストリクト (Chin Hill District) のハカ・サブ・ディビジョン (Haka Sub Division) とアラカン・ヒル・トラクト (Arakan Hill Tract) の最北端に住む。伝説によれば、ラケール族は、北からハカ・サブ・ディビジョンにやってきて再び東からの圧力で現住地にやってきたといわれる [PARRY 1932: 2]。<101 アイデンティフィケーション>ラケールは、ルシャイ (Lushai) 族による呼称で、自分たちでは、マラ (Mara) と呼び、ビルマに住むチン (Chin) 族はゾー (Zo), アラカン (Arakan) 族はクロンシャイ (Klongshai) と呼ぶ [SHAKESPERE 1912: 213]。ルシャイ族が、マラの女性たちが綿を摘む姿をみて、「綿」を意味するラ (la) と「摘む」を意味するケール (kher) をあわせて Lakher と呼んだという [CHIB 1984b: 314]。

<173 口碑・伝説による歴史> 出自伝説によると、むかし、カザングラ (Kha-zanghra) とよばれる大いなる暗闇が、世界をおおっていた頃、人々は地の底の穴からやってきた。ラケール族のグループの創始者たちは、地の底からやってきて、それぞれ自分の名前を叫んだ。神は、ラケールが大変な数の人が出てきたと思ったので、

道をさえぎった。しかし、ルシャイ族は、最初の一人だけが名前を叫んで、他の者は静かにでてきた。神はひとりのルシャイがでてきただけだと思い、長い時間、道をあけておいた。こういうわけで、ルシャイ族が、ラケール族より巨大な部族となった。のちに、神は、それぞれの部族に言葉をあたえたという [PARRY 1932: 4]。

<142 身体諸形質の情報>ラケール族は、良い体軀をしており、頑健である。男性の平均身長は、約165センチメートルで、ルシャイ族よりも高い。女性も、他のクキ (Kuki) 族やルシャイ族より身長が高く、体格が良い。モンゴロイド系で、明褐色の肌で、頬骨は高く、広い鼻をもつ [PARRY 1932: 25-26]。

<19 言語>言語は、チベット・ビルマ語族のクキ・チン語群に属している [PARRY 1932: 501]。

<56 社会成層>社会組織は、アベイ (abei) という王族、パングサング (phang-sang) という貴族、マッチ (machhi) という平民の3つの階層にわかれている。貴族のなかには、さらにクエイ (kuei) とよばれるさらに上段の貴族があり、権威は世襲的に長男へ受け継がれる。<618 クラン>王族は3つのクラン、貴族は8つのクラン、平民は33のクランにわかれている。それぞれのクランの名前は初期の祖先の名前に由来しているといわれる。クラン内での結婚がおこなわれる。Bonghia と Thleutha, Hnaihleu, Mihlong の4つのクランはトーテムの出自起源をもつ。Bonghia, Thleutha のクランはニシキヘビの出自を主張し、Hnaihleu のクランはトラの出自、Mihlong のクランはサイチョウの出自を主張する。それぞれのクランはクランのトーテムを殺したり、傷つけたりしてはならない。<428 相続>ラケールの出自は父系をたどり、長男が家系を相続する [PARRY 1932: 231-235]。

<621 コミュニティの構造>各村には、首長がおり、世襲制をとる。首長は村人に対して大きな権力をもつ。罰金を課したり、争いを調停する。村人は、首長に対して、米を3籠分、収穫時に支払わなければならない。<882 青年の地位>他のアッサム地方の部族とことなり、ラケール族は、若者宿をもたない。

<561 年齢階層>若者はサトリア (satlia)、未婚の少女はライサ (laisa) とよばれる。少年はサトリアの身分に達すると、髪の毛を長くのばして、額に結び目をつくって結ぶ。もはや、両親の家で眠ることはない。未婚の娘のいる家のいくつかに若者があつまる。2年から3年そうして過ごす。<836 婚前性交渉>もし、その少女が受入れたら性交をすることもあり、これは未婚の少女と少年の間で一般に認められている慣習である [PARRY 1932: 246-248]。

<58 婚姻>結婚は、男性はたいてい20歳から25歳、女性は20歳頃におこなう。こ

のような結婚年齢の遅さは、できれば高いクランの者と結婚したいと思っているが、適切な花嫁をみつけるのが難しく、また婚資が高く妻をもらうためのお金をためるまでに数年かかるためである。＜582 婚姻規制＞結婚相手の選択にあたっては、同じクラン内では、何の障害もない。交叉イトコ婚は可能だが、平行イトコ、父方の妹の娘とは結婚できない。再婚は認められている [PARRY 1932: 293-295]。婚資については、シェイクスピア (Shakespeare) の著書に具体例が記述されている [SHAKESPERE 1912: 218-220]。

＜29 服装＞男性の服装でもっとも重要なものは、ドゥア (dua) とよばれる腰布である。日常的にもちいるものと儀礼の際にもちいるものの2種類がある。後者は、白い布で端に濃い青い色がついている。また、首長の家族だけが着る腰布があり、濃い青地に中央に白い線が2本入っている。布全体に、絹で白鳥や野獣の目をあらわす縁取がある。他にも、首長と富裕な人たちが着る、赤地に絹で赤と黄色の縁取がほどこした腰布がある。＜302 身だしなみ＞髪の毛は、額のちょうど真上で髻を結っている [PARRY 1932: 29-33]。

女性は、男性より多くの衣類を身につける。近代的な服装の影響をうけず、濃い青色の綿のペティコートで足を隠す。下部には、絹で縁取がしてある。この上に濃い青色のスカートを着る。王家の女性たちは、儀礼のさいにさまざまな種類のジュズダマや宝貝でかざったスカートを着る。腰には、真鍮や青銅のベルトをつけ、数の多さが富裕さをあらわす。上半身には、袖なしの上着を着る。前あきで胸がわずかにあいている。＜302 身だしなみ＞髪は、後ろで結び目をつくり、真鍮の重い髪飾りでとめる。＜301 装身具＞装飾品には、ガラス玉の首飾り、木製の耳飾り、真鍮の玉や綿の腕輪がある。足首の飾りはつけない [PARRY 1932: 37-42; SHAKESPERE 1912: 215-216]。

＜361 集落形態＞村落は、一般に小高い丘の斜面につくられ、ルシャイ族のように丘の頂上にはない。ルシャイ族が新しい居住地へ移るのに対し、ラケール族は永続的な居住を好む。以前は、村の中央に約3メートルの高さの砦があった。＜342 住宅＞家屋は、ベランダと主室、後室からなる。平均の大きさは、4.5メートル幅で、9メートルの長さである。家は、通りに面して建てられ、向きは重要でない。床は、地面から1.2メートルから1.5メートルの高さにあり、タケのマットでつくる。壁もタケのマットでつくり、屋根はヤシ科の植物の葉かタケの葉で葺く。ベランダには、狩りの戦利品であるクマやシカの頭骸骨がおいてある。家のなかには、3つの炉があり、1つは客用にベランダに、1つは調理用に主室に、もう1つは暖をとるために後

室におかれている。後室にトイレがつくられているが、あまり衛生的でない [PARRY 1932: 60-67]。

<24 農業> 主要な生業は農業である。焼畑耕作で、鋤と斧、ダオ (dao) という刀を農具として使用する。焼畑は1年耕作したあと、5年から6年休耕地にする。農業の開始は12月で、村の首長と長老がどの場所が焼畑地に適しているかを決め、そのなかで各家の者が自分の耕作地を選ぶ。選んだ土地の一部の木を伐採し、夢によってその場所が適切かどうかを判断する。きれいな水、魚、小麦、調理したコメ、人間の死体などがでてきたらいい夢であると考えられ、動物がトラに殺されたり、折れたダオや斧、死んだ家畜、汚ない水、ブタやニワトリが盗まれた夢は悪い夢で、あらたに焼畑地を探さなければならない。

1月から2月に耕作地が切り開かれ、半分伐採した日、また全部の伐採が終わった日に儀礼をおこない、ブタを供犠し、宴をひらく。3月なかばから4月はじめに火をかけ、燃やしたあとに儀礼をおこない、ブタやニワトリが供犠される。トウモロコシ、穀類、キュウリ、カボチャが播種される。4月の末に粃を、1つの穴に10個ずつ播く。全部、播かれた時点で儀礼がおこなわれる。2回から3回、雨季の間に除草する。10月末から11月の半ばに穀物の収穫がおこなわれる。稲は根もとから引き抜き、乾燥してから脱穀する。稲を収穫した後、赤と黒色の雌ニワトリを殺し、その血を稲におとして、稲とサトウキビの霊に対する儀礼をおこなう。タバコ、ゴマ、綿、藍などもつくられる [PARRY 1932: 75-80]。

<23 家畜飼養> 家畜は、ミタン牛、雌牛、ブタ、ニワトリを飼っている。ミタン牛は、婚資としてもちいられる。ミタン牛は、昼間はジャングルに放牧され、夕方、塩をなめに自分の持ち主のところに帰ってきて、夜を過ごす。雌牛は、食肉用として飼われているが、乳は汚ないものと考えられているので飲まれない。ブタは人糞の掃除と供犠のために、ニワトリは供犠と卵をえるために飼われている [PARRY 1932: 164-165]。

<262 食事> 食事は、1日3回とる。常食はコメとチリ、野菜のつけあわせである。油は使わず、水だけで調理する。ラケール族は、肉を好み、ネズミからゾウまでさまざまな種類の肉を食べるが、生肉では食べない。<27 飲み物、薬物、嗜好品> 飲物は、サーマ (sahma) とよぶライス・ビールを飲む。コメを煮て、小麦の酵母をくわえて発酵させ、さいごに粃殻をくわえたもの、これとつくり方は同じだが、粃殻を加えないもの、蒸留してつくるものの3種類がある。タバコは、男性も女性も好む。男性は、長い竹製のパイプをもちい、女性は水ギセルをつかう [PARRY 1932: 82-

90]。

<224 狩猟とわな猟>狩猟は、スポーツとして、また食料獲得のために盛んにおこなわれる。狩猟のやり方には、獲物のあとをつけて、こっそり忍び寄るやり方と、グループで狩猟にでかけるやり方の2種類がある。武器は銃がもちいられ、今では、弓矢はめったに使われない。大型の動物を殺したら、動物の霊が来世に旅立てるように、将来、多くの動物がとれるように、ニワトリやブタを供犠して儀礼をおこなう [PARRY 1932: 136]。

<226 漁労>漁業は、網や罟を使っておこなわれる。網は、ソカウ (sokaw) といわれ、女性にけってつくらない。小さな魚をとらえる罟はチャオ (chhao) とよばれ、タケを編んでつくられている。45センチメートルの直径で90センチメートルの深さである。大きな魚をつかまえるときは、村人が協力しておこなう。最初に小屋をたて、タケと丸太で柵をつくり、流れをせきとめ、数種類の罟をしかける。獲った魚は、全員で分ける [PARRY 1932: 157]。

<462 性別による分業>焼畑でつくった綿を使って衣類をつくる。5月に種を播き、12月に花が摘まれる。紡績機は、木と籐でできている。染色は女の仕事で、いかなる部分も男性は手伝ってはならない。反対に、籠づくりは男性の仕事である。穀物を貯蔵、運搬するためのさまざまな籠がつくられる [PARRY 1932: 95-99]。

<77 宗教的信仰>ラケール族にみられる信仰や宗教的観念、通過儀礼については、パリー (Parry) の著書に詳しくのべられている。とくに、魂や夢についての考え方が独特であり、一部には、プルム族のもつ観念と共通するものがみられる [PARRY 1932]。宗教はアニミズムである。宇宙の運命は、カザングパ (Khazangpa) あるいはカザングルータ (Khazangleutha)、パチャパ (Pachhapa) とよばれる宇宙の創造者である神の手にあると信じられている。カザングパは一般的に空に住むといわれ、すべての父であるとみなされている。この神はすべての人々を支配し、彼自身の意のままにする。妻子がおり、食べ物を食べ、ビールを飲むといった人間と同じような属性をもつと信じられている。また、ザング (Zang) というある種の守護神、保護者的な神も信じている。男性と女性があり、男性のザングと女性のザングと一緒にになったら、その2人は結婚するといわれる。ルーラリィパス (Leurahripas) は高い山や崖、深い池に住み、人をつかまえて殺す悪霊である。すべての病気はこの霊によって引き起こされると信じられており、それ故、人びとはしばしばこれらに供犠をおこなう [PARRY 1932: 349-350]。

人間の魂は、大きさや外見がその人の身体と似ているが、みることはできない。日

中是人々の身体の中におり、口からはいるが、夜になると、眠っているあいだ、時々、魂は身体をはなれてさまよい歩く。魂がさまよい歩くので、人間は夢をみ、将来をみとおせるので、夢がほんとうになるという [PARRY 1932: 350]。

<784 忌避とタブー>アナ (ana) とよばれる禁忌の観念があり、あることを見たり、おこなったりすることが禁じられる。また、ある男が供犠をおこなったとき、彼とその家族は、供犠の始まりから終りまでパナ (pana) の状態であるという。パナの期間は、仕事をしてはいけないし、外出もできない。その者の家の中へ誰も入れない。もし、家へ入ったら供犠はやりなおさねばならない [PARRY 1932: 353-355]。

誕生、結婚、死に関する信仰や儀礼は以下のとおりである。

<844 出産>女性は、誰しもサキア (Sakia) という一種の精霊をもつ。もし、ある女性が健康でなかったり、子供ができなかったりするとサキアのせいになれる。子供が欲しい女性は、このサキアに対して赤いニワトリの供犠をおこなう。妊娠中には、食べ物に対する制限はみられない。踊ってはいけないとか大きな川を横切ってはいけないなどの行動の制限は、多少みられる。陣痛がはじまると、妊婦は床にひざまずき、梁からつるした紐につかまって産む。経産婦が、子供のへその緒を削ったタケで切り、冷たい水で子供の身体を洗い、目をさまさせる。母親はお湯で身体を洗う。難産の場合は、いつもお産の軽い女性がよばれ、ゆでた卵をその安産の女性から、難産の女性に食べるように手渡して「あなたの子供の出産が、私と同じように簡単でありますように」という。出産後、男の子が生まれた場合は10日間、女の子の場合は9日間、ナウクトロング (nawkhutlong) とよばれる状態になり、その間、母親は家を離れてはいけない。子供の父親が仕事にいくとき、竹製のピンを子供の手において、「私が働きにいく場所へついてきてはいけない」という。これは、子供の魂が父についていくのを防ぐためである [PARRY 1932: 378-384]。

<852 乳幼児期、子ども期における儀式>誕生後3日間は、子供は外出できない。4日目に斧と料理したコメをもって通りにつれだし、レモンの木の棘かヤマアラシの棘で赤ちゃんの耳たぶに穴をあけ、耳輪をつける。男の子の場合は10日目、女の子の場合は9日目に、ラデイド (radeido) とよばれる儀礼がおこなわれる。男の子は弓矢をもちいて、偉大な戦士になるように、女の子は葉で編んだ籠をもちいて、きつい仕事にもたえられ、強い身体になるように儀礼がおこなわれ、ニワトリが供犠される。この日、子供の髪を切り、8歳から9歳になるまで、短かくしておく [PARRY 1932: 384-387]。

<553 命名>最後に髪を切った日に、偉大な戦士や祖先の名がつけられる。名前は

2つつける。名前が1つだけであると、最高神が名前を忘れてしまったら、その存在も忘れられ、死んでしまうといわれる。名づけは、ニワトリが供犠され、その脚を子供の手に握らせ、名前を呼んでおこなわれる [PARRY 1932: 390-392]。

<58 婚姻>結婚にあたっては、息子の両親側から申し込む。その際に、仲介者の女性にダオ (dao) と呼ばれる刀を花嫁の両親に贈物をわたしてもらう。これは、いい夢をもたらすといわれる。ダオをもっていった夜に、魚、きれいな水、銃、ダオなどの良い夢をみたら、申込みを受け、動物がトラに殺された動物、死んだヘビ、ブタやニワトリを盗まれるなどの悪い夢をみたら、申し出をことわる。申し出をうけて2日から3日してから、サーマ (sahma) という酒が用意され、仲介者と求婚者をよび、婚資について話しあい、結婚式の日どりを決める [PARRY 1932: 292-303]。

<585 婚姻儀礼>結婚式の日、花嫁と花婿の家に友人が集まる。このあと、婚資の一部であるブタが殺される。花婿側が5頭殺したら、花嫁側がお返しに3頭殺さねばならない。また、花婿側からお返しがあり、ブタのやりとりがつづく。暗くなると、花嫁とその叔母の一行が、花婿の家へ出発する。花婿の家につくと、花婿が花嫁の叔母に、道路を横切するためのダオや斧をわたす。花婿の家で、花嫁に対するさまざまな贈物が、花嫁の叔母にわたされる。花嫁と花婿が酒の入ったポットの側にすわり、実際の儀礼がはじまる。仲介者が、酒の入ったカップをとりあげ、自分の真鍮のヘアピンをつけ、ヘアピンから酒をつぎ、花嫁と花婿に飲むようにわたす。これは、ティパニ (tipani) といわれ、多くの子供を授かるように、長命、繁栄を願っておこなわれる。この酒を花嫁と花婿が一緒に飲んだあと、あつまった者と一緒に、飲んだり、歌ったりして夜を過ごし、最後に花嫁は自分の家へもどる [PARRY 1932: 299-302]。

次の日、花嫁の両親は、花嫁と十数人の友人をつれて、花婿の家に酒をもっていき、仲介者が婚資をすぐに支払えるかたずねる。花婿はできるだけ支払う。翌日、再び花婿の家に集まり、宴をおこなう。翌々日、花婿の家で、白いニワトリを殺して、穀物をたくさん得ることができるように儀礼をおこなう。花嫁は、最終的に花婿の家へ移る [PARRY 1932: 303-304]。

<775 来世観>死は、カザングパやルーラリィパが怒って、人間の魂を没収するためにおこるといわれる。人間が死ぬときや病気になったとき、魂はブタや木の中にはいり、ブタが人間のように鼻をならしたり、木が子供が泣いているかのような音をたてるという。これは、悪い魂の場合だけ起こる。死後、人間の魂の行き先は3つに分かれる。野獣を殺した人はペイラ (Peira) という楽園に行き、ふつうの人は、アンティキ (Anthiki) に行き、病気や事故で死んだ人はサウバウ (Sawvaw) ということ

ろに行くという [PARRY 1932: 394-396]。

＜764 葬式＞人の死が近づくと床の中央に寝かされ、家族が見守る。遺体は、お湯で洗い、上等の着物を着せる。遺体はタケの上にマットをひいておき、コメや料理した卵を魂が食べるようにそばにおく。アンティキの魂に対して、ミタン牛やブタが供犠される。遺体は、2日から3日家におかれ、毎日、遺体の口にコメ、肉、サーマがあたえられる。死者の母方の叔父がベランダに立って、魂をアンティキに行かせるために、「アンティキへ安らかに行け。家族のことは心配するな」と叫ぶ。家のドアと梁をダオで切り、母方の叔父が3回、ダンスをする。他の人々もつづく。年長の男性が歌い、宴がおこなわれる [PARRY 1932: 399-400]。夕方、死者を埋葬する。若者が墓穴を掘り、母方の叔父が墓に入って、遺体をいれる。死者の夫、妻などが遺体をやさしく叩きながら、「私のことは心配するな。安らかにアンティキに行け」と叫ぶ。墓穴をうめて、平らな石をおく。埋葬した日に、死者の夢をみたら、その人はまもなく死ぬといわれる。死者の魂が村をおとずれ、夢のなかで死者の魂がその人の魂に会い、アンティキに連れていくといわれる。そのため、村の人は死者がこないように家の入口に杵をおく。死者は杵をへびだと思い入ってこないという [PARRY 1932: 401-403]。

しばらくして、墓には記念の墓標をたてる。ロングフェイ (longphei) とよばれる平らな石とタングリィ (thangri) とよばれる木の柱をたてる。前者は、墓の頂上におかれ、四隅を石でささえる。後者は、カイメイ (Khaimei, 学名 *Schima Wallichii*) の若い木を切り、皮をはがして、彫刻をし、ブタの血とヤシの葉を燃やした灰をまぜて、色を塗る。タングリィは人間の形をかたどり、死者が男性の場合は、首がなく、胴体そのまま頭につながり、女性の場合は、菱形の首で、首飾りをつける。頭部には、髪をあらわす角をつける。男性は1つ、女性は2つである [PARRY 1932: 414-417; SHAKESPERE 1912: 222-224]。

(八木祐子)

メイテイ (Meitei, Meithei), マニプuri (Manipuri), メクレ (Mekle), カテ (Kathe), モグライ (Moglai)

<101 アイデンティフィケーション> マニプールの河谷平野を中心に住むマニプール州の主要部族で、アッサム人からは、メクレ (Mekle, Mekheli), ビルマ人からは、カテ (Kathe), ベンガル人からは、モグライ (Moglai, Moglie, Moglau) と呼ばれ、またマニプール人 (Manipuri) ともいわれる [PEMBERTON 1835: 19; GATE 1891: 321]。生活習慣, 信仰形態などさまざまな面において, ヒンドゥー教の影響が色濃くみられるのが, この部族の特色であり, 他のクキ・チン諸族に, 強い影響を与えている。

メイテイ族は, 1961年のセンサスには, 指定部族として記載されていないが, クキ・チン諸族のなかで, 大きな影響力をもち, 人口も約50万人と非常に多いので, 本書にとりあげることにした。

<112 参照された文献>メイテイ族の記述にあたっては, おもに, 1908年のハドソン (T. C. Hodson) の “The Meithei” と, 1961年のインド政府によるヴィレッジ・サーベイ・モノグラフ・シリーズのイティン (Ithing) 村に関する文献を参考にした。イティン村は, インパールの南西47キロメートルにあるロタ (Loktak) 湖にうかぶ小島の小高い丘にある。人口は, 調査時において417人で, すべてヒンドゥー教徒である [HODSON 1908; SINGH 1965a]。

<173 口碑・伝説による歴史>メイテイという部族名は, ミー (Mii 人間) とテイ (Thei 分離する) から由来しているという [HODSON 1908: 10]。マニプール河谷はもともと, クームル (Koomul), ルーアン (Looang), モイラン (Moireng), メイテイなどの多くの部族によって占められていた。しばらくの間, クームルがもっとも勢力をもち, その衰退のあと, モイラン族が勢力をもった。しかし, メイテイ族がすべての勢力をおさえたときには, メイテイの名がすべての部族に適用された。18世紀のヒンドゥー教の浸透によって, メイテイ族は, 自分たちがヒンドゥーの出自であると主張するようになった。彼らは, 古い国名のムニポール (Munnipore) は, 『マハーバーラタ (Mahabharata)』によって確定されるという。ムニ (muni) は, 宝石を意味する。バブラ・バハ (Babra baha) という王が, 宝石を手にいれ, そのさいに, マヒンドラポール (Mahindrapore) という国名が, ムニポールに変わったという伝説をもつ。ナガ (Naga) 諸族との関係も指摘されている [HODSON 1908: 6-7]。

また別の説もある。もともとメイテイという名前は, マニプール河谷でもっとも勢

力をもつクランの1つであったニングトゥジャ (Ningthouja) に対して適用された。紀元33年からマニプールの記録された歴史がはじまっているが、数世紀のあいだ、多くの公国として、マニプール河谷を分割していた7つのクランによって支配され、これらのクランは七国連合をつくっていた。七国連合は、しだいにニングトゥジャに合併していった。しかし、クラン自体は、生きのこった。河谷の人々にとっては、メイテイという言葉は、7つのクランに属する人々の誰にでも適用される。部族のいくつかと、マニプールにのちに居住したブラーミン (Brahmin) の多くは、これらのクランの一つに吸収された。メイテイの名称は、本来のマニプール人自体のあいだで使われるときは、マニプール河谷のヴァイシュナヴァ派のヒンドゥー教徒を意味し、マニプールの外では、マニプールの血統をもち、母語がマニプール語であるすべてのマニプール人に対して適用されるという [CONSTANTINE 1981: 37-35]。他にもペンバートン (Pemberton) によれば、13世紀から14世紀に、中国の北西部から移住してきたタタール (Tartar) 人の子孫であるともいわれる [PEMBERTON 1835: 36]。

<175 記録された歴史>マニプール年代記には、紀元30年から1714年にかけて47人の王を数える。しかし、18世紀までは、史実として不確かである。18世紀以降のメイテイ族の歴史を述べると、1714年に、ナガ族の一首長であったといわれるパムヘイバ (Pamheiba) が、養父チュライロンバ (Churairomba) 王を殺し、王位を継承した。パムヘイバ王は、ヒンドゥー教に改宗し、名もガーリブ・ナワーズ (Garib Nawaz 貧者の保護者) と改めた。1724年から1749年の間に、ビルマに対して戦争をしかけた。この間、ナワーズは、息子に殺され、短期間の王位継承が続く。1755年と1758年には、ビルマ側が侵入し、一部、ビルマに併合された。

1762年、マニプール王のジャイ・シン (Jai Singh) によって、イギリス政府との間に条約が締結され、イギリスは、マニプールの失地回復を援助することを約束した。1765年、ビルマがマニプールにみたび侵入し、ジャイ・シンは、カチャールに敗走した。1768年にアホム王のジュスバル・シン (Jyusbar Singh) の援助を得て、ジャイ・シンは、王位に復帰した。その後、ビルマ人と和解した。1799年、ジャイ・シンは没した。3男のチャルジット・シン (Charjit Singh) がカチャールに侵入した。

1823年、ピタムバル・シン (Pitambar Singh) がマニプールに侵入、王を名乗る。チャルジットは、カチャールにおける権益を東インド会社へ渡した。また、ゴビンド・チャンドラ (Gobind Chandra) が、イギリス政府の援助によって、カチャールの王位に復した。

チャルジットの弟のガンビール・シン (Gambhir Singh) は、マニプールおよび

クボ河谷の領有を宣言し、1826年のヤンダボ (Yandaboo) 条約により王位が確定した。1834年の彼の死に際して、息子のチャンドラ・シン (Chandra Singh) が後を継いだ。未成年だったので、ヌル・シン (Nur Singh) が摂政となった。以降、ヌル・シンの一族が摂政をつづけた。チャンドラ・シンが1890年に退位し、1891年3月に、マニプールは、インド政府の手に渡った [GAIT 1905: 321-325; PEMBERTON 1835: 37]。

<19 言語>言語は、チベット・ビルマ語族のクキ・チン語群に属するが、カチン語とクキ・チン語の媒介語であるともいわれる。また、ナガ諸語とも関係がある [GRIERSON 1927: 72; HODSON 1908: 155-156]。

<618 クラン>メイティの社会組織は、サライ (salai) とよばれる7つのクランにわかれている。Ningthouja (Ningthaze), Kumul, Luang, Angom, Moirang, Khabananba, Chenglei の7つである。もとは、10のサライがあったという。サライのそれぞれは、Yumnaksという多くのサブグループで構成されている。<621 コミュニティの構造>社会は、王 (raja) を中心とした封建的構造をもち、奴隷も存在した [HODSON 1908: 73]。シン (Singh) の記述によれば、サライはインドのゴートラ (gotra) に対応し、この同一化は、ヒンドゥー教へ改宗したためであると指摘している [SINGH 1965a: 4-5]。

<142 身体諸形質の情報>メイティ族の一般的な顔立ちは、モンゴロイド系に属しているが、彼らのなかには、アーリア系などの多様な姿がみられる [HODSON 1908: 2-3]。ダス (Das) によれば、メイティは、アーリア系に近く、少女たちは、白い肌で、褐色がかった黒い髪、茶色の眼、赤い頬であるという。男性は、強健で、筋肉質の立派な体格をもち、広い胸とよく発達した下肢をもつ [DAS 1986: 98-99]。

<29 服装>服装は、男性は、ドーティ、クルタ、シャツを着て、時々、チャッダルという布をはおる。冬には、キルトとなかに詰めものをしたコートを着る。靴はめったにはかない。女性は、暑いときには、ファネック (fanek) という一枚の布を、脇の下や胸の上で一回半巻き、腰の部分でひだをとってとめる。ファネックは、綿とシルクでできており、さまざまな色の縞模様をしている。ファネックの上に白い布を着る。寒い季節には、長そでの短かい上着を着る。思春期まえの少女は、下はファネックを着て、上は裸である [DAS 1986: 99-100]。ハドソン (Hodson) は、王族が着るドーティ、役所に勤める人が着るドーティなど4種類のドーティを報告している [HODSON 1908: 15]。<301 装身具>装身具は、イヤリング、ネックレス、ブレスレットを身につける。両方の鼻孔に、金のピンをつける。男性は、イヤリングをつけ

る [HODSON 1908: 18-19]。

1960年代の段階でも、イティング村では、西洋的な服装はあまり普及していない。長いズボンををはいている生徒をのぞいて、男性は、ふだんは市場で買った綿のドーティとシャツを着ている。家では、クデイ (khudei) という腰布を着る。女性は、儀礼のさいにはファネック・マパンナイバ (fanek mapannaiba) とよばれる綿でできた縞の布をスカートとして着る。縞を伝統的な文様で刺繍し、黒、赤、白、青、緑の縦縞が入っている。他のファネックは、単色で、ふつつ赤、青、黄、緑である。年長の女性だけが白のファネックを着る。ブラウスの着用は、大戦後の現象であり、未婚の女性が着る。＜302 身だしなみ＞髪は男性は短かく切り、女性は長くのばして、後頭部で髷をつくっている。装身具は、金の飾りが好まれ、最近ではイミテーションとプラスチック製品が安いので好まれている [SINGH 1965a: 7]。

＜342 住宅＞メイティ族の集落は、1か所に集中していない。家屋は、金持ちの家は大きく、柱は木でできているが、貧しいものの家はタケでできている。家の壁は、土と牛フンを混ぜた漆喰をぬり、屋根は草で葺いてある。すべての家は、東向きに建てられ、屋外にベランダがある。家には、窓がなく、ベランダと家の北側にドアがある。炉は、北西の隅にある。家のなかには、部屋ごとに仕切られていない [HODSON 1908: 25-26]。

1961年のモノグラフによるイティング村の家屋構造も似通っているが、ヒンドゥー教の影響が濃厚である。家は、東、北、南のどちらかを向いて建てられなければならない。家をつくるにあたっては、吉兆な日を星占い師にみてもらい、ジャトラ (jatra) という大黒柱を、ブラーミンがプージャをおわった直後にたてる。骨格は、タケと木でつくられ、壁は、土、泥、牛フンと小さく切った麦藁を混ぜたものをぬる。屋根は、タケとタケを裂いた板でつくられ、イー (ee) という長い草の一種で葺かれる。ベランダは、床の4分の1か5分の1の大きさに、客と話したり、軽作業をおこなう場所である。窓はめったにつくられず、時々、後ろや側面の壁に勝手口がつくられる。どの家も内部は分割されていない。炉は、壁の隅にあり、清浄な場所であると考えられ、ここには、沐浴して、絹、羊毛、あるいは洗った綿の衣類を着てからでないと入れない [SINGH 1965a: 5-6]。

＜262 食事＞18世紀のはじめに、ヒンドゥー教が普及してから、メイティの食習慣に変化がみられた。以前には、雄牛の犠牲による宴やアルコールの飲酒などがみられた [HODSON 1908: 47]。現在では、動物の肉やすべての酒の飲食は禁止されている。魚は食べる。食事は、昼と夜の2食であり、コメを常食としている。キャベツ、

カリフラワー、マスタード、カボチャ、ヒョウタン、マメ類、ジャガイモなどの野菜がもちいられ、さまざまなマメ類のつけあわせが好まれる。湖でとれるヒシ類も食べる。料理には、ギーではなく、菜種油をもちいる。＜27 飲み物、薬物、嗜好品＞紅茶やミルクも飲まれるが、多くの人は、サトウキビジュースを好む。男性も女性も年齢に関係なく、タバコを吸い、買う余裕のない人は、ビリーか水煙草を吸う [SINGH 1965a: 8]。

＜24 農業＞メイテイの主要な生業は、農業と漁業である。農業に関して、ペンバートン大尉は、「この国（マニプール王国）の農産物は、まず常食となるコメであり、土が肥えているのでよく成熟する。タバコ、サトイモ、インディゴ、マスタード、マメ類、阿片もまたつくられている。ヨーロッパ菜園のものもまたみられる。ジャガイモ、キャベツ、ニンジン、テンサイ、カブラなどである。リンゴ、アンズ、イチゴ、ライム、ラズベリー、ザクロ、グアバ、マンゴー、ジャックフルーツが河谷のいたるところでみられる。」と報告している [PEMBERTON 1835: 29-31]。

2月のはじめに犁耕がおこなわれ、3月から4月に種がまかれる。6月から7月に苗が耕作地に移植され、11月から12月に実った稲を刈り取り、穀竿で脱穀する。＜23 家畜飼養＞家畜は、バッファローと雄牛を耕作用に飼っている。雌牛は、乳牛として飼っている。最近では、乳とヨーグルトを近くの市場で売って、現金収入を得ている [HODSON 1908: 39-43; SINGH 1965a: 13-14]。

＜226 漁労＞漁業は、ロタ湖を中心におこなわれている。ロタ湖は、マニプール全体で最大の漁場であり、マニプールで産出される漁獲高の60パーセントを供給する。しかし、適切に組織化された漁業はみられない。漁業には、男性も女性も従事している。女性は、イー（een）といわれる網漁に巧みである。これは、四つ手網で、平均的な大きさは、1.2×3メートルである。男性は、ロングタライ (longthrai) という網を使う。直径2.4メートルから3メートルのU字型をした網で、タケが網の縁につけられ、長いタケが、縁を横切ってとりつけられている。また、タイジュ（tajep）とカボル (kaboru) という罟が浅瀬で使われる。前者は、小さい丸いタケでつくられた長方形のかたちをした罟である。6×2.7メートルの大きさで、片方には、バルブがついている。後者は、円筒状で、両側が先細りしている。一方が、7.5センチメートルの開口部をもち、もう片方は閉じている。罟の中央部に10センチメートルのバルブがついている [HODSON 1908: 45; SINGH 1965a: 14]。

＜286 織布＞女性たちの仕事には、織物がある。どの家にも織機がある。ほとんどが自分の家で使うためにつくられる。スカートとしてのファネックや綿のショール、

スカーフがつくられる [SINGH 1965a: 15]。

<843 妊娠>妊娠から出産までは、次のような信仰と儀礼がみられる。生理の停止が妊娠の証拠だと思われ、吐き気を感じたり、酸っぱいものが食べなくなったら、2か月頃だと考えられる。妊婦は、流産をさけるために苦いものを食べてはならない。産婦とその夫は、双子をさけるために、双子のバナナを食べてはならず、イヌやネコの家畜を叩いたり、ヘビを殺すべきではないとされている。動物に対する虐待は、子供を不具にするといわれている。<844 出産>出産は、夫の家でおこなわれ、マイビ (maibi) という産婆が介助し、とがったタケでへその緒をきる。誕生した子供は、お湯で洗う。男性は、出産時には、その場から離れておくよう要請される。

<788 儀礼>出産後、家族には11日間、不浄がのこるとされる。6日目に、友人や親戚を招待して、ブラーミンによってスワスティ (Swasthi) 女神をまつるプージャがおこなわれる。プージャのあいだ、子供はやわらかくてきれいな布に寝かされ、あらゆる招待者が、子供にお金をあげる。母親の兄弟が、弓と5本の矢のミニチュアをかがけ、弓を北東、北西、南東、南西の方向へ射る。5本目は、最初に天に向け、次に地に向けられる。それから、弓矢を拾って、家の中へいれる。この儀礼は、それぞれの方向の悪霊を防ぐ意味がある。12日目の朝に、浄化儀礼がブラーミンによっておこなわれる。この日、料理用の土の壺は壊され、金属製の食器はきれいにされる。家の内部は、水と牛フンで浄化される。ブラーミンが母親と子供と家の中に、トゥルシ (tulsi) の葉が入っている聖なる水をかける。一か月のあいだ、母親の食事は、コメ、焼魚だけに制限される [SINGH 1965a: 9]。<881 思春期とイニシエーション [成人式]>また、男の子の場合には、20歳に達する頃に、聖紐式がおこなわれる [SINGH 1965a: 9-10]。

<582 婚姻規制>結婚は、クラン外婚制である。夫と妻は異なるクランに属さねばならない。外婚制の違反は、憎しみを意味するイエック (yek) として軽蔑され、社会から追放される。姉妹の夫のクランとの結婚は制限されない [SINGH 1965a: 10]。また、1900年はじめのハドソン (Hodson) の報告によれば、クランごとに、婚姻の相手のクランがそれぞれ決まっていた。Angom は、Khabananba, Moirang, Luang と結婚することは許されなかった。<595 複婚>メイティ族は、以前は一夫多妻制をとっており、王には3人の正妃がおり、ほかに108人の妻がいたという [HODSON 1908: 75]。

<583 婚姻の様式>結婚の形態には、2種類がある。見合いによる結婚と駆落ちによる結婚である。見合いによる結婚は、若者の両親が娘の家に行き、結婚の申込みを

する。娘の両親が同意したら、星占いで相性をうらなう。相性がよければ、婚姻の準備がすすめられる。ヘイタバ (heithaba) という儀礼が結婚式に先立っておこなわれる。若者の母親と親族の女性たちが、甘いお菓子や、ベテル、果物をもって娘の家に行き、婚約を確定する。＜585 婚姻儀礼＞結婚式は、占い師によって指定された吉兆の日の夕方に、花嫁の家でおこなわれる。この日、花婿は、白いドーティ、白い長そでシャツ、白いターバンを着て、白い綿のショールで身体をつつむ。一方、花嫁はポトロイ (potloi) という花嫁衣装を着る。この衣装は、たが骨で広げたスカートと深緑のビロードのブラウス、頭飾り、綿のショールで構成され、さまざまな装飾品も身につけている。

花婿の一行は、吉兆な時間に家を出発する。花嫁の母親が、花婿を抱くようにして出迎え、席にすわらせる。花嫁の父親は司祭に補助されて、中庭の中央でプージャをする。花嫁は、花婿の左手にすわり、花嫁の手が花婿の手にかさねられる。花嫁は、右回りに、花婿のまわりを7回歩く。1回まわるごとに、花嫁は、花婿に両手にもった花をなげる。花嫁には、花飾りが与えられ、花婿がその1つを抜き取って、花嫁の首にさす。このあと、2人の衣類の端が結ばれ、近親者につきそわれて家にはいる。花嫁と花婿が甘いお菓子を交換し、花婿の一行は、花嫁の家を去る。花嫁は、友人、親戚によってつきそわれ、夫の家へすこし遅れて到着する [SINGH 1965a: 10-11]。

駆落ちによる結婚では、ヘイタバはおこなわれない。駆落ちをした夜に娘の親へ知らされねばならない。花嫁の両親は、花婿の両親をふくむ村の年長者たちの前で花嫁の承諾を聞く義務をもつ。駆落ちのあと、ロウカトパ (loukhatpa) という儀礼が花嫁の家でおこなわれる。この儀礼では、両方の家族が客を招き、花婿の両親と、花嫁、花婿と招待客が花嫁の家へ向かう。花嫁、花婿は花嫁の両親に敬意を表し、花嫁の父親は、花婿の父親に、息子と娘が夫と妻となった結びつきに、満足の意を表明する。花嫁の父親に衣類、衣装箱、食器などが贈られる。婚資の習慣はない。ソロレート婚は禁じられていない。＜587 再婚＞離婚と再婚は許されていない。若者は20歳以下、娘は14歳以下での結婚はみられない。＜428 相続＞相続は、末子相続である [SINGH 1965a: 11]。

＜764 葬式＞葬式については、次のような信仰と儀礼がみられる。家屋内で死がおこると不浄となるので、臨終が近づくと、家から運びだされ、庭の右手に仮設された小さなワラ小屋のなかに、頭を北に向けておかれる。死者には、新しい衣服が着せられる。男性であれば、ターバンを身につけさせる。櫛、鏡、米粒、野菜が棺桶にいれられ、コインが口のあいだにはさまれる。遺体は、4人の男性によって墓地へはこば

れ、頭が北の方角に向けられて丸太の上におかれ、火がつけられる。額の骨の一部がはずされて、近くに埋められる。灰を土に埋めて、参列者は沐浴して家へ帰る。家に到着すると、火をまたいで彼らのあとについてきた悪霊を追い払い、再び沐浴する。

男性の近親者（息子、兄弟、孫）が喪主となる。死後、5日目に、アスティ・サンチャイ (asthi sanchay) がおこなわれる。この日、喪主、ブラーミン、親戚、友人、男性の歌手グループが墓地へ向かう。歌手が歌をうたい、ブラーミンがプージャをおこなう。葬式の日に埋めた額の骨の一部が、喪主によって掘り返され、布の一部につつまれる。骨は、シュラッド儀礼までベランダの壁にぶら下げられる。シュラッド儀礼の後、骨は小さな竹籠にいれられ、家の隔離された場所におかれる。塩は2日間、魚はシュラッド儀礼がすむまで、食べることができない。12日目に、浄化儀礼がおこなわれ、死者の家の内部とまわりに、ブラーミンが水をまく。13日目は、午後から2時間から3時間、シュラッド儀礼がおこなわれる。ブラーミンが、プージャをおこない、死者の家族は、友人や親戚をまねきコインをすべての人に配る。あとで、食事もあたえられる [SINGH 1965a: 12]。

<77 宗教的信仰>宗教は、すでにのべたように、パムヘイバという王の治世に、ヒンドゥー教に改宗された。最初は、古い宗教の司祭であるマイバ (maiba) たちによって支持された王族の反対があったが、チャンドラ・シンの時代に布教が強化された。ヒンドゥー教がはいる以前は、アニミステックな神の信仰がみられた。ラム・ライ (Lam lai) といわれる雨をつかさどる神、ウマング・ライ (Umang lai) というジャングルの神、イムング・ライ (Imung lai) という個々人の生死にかかわる神、そして各クランの神などが主要な神であった。これに加えて、山道、湖、川に精霊が住むと信じられていた [HODSON 1908: 95-99]。イティング村の村人は、ヴァイシュナヴァ派のヒンドゥー教徒であるが、サナマヒ (Sanamahi) とレイマレン (Leimaren) という固有の神も信仰している。これらの神々は息子と母親の関係にあるといわれるが、これに関する特別な神話はみられない。サナマヒとレイマレンは、家の後方にまつられているが、具体的なイメージはみられない。クリシュナの生誕祭やドゥルガ・プージャ (Durga Puja)、ホーリー (Holi) と対応するヤオサン (Yaosang) という祭も行なわれる一方、ライ・ハラオバ (Lai Haraoba) という非ヒンドゥー的な祭もおこなわれる [SINGH 1965a: 49-50]。

(八木祐子)